

て始められ、二代目新八氏、代目新八氏、四代目新太郎と續き、當主新八郎氏は五代目に當る古き家柄である。

初代伊傳太氏は、縣内は勿論、富山、



旌 徳 碑

長野方面迄販路の擴張に務め、二代新八氏は松山堂中興の祖として貢献多き人であつた。

現新八郎氏は、慶應大學政治科出身の人であつて、理財に長けた人であるばかりでなく温厚なる紳士として、人望厚き人である。

氏は關原在郷軍人分會長、學務委員の

公職にあつて、郷村のため貢献するところ多かつたが、支那事變勃發し、干才を交ふるに至るや、豫備少尉の氏は、勇躍應召出征して、今や聖戰の遂行に奮闘中である。

皇軍の
の
め
丈の
氣焔



標 商 堂 山 松

をあげてゐる。氏の留守中は分家に當る松田六四郎氏指導の下に營業を代行し、統後に於ける活躍は戦線にゐる氏にとりて安んじて聖戰に御奉公を爲し得ること出来る。

松田六四郎氏を留守隊長として、その下に總務主任長谷川久太郎氏、文具主任柳瀬四郎次氏、製造主任藤田豐次氏の外五名の番頭と五百餘名の従業員を以て凡て合議制に依り事業を遂行してゐる。當堂の商是である「従業員的生活安定」を

計り、之等温情主義は今日の繁榮を招來するに至りし大なる要因であつた。

當堂商品の販路は、内地全土は勿論、朝鮮、滿洲、樺太、南洋、北支方面の廣範圍に亘つてゐて、年産五百萬本を算へてゐる。

その商號は「松山堂」として、各製品に就いて、幾多の博覽會より名譽金牌を授與されたことは枚舉に遑がなきものである。

また目下聖戰に出征して活躍中の現主新八郎氏は、その人格、人望に於て關原の將來を背負つて立つべき人として約束されてゐる徳望高き人格者である。

與板町

第四銀行 布施文定

當布施家は、新發田藩主であつた舊溝口家の家臣、布施和三郎氏の末裔である開祖以來三百餘年、家系連綿として繼承して來た由緒ある家柄であつて、當家は分家してより、當主を以て四代目となし

てゐる。

氏は明治二十一年十月十日に生まる。勤勉努力、苦學力行の權化とも言ふべき人士であつて、夙に明治三十三年十三歳の幼時、第四銀行新發田支店に奉職し、勤続十五年、累進して試補となり、更に書記に任命されて、本店勤務となり、出納、預金、爲替等、諸事務の處理にその手腕力量を認められた。

次で大正十三年九月、出雲崎第四銀行支店主任に昇任、昭和六年現任の與板支店支配人に榮轉した。頗るの努力家であり、理財にたけた頭腦明敏な士である。そののみならず氏の地方金融界に貢献した功勞は甚大であつて町内住民の信望は頗る厚きものがある。氏の今後斯界に對する努力は大に期待されてゐる。

氏は趣味人としては園藝及謡曲に秀いでゐる。家庭には新發田の名家出身であるかつ夫人を首め、三男三女の令息令嬢あり、誠に圓滿なる家庭である。

長男定武氏は、現在海軍兵學校の生徒

として勉學中であり、その他の子息は、みな中等教育を終へて家庭にある。

與板町新町

六十九銀行 小林長次郎

資性温厚、勤勉である氏は、理財にたけた人であつて、明治二十三年五月十四日、小林長七氏の長男として生まる。

同家は代々、荒物肥料商を營んで來た名門一家であつて、當主長次郎氏もまた青年時代には家業を掌つてゐたが、後銀行家として身を立てるに至つた。

氏は大正八年十二月、與板町六十九銀行支店設置と共に、支店長として入行、現在に至つた努力の士である。

かつて氏は青年教育に留意し、青年學校創立に際しては、創立者の一人として功績多き人であつた。現在支店長の要職の他、與板新町區長、氏子總代、檀家總代として、郷土民の福祉及び文化開發につねに指導的立場にゐて、盡瘁するところ多き人である。

氏は一面、趣味の高尙な人であつて、俳借をよくし、その手腕と着想は大家の域に達して、俳人として廣く有名な人である。

家庭は、與板町一流の呉服店である長谷川庄三郎氏の令妹に當るヨシ子夫人を始め、一男六女の子女ある幸福の家庭であつてその圓滿振りには、町内人の羨望となつてゐる。

長男の長三郎君は、目下小學校に在學し、長女美代子さんは他家に嫁ぎ、次女千代さん及三女春野さんは長岡家政女學校出身の才媛とうたはれ、その他の令嬢も勉學にいそしんでゐる。

來迎寺村神谷

醫師 高橋義孝

氏は、杏林界稀にみる、徳望高き人格者であつて、かつて千葉醫學專門學校に於いて醫學を修めた篤學の士である。

氏は永年當地に於いて、開業醫として活動されてゐるのみならず、かつて當村

の村醫として、學校醫として、醫療の普及化を計ると共に、衛生知識の向上、防疫の計畫等、その功績は大きいものがある。またその醫療の他に、學務委員に擧げられて、子弟の育英事業に盡瘁されたこともあつた。

現在の氏は、當村の浦及神谷兩小學校の校醫として、學校衛生に豊富なる學識經驗を以つて當られてゐるのみならず、育英上必要な醫療設備を完備し、その改善はみるべきもの多々あつた。

氏は七、八年前地方病としてウイルス病發生蔓延するや、日夜寢食を忘れ、その防疫につとめたる結果、今日では根絶されて、その憂ひなきに至つた。

氏の犠牲的觀念厚きものあり、やゝもすれば、現代醫療の恩恵にあづかること少き農民に對して、つねに、醫療の恩恵を施し、醫は仁術なりを身を以つて實踐されてゐることは、村民の氏に對する徳望に依つて明らかである。氏の努力は、村落民の醫事衛生思想の向上となり、子

弟の體位向上改善と現はれ、健康の來迎寺の現在に至りし氏の力に負ふところ誠に大きなものである。

與板町中町

消防組頭 藤田 玉治
齒科醫 藤田 玉治

電話與板五二番



藤田家は果代當地に在住し舊藩主井伊家の家臣である。家系古く村有數の名望家であるが、

先代藤田都吉氏は、現在京都府衛生課長として官界に令名ある藤田茂尙家より、分家したものであつて、當主は大正十一年以來齒科醫として現在に至つた。氏は明治二十一年七月二十二日、都吉氏の子息として生まる。

天性濃厚篤實、勤勉努力家であつて、大正十年内務省施行の齒科醫師檢定試験

に合格した篤學の士である。

氏は與板小學校醫として、兒童の口腔衛生に盡力されてゐるのみならず、與板町消防組々頭、長岡齒科醫師會評議員、與板町至誠會副會長として、郷土の文化事業に貢献するところ多き、高邁な人格者であつて、氏の活動はまことに郷土人士のよき師表たるものである。

一面氏は、多藝多能の人で、趣味生活の豊かなものあり、盆栽、釣魚、觀世流謠曲等に至つては、その道の達人である。

現在氏は齒科醫師として、成功を收めた人であつて、表記の外南蒲原郡中條町に出張所を設けて、盛業中である。

家庭には長岡高等女學校出身の才媛であるはま夫人をはじめ、養嗣子清氏は日本齒科醫學士として家業に勵んでをり、長男琢治氏は、長岡中學在學中である。

日越村上除

瑞昭山淨圓寺

當寺は、開山の歴史古く、その記録は

燒失のため詳らかでないが、現住職相場



果耀師を以つて、二十六代と謂はれてゐる

る。當瑞昭山淨圓寺は、初め信州より移住して來た人で、此の村の藥師堂守として永住するに當り、以來相場姓を名乗りて、相場家に於いて代々當寺を管掌をなすに至つた。

當寺は、阿彌陀如來を本尊となし、大谷派に屬してゐるが、當寺の寶物として傳來する梵鐘は、寶歴年間の作として、當淨圓寺の歴史を緝くに唯一の史料になるのみならず、尙ほ同鐘の製作は、凡そ十三代目の時に當ると言ふ。

當寺の名譽のみでなく、當村の誇りとしては、往年 明治天皇北越御巡幸の砌長くも當村木村家の門を御通過遊ばされたので、同木村家では此名譽ある事蹟を

永久に記念すべく、その門を當淨圓寺に寄進した。之が現在の山門として在るものである。

當淨圓寺の年中行事としては、二十年前に創始した子字講であつて、現在は當村の青年會をも合併して「信誠會」と改稱し、春秋二回盛大な例會を開いてゐる。檀家は一五〇戸に及んでゐる。

住職相場果耀氏は、青年時代より、布教に非常に熱心な人であるばかりでなく、當年六十八歳の高齡にもかゝはらず、今尙かくしやくとして、布教に専念されてゐる。

尙氏の令息である正直氏は、大谷大學に於いて、宗教學を修めた秀才であつて現に教職出願中の有爲の人格者である。

古志郡

六日市村 村社三宅神社

當神社は今から凡そ千五百年前の創建



社司小川眞弘氏

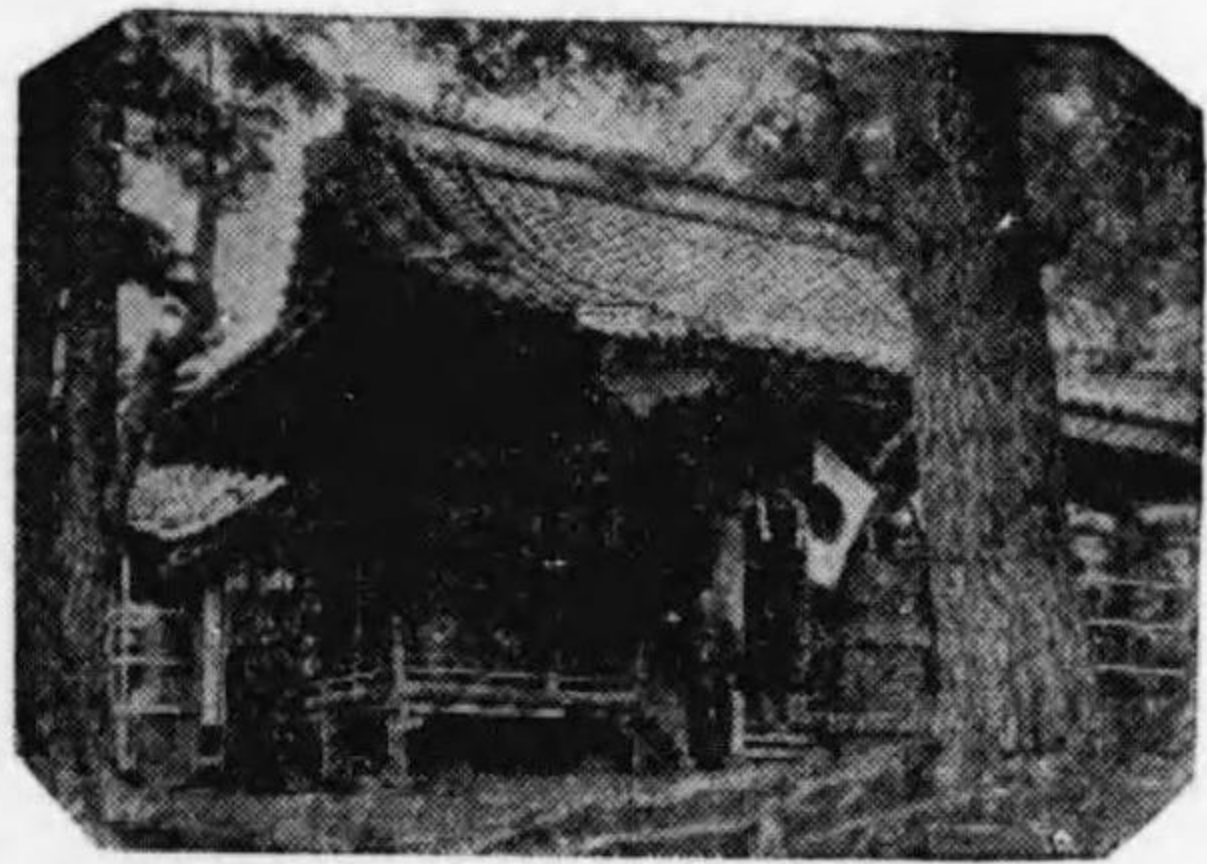
の男、波多武日子命は、新羅國の王子日
神命の姫美明命を連れてわが國に來り給
うた。波多武日子命、後に三神山頂に大
彦命を祀つた。次で日神命は中峯に、波
多武日子命及びその妻美明命は山麓に祀
られた。二柱の神にして三社なる故、三
宅神社といふ。

現社司小川眞弘氏は明治十一年生れ、
新潟師範出身にて約十八年間教職にあり
大正八年社司となつた。その祖は平頼盛
の臣小川太郎氏である。

栖吉村栖吉

栖吉神社

栖吉神社は文治元年の創建にして昭和
三年村社に指定された。社殿は山の中腹
にあり風景絶佳にして、附近には、悠久
山公園、成願寺温泉あり、毎年九月には
初穂講の行事がある。社實としては、珍
什貴品が多く、近代の名士東郷元帥、清
浦奎吾氏、高橋是清氏、犬養毅氏その他
諸名士の筆に成る書畫二十數點をも秘藏
してゐる。山代氏の社掌就任は大正十四
年であつて爾來勤続精勵してゐる。



はこ氏の神のため、まつたく、挺身盡力してゐます。

社 山代茂忠掌



當家の祖は承久
年間の人にして源
氏滅んで後、承久
の亂の起り
し當時、武
人にして別
當たりしが
戰亂の世を
夢み、感ず

るまゝに山伏姿の修験者となつて亂世を
避けた。その後幾代、農を業とするに至
つたが、代々宗教的方面に活躍する人が
多かつた。先代平吉氏は漢學に長じ、ま
た篤農家として聞え、村内青年の指導に
盡瘁した。

當主は先代の男、明治二十三年の出生
にして山代家第二十七世にあたる。夙に
栖吉小學校に教鞭を執りしほか、青年團
長、學務委員、國勢調査員を歴任、現時
村社栖吉神社々掌として神社に奉仕する
ほか、消防組頭、區長、方面委員を兼任
する。方面委員としての氏は、救助者を
出さぬやうにとの主旨の下に、貧困者に
對し副業の奨励に努めてゐる。資性濃厚
にして理智的、村内一流の資産家にして
村政界の重鎮である。

山本村宮路 村社石動神社

當神社は一千餘の昔桓武天皇の御代
の草建にして、社地の一帯は神路と稱す



る靈地であり、明治維新前迄は快晴の日
里人は時折山上に奏樂の音を聞きたりと
いふ
祭神
は少
彦名
命外
四柱
を奉
祀し
てゐ
る。
百五
十年

前源義家奥州征討の砌、當社に一夜參籠
し戰勝を祈願した由。その折附近の光妙
川氾濫し、徒歩困難の様をみて里人木を
渡して義家主従を安全に通過させたので
義家深く感激し、「越後とは鬼住む里と
思ひしに、都に近き人心かな」と口詠し
現に碑として殘されてゐる。當社眺望に

社 菊地實掌



氏の先祖は遠く
南朝の忠臣菊地肥
後守武重佛法に歸
依して隱居
し、剃髮、
祖禪と號し
旅僧となり
足利尊氏を
討たむとし
京洛に入り露顯して捕はるも佛の加護に
依り遁れ、笈檀奉安の虚空藏菩薩（行基
作）を石動へ神納めて遂に駐錫し大弘寺
大弘坊、圓壽坊三ヶ寺を建立したといふ
由緒ある家柄にて宮路、麻布田、宮下部

落五百石の社領は乙吉の城主小島彌太郎が奉納せるものである。其後大弘寺外二ヶ寺を廢し、全く神官となりて今日に至る。昔舊領主牧野家より社領田等を寄せて、爾來二十代に及ぶ。先代彌真人氏は當地方に於ける神樂の宗家にして笛の大家であつた。現社掌菊地實氏は長く小學校長として育英の道に盡瘁し、高潔清廉なる人格者として村民より畏敬されてゐる。

上鹽谷村上鹽

村社 巢守神社

當社は祭神に木花咲耶比賣命を祀り、創立年月不詳なるも古く、嵯峨天皇の御代弘仁年中當村を丸子田と稱せし頃鹽の出る井戸ありて村民井戸の鹽水を吸み取り鹽に代へたるに依り該山下の丸子田の名稱を上鹽谷と改めたといふ。今鹽地の形跡がある。後陽成天皇の御代故あつて社殿を門前なる現地に遷座せしが、刈谷川大洪水ありて神器、古文書等を悉く流

失、社殿の破損甚だしかりしが寛文元年八月再建した。康平年間の相圖に依れば巢守山の麓には奥入鹽入の外家なく、鹽入とは神社領座の上鹽村にして八人を總稱し、以て鹽入郷と呼ぶべく而して該神社は郷中の總鎮守にして鹽の宮と稱し、祭祀を執行した。故に長岡藩主牧野氏は深く尊崇し、來光澤内に田七畝を寄附せられしも維新廢藩と共に上地した。當神社の寶物には、昆沙門天の像（高さ三尺）牧野公の定紋入りの薙刀、幣匱あり、神祇官より嘉永三年賜つたものである。當神社の祭典に於ては毎年井戸より出た鹽水を以て調理したる供物を神前に具へる。



は久宣と號し和歌を良くす。當家中興にして謹嚴理財に長け良く一

氏は皇典講究所卒業にして、伊勢神宮神部署、石川縣一宮の國幣神社、白山比咩神社等に勤め、昭和二年歸郷後は村社々掌となりたるもので資性温厚にして謹嚴而かも明朗高潔なる人格者である。先代民次郎氏

社掌 大港 克己

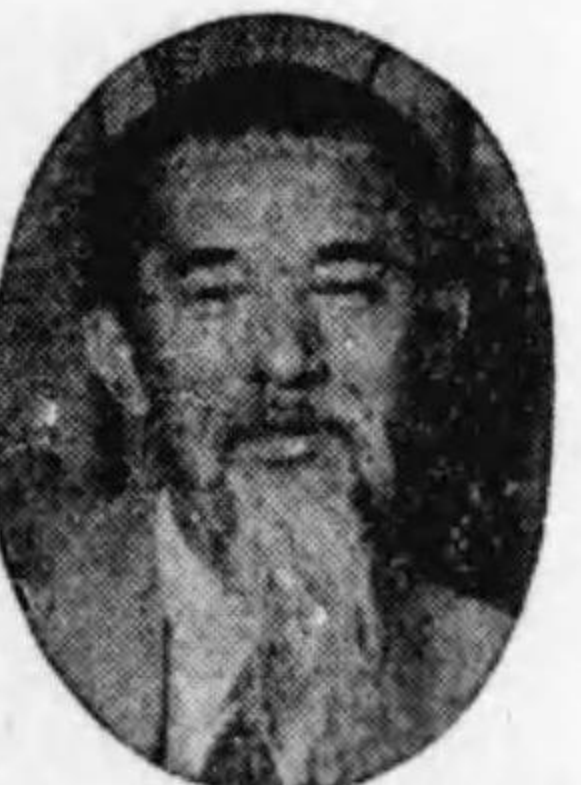
家の財政を處理し、巢守神社の本殿再建築に盡瘁してゐる。氏はその令息として明治三十七年生を享け、敬神の念厚き神ながらの道の信奉者である。神官として公職に就くは村内の思想統一を案ずるものとして一業主義を守り、一切の公職及事業關係を退き専念神事に盡し、氏の指導がよろしき爲め村内の各種團體の諒協調を得て、一切の集會及び、村葬等は皆神社を利用し、思想の善導に功績が多い。當家は長岡藩主牧野公の信任厚く、武器の保管を命ぜられ居りし爲め、明治戊辰の役に幕軍に屬して神職を免ぜられ、その後三十三代大港相模氏が神職復任に奔走し、再び神官の職司を受けたるものである。當神社は代を得て益々盛大とな

り近郷の參詣者引きもきらず、神苑は彌榮に輝き充ちてゐる。

栖吉村

栖吉村役場

本村は戸數五百餘を有する農山村にして九割は農業に従事してゐる。故に農産物が主生産にて、また養蠶實行組合にて養蠶を奨励して居り近年漸次盛んになりつゝある。家畜を飼育する戸數も増加してゐる。當村は教育事業が充實して居り古い歴史を持つてゐるが、進取的な村として漸次躍進を續けてゐる。それには役場當局初め、各種團體の和親協調が大いに與つて力あり、村長水澤欽次郎氏、助役竹日理策氏、収入役佐々木榮太郎の功績は甚大なものである。



功勞者である。氏は資性温厚篤實なる徳望家にして先には選ばれて



先代は區會議員、氏子總代、納稅組合長、學務委員として村治有力

村會議員、學務委員、農會評議員、區會議員、土地賃賃價格調査委員、國勢調査員等村治に關する總ゆる方面に、又教育界に産業方面に活動貢獻し、現在推されて村長の要職にあり、栖吉養蠶實行組合聯合會々長として敏腕を振ひ、重要な人物として衆望を擔つてゐる。キミ子夫人は愛國婦人會々長、學區婦人會聯合會々長として盡瘁し賢婦人の譽が高い。

收 入 役 佐々木榮太郎 城山の城主佐々木四郎高綱の子孫が當先の祖先にて東畑より現住所に移り來た名門である。中興



李一氏は郷總代を勤め、先代

村 長 氏は當村水澤家より分家せる初代當主にして明治十四年に生れ養蠶事業に造詣深く當村に蠶業組合を創立し其の指導に専心努力せる

その附近より梵鐘、頸飾、鐵鉢、金衣等出づるを見るも、また祖先は宗教家でないかと思はれる。當家は名門なるが爲、長岡藩主の御休息所となつたことがある

して聞え、李一氏は郷總代を勤め、先代

横次氏は村會議員、區會議員として三期間勤続し、また水利組合役員等、村治に貢献する所が多かつた。當主榮太郎氏は農會幹事を十年勤め、青年時代より農事改良に意を注ぎ、農友會青年耕作組合設立の發起人である。氏は稅務監督局より大正十年、十五年の兩度に、勤続表彰を受けた程の功勞者である。

北谷村名木野

名木野尋常小學校

本校は明治四年十一月五日柏崎縣栃尾分校北谷教育所と稱し、明治五年十二月二十三日新潟縣古志郡明昌校と改稱獨立し、設置區域は現在の北谷村及北谷村の二ヶ村を包含した。明治二十三年現在の名木野村に移轉し、名木野小學校と改稱、昭和三年に六教室を新築し、昭和十一年更に六教室及び鐵骨屋内運動場の大改増築を行ひ、近代的様式の校舍となつた。

明治六年第十五大區、六小區本校、明

昌校時代は田井校、太田校、小貫校、土ヶ谷校等、多くの分校を有したが、明治二十五年田井校の獨立を最後に、設置區域も縮少せられ、現在では名木野村、明昌村大池之田村、勢田村の四ヶ字戸數三百五十戸の學區となり、現に北谷村中央の丘陵を境に隣に田井校ありて、一村二學區制となつた。當校は創立も古く光輝ある歴史を有する。

本校の教育方針は、教育勅語の御趣旨を奉戴し、兒童の個性に鑑み文化的精神を有する自律的人格を養成せんことを期し、特に體験的生産的たるべく、教育の作業化、生産化、産業化を重視してゐる。歴代校長皆熱烈にその教育精神を遵奉して發展に努力してまた功勞者多く、特に笹原作二、田伏善三、山田庄次郎、田伏作次郎、土田孫太郎、南波正衛、土田要吉、田寄一郎、西田正一、稻田榮代治、田寄勝之丞、小川寅松氏等は物的に心的に本校の積極的教育施設經營に關し援助し、其の功績偉大にして十氏は縣知事よ

り表彰状を授與された。

現在までの卒業者累計は一七五〇名に達し、郷土の爲に盡力するところの傑物多く、本校の日々發展する所以である。本校は全校天然水道完備して居り、學校庭園、實習水田畑の經營、農産加工場畜舎、養魚池、養禽、養兔、昆蟲飼育箱學童給食設備、各教室ラヂオ聴取設備、學用品販賣模擬店經營、作業更衣室等の設備よく完備し、また體育方面には課外運動の獎勵指導をなし、選手偏重制を避け、團體遊戯を獎勵、目下は球戯を盛んに行つてゐる。

校長

三浦 政之丞



氏は師範學校卒業後直に當校に就任勤続し、爾後二十年小學校教育に盡瘁、一身を挺して貢獻せる熱烈正義の士で名校長

の譽れ高く、また現職員は、永井重則、白木尙三、松寄倉吉、山田吾作、鈴木一郎、福田千代、小林トメ、井上八千代の八氏にてよく校長を援け、教育の精華を擧げてゐる。校醫は森庸齋、小林禮保治二氏である。

栃尾町

栃尾郵便局

當局は明治七年の創設になる三等局にして、集配、爲替、電信電話事務を管理し、監察成績一等局として表彰されしことあり、保険契約件數六一、三八、年金契約件數二一に及び繁忙を極めてゐる。従業員は三十四人である。

郵便局長

那須 長治郎

當家の祖是那須與一の孫が攝津方面より來り當地に國司となり後郷士となるに始まる。舊家にして代々庄屋として苗字帶刀御免の家柄である。先代勘左衛門氏は當家の中興の祖であり、町長、村會議員を勤めて功



あり、當地は山間僻地に在つて不利なるも當糸及び織物の産地なる

を以て、その地勢により直接國際貿易を計畫せしも、外人の商略、仲買人の妨害に遭ひ初志貫徹せざるも、外人間の知る處となり産業に貢献する處多く七十歳の高齡にて没した。當主は十六代目にして正七位勳七等長岡中學卒業の秀才であり中越三等郵便局長會々長方面委員代表等々數多の公職に在り村政界の重鎮である

荷頃村北荷頃

荷頃郵便局

當局は明治四十年三月開局以來、三等局として郵便、貯金事務を取扱ひ、明治四十年内國爲替事務を開始した。集配區域は戸數六七五、特殊通事務引受郵便取扱數五八三、小包引受八八三にして保

險契約件數二八六、年金受持契約件數一〇である。

郵便局長

諸橋 虎七郎



當家は村内最古の舊家、諸橋家の分家にして、本家は歴代御取締をなせる名門である。初代初右門氏は弘化二年分家と同



時に清酒釀造業を始めたるに、當地は酒造優良米産地にして、使用水優質なる爲着々と販路擴張され今日の盛業を確保した。二代茂吉氏は郵便局開設と同時に局長となり、多額納稅者として本年七十九歳なるも矍鑠としてゐる。當主は霸氣に富み、局長の外信用組合理

事、酒造組合評議員など公職に有り、長男茂七郎氏と共に家業を勤み、次男は歩兵少尉として中支へ出征中の名譽ある家庭である。

西谷村田之口

西谷郵便局

明治十五年九月一日中村郵便局と稱して開局されたる當局は、その後明治二十三年四月一日現稱たる西谷郵便局と改稱し、明治三十一年七月一日現在の場所に移轉し今日に至つた。創局當時は郵便事務のみ扱つてゐたが、明治十五年九月一日集配事務を開始し、次いで明治三十二年二月十六日内國爲替事務開始、明治三十一年一月一日を以て郵便貯金を開始し同三十三年二月一日には小包郵便事務を開始した。成績きはめて優秀にして模範とされるものあり、現在の成績左の通りである。

通常郵便引受數 五六、七八一
配達數 一二八、六七五

小包郵便引受數 五三六
配達數 二、二〇七
航空郵便引受數 二
配達數 一九
簡易保險契約數 一、二六〇件
月額 七三〇圓
郵便年金受持數 六件
月額 一三三圓

局長として初代多田利吉氏にして、二代即ち現局長は多田利右衛門氏で各々専心地方通信伸展のために盡瘁してゐる。

局長

多田利右衛門



だ青年團長として青年の指導に當る外、専心通信事務に努力貢獻してゐる。

現局長として盡力する氏は一代一業主義にしてまた通信事務の重大性を考て一切の公職その外事業方面に關與せず、た

因に多田家は當地方屈指の名門たる家柄にして、その深き由緒をみるに、源氏の流れたる攝州の豪族多田滿仲より發し天文年間十三代の祖が當地宮の脇に來り天正年間現在の田之口に移り、爾來庄屋として苗字帶刀を許され連綿と傳承する家柄である。十三代目の祖の戒名は寂照院玉風道光居士と祖し、また中興の祖利右衛門氏は村開拓に頗る功勞多し、長岡藩主より印籠及び上下を賜つてゐる。歴代信仰心厚くして篤信の家として聞え、永代常夜燈籠を神社寺院に献じてゐる。先代利吉氏は郡書記、村長の重責を數次農會長、養蠶實行組會長、郵便局長その外村内すべての公職に關與し、一生を自治公共に捧げし偉大なる自治功勞者にして、表彰枚舉に遑あらず、尙從七位勳八等に叙されてゐる。いま七十七歳の老境にあるが矍鑠として壯者を凌ぐものあり村民の信望と尊敬を一身に集めてゐる。當主はその男として明治十四年岳降の資性温厚にして謹嚴なる風格を有する人

格者である。局長として功勞多く大正四年逓信大臣より表彰を受け、勳八等に叙されてゐる。長男精一郎氏は父君を輔佐して郵便事務に携はれる俊器である

中野 俣村

郵便取扱所

當郵便局は極めて最近最新の開設にかゝり、昭和十三年三月十一日開所したるものにして、外形内容萬端は着々と整備に努めつゝある。爲替事務開始は同じく三月十一日開設と同時に開始し、郵便取扱數、特殊通常引受は五〇、小包引受は一九一にして従業員は局長金内富吉氏外二名あり、目下郵便局舎新築中である。

郵便局長

金内 富吉

當家は村内の舊家名門たる金内家より當り隆右衛門氏二男郡治氏が分家せるに始まり、富吉氏は三代目に當る。二代目喜一郎氏は温厚篤實なる人、村治に盡す處多く、村會議員、區長、學務委員等の公職に就き寧



にして頗る頑健、壯者を凌ぐ精力家である。當主富吉氏は明治二十一年生れにして、郡内種芋原村の舊家にして現種芋原郵便局坂卷六兵氏の次男である。望まれて當家の養子となり、學務委員、區長、農會總代として、自治に功績多く、現在は村會議員として村會の重鎮である。氏は長岡中學校卒業の秀才であり、資性は温厚にして篤實、しかも思慮深き理智に富める人格者にして働き盛り、分別盛りの好紳士である。氏の家庭は圓滿にして模範的、村民の信望篤き良家庭である。

郵便局長

坂牧 六兵

會津より當村に移住し、歸農せるに始まる。以來當家は郷半頭を勤めし名門である。その後當家には一代置きに中興とも稱すべき精農家出づる爲、家資大いに伸び今日の巨富を産みしといふ。四代清造氏は磊落にして義侠に富み、先代六平氏は齡七十三を以て歿する迄、終始土に親み、勤勞に努めし爲、當家の基礎益々強固となり家運隆盛を來した。

種 芋 原 村

種芋原郵便取扱所

當村は戸數三六〇戸、人口二千人にし

當主六兵氏は、縣立長岡中學校卒業後上田高等蠶糸専門學校の前身校を卒業せる秀才にして圓滿なる村政家。前に村長を務め、助役、收入役、學務委員、農會長及び農會總代、農會評議員、青年團

長、區長、氏子總代、種芋原信用販賣購買利用組合評定員、土地賃賃價格調査委員、國勢調査員、種芋原寒天組合役員として功績多く、現在は郵便局長、村會議員として三期、方面委員、在郷軍人會顧問山越養鯉組合種芋原支部長、種芋原養蠶實行組合副組合長として、その敏腕を振ひつゝある。氏の祖父善策氏は當村道路開發の元祖ともいふ可き人にて、明治十七年頃より縣道敷設許可運動に寧日なく努力せる人である。當時青年たりし六兵氏は祖父を助けて、常に其行を共にした。善策氏歿するに際し遺言して曰く、『道路の開發は村の興廢に係る重大事故子孫村民を思ひ、之が完成を計る爲めには寢食を忘れし状態に有りしを知る者御身(六兵氏)のみ、依て余の死後は必ず余の意志を繼ぎ達成を期せよ』

得て、久しく難局に有りし該道路も村民の勞働奉仕と努力に依り完成した。爰に於て氏は宿志たる通信事務の完成を計畫し、出願し許可さるゝや、進んで電信、電話の開始を計畫するなど、村の開發、文化の導入、産業の増進に資すところが多かつた。家庭は昭和十年糟糠の夫人を失ひてより、二女ネットさんに家事を委ね専ら村の爲盡瘁せる人格者である。

太田村蓬平 蓬平郵便局

當郵便局は大正九年に出願せられて、大正十二年九月の開局にかゝり、普通三等局である。集配事務の開始は昭和十一年五月十一日にして、内外爲替事務の開始は大正十三年九月六日、内外電信事務及び電話事務の開始は昭和十一年六月十六日であり郵便取扱数は通常發信が七九、七六〇、引受が一六四、九六九、小包發送、一が八七〇、引受二、七八三にして、簡易保



局長 中村 雄太郎

險加入が一、二〇〇であり、縣より電話架設に對する功勞に依り表彰されたることあり、従業員は八名である。當家は當村最古の舊家にして其祖中村氏に始まり武家の出なるも、後年當地に來り庄屋となり苗字帯刀御免の家柄である。當家は代々名譽職を勤め、中興に祐太郎氏とて理財に長けたる人あり資産大に殖えて今日の巨富を作つた。先代養太郎氏は教育事業に重點をおき、之が刷新を圖らむが爲め他の公職を退け進んで學務委員及學區會議員の要職に就き、村教育の發達に盡力せる人にて六十一歳を以て永眠し、氏の令息にして明治二十三年當地に生れたる當主雄太郎氏は當村一流の村政家にして消防組

合評議員、消防顧問として盡して居る。元村會議員、助役、方面委員、村農會代議員、學務委員、學區會議員、太田村養蠶實行組合理事、青年團長、農村調査員土地賃賃價格調査委員、國勢調査員等の公職に在りて寧日なかりし人材にて、政友會支部幹事として政友會の元老である。氏は壯年期より村の發達と文化、産業の開發に専心し、村の發展は通信機關の充實にありと痛感し、之が目的達成を期して邁進した。氏は又長岡、桂谷間の郡道を縣に移管せんと計畫し之が達成をみるや、通信事務の完備を期し山間に珍しき電信設備をなし、縣に於て電話開設の功により表彰を受けた。夫人ミサハは愛國、國防兩婦人會員として活躍して居り長男信一氏は青年團、消防組の役員として前途ある青年紳士である。

黒條村下々條 黒條信用組合

當組合は出資總額三千三百五十圓、保

證責任である。一口金額拾圓にて現在組合員數百二十二名あり、貸付總額四萬圓貯金五萬圓に及び、黒條村全體の信用組合として今日の發展をみた。當組合は日露戰爭平和克復記念として設立されたものである。その動機神聖にして國運進展と共に歩調を合せて來た。積立金壹萬參千圓、餘裕金は縣信用貯金とする。發起人功勞者は、高野九平次氏、吉田市太郎氏、磨田市郎氏であり、歴代理事長は高野九平次、大關又次郎、吉田秋一の三氏である。現在役員は吉田秋一、大關又次郎、磨田市郎、小原靜次郎の四氏である。

組合長 吉田 秋一

吉田組合長は霸氣に富み義氣豊かな資性を有し經濟學に卓抜なる識見を有する經世家にして村政の闘士である。日露戰役に從軍し幾多の戰功を重ね、現在、黒條信用組合長として十七年、村會議員、福島江普通水利組合委員、農會評議員及農會總代議員

として數期に亘り、手腕を振つてゐる。氏は又前學務委員、在郷軍人分會長、私設消防組頭、農業調査員、土地賃賃價格調査委員、國勢調査員、役場建築委員、學校建築委員として到る處に功績を残して、村政會の重鎮であり「公平無私」を標榜とする愛村家であり、おもに教育に重點を置き、産業、經濟の發展に努力してゐる。當家の開祖は萩の城主の重臣にして歴代武士、彦太夫氏の世に同城落城の悲運に會ひ浪人して當地に來り當時無人たりし諏訪神社の神官となつた。其の弟三五左衛門氏は努力の人刻苦奮勵して資金を得終に醸造業家として當家今日の豪富を作つた立志傳中の人である。當家は此人を初代として祭つてゐる。二代三五平氏はそれを繼ぎしも廢業して土地に放資し、其の後明治維新に際し新制敷かるると同時に村會議員として當選多くの公職に在つて自治の爲盡瘁し先代市太郎氏も亦村會議員、黒條信用組合理事、尙武會長、福島江普通水利組合議員、區長、

其の他多數の要職に有り、自治に功績多大にして數度の表彰を受けた事がある。秋一氏はその長男として明治十七年生、キコ夫人は國防婦人會の爲盡瘁するところ大で、又實弟實義氏は醫師、善實氏は醫學博士にして名古屋鐵道病院々長、末弟義治氏は理研柿崎工場の主任を爲してゐる。

山本村浦瀬

山本信用販賣利用組合

明治四十一年九月十一日東山石油鑛山よりの収入を浪費せざる様に天引貯金組合として鈴木義延氏、松本儀八氏、外村内有志一致を以て設立され、當組合はのち組織改りて、今日の如く主として販賣事業をなすに至りしものである。

出資總額貳萬壹千圓、一口金額は拾圓にして組合員數六百七拾四名の地方稀に見る優秀組合にして、八町瀉と稱する水腐地二百町歩を治水して更生せしめたる事績あり、現在は専ら村當局と提携して

村民の勤儉獎勵につとめ、優秀なるその成績は左の如くである。

準備積立金	貳萬五百六拾壹圓
貸付總額	四拾四萬八千九拾九圓
貯金總額	參拾四萬四千八百四拾九圓
購買價額	貳萬五千貳拾六圓
販賣價額	拾五萬四千貳拾四圓
利用料	參百四拾貳萬圓

なほ農業倉庫百四拾四坪にして、事務所は六拾八坪



附屬建築物百參拾八坪餘の廣大である當地方の産と謂は

一意獻身的に、組合伸展に努力盡瘁せるは歴代理事長當代鈴木義延、二代松本儀

八、三代殖栗介二の諸氏を経て、四代すなはち現組合長は松本司一氏である。松本司一氏は陸軍中尉にして今次の支那事變に應召、出征中のため、事務理事武種與作氏が専ら事務を掌り、それを輔佐して努力するは理事内藤西蔵、土田安太郎の二氏及び、監事菊地義雄、佐藤龜兵太、岡村政藏、田井竹五郎の諸氏にてその組合伸展上に、産業の發展に寄與する頗る多大である。

栢尾町

縣會議員 植村 米作



氏は松尾實業學校出身の秀才にして、温厚誠意で質實敦厚、義氣に富みしかも明快厳正なる資性を有し、縣政會の重鎮であり而して實業界の元老である。氏は縣會議員として活躍の外、

町會議員二期、栢尾信用組合専務理事、所得稅調査委員として三期、栢尾實業協會々長、都市計畫委員、學務委員、方面委員として寧日なく東奔西走、獻身的努力を以て公職に盡瘁し居り、又前家屋賃貸價格調査委員、營業稅調査委員、株式會社栢尾銀行監査役として甚大なる實績を擧げた。氏は人の和と不言實行を終生の標語とし、公人として遺憾なき意志強き人にして信望遍く、氏が縣會議員として立候補するや反對黨すら鳴りを鎮め、一致推薦となり無競争の状態の中に最高點を以て當選したといふ。

氏の趣味は圍碁にして相當の實力を有してゐるといふ。りん子夫人は良妻賢母愛國婦人會及國防婦人會の爲め盡瘁し、長男恒作氏は長岡中學校卒業後、東京王子醸造試驗所出身の秀才にして、前途有爲の青年紳士であり、現在公職に寧日なき嚴父に後顧の憂なからしめるべく醸造業一切を引受け、家業に精勵して居るといふ前途の士である。

大和櫻油

栢堀なる植村家は、村内最古の舊家にして歴代庄屋を勤め苗字帯刀御免の家柄であり、當家はそれより分家せるに始まる。寛保、文化年間、家の中興に角左衛門貫渡とて綿紬の發明者あり、當時機業の行詰慘狀甚だしく栢尾郷の機業家五千七百七十人の死活問題起き、領主牧野公も心痛せる折柄、氏は文字通り膏と汗の結晶を以て、幾多の失敗を重ねつゝも屈することなく努力と犠牲を拂ひ、文化年間に至り綿紬の發明を完成し危機に瀕せる當業者に活路を與へ偉大なる功績を残した。村民氏の遺徳仰慕措く能ず社明を建立し氏の靈を祀りて貴渡神社と云ひ、弘化四年正一位を賜はつた。名門植村家より分家せる米次郎氏は、明治十四年より主として醬油の醸造業を開業し、良く時流に應じたる營業をなしたる爲め一躍名聲を博し、今日の盛業確立したるも四十二歳の若さをもつて惜しくも永眠した。

當店の醬油は「大和櫻」といひ、中越一帯に販路をもち釀造高千二百石、博覽會に入賞共進會に一等、全國醬油品評會一等賞受領し白醬油の名高く、薄利多賣主義、親切を以て好評がある。當店は現在米作氏長男植村恒作氏が代表する。

北谷村

北谷村長 笹原 作二



今より約三百年前の創家に係る笹原家は代々農を家業となして營み來りし家柄である。先々代惣右衛門氏は温厚にして篤實なる人格者であつた。明治初年頃庄屋をなして村勢伸展上に多大の功を效し、先代卓治氏また當村収入役、農會長等を永らく勤めて村政、産業の各方面に鈔からざる事績を遺し、村民の信望を一身に集めた。

作二氏はその養嗣子にして池田作衛氏の男である。明治三十二年十一月十三日出生で資性頗る快活淡泊にして明朗、また俊敏の氣性に富みて明敏なる頭腦と能力とを具備し、夙にその手腕は多大の期待を寄せられ、氏またこれにそうて今や當村村長の要職に在り、夙夜献身的に淬勵、その功績たるや村史に永遠に記録さるべきものあり、兼任するは農會長消防組頭、産業組合長、耕地整理組合長等産業自治の要任すべてに亘り、また寄與裨益するところ尠からず、非常時農村の村長に適任の材幹として愈々衆望高く村民また氏の卓越せる手腕の指導下に益益業に精勵、北谷村は今や年を追うて發展の途上にあり、縣下に於ける模範農村と稱されてゐる。

その惣右衛門、卓治、當主と三代に亘る貢獻により笹原家は村民感謝の的である。家庭は圓滿和樂の家なれば、推稱もされてゐる。母堂ツル子刀自六十一歳を以て健在、令閨キイ子さん(四十二歳)

はよく家を守りて内助の功頗る多く、三男一女さんがある。

上組村横枕
村會議員 早川 鬼八



祖先是平家の流れにして家系は審らかでないが、初代以來千餘年を経ぬべしと傳へられ、戦國時代の住家にして、當家は恐らく同郷最古たる家柄であり幾變轉の後歸農してより更に七百餘年、二十一代の長きに渡る歴史を有す名門閥である。歴代郷組頭、百姓總代を務めた。鬼八氏は先代廣太氏の息、二十一代目の當主として明治十七年生を享け鴨農學校を首席にて卒業するや直ちに縣立上組農學校教師として十ヶ年の長年月育英の事に當り、幾多の人材を養成した。氏は教職を退くや上組村役場農業技



を退き爾來村自治に關與し、先には區長に就任し、現在は村會議員、横枕養蠶實行組合長、上組養蠶實行組合聯合會理事に就任し、至誠團役員等の公職を兼任してゐる。氏は實に温厚篤實、然も實行力豊かな人格者にして青年指導に最大の留意をなし、献身努力する處昔乍らの教育者の面目を

發揮してゐる。

スイ夫人は愛國婦人會、國防婦人會員として盡力する處多く、また賢夫人の譽が高い。長男重平氏は縣立上組農學校卒業の秀才、新潟縣農事試驗所養成所及び五泉の農業試驗場講習所の兩所を卒業の壯年にして三十三歳、現在古志郡養蠶業組合技師として、又縣養蠶業検査員として共に六年勤続し、上組青年團役員等の現職にあり、温厚にして意志強固なる紳士として信望厚かつたが、偶々日支事變起るや應召して出征、彼地に戦功を輝やかしたつゝある。實に早川家は一家揃つて功勞多く村内の尊敬の的であり、徳望は甚だ篤い。

六日市村蛇山

村會議員 細貝 正直

當家は代々農業に従事し、明治廿七年勝喜氏の長男として生る。長岡中學卒業後直ちに東京に遊學し農大實科に入學せしも程なく中途退學し、日本主義運動に



先代富太郎氏



先代富太郎氏

身を投じ、熱誠を捧げて奔走し、屢々雜誌「倫理日本」に執筆し皇道日本の精神を熱心に力説した。一方氏は生來の讀書癖から、英、獨、佛、露語を修め廣く各國の思想をも研究した。一見、壯士を思はせ、その鋭い眼は相手に隙を與へない程である。



先代富太郎氏

は、數理に長じたる人なりしを以て、明治五年に土地擔當を、又同九年地租改正委員に任ぜられ、明治新政の地籍及稅制の確立に貢獻せる功勞者である。先代藤四郎氏は、總代等の公職に就き

山通村長倉

村會議員 土田 留太郎

當家の祖先是、長倉村の郷士にして、

勝喜氏は村會議員であつて七十八歳の高齡を以て永逝した。その功績は多大であつた。昭和十三年一月には氏も亦村會議員に就任し日夜村民の爲めに活躍し、現在は大地主である。現住所は新潟縣古志郡六日市村字蛇山嶺、東京帝國大學前總長小野塚喜平次氏は氏の從兄である。

大いに村政の刷新に奔走して居たが、惜むべし三十九歳の壯年を以て逝去したであつた。

當主留太郎氏は、性温厚にして意志強固なる村政家にして、幾多の公職に歴任し、當村の發展に多大の貢献をなしたものである。即ち、氏は嘗て學務委員



として、兒童教育の爲め、幾多の業績を残したるのみならず、特に

兒童教育の重要性を常に説いて普及に力めて亦學校移轉問題の發生するや、兒童教育に悪影響を及ぼすとの見地より、敢然立つて、移轉反對の急先鋒として堂々所信を披瀝し、遂に其の目的を貫徹した。其他、總代、學區會議員、青年會役員、農業調査委員、消防役員等の公職にありて、日夜村自治の爲め、盡瘁せるのみならず、現に村會議員、農會評議員として

奔走しつゝある。

フジ夫人は、貞淑にして、愛國婦人會國防婦人會員として、常に盡力しつゝあり、長男藤三郎氏は、霸氣ある青年にして、現在、青年學校指導員、在郷軍人分會役員として、常に青年學校生徒及在郷軍人の指導訓練に任じつゝあり、將來を囑望する。尙ほ當家の庭園内に古木梨の木あり、昔時應神々社の祭禮には、此の木を神として奉納せしものにして、由緒ある神木なりと云ふ。

栖吉村 栖吉

村會議員 武樋 義治



先考 太郎 翁

當家は城山城々主の重臣武樋氏に始まる名門にして、歴代七郎右衛門を襲名せしが維新に至りて止む。而して當家は歴代



長岡藩への納木の組頭にして又郷組頭たり。先代七郎右衛門氏は明治維新の後の廢藩置縣の時、明治五年土地擔當、又同九年地租改正委員を命ぜられ、非常なる努力をして其難業を處理し

其功績顯著である。

嚴父作太郎氏は性温順にして質實なる村政界の元老なり。村會議員、學務委員總代、農會評議員、農會總代議員にして栖吉村養蠶實行組合聯合會役員、氏子總代、本組信用販賣購買利用組合監事、土地貸賃價格調査委員等の公職を帯び村治に盡瘁すること非常である。特に教育問題には多大の關心を持つて努力せし人、二十餘年間學務委員を務め郡教育會より表彰され、又村治功勞者としても表彰される。今や勇退して悠々閑日月を送る。當主義治氏は村會議員、消防部頭、本

組信用販賣購買利用組合幹事、青年團長等の要職を兼任され、性温厚にして義氣に富み村民の信望極めて厚し。義治夫人ヨシさんは愛國婦人會、國防婦人會の會員にして盡力する處が多く、良妻賢母の人である。

山本村 浦瀬

村會議員 酒造販賣

林 孫市

當家は浦瀬屈指の舊家にして歴代農業を營んだが、三代前孫市氏の代に至り家號を林屋と號し酒造業を開始し、順調に發展し今日の隆盛を見るに至つた。

先代孫右衛門氏の代に資金の擴充を圖り、資本金二十萬圓(内拂込六萬圓也)の株式會社に變更し、自ら第一線に立ちて業務の進展と販路の開拓に努力した結果確固たる業礎を築成するに至つた。然るに昭和六年四十九歳を以て早逝されたのは眞に惜しむべきである。猶氏は元政友會新潟縣支部評議員として、地方政界に活躍された。

當主孫市氏は先代孫右衛門氏の長男にして、高等小學校卒業後、東京市瀧野川の國立醸造試験場に於て三年間の講習を終へ、其の後決り嚴父の許にて醸造法の研究に腐心した。各種覽會及品評會等に出品して、多數名譽賞牌を獲得せるは、良くその優良酒なるを物語るものである。

今日當家で發賣せる優良酒は帝國正宗國華、明鶴の三種にして、就中帝國正宗は縣下及近縣に於て名聲が高い。

尙氏は本年三十四歳、質實剛健、霸氣に富む青年實業家として現に、山本村々會議員、山本酒造株式會社專務取締役、政友會古志郡支部常任幹事、新潟縣酒類販賣統制組長岡支部代議員等の要職を兼任してゐる。

尙當家には、祖先の枌尾汐谷開墾の節發掘された古代佛像及び土器製碗の家寶二箇があり、年代不明なるも相當古代のものにして考古學者の垂涎して置く能はざるものである。

北谷村 名木野

村會議員

田伏 善三



その古き家歴を傳ふる記録の類は火災のために燒失、故

に詳細を傳へる事が出来ぬのは實に惜しむべき事である。代々農を家業となして當主を以て六代目であり、篤農の家として治く聞えてゐる。

先代五藏兵衛氏は資性英邁にして、實業方面に手腕あり商業を營みて努力家として令名が高かつた。善三氏はその四男として明治三十五年十月二日呱呱の聲を擧げし温厚にして篤實なる人格者である。また頭腦敏なる材幹にして小千谷中學校の出身、卒業後は家に在りて専ら家業に精勵、それと共に自治公共の事に意を

注ぎ、曾て村民より推舉されて消防組頭をつとめて村警備の上に多大の貢献をせし事あり、現在も村會議員、區長、信用組合理事、農事實行組合員などの任にあり、その村政産業各般上に貢献からぬものあり尙も献身的努力を執りて盡瘁中にして、その多大なる功勞は圓滿なる人格と相俟つて愈々衆望高く、一舉一動期待を以て矚目され、その將來は村を背負つて立つべき人物として村民期待の的となつてゐる。

家庭はすこぶる圓滿にして、一男二女の令息令嬢あり、春風洋々として村民羨望の的となつてゐる。

六日市村六日市

郵便局長 塚越 堅

抑々當六日市郵便局は明治七年十二月一日、妙見郵便局として、妙見に開局せられたるものであつたが、第五代目局長塚越熊次郎氏の時、大正七年八月二十七日現在の所に移轉したるなり。



先代熊次郎氏

卒業した。同校卒業後は、家業を

受け継ぎ、郵便局長となり、常に親切丁寧を標榜して郵便事務に従事しつゝあるを以て村民均しく、氏に對して多大なる



當主の令弟

は小樽高商出身の材幹にして、現在三井鑛山に於て中堅社員として勤務中である。

茲來汝々として、郵便事務に従事し、岩の實績見るべきものがありたるを以て大正十五年、上司より褒狀感謝狀を下附せられ、續いて更に昭和四年、五年、六年の三回に亘りて、同じく褒狀感謝狀の下附を受けた。又昭和十年九月に至り先代熊次郎氏は勳八等に叙せられたり。従業員は現在、事務員三人、遞送一人、送配二人、遞配一人。

山通村 柿 村會議員 加藤 英一

當家の祖先は上杉則實の臣岡野佐内が



殿父又六氏

城山城主たる時の家臣にして、當家中興の彌兵衛治と云へる人の子、又吉光春氏は藩主の信任厚く當地の郷士となり郷取



戦場の華と散つた。依て弟又六氏が相續をした。氏は明治五年土地

擔當、同九年地租改正委員に、明治二十二年更正土地調査委員、村會議員、學務委員、學校建築委員等の公職を務め、多年村治に盡力し自治功勞者として表彰を受けた。

當主英一氏は意志堅固なる人にして、村會議員、學務委員、柿土木森林保護組合長、東組信用販賣購買利用組合役員、山通村養蠶實行組合理事、山通村養豚組合長、古志郡剣道有段者會理事、山通村農會評議員、大總代、日本赤十字社山通村支部長の現職にあり、氏は明敏にして二十二歳の時既に大總代、二十三歳にして縣産米検査理事となりし人である。氏

の功績を尋ねれば次の通りである、當字には山澤、柿の二部落あり互に勢力争をなし、圓滿を缺くを憂へ芳賀健三郎氏と謀り諏訪、白山の二神社を合祠し地籍の合併を實現し、又柿土木森林組合を起し延長三里の間に四ヶ所の里道を開鑿し之が費用は縣費補助の外一切組合員の勞力奉仕に依り完成を見、村會議員となるや、山上にありて運動場なく通學不便なる學校を山下の平坦地に移轉せんと自ら建築委員長となり又運動場の寄附勸誘に勉め、廣大なる運動場を作つた、村長となるや複式教授學校二校を合併して單式校となし教育の向上統一を圖り、村經費の軽減を策したが、一部策士の爲め實現せざりしは残念である。

氏の家には家寶として佐々木四郎盛綱が藤戸の渡に揮ひ十三ヶ所の刀痕ある青井助次の刀並足利時代の具足等あり。尙氏は上越スキー俱樂部を作り副會長となり氏の指導にかゝる増田氏は全日本スキー大會に第一等に入選した。

尙ワカ夫人は體育聯合婦人會の役員にして、國防婦人會副會長である。

栖吉村 中澤

前村長 中村 祥作



一子忠將に出づ。忠將は通稱中村太郎、蓋し中村氏の祖にして、十

四世中村兵太夫は二浦義村に事へ、義村亡ぶに及び阿州名東郡福井村に住し、十五世兵太夫は其處を去り信州水内郡へ落ち來り茲に住すこと天正年間及び、二十一世中村兵左衛門なる者信州より越後に移り蒲原郡船場村に住し農業を營む、是れ中村勘五郎が始祖にて、古志郡の大豪にして、世々同村の庄屋となり家勢日々隆盛にして享保年中分家を出し、庄屋一棟一本宛を授け、高畑の中村、鷺巢の中

村、栖吉の中村の三家にした其の後、庸暗放情の主多く文化年中に至りて亡び、累代凡そ十有數世、年所一百八十餘年にして高畑、鷺巢の中村亡び、明治年間獨りその家名を落さざる者唯當家のみになつた。先代平作氏は六代目にして、資性鋭削若くして戸長となり明治十四年二月古志郡聯合會議員に當選し、同年八月新潟縣會議員に當選、十八年一月再選され二十二年一月滿期解職となり、三十年二月古志郡會議員に當選、斯界に盡瘁貢獻するところ甚大であつた。其の他室田石油株式會社、六十九銀行、長岡銀行、北越製紙株式會社等の重役に擧げられ、亦財團法人長岡病院の建設事業に功勞多く中にも最も氏を徳とするは中澤小學校經營の功勞にして、氏は首唱して縣廳に請ひ鄉村特別報備米免除の資を得、之を以て中澤教育所を專行寺に開設したのが、中澤小學校の基礎である。明治六年私財を投じて一校舎を新築し、中澤小學校に寄附し、有志と謀り學校資金蓄積會を設

け、後年高等科併置の時、其の經費は多く氏の蓄積の資金まで辯じ、同三十九年村民に提議して學校所在地の地區を購ひ共有とした。義務教育年限延長に依て校舍狹隘を告げ、偶々長岡中學校寄宿舎の競賣に際し、之を落札して購ひ改築、氏は自らその工事を督し落成迄一日も缺かさなかつた程である。同四十三年紀元節に當り、二千圓を當村教育界に贈出した翌年一月氏は六十七歳を以て病歿したが賞勳局は銀杯を下賜し氏の功勞を追賞し縣又氏を褒賞すること五回、氏の鄉村教育に貢獻せし偉大なる功績は筆舌に盡し難く、大正七年五月校舍改築十週年記念式舉行、村民氏の徳を永久に記念せん爲に校庭に建碑、其除幕式が七月に行はれたのである。當主祥作氏は右中村家の分家初代にして早稲大學政經科出身の秀才にして霸氣に富み俠氣滿々たる人物である。氏は教育事業に重點を置き、所有の藏書百數十冊を學校の圖書室に寄附し、又村長時代には産業の獎勵と副業の開發

に専念、消防組頭時代は企畫統制を策しポンプ、火の見櫓の改修及新設を爲し、青年團長當時は青年士氣の強化に努め、國民精神の培養に精勵し功勞多大である現在氏は二期目の學務委員として愈々活動盡瘁してゐる。(寫眞は先代平作氏)

山本村麻布田

村會議員 石田 庄藏

當家は、當村屈指の舊家にして、六代前石田家より分家せしものにして、代々農業を營み、篤農家として知らるゝ所である。

氏は、温厚篤實にして、且つ勵儉力行の人なれば、村民の信望頗る厚く、思想亦穩健である。故に屢々、村民に推されて幾多の公職に就きて、當村の發展に寄與する所尠からず。即ち、大字總代として十六年間勤続し、大いに其の實績を擧げたのみならず、農會總代に選舉せらるゝこと二回、尙ほ三南耕地整理組合會計に勤続すること五年、夫々良く自己の

職責を果した。現在に於ても、村會議員として日夜當村の發展に奔走しつゝあると同時に、學務委員として兒童の教育に常に多大の關心を拂ひつゝある所である。氏は嘗て、學校假建築工事委員として、工事の進行完成等に多大の努力をなしたるに依り、當時より、其の功績を表彰せられたことがある。其の他、土地賃賃價格調査委員、産業統計調査委員として、氏一流の着實さを以て、其の職責を果しつゝあるは、村民の感謝する所である。

下鹽谷村二日町

郵便局長 大橋 大助

當家は村内大橋家より初代半六氏が分家せる家柄にして、代



龜吉氏は當家の中興にして年若くして村

治に携はり、五十歳までの全生活を通じ村民の福祉増進の爲に盡瘁せる人として助役、村長、郡會議員、村會議員、鹽谷信用組合理事、郵便局長等の要職を歴任し特に、郡會議員當時、松尾實業學校の新設、松尾農學校を上組村への移轉問題に關して氏の盡力甚だ多大であつた。又日露戰爭に従軍し其の功に依り勳八等白色桐葉章及び從軍記章を下賜され、郵便局長として功績甚大の爲勳七等瑞寶章を下賜された。子息大助氏は七代目の當主にして明治三十一年生れ、資性誠實にして才學兼備、また謙讓の徳に富み、氏は十八歳の青年時代より郵便局に奉職し、稀にみる俊才にして學務委員、青年團長の要職に精勵し、現在郵便局長、方面委員として衆望を擔つて居り、郵便局長五ヶ年勤続成績優良の爲昭和十二年通信記念日に東京地方通信局長より表彰を受けまた大正十三年以來三回、新潟縣郵便局長より表彰された功勞者である。

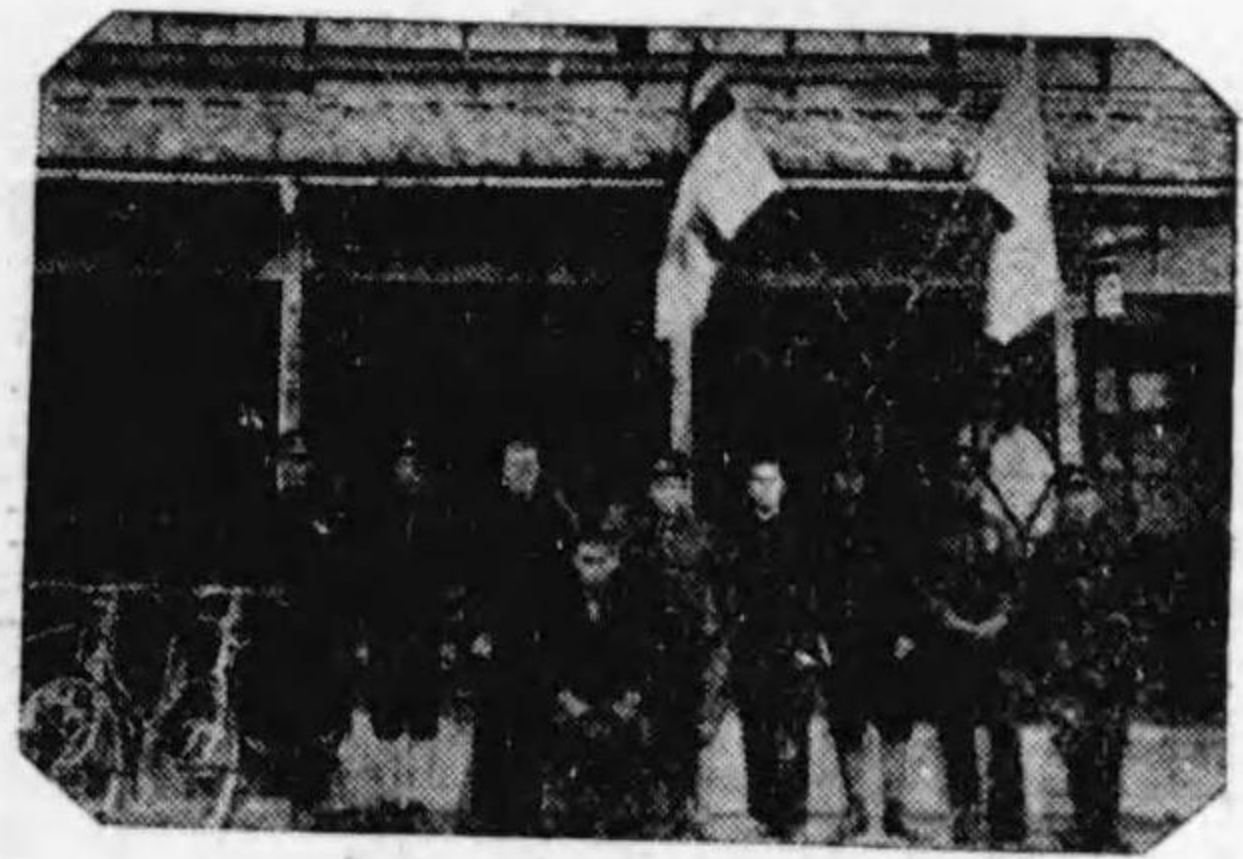
氏は産業の發達、文化の向上、經濟界

の進展を一つに通信機關にありとし其重要性に慮り、一切の公職を退き一意専心通信事務の開拓發展に勉めた。正しく氏の標語たる「實踐躬行」を率先して行つた人である。斯くの如き有爲の人物を有する當村はまことに幸の極みといふべく將來の發展も期して待たれる所である。また氏は皇道精神に基き、敬神の念まことに厚い人格者である。

東谷村泉

郵便局長 川上仙一郎

當家は村内川上家より初代仙右衛門氏が分家せるに初まる、初代仙右衛門氏に二代仙右衛門氏は襲名して祖父淺之丞氏勤勉よく當家の基礎を固めし人にして先代長七氏は當家の中興にて、謹嚴なる理財家であつた。消防組頭、區長、土地賃賃價格調査委員、家屋稅調査員、國勢調査員等の公職を帯び、村治に貢獻するところ多くまた模範的農事研究家として、一頭地を抜いた人物であつた。當主の仙一



郎氏は明治三十一一年生、温厚篤實に民の信望厚く

二代目郵便局長に就くや、村政の凡ゆる發達は一つに通信機關に待つものであれば、その職責の重大性に鑑み、一業主義に轉じ、青年團役員、消防組頭、在郷軍人會役員、區長等一切の公職より退き通信事務に専念盡力してゐる。昭和十二年度保險年金募集維持成績優秀に付、局長會より表彰を受け、非常に將來を囑望せられてゐる。氏は職務に熱烈なる反面、音



竹澤郵便局長 星野榮三郎

樂に趣味を有し、よし子夫人は國防婦人會役員として盡力してゐる賢夫人にして長男仙衛門氏は前途有爲の青年にして父君の片腕として活動してゐる。

當家は平氏の後裔にして、正平年間足利尊氏が謀叛するに及び、義憤に燃え、郷士となつてこれが覆滅を圖つた。その後徳川時代には庄屋をつとめ、苗字帯刀御免の家であつた。先代竹三郎氏は温厚な篤農家なりしが、四十七歳にて他界された。當主榮三郎氏は明治二十年の生れ、分家星野駒三郎氏の次男にして、請はれて當家の養子となつた。村會議員四期、消防組頭、青年團長、學務委員、區長等に

擧げられ、公事に竭して寧日なかつたが星野順一氏の後任として當郵便局長となるや、通信事業の重大性に鑑み、斷然公職一切を辭し、今や局務の善處に専念努力してゐる。養鯉に趣味を有し、四貫、三貫の鯉は數十をかぞへ、中には五貫目以上のものもあり、觀賞魚たる三色鯉の代表的ものを有す。夫人センさんは愛國、國防兩婦人會の幹事である。家庭は圓滿を極める。

竹澤郵便局は明治二十一年の開局にして、東山村、竹澤村、太田村を區域とする。初めから集配事務を取扱ひ、明治三十三年から内國爲替、同四十四年から内國電信、大正五年から保險事務を開始、昭和十年には電話も開通した。現時一ヶ年の郵便取扱数は、通常引受六五二七四同配達一三四六四三、小包引受一七八五同配達三八六五に上り、電信は發信一〇七〇、受信二二七八である。従業員は十三人をかぞへ星野氏の指導下に業務に勵んでゐる。

栃尾町

學校醫
軍醫中尉
從七位勳六等

山田清二



高等商業學校醫學部出身にして、前學務委員古志郡醫師會々長として

六年、在郷軍人分會長を爲すなど公職に在つて献身的努力を惜まず、現在栃尾尋常高等小學校、栃尾實科女學校、青年學校等の學校醫として敬慕頼されてゐる。又軍友會々長として人望篤き人格者である。

當家は長岡藩の重臣山田氏の孫に依つて創家され、山田錫氏と稱する儒者出づ氏は漢學に長けし祖父長滿氏の教えを受けて後、江戸湯島聖堂に在つて古賀調庵先生に師事し、修業後長岡藩の儒者とし

山通村長會

砲兵少尉
正八位

星野惣太夫



務太輔調胤
宗君筑後國生葉郡に封せられてより天正年間に至る三百

六十餘年の永きに涉り一方の重鎮とされた家系で文永弘安の二役に勳功あり、特に吉野朝廷の爲に盡して大義明分を明かにし、西征將軍官を擁護し奉り九州綏撫の大業を翼賛したがその史實多くは湮滅して傳はらず、其の後宗家凋萎後一門を擧げて各地に離散せる星野伯耆守正宗の孫が郷士となり當地に止り幾變轉後、享保年間名を惣太夫と改め歸農せるに始まる。歴代惣太夫の名を襲名し、郷總代を勤めし家柄である。尊夫惣太夫氏は明治維新の際名を惣太郎と改め、性謹言温厚

なる人、縣會議員、郡會議員、村長、村
 會議員、助役、氏子總代等多くの公職を
 勤めし縣政界の元老にて今尙鑠々として
 ゐる。當主惣太夫氏は明治十九年生に
 して前古志郡在郷軍人分會長、山通村在郷
 軍人分會長、山通村青年團副團長をなし
 現在は村會議員として三期目、東征信用
 販賣購買利用組合理事、新潟縣信用組合
 會常務理事を勤め、自治行政及び組合の
 功勞者として知名の人である。その資性
 霸氣あり、理智豊かにして義氣に富み、
 卓拔なる才能の所有者である。又氏は經
 濟政策に立脚する村政界の重鎮であり、
 學校移轉問題の反對派の闘士にして其理
 論明快で率直である。氏は又新潟縣信用
 組合聯合會の常務理事として縣金融界に
 盡力し、功績多く、自他を超えて公共事
 業に盡す所信に依り一路信念の路を邁進
 してゐる。氏は正八位砲兵少尉として、
 光輝ある帝國軍人であり、その家庭は常
 に、春風胎蕩として、信望厚き名望家で
 ある。



上川西村寺島
 前村長 清水 嘉平
 陸軍歩兵少尉
 正八位

大麻の生産地である當村は、之が亂賣
 と仲買人の不正多く、之を除去せ
 んが爲大麻の統制販賣
 を企畫し、
 杏の麻商組聯合會長大貫定衛氏と協力せ
 る嘉平氏は終に協定、實施をみるに至ら
 して村内斯業者に福音を齎らした。氏
 は明治二十一年生れにて、實父榮松氏は
 温厚實質なる村政界の元老にして元村長
 として三期に亘り盡瘁、現在村會議員、
 學務委員として尙も村治に盡力し功勞多
 大なるものあり、齡六十歳にして剛健で
 ある。氏はその血を承け霸氣に富み俠氣
 満々たる雄辯家にして前村長、學務委員
 在郷軍人分會長、古志郡在郷軍人聯合會

會長、農會評議員、農會總代議員等の公
 職を帯び献身的に村治に盡し、現在は總
 代、上川信用販賣購買利用組合理事、
 長岡郷農業倉庫幹事、水理組合委員、中
 越蘭絲販賣購買組合理事、中越醫療
 組合理事として至る處にその才腕を驅使
 し、功績を擧げてゐるが、特に教育問題
 には執權を有し、優良教員を蒐むるに腐
 心して之に成功したる爲、當村は縣内稀
 れに見る良質教員が揃つてゐ、教育の實
 を擧げてゐる。氏は外に信濃川上流改修
 問題、土木匡救事業等多くの功績を残し
 たる村の重鎮であり、當家は當村最古の
 舊家にして名門、約百五十年前全焼し、
 家寶家系等一切を烏有に歸した。當家は
 多く間兵衛の名を襲名し、代々信望厚く
 氏は愛國婦人會、國防婦人會の各分區長
 を爲し、銃後婦人として活躍し、内に在
 つては氏の良き半身として内助に富める
 賢夫人である。家庭はすこぶる圓滿を極
 めてゐる。

山通村鉢伏 櫻井 源治



先代 翁太郎 氏郎

在郷軍人分會長 當家は舊家で、歴代篤農家としてきこ
 九年地租改正委員を帯びて明治新政の複
 雜なる事業を處理し今日の土地關係を明
 かにした。其後土地貸賃價格調査委員を
 帯びて功勞があつた。
 先代翁太郎氏は尙壯健にして、現
 在學務委員として教育事業に専念しつゝあり、元村
 會議員、大總代、村農會評議員、村農會
 總代議員、氏子總代、赤十字社正社員を



先代 翁太郎 氏郎

なして功があつた。

源治氏は翁太郎氏の長男にて大正五年
 青島守備及シベリア事變に出征、勳八等
 白色桐葉章及從軍記章を賜る。現在は村
 會議員、在郷軍人分會長、水稻採取組
 長、農區部長、氏子總代の要職にあり、
 氏は特に青年教育に重點を置き十年間青
 年學校指導員として盡し、爲めに村より
 表彰を受た。又水稻採取組長として其
 改良進歩を計りたるに依り彌彦神社初穂
 講より第一等賞を受け縣より金一封を受
 た。更に氏は部落の企畫統制を計り大正
 七年部落農區を起し、經濟部、副業部、
 土木部、社界部、水稻部の五部を設け、
 各部長を置き農區部長が之を統制する制
 度を作る等其功績顯著である。
 性温厚にして不言實行の人、賢妻テル
 氏に家事を一任し村治及軍人分會の爲め
 努力されてゐる。
 テル夫人は愛國婦人會員、國防婦人會
 員にして、ヨノ母堂も又愛國婦人會員及
 國防婦人會員たり。

十日町村向島新田 丸山 七太郎

當家は分家後五代にして本家は三島郡
 戰國時代よりの武家、その後歸農し庄屋
 を勤め苗字帯刀を許された家柄である。
 百五十年前當地は信濃川河岸にして荒蕪
 の地なりしが、當時山田某なるもの此の
 地の開墾を計畫するを偶々耳にせる當家
 初代與右衛門氏は裸一貫にて分家し當地
 の草分けとして、一步一步大地征服に力
 を注ぎ、困苦窮乏の中に當家現有の廣大
 なる土地を切り開き今日の基礎を作る。
 二代與助氏、三代與七氏共に義氣に富み
 村を愛し、四代政藏氏は温厚なる篤農家
 にして明治新政に功績多く、村自治に盡
 力し今や七十七歳の高齡にして尙壯者を
 凌ぐ元氣さである。當主七太郎氏は新潟
 師範出の秀才にして、大正十一年より二
 十年間教育家として長岡市内校に校長を
 勤めた縣教育界の元老であり、資性温厚
 篤實、意志強固にして教職を退きてより

村長を勤め、現在は村會議員、學務委員、學區會議員、十日町信用組合理事、納稅組合長、農會副會長、總代、私設消防組頭、向島新田水害豫防組合常議員、向島五ヶ井水理組合委員として功多く夫人も又銃後婦人團體の爲活躍し長男精一氏は中村不折氏に師事する東洋美術學校出の洋畫家にして、前途を囑目されてゐる。

上組村村松

村會議員 高橋 績

當村大字村松は、戸數二百三十餘を有する廣大なる部落にして、一小村の戸數を有する爲、當部落の總代區長は想像を許さぬ多忙を極め苦心を要す。氏は良く此の勞苦に在つて善處し、努力し成果を擧げる滿身熱と力の人といふべきである。當家の祖先是源平の戰酣なる南朝正平年中、新田左兵衛左義宗が國司として當地に止まりたるに始り、後郷士となり幾變轉の後、歸農したものであり當村最古の舊家にして名望家である。歸農後の祖

先は歴代重兵衛、藤兵衛の名を交互襲名し篤農家が續いた。祖父十三郎氏は中興にして計理に長けたる二宮式勤農家にて家運大いに進み今日の素因を作りし人、十三代藤三郎氏は温健なる村政家にして明治十九年の地租改正委員を振り出しに村會議員、學務委員、總代、上組信用販賣購買利用組合評定員、氏子總代、壇徒總代等の公職に在り、特に村經濟界の爲に盡力する處多く村内の信任を一身に負つてゐたが、後進の爲、一切の公職より離れ長男績氏に家督を譲り齡五十七歳の高齡なるも、なほ壯者を凌ぐ健康を保つて、悠々自適してゐる。當主績氏は温厚にして理智に富み、義氣豊かなる人格者にして、前農會評議員八年、農會總代議員八年、土地賃賃價格調査員、國勢調査員を勤め、現在は村會議員として三期且學務委員八年、總代四年、上組信用販賣購買利用組合理事十年、上組農業倉庫理事、消防部頭十二年、村松廣道水理組合委員、村松區會議員、氏子總代、壇徒總

代等多くの公職に在り日夜活躍する愛郷心に燃ゆる熱誠の人であり、常に「誠實犠牲的觀念とを以て盡す」とのモットーの下に公共の爲盡瘁し、部落の納稅思想普及に功多く、稅務監督局長より表彰を又土地賃賃價格調査員としても功勞多く再度稅務監督局長より表彰を受けた。夫人カヨ氏は銃後婦人會の爲め盡力するところ多く、家庭に在りては氏の活動に後顧の憂無からしむ賢婦人である。長男榮一氏は温厚にして寡言意志強固なる青年紳士にして中學卒業後は當村役場吏員として村政に關與す。

山通村青木

村會議員 小林 勇三次

當小林家は定明の中村家より分家したる家柄にして、初代の祖を傳左衛門と稱した。傳左衛門氏小林家を名乗りて約五百年前當地青木に來住し一家を創立、實に當村最古の舊家である。爾來連綿として家系を傳承し、また累代庄屋を勤めて



多大の貢獻を印し苗字帯刀を許された。八代目の祖は中興にして青

木開拓に多大の功勞あり、以て長岡藩主牧野公より木杯及び感狀を賜りてその功を賞された。十代松藏氏は明治初年土地擔當を勤め、次いで明治九年地擔委員、明治十九年地租改正委員の任を帯びて、明治の廢藩置縣に際し最も困難なる事業を處理して多大の寄與貢獻をなした。先代勇藏氏も亦、村會議員、農會總代議員外村内各公職を多年に亘りて盡力し、功からざる效を奏し、六十一歳を以て長逝せる自治の功勞者であつた。當主勇三次氏は明治二十一年の出生にして資性剛毅、幼時より俠氣に富みて、事に當りては眞摯を以てなし熱と力の實行家と稱され、手腕家として衆望高い。夙に村政に進出して農業調査員、國勢調

査員、土地移動調査員、土地賃賃價格調査員として専ら産業方面に力を竭し、現在二期目の村會議員、畜産組合長、養蠶實行組合長、農會評議員、農會總代議員、消防部頭、青年會長、信用組合評定員、氏子總代等の村内公職すべての任にあり、尙も寧日なき努力をつけてゐる氏はまた常に犠牲的精神と眞劍なる熱意を以て人生を送るべきであるとの信念を有して村治に盡力し、その献身的努力は多大なる事績を各方面に印し、その主なものは青木より柿に至る狹隘なる惡路を大改修して遂に完成せしめたる事にてこの完成は實に氏一人の盡力に依ると言ふも過言ならず、これ熱と力と犠牲的精神をモットーとする氏にして初めて成功せるものにして、村民悉く感謝し、敬仰するところである。表彰も數次に及び、納稅功勞者としては稅務監督局長より受け、亦敬神の念厚く神社の爲に盡力し神社より受け、土地賃賃價格調査員として

家庭は春風洋々として和樂の家と聞えキエ子夫人は淑徳の譽高く、外に在りては愛國婦人會長、國防婦人會幹事の任にあり、常に銃後の護に奔走の勞を執りてその貢獻尠くない。

上川西村横山

信用組合長 稻川 武



孫にして、寛永年間城下を出て當村に移住し庄屋となり爾後歴代苗

字帯刀御免の家柄にして、當家の中興九代彦藏氏初め代々功勞多く、藩主より目録、感狀等を賜はりし名望の家系である先代兼太郎氏は永く戸長を勤め、複雑困難なる明治初年の新政に寄與する處多かつた。十二代目の當主武氏は温良また謹嚴にして數理に長けて經政家の名高く、

村經濟界を支配する重鎮である。先には村長、郡農會幹事、青年會長等の公職に従事し、其功績枚舉に遑なき有様にて、現に信用組合長として村内の信望を一身に集めてゐる。氏の業績の大なるものを擧げると蔵王橋の架橋と縣道新設にして當村は長岡市を自隄の間に見ながら信濃川に依つて分離され一里餘の上流にある長生橋を渡りゆく不便を痛感、先づ縣道敷設の大運動を起し、漸く之が認可を得引續き蔵王橋架橋運動をなし苦心の結果其貫徹を見たのは、實に氏の熱心なる努力の賜である。此の出願運動を初めてより、架橋完成迄約十五年の長日月を要しその間の苦難と活躍は非常なものであつた。

夫人チサ氏は女子青年團長、國防婦人會々長、愛國婦人會幹事等に日夜盡力してゐたが、最近後進に一切を譲り、家庭で靜穩の内に夫君を助け圓滿なる一家を構成して、附近村民の羨望の的となつてゐる。

竹澤村桂谷 高橋茂雄



信用組合長 勳八等功七級
當家の祖先は遠く織田信長の末期に上組村より移住せる村最古の舊家である。祖先は茂左衛門の名を多く襲名し然らざる時は頭文字に「茂」の字を冠せる。先代茂一郎氏は戸長、學務委員等多くの公職を帯び村治に盡力せるが齡四十にして永眠した。

當主茂雄氏は明治三十七年日露戰役に應召され黒木將軍の麾下に屬し、多くの戰功を積みし折柄黒英臺の大戦に於て敵砲丸の爲右腰下全部を取られ大負傷を受けたるも信仰厚く生命を取り止めた。その功に依り功七級金鷄勳章及勳八等を賜はり、後不自由なる身を以て村長などの要職に在り現在青年團長、在郷軍人分會

長、消防組頭、其他多くの公職を帯び、村民より敬慕されてゐる榮譽ある人格者である。

山通村柿 羽賀健三郎



當家の開祖は長岡藩主牧野源馬の臣にして本縣三島郡與板町に起り、歴代武家なりしが、八代目の祖源四郎氏に至り（今より四百年前）柴崎善九郎と稱する代理として現地に來り、爾來世々庄屋代理をつとめた。十四代健四郎氏は明治初年頃より自治に盡力せる功勞者である。因に現家は長岡千手觀音の老木を使用せる由緒の建築である。十五代先代惣七氏は村會議員、學務委員、氏子總代等をつとめた材幹である。

當主は明治十六年の出生、實力ある村

の元老にして、曩に助役、郡農會副會長、郡農會評議員、青年團副團長、青年聯合會評議員、在郷軍人分會役員等を歴任し現時柿土木森林保護組合副長、養蠶組合役員、養豚組合副長、納稅組合長、衛生組合長、東組産業組合監事、氏子惣代等を兼任する手腕家である。氏は常に不言事に當る實行家にして、溫良且つ意志強く村民の信任が厚い。

上組村横枕 小黒兼松

當家の祖は、鎌倉の管領扇谷の上杉敏朝の子、上杉修理太夫定正公が當地に城主たりし時、其の重臣の一人として來住せるものである。後茂左衛門に至りて庄屋となり、爾後歴代庄屋を勤め、苗字帯刀を許された家柄である。歴代茂左衛門の名を襲名し、明治維新に至りて、茂作と改めた。

茂作氏は、溫厚なる篤農家にして、明治新政の複雑困難なる村内の諸事を良く

處理し、六十三歳を以て逝去さる。先代定吉氏は、溫良なる村政治家にして村會議員、農會役員、耕地整理役員等の公職にありて村政の爲めに貢献せる人に於て、特に耕地整理事業には特別の關心を持ち、全力を傾注して良く該事業の爲めに努力したる人である。村民より村産業界の恩人として、尊敬を受けてゐる。廣く連る美田に稻の波を見る者、氏とその事業への努力を回想して、其の恩を感謝せざるものはない。五十八歳を以て逝去さる。

當家第二十八代目に當る當主兼松氏は理智の人にして而も平和の愛好者なり。其の圓滿なる人格は、村民等しく心服する所にして、推されて幾多の公職に就き其の爲したる功績の數々は擧げて數ふるに遑なきものがある。即ち上組信用組合専務理事、青年會役員、國勢調査員、壇家總代等の公職を歴任したる後、現在上組信用組合役員、村内總代、農會總代議員、五ヶ山林組合役員、至誠役員として

多方面に活動してゐる。

尙ほ氏は、郡經濟界の重鎮にして、十五年の長日月に亘り、上組信用組合最高幹事として、經濟界發展の爲め盡力すると同時に、他面産業開發と其の合理化運動を起す等全く寧日なかりし人である。氏の家庭の圓滿なるは、世人の羨望する所である。夫人ミト氏は溫良なる賢婦人にして、愛國婦人會、國防婦人會に於ては、常に其の指導者として活動しつゝ、長男定一氏は縣立長岡中學校卒業後、縣農事試驗場研究部研究生として二ヶ年修學し、直ちに當村役場吏員として村治に盡しつゝあり、性溫好にして將來を囑望さる。

尙ほ當家家屋は、今より約四百八十餘年前の建築に係るものなるも、今尙頑丈なり。又家寶として多くの刀劍類を有す

栖吉村中澤 廣瀨長右衛門

前助役 當家は武家の流を汲む家柄にて、村最

古の舊家なり。其の開祖は、遠く二百有餘年前、即ち享保年間、初代長右衛門の歸農に始り、元文年間に至る間は、長右衛門の名を襲ひたり。然るに、安永年間より寛政年間に至る歴代は、松右衛門の名を襲ひたり。後享和年間の主を與五七と云ひしも、文化年代に至りて、再び長右衛門の名を用ひ、寛永年間第十六代長兵衛氏に及ぶ。其の間、歴代篤農家として家運の隆盛に勤め、また村内の諸事に盡力したる所頗る大なり。

長兵衛氏の子、長次郎氏は、明治五年土地擔當を、また同九年地租委員の公職に任ぜられ、維新當時の複雑困難なりし諸種の事務を適正妥當に處理し、明治新政に寄與する所大なるものありたり。氏は更に、戸長、戸長役場擔當、郵便取扱等の公職を歴任し、六十九歳を以て逝去せられたり。

先代長太郎氏は、永年村役場に奉職し、後村會議員として當選すること三回に及び、更に、學務委員、農會總代議員、年

番役員、明治十九年の地租改正委員等幾多の公職を歴任して寧日なく、村自治今日の發達の基礎を作りたるものなり。氏は意思と熱と力とを有する村治の手腕家にて七十二歳を以て没せらる。

當主長右衛門氏は、温厚にして謹直、しかも包容力を有する村政治家にして、助役を初めとし、村會議員に當選すること二回、良く村政の運用に力を致し、大いに其の實績を挙げたるのみならず、更に學務委員として兒童教育の刷新を圖り、其の他農會總代議員、農會評議員、青年會々長、土地貸賃價格調査委員等の要職を歴任したる後、現在大總代、氏子總代として、村政の爲め盡力しつゝあるものなり。

氏は、常に正義をモットーとし、信仰心強く、村民等しく尊敬する所なり。夫人は良く當主を助けて勞多く、家庭を守る賢婦人にして、又愛國婦人會員、國防婦人會員等として活動せられ、銚後婦人としての範たり。

新組 村

消防組頭 牛腸 六三郎



氏は長岡商業學校卒業後、大正六年海軍志願兵として舞鶴海兵團に入團し、在團五ヶ年に及びその間遠洋

航海に數度のぼりたることあり。大正九年歐洲戰爭終るや、殘務整理に従事し其功に依り勳等を賜つた。氏の資性温厚篤實にして村民の信望厚く、消防組頭として活躍してゐる。當家は三百年前、同村惣右衛門家より分家となり一家を創立し代々農業を營み今日に及ぶ舊家にして名望の家柄である。氏は明治三十年九月四日實父六藏氏三男として生を享け後望まれて牛腸虎吉氏方に養子となりたるものにして、養父虎吉氏は村會議員、區長として長期に亘り自治事業に盡瘁したる

高潔なる人格の主である。氏は又銚後を守る後援者として親族を助け、近村の評眞に宜しく、村民に敬慕されてゐる人格者である。夫人靜子さんとの間には男三人女一人有り、家庭は圓滿にして和樂に満ち、常に春風の中に居るの感あり模範的家庭として信望篤く、靜子夫人は貞淑にしてよく氏を助け、内助者として比類なき良妻であり、子弟の薫育にはよく心を用ひ、賢母として聞えてゐる。又氏は篤農家として、愛郷家として知られてゐる。

竹澤村 竹澤

消防組頭

星野 仙一



先代仙之丞氏

免の家 柄なる 現郵便 局長星 野榮三 郎氏の

家より、元祿年間に分家せるものにして初代を定助氏といふ。二代仙次郎氏、三代金次郎氏は共に篤農家として聞え、四代仙次郎氏は義氣に富み數理に長けたる村政治家にて戸長、地租委員、地租改正委員を歴任した。五代駒三郎氏も村政治家といはれ、郡會議員、同副議長、村長(數期)、収入役(數十年)、村會議員、學務委員のほか、竹澤信販購利組合設立發起人となり後理事に就任、村農會長、畜産組合長等を歴任し、功績顯著なるものあり、自治功勞者として表彰された。



地租委員 仙次郎氏

先代仙之丞氏は六代目に當る。明治五年に生れ、縣立長岡中學校を経て、明治二十七年駒場の農大を卒業、二十數年間長野縣小縣蠶業學校に教鞭を執り、その後村長、竹澤村託兒所長、同職業紹介所

栖吉村 栖吉

農會長 安部 康多



當家の開祖は八百餘年の往時にあるも戊辰の役に菩提寺善照寺焼失により不明なり然し今當家の記録に判

明せるものを見るに、寛延三年安兵衛氏に始まり、歴代その安兵衛を襲名し、郷總代を勤めし家柄にして篤農家なりしといふ。

十六代安兵衛氏も亦郷總代として村役人なりし爲め戊辰の役には人夫頭として出陣し、其時の負傷が原因して四十二歳にて歿せり。氏には子女なかりし爲め、弟六藏氏が相続をなす。即ち當主の嚴父なり。

六藏氏は性温和にして質實なる村政家六十九歳にして今尙壯健なり。元、村會議員、學務委員、大總代等の公職にあり明治五年土地擔當、又同九年地租改正委員を命ぜられ困難なる事業を處理し維新政府に功績を残せし人なり。

當主康多氏は農會長、稻吉施業森林組合長、原町養畜農業實行組合役員、三貫耕地整理組合理事兼組合長、大總代、禮徒總代、長岡郷事業倉庫理事等の現職にあり、農事關係と改良に就ての造詣深く村内第一人者なり。耕地整理の發起人と

なり山林の開墾、水利の便を計る等の難事業を良く遂行し又稻吉施業森林組合を起し林山道の開索、植林の奨励し、原町養畜事業實行組合を發起し水稻の改良を副業として養畜の奨励をすゝめる等氏の努力は村民の感謝の的なり。

(現中澤橋)を架橋せる功勞者だ。之右衛門氏の次男に助太郎氏あり、分家して一家をたてたのが即ち當篤尾家である。助太郎氏は謹嚴なる精農家にて、植木を好み、庭内には多數の古木繁茂し、今も花季に至れば行人歩を留めてその美觀を賞するといふ。助太郎氏令室リイ氏は土合今井家より嫁し、長岡市に蔬菜の縮賣りをせし元祖にて、内助の功頗る多かつた。二代仲衛門氏三代喜代吉氏を経て、先代たる四代伊三郎氏は、村總代に推されて永年村治に盡瘁し、年五十九の時永眠した。

山通村長倉

村會議員 鷺尾助太郎



長岡藩主牧野公の信任厚く、

代組頭をつとめた家柄である。十九代之右衛門氏の子六左衛門氏は村内谷内橋

當主助太郎氏は明治十九年の出生、俠氣に富み、村治公共の事業に全力を注ぐ村政界の闘士にて、曾て農會總代議員、同評議員、青年會副會長、山通村養實實行組合聯合會役員、農業調査員、國勢調査員三回を歴任、また學區會議員五期、區長數期に及んで今もその職にあるほか村會議員、學務委員を現任する。夫人キミさんは國防婦人會のため盡す

ところ多き村内の名流、長男助一氏は現時青年團副團長、消防組員の任にあり、信望あつく、前途を約された青年手腕家である。

入東谷村來傳

入東谷郵便局長

星野助左衛門

氏は先代治助氏の男として、明治八年に岳降したものである。

當家は村内切つて舊家である、星野家より分家したるもので、當主を以つて七代目である。先代治助氏は當家中興の祖謹直にして、温厚、よく勤儉産を治めた篤農家で、村内の信望頗る厚く、推されて村會議員、區長等の公職を歴任し、村治績の向上に盡した。本村自治の功勞者である。八十七歳の高齡を以つて逝去した。

當主はその男である。現時入東谷郵便局長として重きを爲す氏は、また温厚にして謹言なる活動家で、その高邁なる識見、手腕、力量は、氏の重厚なる人格に

加へて村民の信望絶大なるものであり、従業員一同より深く敬慕されてゐる。趣味として釣に堪能なる氏は名手の境に達すと聞く。

家庭頗る圓滿で、長男到氏は東京本郷育文館中學出身の秀才、中學時代はランニングの選手として活躍したスポーツマンである。現在は父君を扶けて専ら通信事務に精勵してゐる村内の模範青年で、その前途洋々たるものがある。

入東谷郵便局

郵便局長

當局は三等郵便局で、創局は明治四十一年二月一日

である。當時、來傳郵便局と稱したが、昭和八年四月一日現局名に改稱したものである。管轄區域は、入東谷區内に屬し戸數三六五戸、開局當時は無集配引受郵便事務であつた。現在通常引受一〇七、小包引受二二六、簡易保險契約件數一九四、保險料一〇一、三〇、保險金一七、〇九一、〇〇である。現局長は、星野助左衛門氏で、従業員は二名である。

十日町村十日町

學校醫 鈴木宏

當家は村内最古の家歴を有して代々村



總代を勤めた富能氏は富能氏

が分家せる家柄にして當主を以て二代目とする。



富能氏は頭腦明晰にして温厚なる資性を有せる材幹であつた。濟

生學舎に學を修めて、卒業後當地に醫を以て分家なし、専ら當地方一帶の衛生に意を注ぎ、殊に大正元年頃當地方にトラホーム流行を極めし時、氏はこれが撲滅

の爲に寢食を忘れて努力、活躍遂に效を奏せるも、爾來二十年一日も休む事なくして、各校々醫として兒童の衛生に留意し、また各家庭を訪問して衛生思想の普及に努め、當地方民の感謝の的となつた五拾九歳を以て長逝せるが、村民等しくその死を痛惜した。

當主宏氏はその男にして、明治三十八年出生の明敏なる頭腦を有する材幹である。また俊敏の氣性に富み、夙に長岡中學より高等學校にと學を修め、のち尊父の衣鉢を襲いで新潟醫科大學に學を積み卓拔た技術を以て卒業、それと共に家に歸りて亡父の志を嗣いて衛生思想の普及に努め、また患者に接しては柔和圓滿を以てなし、それが卓拔た技能と相俟つて庶民の信望すこぶる高く、近隣稀に見る刀圭家としてひろく著聞する。氏はまた軍人家族には、殊に懇切を以て接してゐる。趣味は尺八及び水泳である。

時代母堂は愛國婦人會幹事の任にあり葉奈子夫人また愛國婦人會及國防婦人會

に關與、共に銖後の護に奔走の勞を執つてゐる。家庭圓滿にして近在美望の的となつてゐる。尙醫家として當家の特筆すべき事は昨年六月新潟縣主催の赤チャン大會に於て次女久美子さんが一等賞状を受けし事にて、以て當家の如何に衛生に留意してゐるかを察知出来る。

種 原 村

學校醫 小 川 齊

當家の開祖は初代徳兵衛氏にして、勤勉、理財に長け子孫の爲め計る處多く當家の基礎をなす。中興に源吉氏棟梁を業とし家政を整理し大いに家運を挽回す。敬神の念厚く神社寺院の建築に際しては犠牲的に請負ひて建立した。

先代(養父)卯一郎氏は、村長、村會議員、學務委員、農會長、區長等の要職を歴任し、功績多し。享年五十七。

當主齊氏は北魚沼郡藪神村の鈴木家より入夫せる人にて濟生學會出身の秀才なり。醫師檢定合格後、長岡市河野病院主



任醫師として勤務後當村に於て開業す。種原村、原校、半藏、金村

校、太田村地谷校の校醫として兒童の衛生に當る。

本村より小出村の縣道敷設の議起るや



當村開發の好期なりと進んで村會議員となり縣當局、佐藤代議士、

十日町村片田

學校醫 矢尾板 民次

氏は村内高山村の矢尾板家の次男とし



先代六太郎氏

て明治十六年生れ、後年獨立分家し、氏

を以て初代とする。本家の開祖は菅平家の武將が落人として歸農せるに始まる村

内最古の舊家であり、歴代御取締を勤めた家柄で名望家である



尊父六太郎氏は温厚にして意氣強固たる村政

家であり壯年時より村會議員、學務委員、區長、向島五ヶ井水利組合長等の公職を帯び村治に盡瘁した精農家であり、今や

櫻井縣會議員等と共に運動し昭和五年當局より許可を得、工事費負擔金中一金壹千圓を寄附する等美舉多し。

更に當村信用組合が破境に陥るや、進んで組合長となり之が整理をなす。同組合は不良貸付の爲、擔保流れの不動産を負込みし結果の破境なるを以て、擔保流れの土地を高價に買入れ、金壹千圓を寄附して見通しをつけ其後組合長を辭す。又植林事業を振興させ、苗木の副業を盛にさす。

氏は敬神の念深く村社に大鳥居の寄附をするや氏の徳を慕ふ村民は、村内總出で大石柱を社前に持ち來りその德行を助く。「誠意を以て生きた記録を萬世に残す」は主のモットーである。養鯉に造詣深くサダ夫人は賢夫人にして愛國婦人會國防婦人會の會員として盡力する。長男徳衛氏は法政大學出身にして頭腦明敏なる秀才なり。

尙當家の家屋は中興源吉氏の手になるもので構造頗る堅なり。

齡七十二にして尙矍鑠としてゐる。本家

當主六平氏も亦、氏の意を繼ぎ、村會議員、區長等の公職に在る村政治家として村治の爲め盡瘁して、信望厚き人格者である。當主民次氏は立志傳中の一人にして獨立獨歩紛骨碎身し、一代にして良く今日の名聲と地位資産を築いた人である。氏は二十歳迄、農事に勤み乍ら獨學してゐたが、向學の念止み難く、近親の反對を押し切り、一切の後援を斥け、苦學の目的を以て上京し、直ちに北里病院に雇はれ勤務の餘暇に日本醫學專門學校に學び、同校を主席にて卒業するや、更に醫者開業試験に合格し、益々研學せんと志し一旦歸郷したが、切なる引止めを受け又村内衛生施設の不備なるを憂ひ、開業醫として村内に止まり衛生思想普及を決意し、大正元年分家し片田に開業した。氏は信念として實家等よりの應援を斥け獨自に資本を以て開業せる爲、資本として見るべきもの無く、頗る貧弱なる家に在り不自由を忍びつゝ、日夜努力した結果

氏の慈心と勤直と相俟つて、日ならずして大なる信用を博し家運大いに振ひ、一路發展途上をたどり、名聲遠く東山村迄に及ぶ。現在氏は太田村學校醫にして、當村學區會議員、古志郡醫師會副會長、校友會評議員等の公職に在り、村醫として村自治の爲献身的な活動を続け、村政界の重鎮として將來性ある人格者である。氏の夫人はな氏は茨城縣猿島郡守戸村の醫師中村家より嫁し來り、賢夫人にして内助のかたわら産婆を爲し、長男正典氏は北里研究所に在つて病理學の研究中にして將來を囑望されてゐる青年紳士である。

黒條村下々條

學校醫 織田 冬一

當家の祖先は、歴代長岡藩牧野家の家臣にして、片山兵治衛門氏に始まる舊家である。代々長岡藩城下に居住したが、先代齊氏は片山家の弟に生れ醫師を志して城下に於て醫學を學び戊辰の役の終つ



た頃、當地に來り醫院を開業した當時村内は元より附近に醫師なく病者の困惑少なからざりし折柄として、氏の開業は附近住民の感謝的であつた。齡六十六歳にて永眠した。



れ、現時、學校醫を囑託されてゐる。氏の受持つ黒條新組、漆山、百東各學校には最も難病とされるトラホームが皆無といふ好成绩である。氏は常にその豫防に腐心し、加ふるに同病患者に對しては無料治療をなし、また家庭に向つては衛生思想の普及に努力する等、村内衛生の改

善に努力し寧日もない。氏は温厚にして責任に強く、且つ博愛心に富み、學校醫設置の當初よりの校醫にして一般人士の信望も厚い。
長男寛氏は明治三十八年生れ、縣立長岡中學校を経て第四高校に進み、更に金澤醫科大學に學んだ秀才で、在學中はラニングの選手であつた。昭和十二年八月支那事變に應召出征し、十三年三月第一回凱旋兵として歸郷した。臨床上の技術に卓れ、典型的な新進名醫である。

山本村

學校醫 菊池幸右衛門

氏は資性温厚にして人格高潔、村民の敬慕頗る厚く、多年醫業を營み同村の衛生に盡力して來た。氏は名利に活淡、私利私慾をさげ、醫は仁なりの所信に依つて診察し、投薬し衛生思想の普及につとめた。氏の嚴父菊池義雄氏は元郡會議員にして後郡會議長を務めたる自治功勞者であり其他縣會議員を二期に亘り務める

など地方自治に功績多大であり、醫を業としてゐた。資性剛毅にして果斷なる義雄氏の血を承け、氏も義氣に富み信望殊に厚く、永年の間本村學校醫として功績あり、又富貴貴村校醫を兼務して村民に等しく感謝、信頼されてゐる。

六日市村新田

養鯉家 星野 正二



當家は元祿年間星野九右衛門氏を開祖となし、この代★



もそも魚は當地の特産なるも、特にその發祥を尋ね

地に在りて庄屋職をつとめし名家である十一代平一郎氏 即ち先々代は當家中興の士にして、縣政界に令名を馳せると共に村自治に盡力せし徳望家であつたが、明治四十年五十四歳を以て他界された。現戸主正二氏は大正二年の誕生、小千谷中學校出身にして、若弱よく家業を繼ぎ、日々學究に勉める傍ら、祖父平一郎氏の趣味たりし養鯉に熱心してゐる。そ

ば、當家にありといふも過言ならず、祖父平一郎氏が趣味として始め、遂に現今の如く地方特産となるに至つたのである。當家養殖の鯉は、各品評會に於て常に優賞を受けて居り、曾て帝國水産會々長野村子爵は、この地方巡察の際、當家に宿泊し、その鯉を鑑賞したといふ。また當家所藏の三富畫伯の筆になる油繪は、星野氏の愛鯉を寫せしものにして、その寫生の如實なる宛も生ける鯉の如く、名畫として愛鯉家の間に聞えてゐる。なほ正二氏の義兄成氏は村會議員として村政に參與し、名聲噴々たるものがある。

太田村虫龜

佐藤 行雄



太田村最古の舊家に於て累代庄屋として村民より誦はれ、名字帯

刀御免の名門の家柄たる佐藤家より分家して既に四代の家業を傳承する當家のその初代は龜遊と稱せる人であつた。

龜遊氏は不幸にも盲目にして、夙に針醫として技を積み、のち醫師となりたる獨力獨行の氣性に富む立志傳中の人物にして、不自由の身ながら當家の基礎を築きし材幹である。二代雄庵氏尊父の衣鉢を繼ぎて幼少より長岡藩牧野公の御殿醫に就きて學を修め、技を修得、龜遊氏長逝するや歸郷して家を嗣ぎ、醫を以て近在に令名高かりし名醫であつた。氏はまた篤行頗る多き博愛心の強き人格者にして事に當りては眞摯を以てなし、家運を益々興隆せしめ、七拾五歳の老齡を以て没した。三代龜之丞氏すなはち先代氏は濟生學舎出身の頭腦明晰なる材幹にして手腕、力量、高潔なる人格を具備し、専ら自治公共に盡して多大の功を効せる自治功勞者であつた。その勤めるは郡會に出馬して二期を歴任し、副議長の要責迄もつとめ、その外村會議員、學務委員

養蠶實行組合長等村内各公職に及び、また民政黨に屬して郡常任幹事の任にあり縣政界の重鎮と稱され、尙特筆すべきは氏は特に教育に意を用ひし事にて、多大の貢獻をなしてゐる。五拾貳歳にて没せるは實に惜しむべき事にて、縣政村治の損失とも言ふべきである。

當主行雄氏はその次男にして、出生は明治三十一年である。長兄辰雄氏の死亡に依り家を嗣ぎしものにて、初め東京高等工業學校電氣科に勉學せるも、父祖のあとを嗣ぐべく東京醫學專門學校に轉じて學を積み、優秀なる成績を以て卒業、昭和十二年亡父の後を嗣ぎて開業、爾來卓越せる技術と明朗圓滿なる性格は名刀主家の評を高め、また人望自ら高まりて會て在郷軍人分會班長、同理事の任に推されて努力せし事あり、その將來は多大の期待を寄せられてゐる。開業以來日未だ淺きといへども既に竹澤村學校々醫を囑託されてゐる。すこぶる多趣味にして馬術、庭球、登山、鑑賞鯉の養魚等

び、地方稀に見る青年紳士である。

夫人靜子さんは淑徳の譽高く産婆及び看護婦の試験に合格したる明敏なる頭腦の持主にて、また愛國婦人會、國防婦人會等に夙に關與して銃後の護に奔走の勞を執り、貢獻頗る多い。

尙、氏の長兄辰雄氏は新潟醫科大學出身の秀才にして、在學中は同校野球部の主將として聞えしスポーツマンにして、卒業後はロンドン、ニューヨーク等に外遊せる明朗にて温厚なる紳士であつた。

栃尾町谷内

神官 川崎 清一



氏は先代勇氏の長男、明治元年三月三日を以て生を享けた。その祖は土佐の人、長曾我部元親の亂に遭つて自然没落し、承應年間越後に來り、栃

尾郷大人ヶ嶺の里、棚村大人の分家に寄遇し、後元和年間に開村せし神子屋敷、鎮守森の下を永住の地とトした。始祖南巖氏は即ちこの地に來てからの開祖にてその先七代は靈壘のみ在す。十四代の祖榮全氏は、一代に四十三度、讃岐金刀毘羅宮に信徒の代參祈禱をした人で、藩主牧野侯の知遇を受け、五家老の門に入り、玉藏院主と與みし、金刀毘羅大権現の堂宇を建立した功勞者である。十五代の全明氏はその長子にて、明治戊辰の役鳥羽伏見に戦火開かれるや、藩使の隨行となつて京都に入り、無事使命を果して歸り復命せしも、藩中城内すでに亂れて糸の如くであつたといふ。

尊父勇氏は明治十年神道教導職試補科命以來、生涯を惟神の大道の宣揚に捧げた人で、明治維新前後、出雲大社教會副議長、神宮教神風講話世話係、その他を歴職したが、制度の變改により、祈禱禁厭の禁止、講社の結收往來不許等幾多の困難に遭遇した。その後神習教少講義に

任命、老後は大社教に復り、栃木縣足尾銅山本山神社の神主となり、行年七十九にて少教正に進み永歿した。

當主清一氏はその長子である。漢學を山田錫に、書法を庄川松雪に、英語を東京成立學舎に學び、また加藤博士の社會學、根本博士の周易、高島嘉右衛門の筮學、黒川真頼の國學、中村博士の漢學指摘講義を受け、京都及び郷里に於て小學校數校に教鞭を執りしほか、山形縣共立學舎の英語教師に任じ、二十七歳の時、大社教少講義に任じ、海雲神社を設立した。明治二十九年、神道宣場と敬神思想普及のため諸國に遊歴、藤崎神社、氣比神社、正樹宮の神宮を初め知名人士の贊同を得て、その目的を達した。同三十一年頃、大日本魂養成會を起して教育勅語の實踐に邁進、翌年大社教栃尾教會所を設立、その後も諸所國々を遊覽して國民精神の作興と敬神思想の振作に力め、日露戰爭當時は皇軍健勝伏敵祈念に日夜寸暇もなく、三十八年には世界萬教統一會

を組織した。現在古志郡長岡市神職會支部評議員、大社教越後分院院長をつとめ、神社々掌は明治三十七年以來にて、延喜式内村社小丹生神社のほか、兼務社に村社諏訪神社、大江神社、村社巢守神社ほか二十社がある。性格剛毅、講演は氣概に富んで流暢、祭事祝詞奏上の如き心血を濺ぎ、聲音一堂を壓する觀がある。

家族は令閨と二人、嗣子武一氏は目下中魚沼郡十日町に在り、奏任官待遇の中學校教諭で、トシ子夫人との仲に孫英一君、同二男尙一君、同長女レイ子さんがある。

太田村虫龜

神官 佐藤 信



當家は南蒲原郡下田郷の五十嵐傳左衛門家の分家にして、本村最

古の舊家名門である。始祖吉左衛門氏は庄屋佐藤善左衛門氏の嫡男に生まれたるも、庄屋などは好まずとて多大の土地を受けて新に家を構ひ、村人が組頭に推薦せんとしてもこれを固辞した。天正年間頃の人である。降つて光格天皇の御宇天明七年當主より四代前の吉左衛門氏は京洛の眞言宗本山智積院に於て十四年から勉學修行し、歸郷後晝夜見書の樂しみに耽り、農閑期には農村子弟に讀書を教へ、碩學の名遠近に聞え、質問に來訪するもの多く、また他村より請はれて講義に巡回することがあつた。世人呼んで虫龜の白髯大學と稱した。當時の書籍品物等は今猶家寶として保存される。先代龍仙氏は當家中興の祖ともいふべく、敬神の念あつく、正直と勤勉謙讓を旨とし、二宮式篤農家であつた。堅忍不撓、殆ど晝夜の分ちなく家業に勵み、冬季は近村子弟に學を教へ、陰徳を重んじ、名高き人物であつたが、行年八十三にて永眠した。

當主信氏は先代の男、文久三年を以て生れ、新潟師範學校の秀才、夙に小學義長、村會議員、信用組合評定員、學區會議員、農會總代等を歴任、現時木村内諏訪神社ほか七社、東山村石動神社ほか二社、種々原熊野神社ほか二社、東竹澤村神明神社ほか一社の社掌を兼務する。青年教化運動に功あり、書畫骨董の蒐集に興味あり、謹嚴慈善の人である。長男重氏は新潟師範卒業後中等教員檢定試験に合格、長岡女子師範、小千谷中學、函館高女、柏崎高女、見付高女を歴任、現時東京府立第六高女に教鞭を執つてゐる。同夫人イシさんは才媛の聞えが高い。



と云ふ。寶永五年より
の記録に依れば、七代目住職が苦心漸く伽藍

の再建を爲せしも大正十一年再度の大火に際し再び一切を烏有に歸した。先代善淵師は焼失後の本堂建築の爲、日夜腐心して義侠心強く、檀徒の信任厚く爲めに本堂の建築も容易なりしと云ふ。現住職善毅師は温厚にして意志強く、在郷軍人會役員、方面委員等の公職に在り、青年思想の善導に寧日無かりしが、支那事變起るや豫備役伍長として應召され今や中支に轉戦生死の間に幾多の勳功を積みつゝある。氏の弟讓氏は京都大谷大學出身東京に於て著作出版を業とし、先代未亡人ルエ氏は精神修養の指導に活躍し三男善是氏も又出征する光榮の家庭である。

上組村松

勝覺寺



先代水哉氏
信師が
蓮如上人の教

當寺は正信師の開基に成り、信濃武田信玄の家臣たりし正信師が蓮如上人の教

華を蒙り弟子となつて永く世上を濟度して後當村に來り眞宗大谷派の一寺を開いた。之が當山の濫觴である。伽藍三百年



有餘の建築に成り、又庭園は古木蒼然と繁り名園の名に背かず、蓮

如上人の御影、三方方面の御本尊、千體の惠心僧都作、六字の妙號等の寶物を有してゐる。當寺二十四代水哉師は温厚な

上組村松

松岡善毅

當寺は眞宗大谷派に屬し、五百年前の開基なるも火災に懸り過去帳等一切を烏有に歸せる爲め詳かでない。口碑に依れば開基は勝覺寺の新發意當時に別居せし

栃尾町

帶雲山西嚴寺

栃尾郷の名刹として古來庶民の信仰篤かりし當寺は、眞宗大谷派に屬し、本尊



阿彌陀如來は木像である。天文二十一年越後國柴田の住人佐々木氏出家して了閑と號し、現在の地に一字を建立、西嚴寺と稱し、爾來法燈燦然として今日に至りしものにして、その祖先は山本村浦瀨の城主佐々木三郎兵衛氏である。了閑上人を第一世とし、十一代目先代意教師は當寺中興の祖と讃へられる功勞者にして教校出身の名僧であつた。七十五歳の高齡を以て入寂した。堂宇は再度燒失の厄に遭ひ、現在のものは天保十一年の建立である。

毎年十一月の報國講は當寺の特殊行事として遠近に著聞し、當日は頗る殷盛を極める。また當寺は戊辰戰役の際、長岡藩山本帶刀の手兵が陣營として屯せる舊蹟地である。寺寶には開山上人の眞筆名號、蓮如上人の眞筆がある。檀徒總代は今井久助、星野豊次郎、大橋廣吉の三氏。現住職佐々木孜雄師は明治三十九年の生、學德兼備して人格高邁、檀信徒崇敬の的となつてゐる。夫人

苑江さんは中蒲原郡小合村高蔭寺堀家より入嫁し、貞淑の譽れ高き賢婦人にして住職同様庶民の信望がある。

十日町村十日町

日長山專福寺

當寺は十日町村の中央に位置し、境内廣く古樹鬱蒼として繁り、池あり小川あり天然の名園を爲し風光雄大である。伽藍は寛永年間の建築にして廣大、崇嚴なる建物である。宗派は本願寺に屬し、御本尊佛に阿彌陀如來を祀り、遠く名寺院として聽えてゐる。

十三代覺峰氏は宗敎家として人格高潔にして宗門の重鎮、善く思想善導に盡瘁し、七十六歳を以て涅槃に入る。先住賢龍氏は學識高き名僧にして多くの衆生を濟度し、思想善導と村民の平和に盡瘁したる教門の元老であつたが、齡五十一歳を以て永眠した。法然燦然と光りを放つて、寺門はいよ／＼隆盛にとむかつてゐる。

住職

鷲尾正俊

現住職鷲尾正俊師は大正五年生當年二十三歳の新進

にして、目下京都大谷大學に在學中の秀才であり、その資性濃厚、宗敎家として遠大なる抱負と理想を持ち一路それに向つて邁進せんとしてゐる學徒にして、當寺の前途洋々たるものがある。先代賢龍氏の未亡人である俊子夫人は、霸氣に富む知識夫人にして現在十日町婦人會々長、愛國婦人會副會長、國防婦人會々長等の公職に在り、婦人公團體の爲め盡瘁する處多く同地婦人界の重鎮として人望あり、又婦人の身を以て先代賢龍氏の後、寺院一切の事務行事を處理するなど賢婦人として粉骨碎身の努力を惜まらず今日に至つたものであるが、同夫人は、又、亡夫賢龍氏の意を繼いで多くの遺兒を教育し、徳育に心血をそそぎ、社會人として立つに遜色なき子弟として養育したるは節婦と云ふべく、まれに見る賢夫人にして賢母である。

六日市村瀧谷

瀧谷山了明寺



當寺は阿彌陀如來を本尊とし、眞宗本派本願寺派の名刹である。昔、岩崎某と稱する武士、建武延元の亂

に落武者となり、發心して出家し、眞言宗を奉じ、小千谷高島に了明寺を建立したのが、當寺の濫觴で、その後六日市へ移轉、當時は岩崎山と稱してゐたが、中興の開基淨雲師（永正十三年三月遷化）までは幾代を経過せしが詳細ならず、後瀧谷の現地に移ると同時に山號を瀧谷山と改めた。百年前、祝融の災に遭ひ、現在の本堂、庫裡、鐘樓、山門等はその後建造に係るものである。境内頗る廣く一町三反歩、殊に庭園は自然の美に恵まれ、山水の麗美なること

縣下に名立たり、了明寺園と呼ばれてゐる。庭内に男瀧、女瀧あり、この瀧あるにより瀧谷の地名が起きたといふ。寺寶としては行基菩薩の作になる不動明王がある。

檀家約二百戸。現住職黒川淳昭師は第十四代法榮和尚（昭和九年入寂）の末子大正四年生れにして昭和十年大谷大學を卒業した。當地方の特産たる鯉の養殖に興味を有して造詣も深く、了明寺の鯉は天下の名物たらんとしてゐる。令園は長岡銀行高田支店長青柳文吉氏の長女、貞淑の婦徳を有す。

黒條村天神

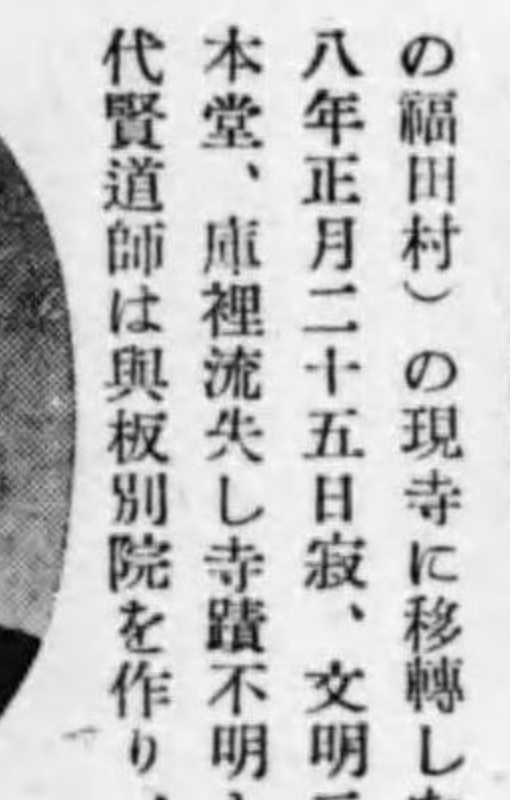
惠曉山淨林寺

當山は長岡正覺寺の開基、善性師の實子善覺師に兒二人あり、長男善惠師は正覺寺に止まり、二男善曉師は信州稻荷山に寺院創立、本山の開祖にして天文二年三月九日入寂、其の後數代の經て川中島の戦亂の際、越後長岡に轉居し、十一代



先住職内藤賢城師

中興の祖宗頼の時代古志郡黒條村（當時



の福田村）の現寺に移轉した、師は寛文八年正月二十五日寂、文明二年の洪水に本堂、庫裡流失し寺蹟不明となる。十五代賢道師は與板別院を作り、教界に盡瘁し、十八代住職賢十師は與板別院に二十二年相勤め、寺院組長を十

六年勤續し本山より大淨院の稱號を受けた。十九代目の前住職賢城氏は、昭和六年滿洲事變に出動、七年五月華々しく凱旋、功により勳八等旭日章及び従軍徽章を授けられ、また後日滿洲國建國功勞章を授與され、伍長に昇進した勇士である



押見住職

當寺は初め栖吉村大字中澤に建立されしが寛永年間現在地に移轉せるものにして、その後近世に至つて住職久し

山通村町田

晃翹山淨照寺

日支事變起るや再び九月十七日召集されて出征、各地に奮戦する中終に昭和十二年十月二十四日午後二時江蘇省孫家宅の戦闘に於て名譽の戦死を遂げた。現住職内藤道雄師は先住職の弟にして當年二十二歳温厚にして謹嚴、多くの將來性を持つ有爲の青年住職である。本山は阿彌陀如來を本尊とし、十二世柏禪師が享保元年申受けたもので、本願寺派に屬してゐる。現本堂は明治二十五年秀城師の再建になるものである。

絶えしが、先代祐覺師が入寺して再興したのである。本寺は荒廢の見る影もなく、疊一枚すらなかつたといふ。それを今日の如く整備したる先代の功勞は譬ふべきものもない。師は謹嚴なる努力家にして、享年五十二歳を以て入寂した。現本堂は約三百年前の建立である。本尊は阿彌陀如来、宗派は真宗本願寺派である。境内は蒼鬱たる森林にして天然の美觀をなし、他境に入るの想ひがする。附近には長岡温泉、悠久公園等あつて訪れる者が多い。當寺特殊行事として、日露戦争の頃から毎年四月十五日に招魂祭とて大讀經が行はれる。

現住職押見智師は明治十年の岳降、濃厚謹嚴なる名僧と稱され、曩に本願寺派十四ヶ村寺院組長たることあり、現時方面委員に任じ、社會事業に貢獻尠くない。長男智淨師は大學を卒業し、現に本山三條別院教務院に在る。

當山は智師を得て、愈々寺運隆昌に向つてゐる。

新組村福島

愛羽山直福寺

當寺は、由緒深く、開山秀算和尚が、元祿二年、南魚沼郡三ツ俣より、當所に來りて本堂を建立したに創る。

爾來十九世の住職を経て、現住職風間文龍師は第二十世である、歴代の住職は良く、高遠なる佛教の理想を、平易にして要を得たる談話の形式を以て、村民の指導教化に努めた。

境内には、藥師堂及地藏堂ありたるも昭和十一年、本堂改修に當り、兩堂は本堂に移した。藥師堂及地藏堂は、靈驗頗るあらたかなるを以て、男女の之に詣ずる者絶ゆることがない。又境内には、松杉等鬱蒼として繁茂し神々しさ言語に盡し難い。

當寺は、其の本山を、奈良縣の長谷寺とし、寶物は、其の主なる物を擧ぐれば十一面觀音、涅槃像、兩面曼荼羅、十二佛、水中より出現し黄金の佛を胎内に納

めたる彫刻の立像(丈三尺)等である。尙ほ、毎年三月廿一日、大師講を、又八月十七日、觀音講を開いて、釋迦無二の無邊の加護に感謝するを常とする。

現住職文龍和尚は、先住職澄純和尚の實子として、明治三十七年一月、呱呱の聲を擧げた。爾來、孜々として、専ら住職としての修養を積み、昭和六年住職となり、其の高潔なる人格は檀家の均しく敬愛する處である。尙ほ、師は方面委員として社會事業にも多大の努力を爲しつゝある。

下鹽谷村下鹽

龍澤山妙圓寺



當寺は紀元千八百三年、近衛天皇の朝
康治二年新
義派の開祖
興教大師の
高弟俗名佐
伯鬼四郎耀
光房融大僧

都(紀州根來寺第二世)の開基に係り、本尊は釋迦如来(行基菩薩の作に成る)鎮守山王神社の寶物弘法大師の筆に成る不動明王の像は僧都が當寺に遺されたものにて、其他にも遺物多かつたが、火災に罹り燒失した。開基以來七百七十二年にして、其間時勢と寺運は幾多の困難に遭遇したるも法燈益々隆々として信徒加はり、當村に華藏院、山葵谷村に遍照院蒲原郡長澤に寶積院の末寺を有し、寺院隆である。

舊藩主牧野侯封を享くるや、舊領地より玉藏院を移して建立し以來鬼門を鎮め領内に冠たるものがある。開基大徳は諸人が知ずして鬼神の怒りに觸るゝを憐み永久に是が鎮護の任に當らしめた爲に當山の加持を得れば、鬼神の怒り解け、靈驗顯著にして患者の平癒せしもの枚舉に遑なく信者の參詣絶ゆることがない。當寺の面積約五反、田地三丁、畑一丁あり、檀家五百、行事として二月三日武神毘沙門天大護摩供、五月八日灌佛念、大般若

轉讀會あり、又年中金神祈禱修法あり、檀徒總代は上田彦一郎、石風善一、阿部惣右衛門、橋惣次右衛門、大橋勘助、大橋大助の諸氏。

住職

師は東京大正大學專門部弘教科三年卒業の高徳の内山慶阿

師にして内山賢峰師に望まれて養子となり、先住賢峰師は現在南魚沼郡浦佐村普光寺住職である。氏は濃厚篤實なる人の抱負は、修養道場を作り、惱める者への燈したらんとし「行」としての努力に欠けた現代佛教に實踐的な歩みをさせなければならぬとの主張の主、趣味は盆栽培養、動物飼育に興を持ち、日本鶏の研究者として日本鶏保存會の會員である。氏の家庭は、養母堂、夫人、長男の家族にして圓滿である。

荷頃村北荷頃

萬年山曹源寺

當山は曹洞宗に屬し、本尊は觀世音菩

を整備して今日の偉觀を復興するに至つた。

檀徒總代は田ノ口多田利吉氏である。

住職

中野 琢乘



先住渡邊嶺丈師は學識一世に秀でたる名僧であつた。現住中野琢乘師は昭和二年その後を襲いで就任した。中野家は長岡藩主の重臣たりし、長岡市原町の名門中野熊藏家であつて師はそこに生れた。十一歳にして高德寺田村大機師に入門して修行を積み東京市麻布區北日ヶ窪なる曹洞宗大學林即ち駒澤大學の前身を即業し明治四十三年宗門より選拔され北野元峯老師に隨行して渡鮮した。その後京城語學研究所に入つて朝鮮語を修め、全鮮に亘つて布教し内鮮融和と宗門擴張等のため盡瘁して大正四年歸朝、高德寺住職を

經て昭和二年當山の住職に就任した。

吾身こそ口下手 筆下手

上手 下手

何が取得で

生きて居らるゝ

の一首を座右銘としてゐる。嚴父は明治戊辰の役に陣歿し、母堂刀自は健在で、師夫妻の間には三兒がある。

上組村上下條

日出山專徳寺



當寺は僧淨哲の開基に係る、本派本願寺に屬す。淨哲は新潟眞宗本派眞淨寺十一世である。天眞淨寺は信州水内郡より長岡城主の招に應じ此の地に移つたが、城主村松へ轉封の時従つて新潟へ移轉した。其の後元祿十年變故に依り轉派して西本願寺に歸す。



當寺は戊辰の兵火に懸り本尊佛を殘して寶物烏有に歸し、十二世智海師現在の伽藍を建立し、先代嘉哉氏は東京帝大印度哲學科出身にして飯山中學校長として教育事業に盡瘁した。

住職

佐々木 哲矣

師は十四世にして京都龍谷大學出身。佛教の民衆化と立體的國家的建設運動に惠念し、母堂は愛國婦人會役員夫人は國防婦人會に爲活躍してゐる。

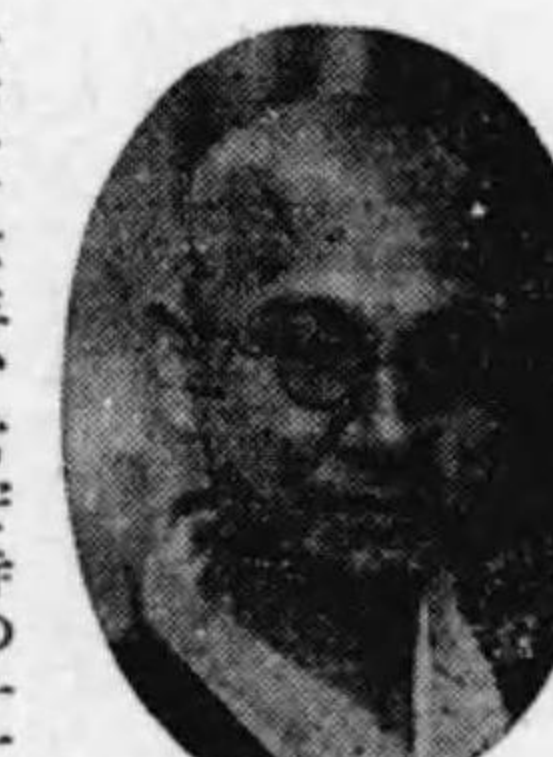
上組村宮内

日照山万休寺

當寺は眞宗大谷派に屬し、阿彌陀如來を本尊とする。開基は順能師といふ。信濃國稻荷山五千石の人にして、寛文年中當地に來り當組片田村權左衛門、姓田中



氏同家の姉嬢坊守して諸事世話するにより當村へ一寺を建立したのが即ち萬休寺である。師は眞享四年卯年十一月、享年六十二を以て入寂した。寶物に祖師上人御影、空如上人御影、寺號名號等がある。



眞言宗の寺院として名利なりしがその後廢寺に等しくなり居たるを

中野侯村東中野侯

稻荷山東光寺

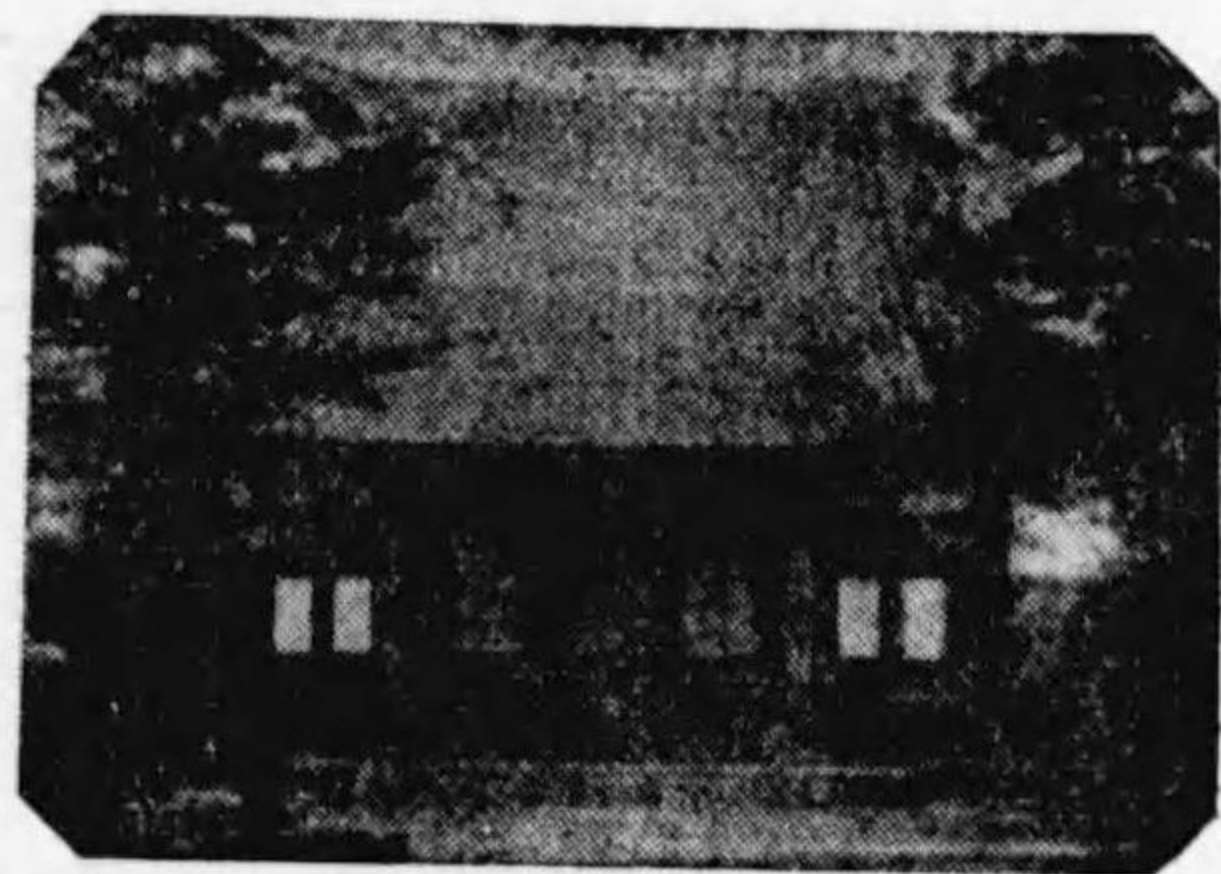
當寺は雁叟秀頌師を開基とし、古くは天正十六年、常安寺の十二世臥月善龍大和尚が曹洞宗の寺院として再興した。本堂は大日如來、側立に毘沙門天及び不動明王を安置する。境内頗る明媚にして不動ノ瀧、藥師堂等、眞言の盛大の時、高野山を眞似たる結構なるものにして、本堂は三百有餘年前の建立に係る。境内面積五百有餘坪、自然の山水に富み、古松の婉曲は恰も蛟龍の天を飛ぶがごとく、また門前に古木大樺の繁茂せるありて仙境に入るの想ひがする。

上組村攝田屋

青木山光福寺

當寺は眞宗本派本願寺に屬し、本尊には阿彌陀如來を安置する。開基は玄洞と稱し、信州草間村の人、久しく筑摩川沿岸に俗塵を離れて悟道に入つてゐたが、戰國時代のこととて諸國に兵馬倥傯し、

なほ養父たる先代開能師は當寺中興の祖とも稱すべく、堂宇全焼後の復活に滿腔の努力を盡した人である。



福寺を建立した。本山は京都本派本願寺である。現堂宇は前住職草間寂靜師が大正三年に再建せるもの、庭内には山あり池あり、自然の景観をあつめてその美、遠近に著聞する。

檀徒は長岡市、古志郡、三島郡等にわたり、總代は長谷川彌吉、星野衛吉、高橋中の三氏である。現住職草間寂靜師は明治十三年の生れ、當山第十八代目にあ

玄洞居住の地にも甲越の兵干戈を交へるに至つたので難を避け、越後頸城郡土底濱に移り、再轉現地に永住して光たる。毎年九月十日在郷軍人分會主催のもとに戦死者の追善法要をなす時、師の影響下にある上組村佛教聯合會にて後援をなし、護國の華と散つた人々の靈を慰めてゐる。同聯合會は師の盡力により設立され、各宗の服裝と讀經統一につとめ現在理想的團體と稱され、時折思想善導のための講演會などを催してゐる。師はまた郡佛教聯合會設立運動中であり、且つ方面委員として活躍し、宗教と實生活の結合に努力してゐる。

夫人千代野さんは曩に女子青年團長をつとめ、現時、愛國婦人會新潟縣幹事、同攝田屋分會長、國防婦人會攝田屋分會長等を兼任する。

上組村松小山 金城山洞照寺

當寺は文明年間當時の碩徳月船長印大和尚の開基に係り、本尊十一面觀音は惠信僧都の作、本尊の他に毘沙門天を安置す。開山は一山惠桃和尚である。享保年



住職 船岡見雲師

間、十世住職の時、火災に罹り、記録費物を一切烏有に歸した。その後、二十四世棟門碩梁大和尚はこれを再建、現在伽藍の結構遠近に冠たるものがある。三十世昭嶽宗和尚は茶道の大家として知られ、先住職三十一世中川雲嶺師は富山縣の出身、享年六十九にて入寂した。境内は天然の山水美に富み、就中西國巡禮三十三觀音を擬せしは他に比類なく、舊領主牧野候が時々歩を枉げられしところ、道俗男女の參詣者も踵を接して後を絶つことがない。現住職三十二世船岡見雲師は明治十一年の岳降、中蒲原郡白根村能登の船岡嘉右衛門氏の二男にして、先住職雲嶺師に就いて修業した。現時村内の集會や講演會等に進んで寺院を開放し、精神修養の道場たらしめてゐる。

刈羽郡

上條村久米

別俣尋常高等小學校

明治八年水上大光寺に假開校され、同十六年回谷、水上、久米、博文の四校に分離、回谷校は更に細越校を分校としたが、同十九年、博文、水上、細越の三校を廢止し、二十年これを併合して久米村に校舍を設置、二十二年、校名を別俣尋常小學校と改め、大正七年四月より高等科を併置して今日に至つた。學區は久米水上、細越の三字である。農村の實相を體認せしむると共に、農村生活に必須なる智識技能を授け、美しき農村社會を建設せんとする精神を涵養することを根本方針とし、校外訓練の徹底を期するため久米、水上、細越の三通學團を設け、各團に團長、副團長及び役員を置き、成績

頗る良好である。勤勞教育の徹底、自治訓練の徹底、敬神の念の徹底は本校の三特色といふことが出来る。

歴代校長は池島大吉、堀井啓助、鹽浦三代吉、猪俣松次郎、南鋼太郎、霜田佐内、會田俊治、武藤儀作、大橋喜作、小林三郎、金子武夫(現任)の諸氏にして、學校功勞者としては長井助治、宮川仲平、小林安二郎、桑原長太郎の四氏が挙げられる。現在職員は九人である。在學兒童は尋常科二百五十人、高等科七十人で、卒業生は尋常科千二百六十人、高等科四百餘人の累計を示してゐる。就學歩合は一〇〇%、出席歩合は九九%二一にして夏の庭球及びランニング、冬のスキー及び球技は他校の範とされる。衛生費の設定と實施も他に率先したもので、蛔虫驅除、その他兒童衛生施設は完備する。

石地町

石地町長 光村 關治

今より二百五十年前に加賀藩士が故あつて當地



抑々當家 魚業を營みしが、の祖にし

て、先代乙八氏は町會議員並區長として町治に參與し其の功績著しきものあり。當主關治氏は明治三年八月二十七日、嚴父乙八氏の長男として生れ、石地小學校卒業後は嚴父の訓育を受け、早くより町治に關心を用ひ、現在は石地町の町長の名譽職にあり、其他、郡會議員、收入役、書記、農會長、消防組頭、魚業組合長、町内役員等各種の公職を歴任して現在に至つたものなり。氏は性穩健着實にして義氣に富み、眞に紳士的人格者にして町内の信望を一身に集めてゐる。

民政黨に屬しその政治的關心も大きなものあり。家族は男三人、女一人なりしが不幸にして男三人は死亡せり。

南鯖石村石會根

正八位 佐藤 益章

當家は村内屈指の舊家にして、天正年間すでに當地に在住せること判明するも其以前は何十年か何百年かを知らず、ただ判明する祖を權太夫と云ひ、その後權之丞を襲名して明治維新に至つた。古くは農耕の業に従事したいとはれ、先代和作氏は神官をつとめて遠近に令名を馳せてゐた。

當主益章氏は先代の長男として明治二十七年二月六日に呱呱の聲をあげた。柏崎中學校卒業後、東京農業大學に學んだが、中途にて學を辭し、郷里に歸つて社會公共の事業に携はり今日に及んだ。一年志願の豫備少尉にして正八位に叙されてゐる。烈々たる熱意を有し、意志の強固なること他に比類すくなく、一面に於

ては温厚に見ゆるも、一度斷を下せば飽くまでも初志を貫徹せざれば止まざる程の人である。現時南鯖石村長にして、村會議員、在郷軍人分會長、消防組頭等を兼任し、自らは謙遜して業績を語らざるも、村の發展には多大の貢献あり、抱負また遠大なものがある。趣味は旅行である。政黨色は絶無。

家庭には母堂ハジメさん、夫人カツさん、長男正隆氏(帝大在學中)のほか、二郎君、秋雄君、十三郎君、正君、永子さん等の子女がある。

上小國村太郎丸

上小國村長 中島 泰造



當家は由緒ある舊家にして、數百年前源平時代の落武者として諸國を流離し、後大沼に着く

其後故あつて當地に土着して、それ以來農業を營み來る。永正二年よりの事績は判明せり。

實父直一氏は村長、産業組合長、村會議員、郵便局長を歴任し、その清廉潔白にして温良なる人格は、村民敬慕的にて、早くより村治に意を用ひその功績は村民の普ねく認める所、今尙、鑿鑿として郵便局長に在職中である。

當主泰造氏は實父直一氏の長男として明治三十五年一月廿四日に生る。長じて柏崎商業學校に學び、卒業後は大正十二年より昭和六年迄役場の書記として精勵した。

資性剛毅廉直にして才氣渾灑の氏は、夙に村治に意を用ひ、その識見、手腕は眞に非凡なるものがあり、現在では村民の衆望を擔つて村長の要職にある。

氏は村長となるや、村民一致自治の發達を計り、着々其業績を擧げつゝあるは氏の手腕を現實に物語るものである。父子二代に互つて今尙村政の爲めに盡

力しつゝあるは、村民の深く感謝してゐるものである。

トミ子夫人は温雅貞淑にして、當主との間に一男三女あり、その家庭は頗る圓滿である。

中里村桐澤

中里村長 青柳 良吉

青柳家の祖は青柳武右衛門氏といひ、相澤藩の家臣として武名を馳せしが、相澤城の廢城と共に當地に止まり、桐澤部落開拓の先驅者となつた。爾來年々戸口の増加を見ると共に、當家の地位もまた重要さを加へ、天和檢地の頃は高頭をつとめ、且つ庄屋として名聲があつた。分家も非常に多い。先代三郎氏は自治功勞者といはれる逸材である。

當主はその男にして明治二十四年の出生である。縣立加茂農林學校を卒業し、智識的な近代型紳士と稱され、温厚篤實なる性格は衆望をあつめるに充分であつた。夙に村會議員その他村内各種の公名

譽職を歴任し、村政各般に互つて赫々たる事績をのこし、先年村民一致の懇望により村長に就任、銃後農村の固めに努力すると共に、自治の圓滿なる發達に意を用ひ効果を收めてゐる。

長男惇氏は加茂農林學校に在學し、頭腦明晰なる俊才といはれる。なほ他に二令息三令嬢を有し、和氣藹々として家庭頗る圓滿である。

千谷澤村

千谷澤村長 林 源治

そもそも當家の祖先は、我が國、名門藤原家より出でたる家柄にして、當村屈指の名家である。始祖は藤原貞宗に起り往昔戦亂を避けて花の京都より今の高田市附近に來り、しばらく同地にありしが後、現在地に移り住んだのである。代々農耕の業に従ひ、先々代の頃は村内第一の資産家と稱された。先代周平氏は家業の傍ら村會議員に當選活躍し、功績顯著なるものがあつた。

氏は先代の男、明治二十年十二月二十五日の岳降にして、同四十一年近衛騎兵第一聯隊に入營、同四十四年騎兵上等兵となつて除隊した。資性温厚篤實にして言語明快なる君子的人格者といはれ、漢學に造詣深く、現時村長の要職をつとめてゐる。ミツエ夫人との間には五男三女を有し家庭圓滿である。

武石村

武石村長 片岡 平一郎



片岡家は上杉の臣下にして、七八百年前、故あつて當地に來り土着せし由なるも、確固たる記録等なく、判明せる事項としては、當主にして、十八代目にあたり、代々庄屋を勤めし舊家名門の家柄である。百年前頃より酒造業を始め、品質良好

にして縣下及近縣一帯に名高く、博覽會品評會に於て優等賞を授けること數十回に及び、年三百石の醸造をなし、使用人も十餘人に及ぶ。

當主平一郎氏は明治三十五年十二月二十五日、嚴父龜太氏の男として生る。長ずるに及び東京に遊學し、早稻田大學の商科に學び、卒業後は郷里に歸つて父業を繼ぐ。青年團長の要職を経て、現在は村長、村會議員、家屋調査委員長、衛生組長、信用組合監事等を兼職しつゝあり。此間、醸造酒の品質の改良、販路の擴張に専心し、酒造優等賞は縣組合及縣より數十回に互り表彰された。

氏は資性明敏達識にして、君子型の人格者なり。

典雅溫良なるテイ子夫人との間に長男一人あり、琴瑟相和し羨望的なり。

横澤村 德橋

横澤村 中 澤 淳 藏

當家は數百年前、戰國時代に落武者と

して、當小國郷中里村相野原に流離し來り、當所を住居と定め、農業を營み初めたり。當時諸武具は當領主にはゞかりて持參せず、僅に表道具なる槍、刀を持參せるのみ、いづれも今尙家寶として保存する。其後當初居住の相野原は度々の水害を蒙り數代に互つて烈しき苦しみを嘗めてより、遂に現在の横澤村德橋に轉居せり。當家は舊家名門にして村内第二の資産家なり。

當主淳藏氏は、明治二十七年嚴父幸松氏の長男として生る。長じて高等小學校に學び、卒業後は漢學を修む。嚴父の嚴格な指導の下に勉學にいそしみたる篤學の士なり。

青年時代より役場の收入役を勤め、後助役四期に及び、昭和十二年八月遂に村長に當選現在に及べり。

氏は民政黨に屬し、政界への關心も深く、性淳朴平適にして動作機敏なり。純乎として村民の爲めに努力する様は、普く渴仰的なり。

夫人との間に三男一女あり、夫人も愛國婦人會の會員として盡力してゐる。

山横澤村

山横澤村 中村 兼 平

三百數十年前以前の昔に、中村清右衛門



と云へる人當地に移住し來り、土着して附近を開拓し

農業を始む。之當家の祖にして百三十年前に分家し、當主にて五代を累り當村の舊家である。先代兼一郎氏は、産業組合理事、村會議員三期を歴任し、八十二歳の高齡を以て今尙健在である。

當主兼平氏は明治三十一年一月六日實父兼一郎氏の長男として生れ、長ずるに及び、縣立柏崎農學校を卒業し、郷里に於て消防部頭、青年團監事長等の要職を経て現在は收入役を務む。

氏は頭腦明敏、事に當るに緻密、又數

理に明るい。卓越せるその手腕、識見は特に納税に於いて縣内有數の良成績となつて現はれ、縣廳及稅務所より數回に互り表彰せられし事は村民の信望を一身に集めてゐる。政界に於けるその存在は又大きくして、民政黨に屬し、活潑な運動をなしてゐる。

テル子夫人との間に、長男稔氏一人ある。溫良なる夫人又夫君を助けて賢婦人の名聲高きものあり。

中通村 吉井

中通村 伊部 貞太郎

當家は當村有數の舊家にて、伊部八兵



衛氏より十數代を経て當主に至る。代々庄屋を勤め、

良く當村の爲め貢獻する所多大なるもの

あり、苗字帶刀を許さる。

當主貞太郎氏は、先代源三郎の男として呱呱の第一聲を發したり。長ずるに及びて柏崎中學校に學び、優秀なる成績を以て同校を卒業したり。

氏は、濃厚篤實にして言語明快、其の手腕は人の知る所なり。即ち實業界方面に於ては各方面の事業に關係を有し、中通信用組合理事、中通郷農業倉庫理事、刈羽郡乾藪組合理事、刈羽郡養蠶業組合副組長等、多數の要職を兼ねて、氏一流の敏腕を以てする諸種の事務の迅速、適正なる事務の處理は、何人の追隨をも許さざる所なり。尙ほ氏は、實業界に以上の如くなるのみならず、又諸種の公職にありて直接當村發展の爲め寄與しつゝあり、即ち、中通村農會長、中通村消防組頭、中通村會議員として、當村の福利増進の爲めに、多大の貢獻を爲し來りたるのみならず、現に當村長として、村政の刷新、諸施設の改善の爲め異常の努力を拂ひつゝあるは村民等しく感激し居る

所なり。

優れたる生活の所有者たる氏は、尙政治方面にも多大の關心を拂ひつゝある所にして、常に進歩的なる見地より、漸進なる説を爲して、人を感服せしむ。氏は民政黨新潟縣刈羽俱樂部常任幹事として活躍しつゝあり。

家庭にあつては、夫人ミユ氏、長男與一君、二女久子さん、二男隆君、三女美佐子さんあり、長女悦子さんは既に荒濱村渡邊富一氏と婚姻さる。

刈羽村

刈羽村 長 木 村 勇

當家は二百年前より、當地に在住する



ところにして、當村有數の舊家にて代々當村の公職に

就きて良く其の職責を果し、當村發展の

爲め資すること洵に大なるものあり。

氏は丸山 太郎氏四男として、明治廿二年八月廿八日、呱呱の第一聲を擧げた頗る天性明敏にして、夙に當村の村政に對して多大の關心を拂ひつゝありたり。長ずるに及び、氏は早稻田大學政治經濟學科に學び、良く政治經濟學の蘊奥を極め、歸郷するや村民は氏の政治經濟に關する深き知識と其の濃厚篤實なる人格に對し、忽ち心服敬愛する所となり、最初推されて、青年團長に就任、就くや氏は直ちに、當時青年間に有したる種々の弊風を打破して、質實剛健なる農村青年の意氣の養成に努め、大いに其の實績を擧げた。續いて消防組頭となりて、消防施設の充實に盡力しつゝありたる所、遂に村民の希求する所に依り、村長の要職に就任したり。爾來氏は、早大に於いて學べる知識を應用し、良く村政の刷新に努力しつゝありたるを以て、當村は今や進歩向上の一路をたどりつゝある。氏の家庭は妻子共六人、頗る圓滿なり

常に和氣あいあいたるものがある。

二田村 二田村長 荒川義一



大同元年開山に係る圓滿寺の住職をなせる人が當家の祖にして開明の義民事件にて缺門になりしことありしも、累代當地に止まりて現在に及ぶ。

先代又市氏は庄屋、戸長、郡會議員等を務め、村内に残せし功績顯著なるものあり。

當主義一氏は、嚴父又市氏の長男として明治二十七年一月に生る。長じて柏崎中學校に學び、卒業後は嚴父の訓育の下に共に村内の自治に専心し、村民の福利増進を圖ることを終生の念願として永年に亘り努力し、學務委員、村會議員、消防組頭等の要職を経て、現在は二田村村長となる外、村會議員四期、信用組合理事、消防組頭等の現職にあり。政黨關係は無く、性溫情にして人に接するに溫雅なり。村民は擧げて氏の村治に對する努力を多とす。

信仰は眞言宗にして、信仰心頗る厚くキクノ夫人との間に三男二女あり、尙夫人は愛國婦人會會員にして、村内の婦人間に重きをなす。

柏崎町批把島

町會議員 西川 彌平治



養父藤郎氏は敏腕を以て聞え高き人にして、大正六年八月、鐵工業を開始漸次其の規程を擴

組織に變更し、合名會社となし、當時三萬圓の資本金を増加したるも、其の後、發展の一路をたどり、現在資本金拾萬圓である。

當主西川彌平治氏は明治三十一年十二月十八日、呱呱の聲を擧げた。長ずるに及びて、長岡高等工業學校に入學し、優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直ちに新潟鐵工所より招聘を受けて、同鐵工所に入所、爾來孜孜として同方面の研究に餘念なかりしを以て、短時日を以て實習を完了、退きて養父藤助氏の後を受け續ぎて、合名會社西川商店鐵工所に社長として入所、爾來同商店の従業員の信頼を一身に集め、同商店社長として現在に至る。

氏は、養父藤助氏に劣らざる敏腕家にして、實業家としての氏の活躍は、洵に刮目すべきものがある。即ち、比角自轉車株式會社、理研チアアップ株式會社、上越工業株式會社、理研電磁器製作所等、多數會社の重役を爲してゐるばかりでな

く、氏は昭和機械製作所、柏崎機械製作所の二會社を主宰してゐる。

氏の實業界に於ける活躍は以上の如きであるが、氏は尙ほ推されて各種の公職につき、當町發展に資することも亦大なるものがある。即ち現在町會議員の一人として、當町々政の刷新、諸施設の充實のため常に留意し、當町町勢發展の爲め多額なる私財を提供してゐる。當町の氏に負ふ所實に大なりと云ふべきである。尙ほ氏は柏崎實業協會理事、縣工場協會柏崎支部理事長、柏崎商工會議所設立準備委員として盡力してゐる。

終りに、合名會社西川商店鐵工所について一言すれば、同鐵工所は工作機械器具を製作し、其の品質の優良なると、價格の低廉なるの故、當町附近一帯は勿論廣く販賣せられてゐる。本鐵工所は、大正六年八月に、先代藤助氏の創設にかゝり、爾來發展の一路をたどりつゝ、現在にいたつて居ることは、既述の如くである。

高田村上方

村會議員 金子 文一郎

當家の祖は藤内氏と稱し、元祿年間末期の人である。代々農を以て家業とし、當主を以て八代目とする。先代文左衛門氏は衛生方面に通じ、村内衛生施設の改善には多大の功勞があつた。

氏は先代の長男にして、明治十三年八月十五日の出生である。夙に村農會代議員、部落消防組副組頭、動力組合、殖産組合各役員、上方衛生委員長を歴任し、現時村會議員に當選活躍、且つ村傳染病豫防委員を兼任する。自治の精神により共同一致して圓滿に村治を遂行し、村民の福利増進に盡力するところ多く、事に處しては熱慮を惜しまず、常に研究的態度を持つてゐる。民政黨系の材物といはれ、資性溫厚にして實直、加ふるに信仰の心篤く、徳望がある。

夫人モトさんは良妻賢母との定評を有す。長男文雄氏(大正二年生)は柏崎農業

學校の出身、次男文英氏(大正十年生)は柏崎商業學校を出て現に東京市内に職を奉じ、他に小學校へ通學する三男がある。なほ當家は代々衛生方面に貢献多き故を以て著聞し、氏は縣主催の講習會を受けしことあり、長男文雄氏は高田歩兵聯隊に勤務せる衛生兵である。先代が衛生方面の功勞者たると思ひ併せ、三代にわたるこの方面の發達に努力したるは多とすべきである。

鵜川村

村會議員 横田 軍一

當家の祖は戰國時代の驍將上杉氏の家臣にして武藝の譽れ高かりし人にて、今より約六百年前、故あつて當地に來り、ここを永住の地と定め、鋤鋤を執つて生業としたのである。爾來地方の名門として著聞し、先代茂太郎氏は區長三期及び村會議員等をつとめ、村のため貢献多からざる人望家である。

氏は先代を父として明治二十八年十二

月十五日に呱呱をあげた。縣立柏崎農學校を卒業し、家業に努力精進しつゝ、農區長十ヶ年、村會議員、青年團長、消防組小頭二回を歴任、民政黨の逸材として畏敬され、現時村會議員並に産業組合監事を兼任してゐる。敏腕衆にすぐれ、頭腦明晰にして、人格高く、事に對しては誠實を以て臨む、明朗なる紳士的材幹である。村民の信望もあつた。

ふじの夫人は内助の功多き賢婦人にして、長男耕作君(大正十二年生)は、高田農學校に在學中、他に三人の令嬢あり、家内益々繁榮をつゞけてゐる。

高柳村山中

村會議員 村田 與左衛門

村田家の祖先是、松平越中守の臣にして、今より約四百年以前、故あつて、農民となり、土着して農業を營み、代々庄屋を勤めた。

先代萬治氏は、町村制施行以前より、書記、收入役、助役を歴任、良く其の職

責を果したる後、推されて村會議員に就任し、爾來村會議員として當村自治のため貢献することある。



當主與左衛門氏は、先代萬治氏の男として、明治三十年十二月二十四日、呱呱の聲をあげた。少年時代より温厚篤實にして、將來を囑望せられて居た者、長じて加茂農林學校に入學、農業並に林業に關する研究を重ね、優秀なる成績を以て同校卒業、其の後郷里に於て農林業殊に林業の重要性に留意し、盛んに植林を奨励し、赤土の露出せし山を一變して、緑の美山とした。將來當村からは多額の木材を産するに至るであらう。其の後、青年支部長、新潟縣方面委員の要職を経て、村會議員に當選、爾來よく當村發展

のため貢献して來たのである。氏は尙ほ方面委員、負債整理委員、産業組合理事及相談役の公職を兼ねてゐる。資性温厚篤實にして言語明瞭である。又氏の雄辯は水を流すが如く、良く人をして傾聴せしめる。旅行登山を趣味とする。

廣子夫人は、人も知る賢夫人にして、夫に對しては良く仕へ、又其の家庭教育は、正に婦人の範とするに足るものである。廣子夫人との間に二女あり、共に小學校に在學中である。

上小國村原

村會議員 田中 慶治

今より三百年前、田中姓の總本家たる田中國吉氏より分れて田中平治氏なるもの一家を創立し、その後二百年を経て、更に分家したものが即ち當田中家である。先代莊藏氏は村會議員、區長等に任じたる自治功勞者として聞えた人である。家は代々農。

當主慶治氏は先代を父として明治二十

二年十一月二十九日を以て生れた。同四十二年近衛歩兵第四聯隊に入營、四十四年除隊した。夙に消防組小頭、青年團支部長をつとめ、また在郷軍人分會班長たること六ヶ年、現在は村會議員に當選すること六ヶ年、現在村會議員にして横の手腕を揮つてゐる。資性温厚にして篤實なるところあり、人格高く、勤勉力行の士である。政友會に屬し、當地方に於ける同會の有數活動家である。大正五年軍人分會長より班長として勤続の功により表彰された。

ハル子夫人とは琴瑟相和し、長男健一君(大正八年生)は家業に精勵しつゝあり他に一男三女を有す。

中里村二本柳

村會議員 竹部 博

竹部家本家の祖は、上杉家の御典醫をつとめて令名高かりし善照といふ人である。故有つて當地に流寓し、ここを墳墓の地と定め、竹部家を創立した。それより四郎右衛門、五郎兵衛、新右衛門、常

右衛門、亦藏、常次郎の諸氏を経て、現主一郎氏まで十四代に及ぶ。文化年中より代々庄屋をつとめ、明治維新まで及んだ。當竹部家は今より五代前の四郎吉氏の代に、前記本家より分れて一家を創立したのである。今より約百五十年前のころとて、爾來代々農業を營んで今日に至り先代徳平氏は産業組合監事その他の重職に擧げられたる自治産業の大恩人にて、目下老軀に病を得て靜養中である。

當主博氏は先代の男として明治三十三年四月二十日を以て生れた。郷校卒業後専ら家業に精勵し來つたが、推されて青年團支部長たること二期、産業組合監事たること一期、功績大いに見えるべきものあり、また十年來消防組小頭をつとめて現にその任にあるほか、村會議員として活躍してゐる。民政黨系の新鋭だ。アイ子夫人は良妻賢母型の婦人、長男榮徳君は縣立小千谷中學校に在學中、他に次男靜雄君、三男正矩君、四男正弘君等がある。

横澤村
村會議員 山口 爲吉

山口家の祖先是、上杉輝虎公の家臣にして、中頸城郡柿崎在吉川村大字山口に在せる郷士であつた。越後の名門として著聞し、代々横澤村の里正をつとめた家柄にして、當主を山口誠太郎氏といふ當山口家は今より二百年前、この本家山口家より分れたるものにて、爾來代を累ねること七回、世々農耕に従事して篤農家を稱された。

氏は先代清吉氏の二男、明治十一年三月十日を以て生れ、大正十一年頃、村助役に任じ在任一期四ヶ年、その手腕は全村民の賞讃するところであつた。消防組副組頭、産業組合理事も歴任、村會議員にはすでに二十有餘年開動續して、現にその職にあるほか、區長を兼ねて部落のため貢献尠なからざるものあり、村内有数の自治功勞者である。政黨は立憲民政黨に屬する。資性温厚篤實、博覽強記の

人格者である。令夫人は三年前に幽明境を異にせられた。

山横澤村芝文
村會議員 内山 政英



當家は村内切つての舊家にして、元祿時代のこゝと判明せらるも、其以前の事項は不明なり。現

在當村内山家の總本家なり。二百年前、七代目の當主分家となり現在に及ぶ。嚴父金藏氏は日清、日露の兩役に參加した勇士にして、其功績に依り勳八等を賜はる。昭和十一年死亡せり。
當主政英氏は明治廿五年七月二十日嚴父金藏氏の長男として生る。小學校卒業後、大正元年十二月野砲第十九聯隊に入隊し上等兵となりて歸郷し、嚴父を助けて家業に勉勵し、其間消防部頭、軍人分

會評議員の職を歴任し、現在は村會議員區長の要職にある。

資性剛勇にして眞率、且つ純潔な性資は、村内の尊敬を集めてゐる。

尙一家より四人の出征軍人ある爲め、賞勳局總裁下條康賢氏より昭和七年一月表彰され木杯一個を賜り、大正八年九月高田聯隊區司令官より同表彰せらる。イツ子夫人との間に二男三女あり。又當主令弟(次男)は目下中尉にて今次の聖戰に出征中であり、三男は海軍兵曹長にて航空兵の處、昭和六年二月、軍艦と接觸して殉職せり。

中崎石村
村會議員 本間 平八

當家は、本村有数の舊家にして、且屈指の名門である。代々農業を營み、篤農家として聞え高い。
先代恒八氏は温厚篤實、人格高潔の士にして、且つ該博たる知識を有する材幹を以て、村民の人望厚かつた。氏は初め

郡會議員に最高點を以て當選するや、當



恒八氏
村が 屢々 水難 に遇 ひて 多年

甚大の損害を受くることあるを苦慮し、治水、水害豫防対策に寢食を忘れて奔走し、大いに實績を擧げ、之が爲め今や當村は全く水害の危険より除かれ、村民は安心して農業に従事することが出来る様になつてゐる。氏は全く當村の救世主と云ふも過言ではないであらう。

郡會議員を退くや、氏は村民に推されて村長に就任し、老軀をも顧みず良く村治のため奔走した。現に小學校々庭に建立しある功德碑には、當村功勞者の一人として氏の姓名が刻まれてゐる。
恒八氏の長男として、明治三十七年八月十五日、嗚々の聲を擧げたる平八氏は性明敏にして、長ずるに及びて、東京駒

澤の園藝學校に入學、常に同方面の研究



平八氏
の成 績を 優秀 念に 餘

以て同校を卒業するや、直ちに歸郷して當村の發展に資せんことを志し、先づ青年團長となり、常に農村青年に、農業の多角形的經營の重要性を説き、この指導に専心したのである。間もなく推されて村會議員となり、目下鋭意村政の刷新に努力してゐる。

北崎石村 藤井
村會議員 竹田 榮
今より約三百年前の草創に係る竹田本家は、代々篤農家として知られ、舊幕時代には庄屋の職をつとめ、源五右衛門を襲名した。明治維新後は戸長に任じ、町村制施行と同時に村長その他村内各種名

譽職を歴任し、自治界に功勞があつた。

當竹田家は、源右衛門氏宅より今から約百七、八十年前分れて一家を成したもので、本家同様代々農業を營み、現在を以て七代目とする。

當主榮氏は先代七兵衛氏の長男にして明治九年の岳降である。同二十九年歩兵第三十聯隊に入營、三十一年伍長に陞任し、翌三十二年軍曹となつて除隊、明治三十七、八年の日露戰爭に出征し、黒溝台、奉天その他各地に轉戦して武勳あり功により勳七等功七級金鷄勳章を下賜せられ、曹長に進級した。先是、明治三十三年、日本石油株式會社に就職し、各地出張所長を歴任、大正十年まで勤続した資性聰明にして人格高邁、聲望遠近に普く、現時、村會議員、産業組合理事、水利組合會議員を兼任する。

嗣子なきため令弟(七兵衛氏四男)時治郎氏を家督相續としたが、昭和十二年不幸逝去せられた。同氏は陸軍士官學校卒業後、累進して憲兵少將に任じ、正五位

勳三等に叙されたる、郷土が生んだ偉大なる材幹であつた。

内郷村

村會議員 田中 季次郎



幕府の初期、上杉家の變動に依り、當地に來り、後代

代當地方の郷士として、現在に至つた。實父治八郎氏は、性明敏にして、農學校を卒業するや、小學校教員となり、熱と慈愛とを以て、兒童を訓育し、兒童は氏を慈父として仰いだ。間も無く、轉じて、郡視學の要職に就き、良く其の職責を果したる後、村民の要望に應へて初代村長に就いた。又郡會議員、縣會議員として、郷土政界にも終生活動せし人であつた。

治八郎氏の男として、明治八年十二月廿五日、呱呱の聲を擧げた。當主季次郎氏は、少年時代より野望を抱き、十五歳を以て單身上京し、種々の困難に遭遇したるも、常によく之を克服し、其の間、ニコライ學校を卒業した。氏の意氣、氏の忍苦の精神は、吾人が範とすべきものである。

ニコライ學校卒業後、氏は郷里のため種々改善すべき點あるを認め、歸郷したる上、先づ青年團長に就任、郷土の青年を訓練するに、スバルタ式の方法を以てした。かくして、やゝもすれば脆弱に陥らんとする青年の弊風を打破したる後、消防組長、農會長の要職を歴任し、更に進みて村長として就任した。氏は村長在職當時、種々の改革を試み、良く其の實績を擧げた。後、村長の職を退きたるも現在尚、學務委員、村會議員、産業組合理事として、福祉増進の爲め、鋭意努力してゐる。

夫人さんさんは賢婦人の聞えが高く、

夫人との間に二男あり、長男は東京の宮内省に勤務されて居る。又次男は中學校に在學中である。

荒濱村

村會議員 品田 喜三次



年前より此の地に住居せる由緒正しき名門にして、代

代庄屋を勤め、明治初年迄は三代に亙りて戸長たりし家柄である。代々漁業を營む實父喜三次氏は、戸長を勤め、現在は小學校國定教科書納入及び電氣會社の集金員を奉職してゐる。資性謹嚴にして、徳望高き人である。

當主喜三次氏は明治八年十二月二十三日先代喜三次氏の長男として生る。明治專門學校に學ぶも中途にして退學す。現

在は村會議員、學務委員、方面委員等の要職にあり、村民の繁榮には特に意を注ぎ、社會大衆黨に加擔して、明朗なる政治の助長されんことを切望し、無産階級の爲に福祉増進に一身を捧げて、熱意を以て活動してゐる。不撓不屈にして初志を貫徹せずばやまざる強固な意志の持主であり、氏の成功は村民の常に希望してゐるところである。カトリック教を信じ夫人との間に二男二女あり。

氏は眞に騎士の言にふさはしき材幹である。

柏崎村批把島

村會議員 飯塚 眞平



百前より當地に居住して來た。即ち當部落に於ける飯

塚の總本家である。代々農業を營み、篤農家として聞えが高い。

當主は先代徳治氏の男にして、呱呱の第一聲を放ちたるは、明治卅五年十二月十日である。

性温厚篤實、知識亦該博なるを以て、町民の厚望を一身に集めてゐる。氏は嘗て農會代議員として、其の該博なる知識を用ひて、良く農會の爲め盡力せしのみならず、刈羽郡牛乳營業組合長となり、低廉にして良質なる牛乳を一般町民に提供し、爲めに町民の體育大いに向上したのである。間もなく氏は、同組合長を辭任したが、現在に於ても町會議員農會代議員、刈羽牛乳組合評議員として當町發展のために致しつゝある努力は洵に没すべからざるものがある。

家庭には、さかえ夫人との間に、長男眞一君十四歳、次男治雄君十四歳、外男三人、長女美恵子さんは、目下小學校に在學中であり、次女の和子さんは四歳である。

高田村横山

村會議員 種岡吉郎左衛門

當家は開祖不明なるも村内に於ける舊家として知られ、代々農業に従事せる家柄である。

氏は明治十四年九月四日の出生にして先考吉郎兵衛氏の長男である。實直そのものにして、人格者として信望あり、夙に二十七八歳の頃、懇望されて柏崎郵便局員となり、爾來三十年一日の如く精勵格勤し、昭和十一年九月退職するまで、終始一貫裏面なく、眞面目に勤務し、他局員の模範となり、その引退を惜しまれたほどである。

在勤中、逋信大臣より賞状を贈られること數回に及んだ。その後區長代理に擧げられて今日に至り、現時村會議員を兼任する。

令閨との間には三男二女を有し、家庭圓滿にして繁榮をつづけてゐる。

鶴川村野新田

村會議員 島岡信良

當家は村内屈指の舊家にして、既に連綿十五代を繼承する家柄である。古く、上杉の家臣であつたが、今より四百五十餘年前、故あつて土着し、中頸城より當地に移りて、代々農業を営むてゐる。

當主信良氏は嚴父磯吉氏の長男として明治十八年十二月一日出生し、長じて鶴川小學校に入學し、卒業後は嚴父の下に熱心に農業に従事してゐる。

氏は常に人に對して誠心誠意、眞摯なる態度で臨み、その清廉さは、益々聲望を高め、現在は村會議員、區長の要職にあつて夙に村政に盡瘁し、又その功績頗る顯著なるものがある。

尙氏は政治方面にも關心を抱き、中立をもつて活動してゐる。

ミカ子夫人との間に四男あり、長男靜男氏二十八歳、次男正明氏二十六歳、養

子三男芳則氏二十一歳にして共に父君を助けて、家業の手傳に勉勵しつゝあり、四男行夫氏は十六歳にして生來才能にめぐまれ秀才の聞え高く、縣立水産學校に在學中である。

上小國村法末

村會議員 大橋八十一郎



大橋八十一郎

當家は毛利丹後守の臣下にして、上杉に合併せらるゝや同郡上條村に落人として流離し來り居を構へ、數百年前に至つて、同村に移住し、代々農事を経営して今日に至る。同村仁左衛門より紀元二千三百七十二年に分家となり、一家を創立、代々農業を繼ぐ。

實父八次郎氏は、産業組合創立委員、村會議員數十年に亙つて勤續し、現在法

末村第一の資産家にして、名門の家柄である。八次郎氏の村治に對する業績は枚擧に遑なく、村民の遍ねく認めるところである。

當主八十一郎氏は明治二十年十一月八日の生れにして、先代八次郎氏の長男である。

氏は本村小學校を卒業するや、嚴格なる訓育の下に漢學を修む。書記二年、收入役四ヶ年、助役四ヶ年、農會長等の諸要職を歴任して、現在は村會議員、區長學務委員、産業組合理事を兼務する。

氏は濃厚篤實の人格者にして村内の信望深きものあり、政友系に屬して縣政界にも知らる。淨土宗の信仰者である。

トミ子夫人との間に四男二女あり、長男正典氏は加茂中學校卒業、次男茂君は長岡商業學校在學中、三男は小學校、四男は幼稚園に通學されてゐる。長女千鶴子さんは、トミ子夫人を助けて、家事の手傳にいそしみ、次女は、美榮さんと云はれる。

横澤村

村農會長 飯田元吉

當飯田家の始祖は、戰國時代の落武者たること明瞭なるも、何某といふこと判明せず、たゞ當村の開祖として知られてゐる。その後中村某なる落武者、同様三兄弟にて亡命し來りしにより、内二人は各一家を創立せしめ、一人を自宅にて教育しつゝ使用人とした。その後また内山某なるもの來り、當家の恩顧により一家を興した。代々庄屋をつとめた舊家名門にして、現に資産數十萬圓と稱され、附近の名望をあつめてゐる。現在本村一百六十戸の内、飯田姓を名乗るもの五十數戸あり、いづれも當家の分家にして、中村、内山兩家は併せて百餘戸である。全村が古い昔から當家の恩を受け、その扶けを蒙つてゐる。

當主元吉氏は先代惠太郎氏の男にして明治二十四年十一月二十五日の出生である。嚴父が郡會議員、郡農會副會長、村

長、村農會長等の諸要職を歴任したると同じやうに、氏もまた早くから自治公共のために盡瘁し來つた。柏崎中學校を卒業後、大正元年、歩兵第三十聯隊に入營

歩兵軍曹となつて除隊し、その後在郷軍人分會長、青年團長を経て、現に村農會長、産業組會長、村會議員等を兼ね、且つ民政黨刈羽郡幹事として重きをなす。資性剛毅、言語明快である。

良子夫人との間には長男昌二君のほか二令嬢がある。

高濱町椎谷

郵便局長 羽田榮一

羽田家は村内切つての名望家にして、先代は農を以て家業とした。至誠奉公の精神に燃える當主榮一氏は、明治二十五年三月一日の出生にして、同四十三年縣立加茂農林學校を卒業した。夙に家業を繼承して篤農家といはれ、土に親しむことを生活の信條とした。その後椎谷郵便局長として今日に至り、地方稀に見る文

化人として令名がある。従業員はいづれも精勵恪勤、通信事業に全力を傾注するを己が使命と自覺してゐる。

因に椎谷郵便局は昭和六年開局され、初代局長には中野辰次氏が就任し、大正二年二月、二代目局長石橋平助氏これに代り、同十一年四月、現局長羽田氏之を繼承した。三等郵便局として縣下有數の成績を擧げてゐる。

中 通 村

元村農會長 池田禎作

剛毅果斷、自治界の大先輩たる氏は、池田定左衛門氏の男にして明治二年四月十六日の出生である。夙に村長、村農會長、郡會議員、その他の要職を歴任して功績多く、表彰を受けしことも一再ならず、稀に見る功勞者と稱される。目下、老軀を提げて銃後援護に寧日なく、その行爲は萬人讃仰の的となつてゐる。皇國將兵の義勇奉公、盡忠報國も、畢竟銃後に於ける國民の大なる犠牲と忍苦によ

る後援の力に俟つところ大であつて、統後の國民が、この將兵の心を心とし、相共に皇運を扶翼し奉るところに、軍民一致が具現せられ、舉國一體の實を發揮し得るのであつて、護國の英勇を地下に冥せしむる所以のもの、氏の行爲に眞似ることにあるといふべきである。

野田村宮川新田

軍友會長 金子 孝一郎

當家の先祖は上杉の臣下なりしも、元祿十年同郡高田村に來り、茲に一時居住せしも、其後當地に移り來り、宿川新田と云ふ村を創立す。現宮川新田の名は、祖先の移居と同時に、命名されたる字なりと謂はれてゐる。

實父藤作氏は早死の爲め、公名譽職には一切關係なく、代々農業を營み、全村に於ても舊家名門の家柄なり。

當主考一郎氏は明治十四年四月先代藤作氏の長男として生る。

村立小學校卒業後、北明義塾時央學舎

に入り、克苦して漢學を修めり。明治三十四年十二月工兵第二大隊に入隊、明治三十七年三月、日露の戦役に勳員令を受け勇躍して出征し、第一軍に参加して宇品を出航、其後九連城、遼陽、沙河、奉天の大会戦に轉戦し華々しく奮戦せり。其功績に依り勳六等を賜り準尉となる。

凱旋後は郷里に歸り父祖の業を繼ぎ、夙に精農家を以て開ゆ。助役四ヶ年、軍人分會長、村會議員二期、區長等の要職を経て現在は軍友會長、學務委員として盡力してゐる。政友會に屬し政治運動にも盛んに活躍しつゝあり。

氏は性剛健にして、意志強固、正義感の強い人として村民の徳望高し。

千谷澤村原小屋
消防組頭 樋口 熊治

當家の開祖は樋口二郎兼滿の後裔にして、今より五百年前當地に移居し來り、居を定めて農業を營む。檀家寺燒失の爲

元祿以前のことは詳細のこと不明なるも



由緒ある名門の家柄にして當村に重きをなしてゐる。

父は御獄行者にして敬神の念篤く、公名譽職を嫌ひ、政黨を惡み、以前は副庄屋を勤め、十三代を累ねて今日に來る。

當主熊治氏は、明治十四年、實父佐藤常吉氏の五男として生れ、養父和作氏の許に養子に來れるものにして、高等小學校卒業後は長岡市の高橋竹介先生の門に入り、厳格な訓育の許に克苦勉強して漢學を修む。明治三十四年歩兵第三十聯隊に入隊、明治三十六年十二月北清駐屯軍として出征、日露の役には第二師團に屬し北清にあり、同三十九年除隊、伍長となる。創立當時よりの軍人分會長、村會議員、區長、農會長、郡農會代議員の要職を歴任する。資性質實剛健にして眞摯

なり。天人の令弟時平氏を相續人と定め現在同小學校教師、嘉義農林學校出身者陸軍歩兵中尉にして、軍人分會長の重職にある。トミコ夫人との間に三男四女あり。長男忠雄、次男敏夫、三男は光夫君で、長女要子嬢、次女ユリ嬢は共に他家に嫁し、三女富子嬢、四女鈴子嬢は小學校に通學中である。

上小國村

農會長 關口 増藏

關口家は相當古い歴史を持つ家柄にして、二百年以降の家系は判明せるも、其以前の事は記録なく、且つ過去帳燒失の爲め不明なり、代々農業に従事して今日に至れるものなり。

當主増藏氏は、先代五郎吉氏の長男として明治十六年十月七日に生る。

明治三十七年歩兵第三十聯隊に入營、間もなく日露の役に勳員され、宇品を出航、第一軍に従軍して沙河、奉天等各地に轉戦し、凱旋後、其功績をたゞへられ

勳八等を賜る。

歸郷後は嚴父の業を繼ぎ、夙に精農家を以て開え、村會議員、消防組頭、消防部頭、産業組合理事、淡海自動車商會專務理事等の職を歴任され、現在に於ては農會長、學務委員等を兼職され、村内の向上啓發に貢献しつゝある。

人と成り豪氣英邁にして、村民の遍く敬仰する所である。尙氏は民政黨に屬し政治運動にも熱誠を以て當つてゐる。

ツネ夫人との間に、男二人、女五人あり、長男芳雄氏は高田聯隊に召集され、父子二代に亙つて名譽を擔つてゐる。次男昭二君は小學校に在學中である。

中通村會地

從七位 倉部 周治

當家は、當村屈指の名望家にして、戰國時代より、代々當地に於て農を營み、篤農家にして、又庄屋を勤め、當村のため常に貢献して來た。

當主周治氏は、先代伊作氏の男として

明治十四年八月呱呱の聲を擧げたり。性



明敏にして、早くより兒童教育の重要性に着目し、將

來教育者として、身を立てんと欲し、高等小學校を卒業するや、直ちに縣下高田師範學校に入學、孜孜として同方面の學術を研究し、同校を卒業するや、小學校訓導として、年來の希望たる兒童教育への第一歩を踏み出したのである。氏は濃厚篤實、人格高潔の士にして、小學校訓導として在職實に三十年餘、村民、氏を慈父として敬愛す。氏の高潔なる人格が兒童並に村民を指導教化したる功は洵に當村々史上特筆さるべきものの一つであらう。氏は、永年小學校々長を勤めたる後退職、現在は餘生を村勢要覽の編纂に送つてゐる。尙氏は退職後、三等郵便局長となり、良く局長としての職責を果

したるを以て、其の功勞の爲め、從七位勳八等を賜るの光榮に浴した。

長男榮男氏は柏崎中學校卒業後、師範學校二部を卒業、教員として十年、小學校に於て教鞭をとつてゐたが、父周治氏老衰の爲め退職し、目下氏が局長として郵便事務に従事して居る。次男は死亡され、三男は小學校に通學されてゐる。長女靜江さんは女學校卒業後、仙臺通信講習所卒業し、目下家庭にありて郵便事務並に家事の手傳をしてゐる。親孝行の評判が高い。次女は既に婚家され、三女、四女は、夫々長岡女子師範學校、柏崎女學校に在學中である。

上條村佐水

勳八等

會田義三郎

當家は舊家にして今より百年前、同村會田家より分家し一家を創立、代々農業を營み、當主にて四代目なり。

當主義三郎氏は明治十三年三月、嚴父熊治郎氏の長男として生る。

明治三十三年十二月、歩兵第三十聯隊に入隊し同三十六年十一月除隊せり、翌三十七年、日露風雲急を告ぐるや三月には動員令を受け、第一軍に従軍して宇品を出航せり。上陸後直ちに九連城、遼陽沙河、奉天の世界的大會戰に屢々奮戦し皇國の爲めに盡し、平和克服なるや、歩兵上等兵となり、その功に依つて勳八等功七級を賜つた。

前に在郷軍人評議員、消防小頭（在職七年）を勤め、現在は公職を持たない。關係事業並に政黨關係等は一切關係しない。氏は性、質實剛健、頗る謹言實直にして言語明晰なり、態度又活潑なり。夫人との間に男一人、女五人の子福者にして家庭眞に團欒なり。愛國婦人會、國防婦人會員として盡力する所多し。

鯨波村河内

河内區長

根立郡平

當家は村内の舊家にして根立家廿四軒ある中、總本家とも稱する家柄なり。

當主郡平氏は明治十年四月、先代源藏

氏の長男として生まる。



元長岡市に在りたる縣蠶

業部講習所第一回（明治廿九年）出身者にして、一時縣蠶業教師たりし事あり。村吏員、助役たりし事拾五年間に及び、助役を以て退職せり。尙助役は大正十四年より昭和四年迄なり。現在は區長並方面委員を兼職す。關係事業はなく、一意村民の爲めに盡力し、その功績誠に見るべきものあり、村民の信頼を一身に集む。氏は篤學勤勉にして、徳義心厚し。又考古學に非常なる興味を以て研究し、村史の編輯に努力せる事あり。

夫人との間に三男あり、長男春男氏は宇都宮高等農林學校第二回目の卒業生にして、現在、日本勸業銀行支店に在職中である。次男は嚴父指導の下に農業に従

事してをり、三男は今次の聖戰に勇躍宣撫班に應募し、北支に活躍中なり。

鵜川村清水谷

大圖鯉太

當家は舊家にして、古く里見大膳守の



臣下たりし大圖某なる者、今より數百年前當地に來たりて農業を營み、尙ほ二百年前に於て同村大圖家の總本家より分家して一家を創立し、代々農業を營みて今日に至る。

當主鯉太氏は賢藏氏の男として明治九年二月に生る。以來、彌五藏氏の下に養育され、長じて鯖石小學校に學び、才能に恵まれ優秀なる成績を以て卒業せり。以來、養父彌五藏氏の厳格な薫陶の下に成長し、永年の村會議員、區長の諸職を経て、現在は産業組合評議員の要職にあ

り。事業關係及び政黨關係は全く無く、只管村内の改良發達並村民の思想向上、啓蒙に努力せり。

氏は性、溫和溫情にして、且篤志篤敬の人なり。言語明快にして對者に頗る好感を與へる稀なる人格者なり。

リユ夫人との間に三男五女あり、長男次男は既に死亡せり。三男宗一氏は柏崎農學校に學び、卒業後本年一月近衛歩兵第一聯隊に入隊せり。

長女、次女、三女共に嫁入し、四女クラ嬢は現在家業の手傳をなし、五女キシ嬢は、柏崎女學校に在學中なり、才媛の聞え高し。

高柳村門出

門出區長

村田泰一

今より三百年前他國より移住して當地に來り、土着して農業を營み、村田家の總本家として村内に聞ゆる舊家の家柄である。村内に於ける分家は十五戸に及び當村に重きをなしてゐる。實父永之重氏

は村會議員、區長等よく重職に堪へ、村



内自治問題に盡力した功勞者で、業績として、村民

の衆望をあつめし人である。

當主泰一氏は、明治三十一年十二月十日永之重氏の次男として生る。長ずるに及び村内小學校を出で、柏崎中學校に學び、二ヶ年間修業の後退學する。青年團支部長の要職を経て、現に區長の職にある。その手腕と識見と人格を以て、村民の輿望を一身に擔ひ、本村の興隆に一意努力を續けてゐる。勤勉實直、その眞摯なる態度は、對者に好感を與へ、稀なる人格者である。

母堂タメ夫人は今尙健在にして、ヒデ夫人との間に一男一女あり。ヒデ夫人は溫和貞淑にして、内助の功厚く、家庭圓滿なるものあり、村民の羨望の的となつ

てゐる。

上小國村若野島

若野島區長 中村達雄

當家は頗る舊家にして、開祖は徳治元年、武田信玄の臣下たる中村若之進と云へる人、信州より來りて一ヶ村を創立し其名を取つて若野村と命名せり、其證據としては古くは飯山瑞龍寺の檀中でありしことあり、先祖の持參せるといはれる武具一切は住宅地の北方に、三、四百年前に埋藏したりといふ記録塚と稱せられる處あり、小國郷土誌に記載しある如く系圖は一切他見せしめざる事なると云ふも特に許されて一覽するを得たり。

嚴父は長岡銀行創立當時よりの行員にして勤続三十五年に及び、篤志勤勉にして、晩年には遂に支配人に出世したり。曾祖父の官吾氏は當家中興の祖にして桑名藩より特に帶刀を許され、累氏庄屋

を勤めたるなり。

當主達雄氏は實父二郎氏の長男として明治三十一年三月に生る。長じて長岡中學に學びしが半途を以て退學し、大正五年近衛歩兵第四聯隊に入隊し同七年除隊せり。

現に産業組合監事、消防部頭、區長等の要職にあり、尙政治への關心厚く、民政黨に屬し、小國郷の總務、刈羽村民政黨副團長として活躍しつゝあり。性、温順、實直にして克く謙讓の徳を守り、村内の信望極めて篤い。

中里村

青年團長 松田安之



當家は當村屈指の舊家にして、代々農を營み、當村開發の爲め貢獻する所甚大なるものがあ

つた。

養父松田作太夫氏は、當村に於ける有力者の一人にして、現在消防組頭、村會議員、農會長等の要職にありて、重要な村政は總て氏の意見を顧慮して決せらるゝ所である。

當主は星菊治氏の男として、明治卅六年十一月三日、呱呱の第一聲を放つた。性明敏にして少年時代早くも群を抜き、斷然頭角を現した。

間もなく、先代作太夫氏の認むる所となり、懇望せられて松田家の養子となつた。小學校を卒業するや、新潟師範學校に入學、常に優秀なる成績を保持しつゝ、同校を卒業したのは大正十二年三月廿五日である。同校卒業後、北魚沼郡小出小學校に於て二ヶ年、長岡市千手小學校に於て十ヶ年、現在校に於て三ヶ年、意氣と熱とを以て教鞭をとり、兒童教育の爲に寢食を忘れる。

氏は教鞭をとりつゝ其のかたわら、郷里青年に推されて中里村青年團長に就任

し團員の指導訓練に當りつゝあるも、尙

ほ氏は、嘗て長岡市青年會幹事として大いに其の實績をあげ、同會々長より、昭和十年四月幹事の功績に依り、感狀及び記念品を授與せらるゝの光榮に浴した。氏は青年を指導訓練するに當りては、常に質實剛健を旨とし、遊惰の風を打破することに努めた。爲めに、郷土青年の氣風大いに改り、産業は大いに開發され、當村は漸次躍進の準備を進めつゝある。家庭に於ては千代野夫人との間に、二男二女あり、其の和氣あいあいたるは、人の羨望する所である。

高柳村岡田

小學校訓導 若山正明

當家は往古上杉の臣下にして、領主移封の砌り、當地に留りて農民に降り、代代農業を營みて今日に至る。當村若山家一族の總本家たる、由緒ある名門の家柄である。今を去ること、三百年以前のころより

累代庄屋を勤めて、多大の貢獻をなせるものである。



養父重作氏

日、島岡信良氏の三男として生れ、其後若山家に養子に來たり、養父重作氏に薫陶さる。養父重作氏は、戸長、村長、郡會議員の要職にあり、村自治の爲め貢獻するところ頗る多大である。資性俊敏、意志鞏固にして、良く當村の識者として重きをなす。

當主正明氏は、長じて高田師範卒業後は短期現役として歩兵伍長となる。現在は高柳小學校の訓導を務めてゐる。生來、學識高く、且徳義心厚くして、當村有数の材幹なり。養母フサ母堂は今尙健在にして、翠夫人との間に一女ある。翠夫人は、端麗、

温雅にして良妻賢母の人である。

フサ母堂を圍んで家庭至極圓滿なり。

野田村野田

學務委員 金子勇司



當家は當村屈指の名門である。即ち其の昔毛利丹後守、上杉に合併せらるるや、其の臣下として留まるに忍びず、落人となり當地に來り、土着して農を營み、代々篤農家として、當地方福利増進のため多大の努力を拂つて來た。

養父新太郎氏は豪膽の人にして、明治十六年陸軍教導團に入團、良く軍務に精勵し曹長となつた。氏は日清、日露の兩役には勇躍戦線に赴き、豪膽と沈着とを以て、赫々たる武功を立て、累進して歩兵大尉となり、正七位勳五等を賜るの光

榮に浴した。凱旋するや、氏は推されて村長となりたるも、間もなく辭退し、後再び支那大陸に渡り、同大陸に革命起るや某方面に於て、一方の參謀長となりて活躍して居りたるも、明治四十四年、惜



養父新太郎氏
しむべし、敵弾の爲めたふれ、遂に再起

するを得ず、漢口に於て逝去したのである。同地日本人墓地に、噫金子氏と刻まれたる記念碑が建立されて居る。

當主勇司氏は、同村名門久吉氏の四男に生れ、性明敏令兄は支那領事、令弟は實家を相續し村長に就任し人望家なり。先代新太郎氏に認められ、懇望せられて金子家の養子となり、長じて高田中學に入學、更に進みて早稻田大學商科に入學優秀なる成績を以て同科を卒業するや、日清汽船株式會社に入社、後轉じて東京

建物會社に入社、昭和八年四月辭職、郷里に歸り農業を營み、現在學務委員を勤む。新太郎氏長女サカ子夫人との間に一男一女がある。

上小國村法來

元村會議員 内山祐吉



今より四百年前内山条吉氏、他國より來り、當村に土着して農業を營み、之より内山榮之吉

氏分家となり約三百年前分家して今日に至る。

實父謙吉氏は區長を勤め、資性博識多才にして、謙讓の徳深く、村内の諸事業に残せる功績は、村民のよく感謝するところである。

當主祐吉氏は十二代目にして、兼吉氏の男として明治十年六月三十日に生る。

村立小學校卒業後は嚴父の訓育を受け、刻苦勉勵し、區長、村會議員、學務委員等の要職を歴任す。その間、村内の改良村民の繁榮に盡力し、功績眞に見るべきものあり、村民一同の深く肝銘するところである。該博なる智識と濃厚清廉の人格の持主である。政友會に屬し、その行動を囑望されてゐる、縣政界の有力者である。

リサ子夫人との間に三男四女あり、長男和雄氏は小學教員奉職中、次男健治氏は現在横須賀に在住してゐる。三男鐵治君は、小學校に在學中で、非常な秀才である。

横澤村下村

元村長 永見 榮次郎

當家は相當の舊家にして四五百年以前との傳説あるも、詳細は不明である。横澤村二番組の戸長、當主の三代前、九右衛門氏以前は累代庄屋を勤め來りし名門の家柄である。

先代甚内氏は戸長及組頭を勤む。



當主榮次郎氏は
文久三年十二月一日、實父甚内氏の

男として生る。小學校卒業後、しばらくの間、嚴格な訓育を受けて漢學を修む。村長、農會副會長、村會議員、勤續四十年に及ぶ。現在は信用組合理事の要職にあり、閑歴、人格共に村内の元老として相應し、その數々の功績は良く村民の認める所にして、氏は又民政黨に屬し、縣政界に重きをなしてゐる。

三男四女の子福者にして、長男は既に他界され、次男義次郎氏は、當村の青年團長として青年訓練に盡力してゐる。

三男三郎氏は會社員として勤務に精勵してゐる。長女、次女は死亡され、三女は現助役たる小林啓一郎氏のもとに嫁ぎ、四女は家事の手傳に勵まる。溫良にして

容姿端麗、仲々の才媛である。

中通村赤田北方

名望家 太田恒治



當家は古く太田道灌の後裔にして今より百八十年前、同家中興の祖たる源右衛門氏以來のことは判明せるも、其以前の事項は詳かならず、當村の名門たり。

實父善作氏は、郡會議員、村長、農會長、村會議員等村内の要職を歴任され、其間、村内教育事業及産業開發に非常なる努力をなせり。頭腦明敏、忍耐に富み事に處するに綿密にして果斷、その人格は眞に圓滿なり。

當主恒治氏は嚴父善作氏の長男にして長するに及び加茂農林學校に學びしも、中途退學して、嚴父の薫陶を受く。

石地町

赤江山極樂寺



當寺は一代の名僧親鸞上人の開創に係る所に於て、淨土眞宗に屬する名刹である。

京都の大谷派東本願寺である。本堂には二尺三寸の西方願主阿彌陀如來が尊置されてゐる。この御本尊は靈驗頗るあらたかなので老若男女の之に參詣するもの絶ゆる事がない。殊に火災除に於て著しく、常に阿彌陀如來を禮拜してゐるものは、決して火災の難に遇ふ事がないと云ふ。當寺は、本堂、庫裏、經藏、並に鐘突

堂より成る。この鐘突堂より、夕に突き出される鐘の音は、いん／＼として夕暮の空気を振るはし、常町一圓に張り、よく町民の一日の疲勞を癒すと云ふ。境内は百五十九坪あり、松、杉等が鬱蒼として繁茂してゐる。

常寺の寶物としては、元祿六年九月海中より出現したる大きき一尺二寸の聖徳太子の木像あり、又享保十四年四月鑄造したる大きき直徑二尺二寸、厚さ二寸の梵鐘あり。又慶長十二年八月六日顯如上人が御造りになつたと云ふ佛像其の他十五點がある。

現住職として盡瘁する佐々木正信師は博學の高僧にして、謹嚴なる中にも溫和の風あり、町民に敬愛されてゐる。

野田村熊谷 稱名寺

當寺は淨土宗に屬し、文久元年三月、稱譽溝海上人の創立せしところにして、これより以前のことは確實なる記録を存

しない。溝海上人は村民の歸依厚き名僧である。爾來十二世までは圓光大師御染筆名號を本尊に安置せしが、第十二世欣譽上人の代に至り、延寶元年九月二十五日、京都法橋一運作の本尊並に二祖兩大師像に入佛安置し、爾來代々奉祀して現在に至つた。本郡小國村森の眞光寺、同鵜川村の觀音寺は共に當寺末である。

寺寶には圓光大師御直筆の名號大字一幅、小字一幅、熊谷蓮生坊自作像一體、熊谷蓮生坊遺愛鐵鉢一箇等がある。毎年一月二十日の御忌會、二月十五日の涅槃會、春秋兩期の彼岸會、二月より十二月まで毎月十五日の御忌講、春秋二回の念佛會、七月十五日より五日間の盆供養、十一月十四、五兩日の十夜法要會、八月十五日の大施餓鬼會、秋季の永代經法要等、年中行事は頗る多く、それ毎に參詣の男女群をなして殷盛を極める。

檀家は各村に跨り、約四百五十戸をかぞへ、現住職五十嵐祐山師は徳望家として聞ゆ。

高柳村岡野町 莊嚴山西照寺

當寺は承安三年、人格高潔なる源阿空



昭上人の開創する所にして本尊は阿彌陀如來にて淨土

宗に屬する靈山なり。

當寺は初め東頸城郡於代地内にありたるも、後岡野町字横道に移轉し、次で現地に移りしものなり。然るに文祿年中火災に會ひ不幸にして全焼したりしが、寶永四年、當時、住職傳譽上人の異常の努力と、檀徒の絶大なる支持の下に、本堂を再建したり。現本堂之なり。當時、傳譽上人用材の不足を嘆き居りたる所、一夜夢に高僧現れ、命するに境内の中央地下數尺を掘り下ぐべきことを以てせり。上人、翌朝直ちに高僧の命する儘をなし

たる所、く驚べし、上人は其處に巨大なる埋木二本を發見せり。上人大いに喜び直ちに之を挽き分ちて、十一本の大柱とし、再建を完成したりと云ふ。

本堂は九間半四方、其の他十間に五間の庫裏及山門、土藏等あり。境内は一千七百餘坪、外に宅地、田畑、山村等を所有す。

當寺の寶物は其の主なるものを擧ぐれば、行基作正觀世菩薩、惠心僧都筆眞向阿彌陀如來、彈誓上人筆金胎曼陀羅、其の他あり。

常寺は修正會、年賀、御忌、涅槃會、彼岸、灌佛會、盂蘭盆會、十夜成道會、月々の明盟會、其の他を年中行事となし其の都度、廣大なる阿彌陀如來の大慈悲に浴し居ることを感謝し居れり。當寺は檀家を高柳村四百六十戸、東頸城郡松代村參捨戸、其の他に十戸を有し、現住職小島靜知師は、人格高潔の高僧にして、檀家は勿論一般庶民の均しく敬仰する所なり。

中里村 鳳住山桐盛院

當寺は曹洞宗豊山派に屬し、釋迦牟尼佛を本尊とする。長岡藩主堀丹後守、法號寶徳院殿清海居士を開基とし、開山は竹巖金虎大和尚である。大和尚は南魚沼郡千瀨村林泉庵第四世にして、當寺開山は紀元二二二二年、寛正三年のことであつた。爾來法燈連綿として、代を累ねること二十二代、現住職井口孝金師に至つた。本寺は前記林泉庵にして、刈羽郡横澤村の瑞音院を末寺とする。

本堂、庫裏、衆寮、山門、鐘樓等の建造物あり、境内面積三反六畝九歩、他に田二町七反、畑二町歩の田地を有す。寺寶としては涅槃像十三佛並に十六羅漢がある。附近には桐澤城址あり、一日の清遊によい。檀家總代は難波政五郎、青柳千恵子、長井廣隆、眞貝源市郎、野田靜雄の五氏である。

北條村北條 神興山普廣寺

當寺は釋迦牟尼佛を本尊とする曹洞宗の淨刹である。永正元年甲子年、北條村の内深澤の城主村山安藝守正勝公、法號神興院殿は、群馬縣群馬郡白郷井村雙林寺三世寶光智證禪師(曇英應大和尚)を開山に招じ、普廣寺と公稱した。天文十七年六月十六日、當山四世龍山文經和尚に、月照徳光禪師號を賜はり、常恒會を勅許するの勅狀を下附された。爾來連綿として法燈輝き、現住職倉橋景寛師を以て第三十七世とする。

本寺は群馬縣雙林寺、末寺は刈羽郡内に壽慶寺、福勝寺、正雲寺、花樂寺、大光寺、安住寺、周廣院あり、北魚沼郡内に潮音寺、圓明寺の二ヶ寺、三島に繁慶寺、西頸城郡に泉福寺がある。境内面積千七十七坪、本堂、開山堂、山門、庫裏廊下、土藏等の建造物を有す。境外地は宅地二百五十七坪、田畑二町七反歩餘、

山林三町五反歩餘である。

一月一日二日三日の、皇室國家祈禱大般若會、毎月二十八日の修證會布教、四月八日の釋尊降誕會、十二月八日の成道會、二月十五日の涅槃會等は、いつも盛大に執行される。附近には城山と稱する舊城址がある。檀家は約十戸、總代は六名である。

西中通村下原

月岡山 普光寺

當寺は曹洞宗に屬する淨刹にして、本尊は釋迦牟尼佛、文殊菩薩、普賢菩薩の三尊佛、開基は上杉重景公、開山は快翁芸悦大和尚、中興の祖を、長壽院様とする。初め寶廣寺と稱して當村にありしが文明六年に半田村に移り、國主長尾氏から黒印地附與、天和二年、柏崎町に移つて普光寺と改めた。寛文の頃、本村山本に移轉したが、烈風のため砂埋となり、現地に復歸した。

安永九年燒失、その後再建、舊幕府よ

り附與の除地高二十五石九斗三升三合あったが、明治八年返上せり。

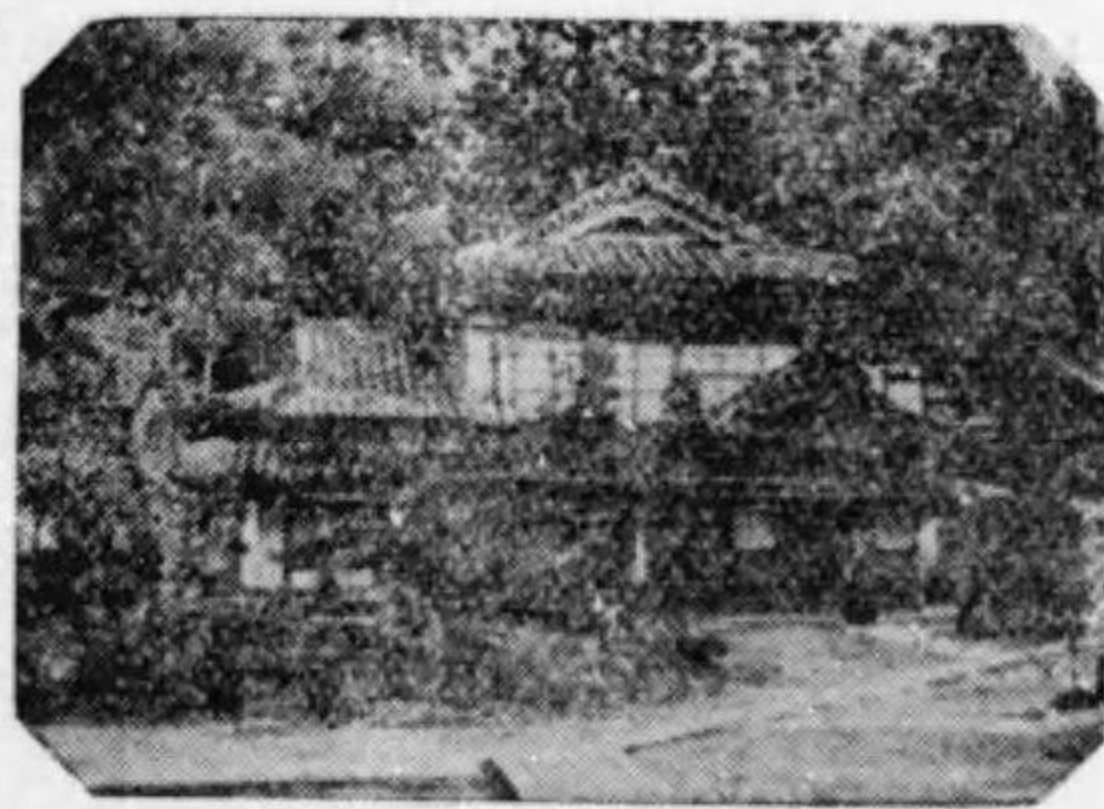
白川風土記には、村内に字法光寺と云ふ處あり往古寺地にて慶長年中に此寺同郡下原村へ移り普光寺と稱す、此蛇塚と云ふは此の地大いなる蛇出て人民を惱ましたる事ありしに、此寺の主僧祈念して經塚を築きしにより蛇の災ひ絶えたり云々と見えてゐる。

高岡市關町高岡山瑞龍寺は、本寺の二代和尚の開山場にて本寺の門首と稱す。境内面積千七百餘坪、檀徒二百五十五戸をかぞへる。

寺寶としては、寄進書その他の多數文書、竝に長さ一丈二尺、幅四尺の古金襴象鼻袈裟一肩、長尾爲景公より頂戴の經三寸高さ二寸八分の純金湯吞一箇等があり、由緒の深きを傳へてゐる。現住職は遠藤仙英師である。師は高潔な人格の所有者として有名である。

刈羽村入和田

月立山 妙滿寺



妙滿寺

當寺は、高僧雲哲阿闍梨日從上人の開創に係る所に、眞言宗に屬する本妙寺と稱する此所にありたるも、

暫くして廢寺となり、長く無住寺として荒廢する所に委せられたるも、偶々、日從上人の現るゝや、檀徒均しく上人の徳を慕うて、上人檀徒の渴望に應へて當寺住職に迎へられ、同時に改宗して日蓮宗とし、日蓮上人の高遠なる理想をよく其の熱と意氣と妙好なる話術を以て、檀徒

野田村木澤 花榮寺

當寺は曹洞宗の古刹にして、本尊には行基菩薩の御作に成る聖觀音を安置し奉る。人皇百四代、後柏原院の御宇、永正十癸酉年、北條城主十一代毛利丹後守高慶公御老母花蔭正榮大姉菩提のため開創せしものにして、是より先天喜年中、源義家公が奥州へ下向の砌、當國米山へ御參詣あり、同所へ御一泊なされしに、谷間に鶏の聲を聞きしにより、供人にお尋ね遊されしところ、住僧と御物語りの上鶏の谷間に鳴くを以て御愛護に鶏谷と書し、當所に納めた。その後、前記の通り毛利丹後守が再建して花榮寺と稱したものである。觀音妙知力の佛徳高大なること當地方に冠絶し、聖觀音を一心に祈願する時は、大願も必ず成就すといひ、古來善男善女の崇敬が厚い。木澤村に木澤地藏堂、野田村に山王地藏堂、同村宮川新田に長照寺、同村石塚に十王堂、同堀ノ

の教化指導に努めたるを以て、檀徒は勿論遠近の老若男女其の説教の有難さに接せんと、集り來りて、上人の徳に心服せりと云ふ。時に大同六年なり。本山を伊豆國村澤妙法華寺とす。

當時は明治維新當時、不幸にして再三火災に遇つて燒燬し、現在の建物は、本堂は明治十四年、又庫裏は昭和七年の再建にかゝるものなり。

境内面積一五〇〇坪。尙ほ當寺は西山油田の中心地に當り、又現在新潟縣日蓮宗宗務所の所在地なり。

檀家は二田村、高柳村、内郷村、刈羽村等に多數存在す。

二田村坂田

坂田 圓滿寺

當寺は聖如意輪觀世音菩薩を本尊に安置し、眞言宗に屬する靈刹である。今よ

内に観音堂、鷺川村に地藏堂あり、これらはいづれも當寺末である。
寶物としては佛像佛畫法衣等あり、本尊觀音並に脇立昆沙門、不動尊もまた秘佛とされる。本尊胎内觀音一、十三佛大小三幅、開山法衣一、後水尾天皇宸筆の短冊、菅家證明一、大藏經全部、日本洞燈錄全部、大涅槃經全部、仙人二幅對、虎龍二對、屏風二双、仁孝天皇の御草履、その他數へあげれば際限もない。
現住職九里好信師は、人格高くして名僧の面影あり、檀信徒の尊敬を一身にあつめてゐる。

西蒲原郡峰岡村峰岡

峰岡村長 中村 富次郎

當中村家は相當の舊家であるが、記録の徴すべきものなく詳細を斷じがたいのであるが、先代連次氏は越後國蒲原郡三根藩主牧野家の二代目藩公の時に御勘定人に召し出された。その門閥と財力信用

は推して知るべきである。かくて明治初年の廢藩に至るまで牧野家に勤続して、御用人上席、御家老相談役を兼ねて精勵し大いに信任せられて功績亦た少くなかつたといふ。

當主富次郎氏は連次氏の男として、明治七年一月二十二日に生れた。二十九年三月三十日新潟縣師範學校を卒業し、縣下各小學校に訓導を歴任し、峰岡尋常高等小學校長に任ぜられて勤続二十五年間に及び、その功勞著大なものがあつた。後進の爲めに勇退して路を開き、これより自治公共の事に挺身奉仕するところあり、數多の公職を歴任して功勞多大、遂に村長に推されて現任中であり、名村長と謳はれてゐる。財團法人三根山有終團理事長をかねてゐる。教育界に於て多年薰陶したる子弟が、すべて當今の第一線に活躍する有爲の士となれるために、氏の惠澤徳風は全村に豊かにして村外にまで溢れ漲つてゐる。まことに崇高にして玲瓏たる人格は渾熟して全村の師表とな

り、その舉措は悉く村民の木鐸とならざるはない。不偏不黨にして嚴正中立、村是村護のために最善をつくして、たゞその及ばざらんことを懼れ、誠意誠心萬人をして發奮興起せしめる。教育等の功勞により大正十一年二月縣知事を始め諸方より表彰を受くること多數に上る。
溫和にして瀟洒なる氏 書畫を愛好しまた盆栽を以て趣味とする。その三昧境に味到すると雖も敢てこれに淫することがない。荒亡己を失ふことなき士君子といふべきであらう。清濁ひとしく併せ吞んで選ばず隔てず、まことに寛容にして懇篤、仁者の風がある。

夫人は先年永眠し、長男夫妻は遠く滿洲國哈爾濱市に在りて活躍中である。一家一門益々積善餘慶のうちに隆昌を極めつゝ、全村の敬仰をあつめてゐる。

東 頸 城 郡

安塚村中猪子田

村會議員 杉 田 鎌 吉
勳七等

氏は明治十三年四月二十七日生れにして、明治三十一年新潟師範學校出身者であり、卒業以來各地に奉職す。昭和五年三月東頸城郡松代尋常高等小學校長を最後に引退し今日に至りしものである。現在は村會議員の要職にある。

氏の永年の教育界生活に於ける功績は眞に偉大にして、兒童より慈父の如く仰がれ、父兄の信望絶大なるものあり。資性濃厚、清廉潔白にして、徳義心深く、稀有の人格者である。

氏は、高等小學校と青年學校普通科二年間との關係を如何にすべきであるか、亦高等小學校の教育と青年學校の教育と

は、その内容を如何なる關係に置くべきかの問題に關して教育家の立場に於て夙に憂慮してゐた。篤學にて如何に職務に眞摯であるかを伺ふに足る。氏は又非常な運動家にして、その運動競技には特に率先して出場す。禪宗を奉じて信仰心深く、敬神家を以て知らる。長男は南滿洲鐵道株式會社に勤務すること二十年餘に及び、その事業家としての才腕は刮目すべきものあり、敏腕家として謳はれて、仲々の秀才肌の人である。

安塚村下猪子田

村會議員 石 田 武 次

當家先代慎二氏は明治十一年三月二十

九日生れにして、當村に於て永年村會議員の要職にありたるも、數年前より宿痾靜養の故を以て引退し、只管その回復に努めつゝある。元信用組合長としてその經營の任に當りしも、昭和十二年十月安塚村に在りし五組合を合併、一組合とせる爲めその職を退き、又保念川水力電氣株式會社の重役を勤めしも、魚沼水力電氣會社と合併せしにより會社の重役を引退す。現在は信用組合理事及方面委員の足を勤めてゐる。その間の功績は偉大なる足跡を印し、村内屈指の功勞者として讚美さる當村の有力者である。

當主武次氏は明治三十四年十二月二十八日慎二氏の次男として生れ、高田師範附屬小學校卒業、長野縣松本市所在の小學校教員養成所出身者である。

同村は元四ヶ村合併し、現在の安塚村となつたもので、地理的に種々の村民よりなる爲め不便の點ある故に、同村内に小學校四校あり、氏の居住部落には二百數十戸ある所にして、同村大字安塚の中

中央部に在る高等小學校は、降雪期に入ると児童の通學困難となるを以て、通學生多數ある同部落の小學校に高等科合併の議起るや、氏は嚴父の意を受けて該運動に東奔西走、一身を捨て、努力せしため村民いたく感激し、少壯にしてよく村民の推舉する所となり、村會議員となりたるものである。その前途眞に洋々たるものあり、盆裁に造詣深く、禪宗を奉じ信仰心が深い。

捨て、郷里に歸り、家を繼ぎて同村に開業す。その手腕、識見は、遍く村民の認める所にして推舉されて郡醫師會長、村會議員、校醫、元郡會議員の要職にあり、青年議員として大いに活躍し、その未來を囑望され、前途洋々たるものありたり。氏は村長たること二期に及び、その間、村内の開発繁榮につくせし功績は顯著にして、名實共に名村長として長く謳はれしが、惜まれて退き、村内第一の素封家にして、名門の家柄なる横尾義智氏に其の職を譲りて今日に至る。



所にして

て、長男孔氏は滿洲醫科大學出身者中の逸材にして、現在本溪湖病院小兒科に勤務中、次男文夫氏は農業に従事し、長女靜枝嬢は北魚沼郡堀之内町八木家に嫁し、次女マチ子嬢は南魚沼郡鹽澤村宮田家に嫁して二男二女あり。

小里村和田

郡醫師會長
元郡會議員

横尾正治

氏は明治十六年九月十三日、實父嘉六氏の次男として生る。夙に長谷川綱治郎氏に師事して醫學を修め、生來才能に恵まれた氏は、優秀な成績を以て大正元年十月二十二日醫術試験に合格した。氏は令兄が不幸にも早世したるため、大志を

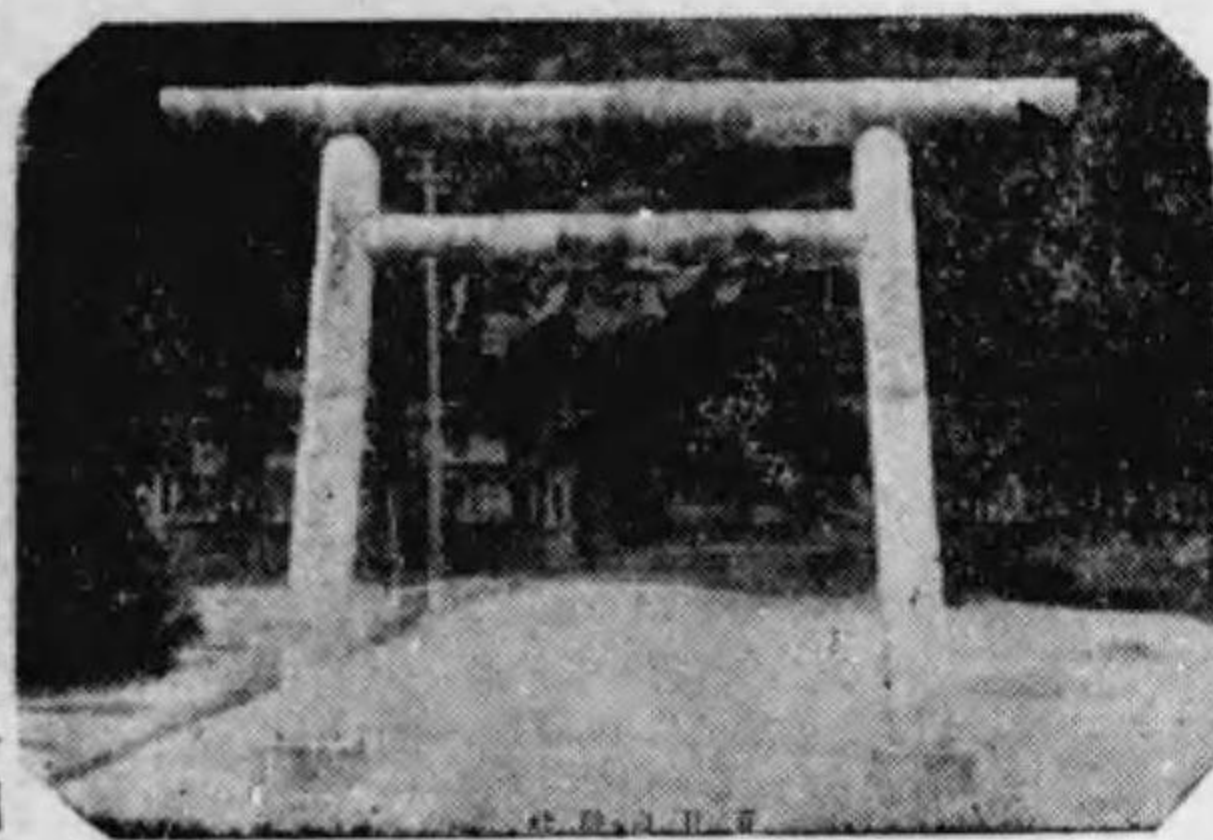
清廉潔白にして、謙讓の徳厚く、眞に衆庶の範たるべき傑物であり、當村の元老である。眞宗を信仰する。カウ子夫人との間に二男二女あり、夫人は容姿端麗にして、温雅な賢夫人にして今日に至る。

中頸城郡

春日村大豆

縣社 春日山神社

春日山城跡の中腹、謙信公の母、虎前の御前



春日山神社

祭神としてゐる。明治三十四年高田藩士

御前の御館の有つた御老母屋敷にあり、上杉謙信公を

小川隆晴等の奔走に依り社殿竣工三十九年縣社に列せらる。大正十四年騎兵第七聯隊の廢止に依り兵營内に祀れる武雷命、齋主の命を遷座して相殿に祀る。社殿を中心とする一體の地は昭和十年文部省より史蹟に指定され、武神及藝術の神として軍人、青年、學生の崇敬を受けてゐる。社殿は神明造にして境内は三十町歩、寶物は毘字旗、亂龍の旗、紺地日丸

氏は、從七位勳七等、明治四十二年新瀉縣高田師範を卒業し、當社講社社長、春日村教育會長、春日村軍人會長等に歴任し、後春日村青年學校校長、春日村小學校々長春日神社社司として上杉謙信公の尊王布徳及公明正大の精神を普及するの抱負を持ち居るものにして、同氏は明治十九年十二月二十三日田村輝吉氏三男として生れたものである。夫人美代乃氏貞節にて



社司小川

社司 小川三郎 二年高田藩士大川家に生れ、明治戊辰の際官軍に屬し奮戦し、三十九年當神社を創立す。

女子三人男子二人にして、長男永久氏は高田中學校在學中である。

旭 村

元代議士 大瀧 傳十郎



氏は文久元年六月二十五日の岳降、本年七十八歳の高齡なるも尙壯者を凌ぐ豊饒振りで、また當家は本村切つての富豪舊家名門、大地主として四隣に響いてゐる。

町村制實施前戸長として農村開發に力を致してきた氏は、明治二十三年衆望を擔つて當村々會議員の要職に執掌するや爾來四十八年間村勢發展に協贊の任を盡し、殊に同三十四年以降曾つて村會に缺席したることなく、一意専心村治の爲に貢獻、その功績また頗る顯著で好評噴々たるものであつた。續いて縣會議員に推

されるや、縣政の改革に一身を挺して縣治績の向上に協贊してきた氏は、遂に本縣の爲衆議院議員として國會に參與し、堂々侃諤の論陣を張つて國策を論じてゐる。當村切つて逸材である。その他氏は村農會長、産業組合長等を歴任し、明治四十年には農商務省より地方森林議員に選ばれ、縣山林會副會長、縣農政協會長縣種苗會長並に縣耕地協會副會長等の重職に推され、地方自治の發展並に産業振興に貢獻する所尠からず、殊に曾て小學校統一問題に關し流血の慘を見るが如き紛擾の起る時は、理事者を助け自ら各部落を訪れ、寢食を忘れて之が圓滿解決に努めしことは著聞なことである。また明治三十二年他町村に率先して農會を設置し、或は耕地整理の完成に、産業組合の助長發達に終始其の全力を傾注し、一村民の福祉の増進を圖る等、全く氏の功績は枚舉に遑あらず、その徳望頗る篤く昭和八年には村民相諮つて氏の壽像を建設した。

氏は政友會に屬す、趣味として書畫に造詣深い。日蓮宗を深く信仰してゐる。氏の長男傳昌氏は現在學務委員とし活躍する當村の中堅人物で、家庭は春風踏蕩和氣霽々たるものである。

濁町村土底濱

縣會議員
濁町村長

藤 繩 清 治

年二百五十石を醸造する酒造業を營む氏は、高田中學校卒業後、當村に在つて前助役、村會議員等の要職に在り村の爲め貢獻する事多大であつたが、現在も濁町村長として、村治を双肩に擔ひ、名村長振りを發揮してゐる。縣會議員としては縣會の新進氣鋭の鬪士として明晰なる頭腦と、生來の雄辯とを驅使して一方の雄であり、農會副會長、消防組頭、産業組合長、中頸城郡養蠶業組合長、魚業組合長、青年會長、國防婦人會長、主婦の會々長、銃後會長、村政治會々長、縣銃後後援會理事等行く處として可ならざるはなく、到る處その才腕を揮つて功績を

擧げてゐる。氏は正朝氏長男として明治二十六年三月十二日生れ、正朝氏は女子教育に特別熱心で、現高田裁縫女學校を明治三十七年に創立し、現校長は清治氏の令姉である。氏は終始至誠の人であり、同村は會計事務優良村として表彰される事四回に及ぶ模範村である。家族は七人にして男三人女二人あり、圓滿なる家庭を營んでゐる。

尙當家は開祖以來相當古く、年代は不詳であるが、舊家名門として知らる。

新道村稻田

縣會議員 田 原 貞 吉

氏の祖先是先覺者にして横濱に貿易商を營み成功した人である。氏は元治元年生れ、又三郎氏方に養子となり、村會議員たること四十年餘、大正十一年村長に推され、又名譽助役、學務委員等、村自治に關與、その功績甚大にして、郡會議員として歴任したる事あり、村の長老として信望篤く、現在高田病院評議員、農

業倉庫理事、製氷會社總代等として人望高く、その抱負高大にして、特に降雪多き當縣下人民の爲め、各種税に對する特別金を主張して其達成に努力してゐる。氏は資性磊落にして剛放果斷、自治功勞者として數回に亘り表彰を受けしことあり、政友系幹事である。氏は又書畫を好み、園藝に興味を有し風流を愛する人、その家庭は男二人女五人あり、長男貞太郎氏二十六歳は、現在立川飛行隊志願兵として帝國空軍の勇士であり、家庭は常に圓滿、氏の人格を反映して明朗なる雰圍氣を醸し出してゐる。

旭 村

旭村 役場

本村は頸城平野の北隅、中頸城郡の北部に位し、面積約一〇、三三三平方呎にして、その沿岸は鎌倉時代以後は北條氏上杉氏、堀氏と替り、徳川時代となつて親藩の松平氏となり其の後幾變轉の後、明治六年新潟縣に合併せられ、同十二年

郡制施行と同時に中頸城郡に入り今日に至つたものである。當村は農四〇七、商業一三、工業六、其他一七にして計四四三戸、人口二、六九七人、當村の産業は農産物の外、蠶工品、製茶、養蠶、家畜、養鶏盛にして、林業及び水産業（養鯉）あり、着々と成果を擧げてゐる。村内神社は村社一、無格社一六、佛閣に眞言宗一、淨土宗一、淨土眞宗一あり、各團體に農會、青年會、尙武會、在郷軍人分會、教育會、信用販賣購買組合、耕地整理組合、婦人會、女子青年會、農事研究會、商工組合、各消防組、朝日池用水普通水利組合、谷三ヶ溜用水普通水利組合、上割外三ヶ溜用水普通水利組合、大瀧惡水普通水利組合、赤川排水普通水利組合、外十八ヶ村水利組合、旭村軍友會國防婦人會分會がある。

村 長

井部修三

氏は永年に亘り村治に關與し、その實績多大にして名村長として衆望を集めてゐる。その資性温厚にて謙嚴しか

も快氣に富み、献身的努力を以て村治に盡瘁、當村の今日在るは實に氏の功績に負ふところ多大である。井部家は又、當地方切つての名望家にして、名門の家柄として知名である。

和田村

和田村役場

内山平治

氏は明治十年生れの當年六十二歳にて、初め助役として一期就任後、大正十五年八月推されて村長となり、爾來十有餘年、一意邁進村政に貢献してゐる功勞者である。その他郡農會長、縣町村會長、郡町村會長、教育會長、尙武會長等の職に就き、傍ら農村經濟更生を志し、第一は自給肥料の増産、綠肥の増産等に主力を注ぎ、次に紫雲英栽培に及び耕地面積一千町歩全般に亙る指導獎勵の實現を見るに至つたものである。氏は村民の信望を一身に擔ひ、全生涯を村政の發展の爲に捧げてゐるのである。

助役

明治十五年十月三日生れの氏は昭和四年二月助役就任後、今日に及んで

七等功七級の行賞に與り、村議二期間就任、尙本郡十ヶ村の水利組合理事、及び産業組合長等の重任にありて、献身努力せる人材である。

清水郡吾

氏は明治三十四年八月生れ未だ三十八歳の壯年にして、大字西田中が生地である。種々村自治に關與し、盡力する處多く、村民舉げてその信望厚く、濃厚篤實の紳士として、將來を期待せられてゐる。

原通村

原通村役場

飯田寅吉

氏は資性温厚にして高潔清廉なる人格者にして常に公正無私をモットーとせる徳望家である。氏は昭和十一年村

長に就任したるも、今日に至る間村治に盡瘁し、村の發展と開發に専心、又信用組合理事、農會長として産業經濟の發展に貢献し、村の功勞者として感謝と、將來に尙多大の期待をかけられてゐる人材である。氏の嚴父傳右衛門氏も村長として長期に亙り盡瘁し、村の今日在るは實に傳右衛門氏の功績に依るものであり、高潔なるその人格と共に村民の長く記憶して忘れ得ぬ人であらう。

吉越耕治

氏は大字坂下新田の人にして、明治三十四年六月生れ、當年三十四歳の新人なるも、村會議員として二期に亙り推舉されたる新進氣鋭の人にして事務的才能業に勝れ、明敏達識にして卓拔なる才腕を有し、村の將來は實に氏の双肩にあると期待せられる逸材である。昭和十一年五月助役に就任し、益々自治公共の意を用ひ、常に現實を認識して、確固たる立場に於て村政の改革に盡瘁し居る人にして前途を矚目されてゐる。

収入役

霜鳥三保也

氏は明治二十六年九月當地に呱呱の聲を擧げ、資性穩健着實にして、清廉潔白、昭和二年より本村役場事務に關與、模範的手腕家にして、昭和十一年七月推されて収入役となり、献身的努力を以て多大の實績をあげ、現在に至りたるものにして、氏の嚴父松五郎氏は元村長にして名村長として信望あり、當村の功勞者として知名である。

中郷村

中郷村役場

松本治村

昭和三年五月助役となる。同七年五月推舉されて氏が村長に就任するや學校併置問題に關與、主唱者となり献身的熱意を以て鋭意努力したる結果、遂にその實現をみるに至つた。氏は又米作の改良に意を用ひ、研究に研究を重ね致々としてその目的に邁進しその功績尠からず、町村長會より特に表彰を受けたるこ

とあり、村民の信賴頗る厚く、衆望を擔つて尙も村治に盡瘁中であり、村民の希望は實に氏の双肩にあると云つても過言では無い。氏は大字江口新田に住し、明治十年十二月七日の出生にして、本年六十二歳の高齡なるも、一身を挺して村治に盡し居るものにして壯者を凌ぐ元氣さである。現在消防組頭も兼任して、實績多大。當家は舊家にして素封家として知名な家柄であり、氏の家庭は圓滿にして和合を極め模範的良家庭として信望がある。資性圓滿高潔にして率直、しかも質實敦厚なる人格者である。

水上村

水上村役場

當村は中頸城郡の東南に位して、面積約〇、五四五平方里あり、水力の便甚だしく利用力に富む。當村は交通の便良く新井驛へ十三町の地にあり、大字數六、部落數八あり、神社數五社、寺院は淨土

間島利太

村長

當村々長間島利太氏は明治四年二月七日の岳降にして、大正十五年一月



村長就任以來現在に至るまで村治に盡瘁し功績多大に

上る名村長である。

間島家の開祖最も舊く、先々代及び先代は名主、庄屋、戸長等を爲し、村内隨一の名門である。氏は村長就任前二十ヶ年の長期に亙り村會議員を爲して、其の間村内道路の改修、學校併置改築、消防機構の改革、經濟更生の實行等々、その功枚擧に暇あらず、現在消防組頭、農會長、信用組合及農會倉庫理事等、凡ゆる村發展機關の主腦者として、昭和十一年度經濟更生畫策後、着々としてその實績を擧げ、尙も將來を期待されて居り村を擧げて絶對的信望を集めてゐる。

氏の實兄に間島與喜氏あり三井物産の重鎮にして村出身の名士として、本村の誇りである。氏は本村の産業不振、經濟の窮狀を痛感せられ、學校新築に教育費に消防自動車購入に進んで莫大なる私財を投ぜられる事再三ならず、現在各般に互る施設の全きを爲したるも一に氏の援助に成るものである。村長利太氏は圓滿高潔なる村の長老にして名村長として名

聲あり、村民の常に敬慕して止まざる人格者である。

瀧町村

瀧町尋常高等小學校

本村は明治二十六年四月を以て開校され、明治三十五年十月に高等科を設置されたもので、現在創立以來四十六年の歴史を持つ。學區は大字瀧町、大字九戸濱大字雁子濱等、三百七十戸、人口一九萬餘人を有し、現在在學兒童三百六十四名卒業者は尋常科一、五四四名、高等科は五四九名に上つてゐる。

本校の特徴は、各大字に出張、父兄懇話會を持つて居り、毎月一日、十五日を感謝報國として禮拜を行ひ、尋常三年より金錢出日記を記させて居り、それによつて反省力を強めてゐる。全校生の學風は大慨快活機敏にて健全である。

現校長岡村寬平氏は十一代目の校長にして、全職員八名、澁川直人氏が歴代校長として學校衛生に携はり、尋常科一年

には年一回糞便検査を行ひ、全校生徒に驅虫劑を與へて驅虫を行つてゐる。勸語奉讀歌の作曲者で音樂學校教授であつた故小山作之助氏は本校出身である。

校長

岡村寬平



氏は明治二十七年六月生れにして、高田師範卒業後、上米山尋常高等小學校、柿崎尋常小學校、高田市大町尋常高等小學校等に教鞭をとり昭和七年三月當瀧町尋常

高等小學校へ榮轉、現在に至つたもので生涯を小學教育に盡瘁される人にて特に高田市の大町尋常小學校には十五年餘も奉職、兒童父兄達の大いに尊敬を受けてゐる。現在瀧町青年學校長をも兼ね、青年の善導に精勵してゐる。家族は長男は高田師範在學中、外に小學校五年の男子と同二年の女子ありて、夫人は村内主婦

の會の副會長を務めてゐる賢夫人の譽れ高い。

和田村

和田尋常高等小學校

國學院大學教授文學博士植木直一郎氏海軍少將宮尾信次氏等の逸材を排出した當校は、報徳思想の普及、思想善導及教化を目標にせる教育方針にして、在學生徒數七百四十五名、現任職員數二十五名にして、大正五年他一校を合併して和田尋常高等小學校と稱するに至つたものである。當校は毎月一回衛生相談日を設けて校醫の來校を求め、相談會を催すなど理想的模範校として知名である。體育方面に於ては、生徒の自由を尊重し、好める處に依て體育を奨励し、多大の成果を擧げてゐる。

校長

氏は中頸城郡里五十公野村の出身にして、明治十五年五月三十日生れ、

新潟縣立高田中學校卒業後新潟師範講習

科了へ、明治三十五年七月、柏崎尋常高等小學校に勤務、三十七年十二月青雲の志をたて退職せしも、更に感ずる處ありて三十九年再び教育界入り立志し、中頸城郡美守小學校に教鞭をとること三ヶ年餘、四十二年上吉野尋常高等小學校に轉任、更に大正八年十一月同郡三郷村尋常高等小學校に轉任、大正十一年八月同郡上杉尋常高等小學校に轉任、昭和四年三月本校々長として就任し現在に至りたるものにして、其の間教育界に貢獻する處尠からず、表彰を受けること數回に及ぶ。

氏は本校赴任以來數ヶ年に亙り、村内思想善導に砕心、苦闘を續け、現在の純朴なる風俗を招來するに致らしめたる努力は、實に教育界の範と謂ふべく、教育に従事する事三十二年の永きに亙り、一身を挺して盡瘁した。

されば氏のその篤行は遂に報いられて昭和十三年二月十一日、特に功勞者として表彰され、知事賞を受けたるは當然の事であらう。

瀧町村

犀瀧尋常高等小學校

當校は明治七年一月の創立になるものにして第四中學區第二十二番小學土底校と稱し、里井、夷濱、澁師濱、上下濱、直海濱に分校を設置し、明治二十二年村立犀瀧尋常小學校と改稱、同三十年七月高等科併置、同三十四年犀瀧村と瀧町村と合併瀧町村と稱し、昭和九年九月校章校歌、校旗を制定した。當校の校舍は創立當時は土底養性寺に借館を置き、明治廿二年土底濱の現地位に移轉、その後二回増築、昭和九年に至り、皇太子殿下御降誕奉祝及び創立六十周年記念事業として奉安殿を建造並に屋外運動場を擴張した。現在教員數十六名、生徒八二〇名にして、當校の教育根本精神は團體尊仰に出發し、體育擁護、徳操訓練、智能啓發に重點を置き、社會人として遜色なき圓滿健全なる人物を養成せんとするものにして、その實績を擧げ、當校卒業生に名

士が多い。

校長 田中好治

氏は明治十五年八月十日岳降せるものにして本年五十七歳、高田師範第三期生である。氏は厚濁尋常高等小學校、上千原尋常高等小學校、直江津尋常高等小學校首席



訓導、里五十公野尋常高等小學校校長を経て昭和六年再び當校に榮轉せるものにして、奉職似來實に三十四年の長期に亘り献身的熱意を以て教育界に盡瘁し、縣下一の名校長として知名である。氏の資性謹嚴にして、しかも圓滿なる人格者であり、夫人も永年小學校訓導として奉職したる教育者であり、賢夫人として令名が高い。氏の家庭は四男一女あり、長男は目下拓植大學在學中の秀才にして、尙氏は各方面よりの表彰狀多數にのぼる。

新道村稻田

稻田郵便局

當局は三等郵便局にして、毎年業務優秀に依り表彰を受けてゐる模範的郵便局にして事務員七名、集配人九名により、新道村、津右村、三郷村に亘り集配してゐる。現局長は三代目にして明治四十四年引繼ぎ現在に至つたものである。

局長 川崎眞治

當家は明治二十年頃より吳服商を営む地主にして資産家である。父伊四郎氏は治水組合役員、村會議員、區長、其後總代等として村自治に盡瘁し、六十二歳を以て永眠した。氏は伊四郎氏長男として明治十五年五月十日生を受け、資性温厚篤實にして、村行政に努力する事村第一人者である。郵便局創始者前島公出身地津右村に記念館設立に付、努力奔走し、目的達成する迄献身的努力を爲したる功績あり。現在村會議員四期、所得稅調査委員、方面委員、學務委員三期、

瀧町村土底濱

瀧町村信用販賣購買組合

當組合の區域は瀧町村一圓にして、保證責任瀧町村信用販賣購買利用組合と稱し、電話瀧町二一番である。

現在役員は、笠原謙治郎氏、小山宗一氏、藤繩清治氏、柳澤守之輔氏、小山誠太郎氏、池田謙治氏、熊木春次氏、内藤雄次氏、新保徳太郎氏にして、着々と實績を擧げ、發達途上に在る組合として信望がある。

専務理事

小山宗一

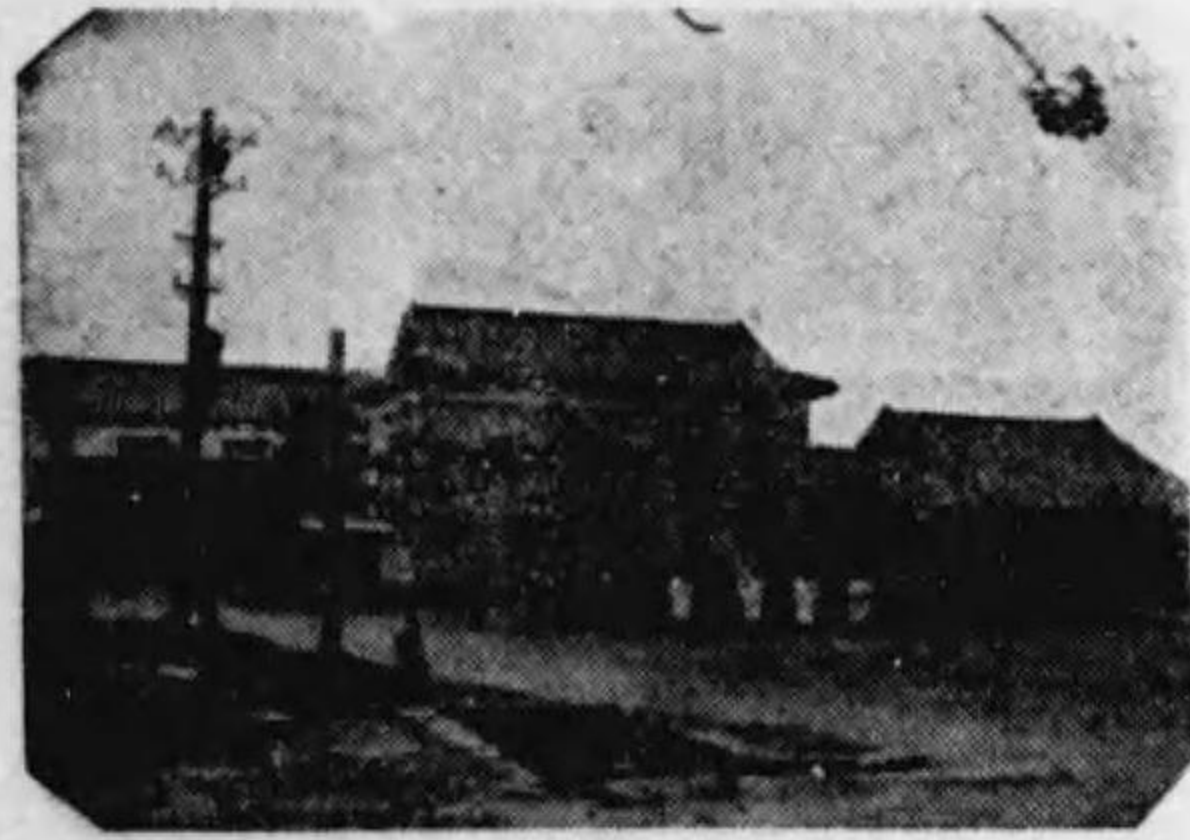
當組合専務理事小山宗一氏は、村會議員として二十年の長期に亘り孜々として村治に盡瘁し、貢献するところ多

大であり、功勞者として衆望を集め、又區長としても數期に亘り寄與し、今尙努力止まざるの精進振りである。氏は又産業組合理事として夙夜淬勵献身的熱意を以て當村産業經濟の發展に銳意努力してゐる材幹である。

旭村

旭信用販賣購買組合

當組合は明治三十六年創設當時無限責任



組合全景

任たりしが、大正九年有限責任とし、組織變更するや

理事 石野武三

石野家の先祖は藤原左近と言へ傳えられ代々武家であつた。明治初年頃

族籍の士族を何時しか平民に改めた。享保二年、



松平日向守の領地となるや六萬部外十四ヶ村

の割元役被仰付代々勤続し、明治初年より戸長、用掛、村長等拜命、地方自治に盡瘁した。氏は新潟師範學校卒業後、割元役、戸長、村會議員、學務委員、中頸城郡總町村聯合會議員、旭村長をなし功績多し。現在は村會議員、村農會旭村地整理組合會議員、六萬部落農事實行組合長、旭信用販賣購買利用組合理事として盡瘁し來りしものにして、眞面目にして言語明瞭、規律ある動作をなす快活にして、親切、温情ある人格者として、後進の指導に意を用ひてゐる。

氏は明治十三年三月二日當地に呱呱の聲を擧げ、爾來村民の信望を集めてゐる徳望家である。

吉川村厚立町

吉川信用販賣購組合

當組合は昭和七年信用組合として信用



下島新次郎氏

事務所を設け、昨年まで經營、十一月現在事務所に移轉兼營となつた。當組合は四百七十餘名の組合員を有し、出資總額一萬二千一百八十圓にして、貸付總額一萬八千八百八十四圓、貯金一萬二千一百四圓を有し、購買價額二萬二千圓、販賣價額一萬二千五百圓である。販賣事業初年高なるが、堅實なる經營方針を組合擴充計畫に依る運動にて、日増しに充實をみてる状態である。當組合設立の動機は農村不況の折柄、金不圓滑なる爲め是が打開と組合員相互の利益の爲に設立する

に至つたもので、部落三十三ヶ字、東西三里、南北二里餘町の大村にして、農家戸數八百八十戸、水田八百三十町歩、畑二百餘町歩、外に山林あり、製炭者三十餘名を有してゐる。

當組合長は下島新次郎氏にて、氏は初代よりの組合長にて、努力献身するところにより功勞多大である。事務理事は飯川繁三氏にて、よく精勵勉めてゐる。當組合は未だ四種兼營後五ヶ月にして其の業績見るべきものなけれど、組合當局と組合員との一致協力により、將來發展を

原通村岡新田

原通信用販賣購組合

當組合は昭和十一年二月十七日の創立にして、前村長、現組合長杉本源治氏及び現村長飯田寅吉氏等の奔走により設立を見たるものにして出資總額五、八六〇圓、一口金額二十圓、組合員數二六二口に及ぶ。組合長杉本源治氏は明治十二年

八月生れ、温厚にして清廉潔白なる資性を有し、堅實第一主義にして事業の一時的發展より漸進主義を目標として今日に至り、着々其の實を擧げつゝある。現事務理事藤野英夫氏は設立當時より活動したる俊敏の氣性に富める材幹にして、明治三十二年十一月の岳降、高田農林學校出身の傑才であり、粉骨碎身、今日の組合を建設するに大なる貢獻を爲した。當組合は他に理事七名、監事三名を置き保證責任もあり、頸南警察組合へ出資二口金一千圓に及び、杉本良治氏の持論である漸進主義に立脚して、歩一步躍進を續けてゐる。

關山村關山

頸南購買販賣組合

大正十一年設立せる組合組織の兩市場及農業倉庫を經營してゐるが、糸價下落に依つて營業意の如くならざる状態となり、政府の組合を獎勵するに到り昭和四年九月購買販賣利用組合を以て製糸工場

寺野村下久々野

寺野村信用販賣購組合

當組合は保證責任にして、明治三十六年八月三十日認可設立と同時に事業を開始し、既に滿三十五年を閲し、着々と實績を擧げ、發達途上に有る組合にして、大正十年十二月購買利用部を併置して其の活用範圍を擴大し、地方に有り勝ちなる情實貸付等を極力警戒して廢退を防ぎ其の成績は古き歴史と共に光輝ある成果を擧げてゐる。

出資總額は貳萬四千貳百貳拾圓、一口貳拾圓にして口數一千二百一十一口の多きに及び、組合員數四百十八名にして、積立金參萬九千八百拾圓現在の高額を示すに至つた。現在は理事七名、監事三名あり、協力して發展の路を邁進する前途ある組合である。

組合長

下島松治郎

當組合長下島松治郎氏は、明治十一年八月十日生れにして資性温

水原村大濁

水原信用販賣購組合

大正二年四月四日、元村長黒田元藏氏の奔走に依つて設立されたる當組合は、當時單に信用組合のみを以て經營し、役

を創立し、爾來漆間與三郎氏組合長となり、是が任に當つて以來漸落の糸價不況の經營に當り今日に及びたるものにして頸南地方の養蠶家の生繭を以て繰業を爲しつゝあり、その釜數五十釜、使用人七十餘名にして出資總額四二、〇三〇圓、一口金額は三〇圓にして、一、四〇一口數に及んでゐる。當組合の理事十二人、監事六人漸次隆盛の途を辿つてゐるが、その實績大に賭るべきものがある。

組合長

漆間與三郎

中頸城郡中郷村前村長として敏腕を振ひし氏は、現在村會議員、農會長、中頸城郡農會副會長、頸南購買販賣利用組合長として村政の重鎮であり逸材として自治行政の功勞者であり、引退後は只管頸南組合製糸事業に力を注ぎゐるものである。氏は資性磊落にして潤達、徳望ある人格者にして當組合は氏の統制に依り、鮮かな進展振りを示してゐるが、絶大なる統制力を有する氏を戴く當組合の發展は期して待つべしである。

厚なれども終始努力の人、献身的組合長にして大正十二年七月より同村村會議員を兼ねて組合長に就任したるものにして日露戰役に出征し、各地に轉戦して幾多の功を重ね勳八等功七級を賜はるに至つた勇士にして果敢なる帝國軍人である。當組合に於ては、事務理事を兼任し、その熱意と意欲とは實に今日の本組合に隆盛なる發展を至らしめたものであり、歴代組合長もそれ〴〵功績を遺し、氏を得て一路發展に向つたものにして、敏腕なる事業家として、信望を一身に集めてゐる。その家庭は圓滿にして名望家であり家庭に於ての氏は、無類の人格者にして和樂に満ちたる和やかなる美しき家庭を作つてゐる。

場内に事務所を置きたるも、昭和十二年四月現組合長恩田豊治氏の主唱により保証責任信用販賣購買利用組合となり、同時に縣の認可を得て、新舎屋を建築し、同年十一月本組合設立、二十五周年記念を兼ねて盛大なる落成式を挙行した。新舎屋は倉庫二十坪、事務所二十坪餘である。當組合の出資額は七千二百八拾圓にして、一口金額十圓、組合員數二百六十二名に及ぶ。又當組合は、當村に醫療機關なかりし爲め頸南醫療組合に三口千五百圓を出資し、當村坪山に同病院診療所を新築開設し、農民の幸運を計り居るものである。

組合長 恩田豊治

現組合長たる恩田豊治氏は明治十七年十二月二十日の岳降にして、元村長、現村會議員として村政に盡瘁し、資性濃厚篤實の士にして適材適所の聲が高い。専務理事木村正史氏は有恒學舍出身の俊英なる逸材にして、明治三十五年三月十六日生れにして、組合の完璧を期し

兩氏は實に當組合の双壁である。

當組合に於ては村内全戸を組合員に爲すため努力奔走中にして、近き將來に於て必ず其實現を觀るものと思惟せられてゐる。尙當組合は組合長一名、専務理事一名、理事七名、監事五名に依つて善處される。

柿崎町柿崎

理研ヒストリング 株式會社 柿崎工場

當工場は昭和十年十月一日の設立にかり、切削工具を製造し理化學研究所の研究に成るものである。本社は東京市麴町區有樂町一丁目二番地に存し、従業員壹千餘名を數へ、工場設備は理研にて研究を實施したる模範的工場である。その組織は合理化され一ヶ月皆勤者及五日迄の缺勤者には汽車賃を支給し、寄宿舎は一日十五錢の宿舍料の外何等を取らず、又精米を工場に於て爲し、之を以て養鶏を爲し残飯にて養豚を爲すなど、合理化整備されたる外に例を見ざる程である。

資本金壹千八百萬圓にして社長は子爵大河内正敏氏、工場長は星野一也氏であり實績を擧げてゐる。工場主任は谷口和雄氏にして福井縣丹生郡織田村の出身、明治四十三年九月二十八日生れ、東京帝國大學工科を昭和十年に卒業し、理化學研究所に於て研究したる後、昭和十二年八月同工場の主任として就任したる研學努力の人である。

特殊鐵鋼 株式會社 柿崎工場

當工場は昭和十一年十二月一日の設立にして各種製鋼事業に従事し、工場の坪數壹千九拾七坪八合にして従業員數二百二十四名にして主要販路は官廳及一般工場である。製品は理化學研究所の研究になるものにして、資本金壹千貳百萬圓、工場長は星野一也氏、主任は吉田義治氏であり、着々と發展、躍進を續けてゐる。

電磁器 柿崎製作所

當製作所は昭和十二年七月十五日の設立にかゝり、電磁器の製造

を爲してゐる。工場坪數五百六十五坪にして従業員數百九十六名に及び、資本金參拾萬圓である。製品は理化學研究所の研究に成るものとして主要販路は官廳及一般工業に用ひられてゐる。工場長は吉田義治氏であり、發展途上にある優秀なる工場にして前途を囑目されてゐるが、氏の努力献身に負ふ處が大きい。

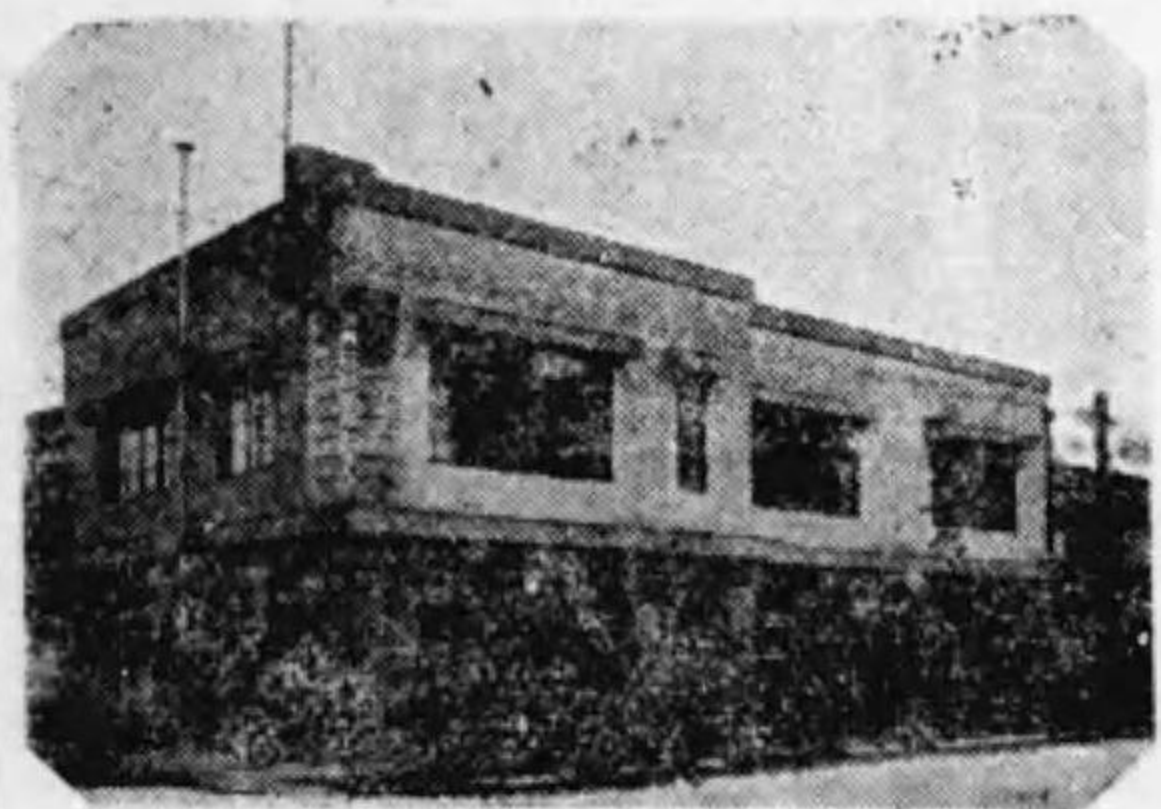
以上三工場は子爵大河内正敏氏の社長を頂き、株式會社理化學研究所に配屬してゐる。

大漕村

頸城鐵道株式會社

本社は大正二年四月に創立され、私設鐵道として縣下第二の古い歴史を持つてゐる。資本金二十二萬圓を以て大正三年秋から事業開始され、更に大正六年十月姉妹會社として頸城倉庫株式會社を創立した。昭和二年省線十日町線が、同六年上越線が開通されて一時事業に打撃を受けたが大正末期から乗合自動車營むこ

ととなり、爾來一步又一步、事業の増大



(社會鐵道城頸)

と成續の上昇を見、鐵道は新黒井下保倉間下保倉浦川原片田九十八、山田三郎の諸氏にして、社長大竹謙治氏は郡内屈指の資産家であり名望家である。明治十一年十一月の生れにして、夙より自治公共の事業に參與貢獻し、衆議院議員、郡會議員を歴任、新潟縣政友會支部總務として重きをなし現時村會議員、學務委員を兼任、且つ當社長のほか高田病院理事長をつとめてゐる。長男太郎氏は東京帝大を卒業せる辯護士、二男次郎氏は同じく東京帝大を出て宮城に奉職する。

明治村 明治村長 大澤助治

間を運轉、自動車は、高田浦川原間、直江津浦川原間、高田岡田間、浦川原信濃坂室野間、室野岡野町間、高田水科間、高田柿崎間、高田棚廣間、高田瀧町間、水科宮口間を運轉し、他に貸切自動車も經營する。一ヶ年の乗客は六百九十萬人をかぞへる。社員は百十二名。

重役は大竹謙治、饒村克治、岩崎徳五郎、小澤正信、白田善四郎、武田徳三郎

當村は明治二十二年町村構成後、明治三十九年十一月東頸城郡より大字石神外三ヶ大字を合併し、現今二十ヶ大字に分れるものにして、役場を大字上増田新田に置く。郡内中位に位し、縣廳を距る三十五里、郡衙を距る四里十四町の位置に在る。當村は年一年繁榮の路をたどり村長大澤氏の下に助役職員保治氏、收入

役井澤松藏氏、書記春日賢隨氏、岡田重吉氏、中村彦八氏、水澤孝市氏、日露素憲氏、外ノ池進氏あり、農會技術員福原一氏、蠶業技術員岩本義孝氏ありて、一糸亂れぬ統制下に實績を擧げてゐる。



少尉として日露戦役に参加し、轉戦又轉戦、數多の勳功をたてたる帝國軍人にして、我國大勝の中に日露戦役終結を告げるや、朝鮮守備隊附將校として活躍したる果敢な軍人である。氏の家系は古く源義經の家來にして、義經奥州に下るやそれに從つて越後に來り、上米村谷根に止りたるも、後に現在の西靜谷に土着したものである。常家は、西靜谷産木炭製造の元祖にして、代々農に従事し、曾祖父磯右衛門氏は庄屋として三十年に互り苗字帯刀御免の家柄である。又、東本願寺新井別院肝煎として勤続十數年に及び、京都に上る事二十數回、祖父權四郎氏は庄屋を勤め、軍費金百圓を獻納の功に依り苗字御免となり、先代一八氏は村會議員、學務委員、區長として村自治の功勞者であり、信望

して本年四十八歳の働き盛りであり、代農を營み、村會議員として村の爲に盡力して來た。氏は前助役、村會議員、區長を歴任し、信望厚く、現在は農會幹事信用組合理事として功績あり、村長としての入望頗る厚く、名村長の名が高い。氏は政友系に屬し、天性温順にして謹嚴なる人格者であり、長男氏(二十三歳)は、聰明にして前途有望なる青年。夫人は愛國、國防婦人會員として活躍し居る明朗なる賢夫人であり、外に男四人、女七人の家族である。

矢代村西靜谷

矢代村長 丸山權治
正八位勳六等
氏は縣立高田中學校卒業後、陸軍歩兵

厚き篤實なる人格者であつた。氏は一八氏長男として、明治十五年十二月十七日同村に呱呱の聲を擧げ、資性謹直にして徳望あり、責任感厚き村政界の重鎮である。氏は、中頸城郡木炭同業組合長、矢代在郷軍人分會長として敏腕を揮ひし事あり、現在は矢代村長として村民の信望厚く、矢代信用組合長、村會議員、公設消防組頭、新潟縣木炭聯合會評議員、高田郡病院頸南醫療病院理事、地方事情調査員として功績多く、實行の人である。氏は元民政系なれども現在は關係無く、只々村政に意を用ひ、心を用ひて村民の文化的向上、産業の發展に、一意盡瘁せるものであるが、氏の家庭は至極圓滿にして、淨土眞宗を信奉し、常に和氣霽々としてゐる。

金谷村大貫 保科正保

金谷村長 保科正保
氏は二十七歳にして村會議員に當選、二十歳位より村自治に關與して來た。氏

は村會議員たること三期、農會長、消防



組頭、其他の要職に歴任して實績をあげ、その後推されて昭

和十一年十二月村長に就任し今日に至りたるものにして、尊父傳吉氏は郡會議員三回、二代目金谷村長であり、高田新聞社に關係した民政黨の重鎮であつたが、四十五歳にして永眠した。其夫人は前外相芳澤謙吉氏の令妹に當る。氏は其の長男として明治三十五年一月二十三日同地に生れ、高田中學卒業のスポーツマンにして、スキーに妙技の持主であり、明朗にして温厚なる紳士であり、村自治關係の出馬に付ては爾來屢々推されしも常に辭してその任に着かざりしも、芳澤謙吉氏のすゝめにより、人間公共の事に盡力するは當然の責務なりと悟り、遂に出馬するに至つた。因に當家は村の舊家

にして名門の家柄であり、資産家として地方屈指の家柄。同氏夫人久子氏は國防婦人會長として活躍し、男二人、女二人の善き家庭を營んでゐる。

春日村岩木 春日村助役 丸山市太郎

當家は當村に於ける舊家にして、代々農業を營む。先代文平氏は現在の區長にして其當時總



代と稱せられし時より二十五年餘、總代として村自治に關係するの外、村會議員三期を歴任し、その村自治に對する功績多大にして、よく村勢隆盛に盡瘁せる爲村民の徳望高く、推擧されて村長となり誠實にして謙讓の徳高き人格者である。當主市太郎氏は文平氏の長男として生れ、四十二歳にして村會議員に當選、以

後重任すること五期、約二十年間農會總代、農會議員、亦創立當時より産業組合理事たること二十餘年に及び、區長を勤めること十三年にして、村内の最有力者である。現在は村會議員にして、昭和十二年、助役に就任して今日に及んでゐる。篤學にして、明敏なる透察と、穩健妥當なる判断を以て、よく村民の爲盡力す。政友會に屬し縣政界に重きをなす。家庭にはセツ夫人との間に一女あり、養子佐市氏は、高田農學校を卒業し現に谷濱村高徳小學校に奉職中である。實家は眞保信太郎家で、今年四十三歳の前途を囑望される材幹である。

寺野村 寺野村長 長嶺健治

當家は當村有數の舊家にして又當村屈指の名門である。歴代農を營みて、篤農の家と聞える。舊幕時代には百姓總代と稱する公職にありて、當村自治の爲め盡力せし家柄である。當主は其の十三代目

に當る。

當主健治氏は、明治三十一年十二月十八日に呱呱の第一聲を擧げた。資性濃厚にして而も剛毅、少年時代より既に群童を抜きて頭角を現はす。

長じて氏は、有恒學舎に入學、終始優秀なる成績を以て同校を卒業、同校諸教師の等しく將來を囑望する所であつた。偶々シベリヤへ出兵となるや、衛生隊として出動、剛毅なる氏は各戦線に於て奮闘、赫々たる武勳を樹て勳八等に叙せらるゝの光榮に浴したのである。

間もなく押されて村長に就任し、爾來氏は、或は道路を開設して交通の不便を除きて産業の發達に資し、或は新校舎を建築して、教育施設を充實し、或は診療所を設けて、病魔に苦しみ醫療に恵まれざる村民をその悲惨より救済する等、業績は正に刮目すべきものがある。

令兄氏は陸軍中佐にして、目下北支方面に參謀として活躍、令弟果源氏は高田高等女學校に教諭として、教鞭を採られ

てゐる。尙兩親は健在である。

有田村佐内

有田村長 竹内 榮治郎



當家は當村有数の舊家であり、三百年前より當地に居住し、代々農業を營み、篤農家として知らる。先代久吉氏は永年村會議員として、自治の爲めに多大の貢獻をなした人である。

當主榮治郎氏は、久吉氏の長男として明治五年に呱呱の第一聲を擧げたのである。氏は敏腕を以て聞え、他面人格圓滿にして、村民の人望厚く、村民より多大の尊敬を受けて居る。

氏は最初村會議員に推さるゝや、當時村勢振はざりしを苦慮し、此れが對策はやゝもすがが情弱に流れんとする青年の

士氣を鼓舞するにありと爲し、機會ある毎に青年の指導訓練に務めたのである。

間もなく郡會議員として出馬、村民多數の支持により當選し、郡政刷新の爲め奔走したる後、追つて當村助役、收入役、消防組頭、學務委員等の公職に就任した後、遂に推されて村長となり、現在に至つて居る。氏は此の他、産業組合長、村會議員、國防婦人會長、農會副會長、消防組頭、青年團長、銃後會長等幾多の要職を兼ねてゐる。

氏の實績は以上の如く洵に大なるものがある。郡農會より感謝狀を授與せられたることあり、又郡長、村長會より、永年勤続したる廉により表彰を受けたることがある。

眞宗を信奉し、家族は六人である。氏は家長としてよく家族を統制し、家族は氏を敬愛して和氣あいあいとして居る。氏は從來政友會を支持し、國政にも多大の關心を有し、其の卓見は人をして心服せしむるものがある。

海町村行野濱

村會議員 平 井 達 司

當家は當村有数の舊家である。代々農を營み、當主は其の第九代目に當る。

先代清造氏は、區長を十三年間勤続し大いに部落のため盡力し、又學區會議員を二期務めた人である。



標商のれ譽

六月十五日誕生せしも、其の實直なる性格は、先代清造氏の認むる所となり、懇

當主 達司 氏、作太郎 氏、の六郎 氏、男と して 明治 三十 六年

望せられて同家の養子として迎へられたのである。

實直なる氏は、村民の人望厚く、最初代理區長を二期勤め、續いて學區會議員を二期、神社氏子總代を勤めし後、今回村會議員として出馬、村民の絶大なる支持の下に當選し、爾來、銳意村政の刷新充實の爲め盡力して居る。

氏は眞言宗を信奉し、信仰が非常に厚い。投網を趣味とし、併せて強壯なる身體の育成に不斷の注意を拂つて居る。家庭には妻きよ子さんあり、貞淑の聞えが高い。きよ子さんとの間に二男三女がある。

八千浦村

村會議員 白 砂 庄 作

當家は當村に於ける相當の舊家にして由緒ある名門なるも、詳細なることは不明なり。然し明治二十年頃には當村の若者頭たりしことがある。

當主庄作氏は先代重作氏の長男として

明治十八年十月に生る。小學校卒業後は父業を繼いで精勵し、家業を更新繁榮させ、農業、米穀肥料商を盛大に營む。氏は八千浦私立消防創立者にして、三十歳の時より二十五年間に亘つて勤続す。現在は村會議員の要職にある。

氏は資性快活、明敏達識にして、進取の氣性に富み、愛郷主義、實行力ある徳義心強き人である。村政及び農村の改革に一身を傾倒して少しも撓まぬ不屈の努力は、數々の業績を残し、その村内に及ぼせし功績眞に偉大なるものがある。

人に對するに禮節あり、村内有数の人物たることは、村民の普く認めるところにして、氏は又浄土眞宗を奉じて信仰心篤し。政黨關係はなく、夫人との間に一男あるのみ。長男英一君は當年二十二歳にして、いま特務兵として仙臺に入隊してゐる。

夫人は淑徳溫和な賢夫人、内助の譽れ高く、琴瑟相和し羨しき限りである。

大濱村柿野
村會議員 宮川辰一

當家は大濱村が開墾されて以來の舊家にして、近在に響く大地主、名望家の由緒深き家柄である。

先代謙治氏は今尙健在にして、村長、産業組合長、其他各方面の公名譽職を歴任する。村内の改良、繁榮に幾多の業績を上げし功勞者にして、當村の元老として重きをなしてゐる。禮節を重んじ、舉措懇懇にして人格者である。

當主辰一氏は明治三十七年一月十一日先代謙治氏長男として生れ、長じて柏崎中學校を卒業するや、勉學の志止み難く上京して明治大學に學び、大正十四年同大學の政治科を卒業する。

郷里に歸りてからは、熱意を以て村の自治、其他村内の諸事を研究し、博學なる氏は、良く諸事項を究め、後産業組合に入りて、勤務しつゝ、二ヶ年半に亙つて此の間の事情を研究した。

昨年十一月より頸城鐵道會社に入り、今勤務中である。尙現に村會議員、村青年會長を兼職する。

父君の薰陶良ろしきを得て、氏も又禮節を重するの士であり、明朗英邁にして村内稀なる人格者である。その該博な識見を以てよく村内の繁榮に努力なし、父子二代に亙つての功績は、村民のよく感謝感激するところである。氏は又村内の青年の訓育には、更に熱誠を以て當つてゐる。

下里川の素封家にして現に村長の要職にある内藤慎二氏の長女を娶りて一男一女あり、淑徳温雅な夫人は、よく當主を助けて賢夫人の聞き高き人である。

明治村大浦生田

村會議員 大瀧 三郎

當家の始祖は初代を八左衛門と稱し、寛文十一年に始まる。代々篤農の聞き高く、七代鼎氏は新潟縣第十一大區小七區五番組地租改正用掛を明治七年五月に拜

命し、また龔に郡中總代となり維新後に



官置川 浦(五) 十公野 村)民 政局に 四ヶ

年事務を掌り、明治十五年通牧深澤及神田道路の開鑿に當つては献身的に盡力した。同十九年アヤマノ溜池を十町歩の開田に盡力する等、その功績燦然たるものである。同二十年十月七十六歳の高齡を以つて逝去した。九代健三氏はまた四十五年間村政の要職に參與して、村治の向上に夙夜淬勵した本村自治の功勞者である。昭和十三年二月八十六歳の長壽をもつて逝去した。

當主はその男にして、氏をもつて十代目である。明治二十二年十月十日の岳降夙に祖父の血を繼承して村治に進出し、現時村會議員、學務委員、區長、その他公名譽職に有りて、産業に、育英に、

氏の功績頗る顯著なるものがある。圓滿にして高潔なる氏の人格と相俟ち、村民の絶大なる信望を博し、その存在愈々重きを加へてゐる。

貞淑なる令閨ミチ夫人との間に一男四女に恵まれ、長男正三氏は幼時より頭腦明晰にして秀才の譽高く、目下早稻田大學法科に在學中の才器である。なほ長女次女共に良縁を得て他家へ嫁してゐる。

下黒川村萩ノ谷
村會議員 金子 丈助

當家は先祖吉右衛門氏が正徳年間に當地の庄屋を務めし家柄にして、代々庄屋を以て傳はる名門なり。

當主丈助氏は明治十一年二月、先考大治氏の長男として生る。夙に父君の衣鉢を襲いで村政に參與し、村會議員、學務委員を五期に亙つて勤績す。特に學務委員在職中の功勞甚だ顯著なるものあり、學務委員として縣より一度表彰されしことあり。

氏は資性果斷にして、手腕力量共に村内に卓越せる人で、特に學務委員として教育方面に於ける事績は相當刮目に價するものがある。

眞宗を奉じ宗教心に富み、自己修養の一具としてゐる。政界方面にも興味を有し、活動盛んなものがある。

フミ夫人との間に三男二女あり、長男茂氏は明治大學卒業後、一年志願兵となり少尉で、當年三十一歳である。家庭の圓滿さは贅言を要しない。

金谷村上中田

村會議員 瀧澤 惣四郎



上中田部落草分の舊家にして、約千年を經ると謂はれ、元福田姓を名乗りしも中興に於て瀧澤姓に變り、今日に至りしものにて代々

農業を以て家業となし、篤農家として知られてゐる。先代惣太郎氏は區長、村會議員二期、學務委員として三十年餘り、第一金谷小學校改築當時監督等をなし、村治に、教育方面に盡力せる功勞多大にして、村民の信望厚かつた人である。政友系に屬し、多趣味であつたが、昭和八年七十一歳の高齡にて歿した。惣四郎氏はその二男にして、區長として(當村に於ては區長を總代と稱す)長年勤績し、現在も區長、村會議員等の職務を歴任し、村治發展に努力せること、甚大である。

氏は資性温厚、篤實なる人物にて、養鶏、小鳥の飼育に興味を有し、うめ夫人は金谷村國防婦人會支部長として活躍してゐる賢夫人である。

相續者達二氏は養子にして、本年二十六歳、高田師範卒業後、小瀧村小學校に教鞭をとつてゐる。夫人はいちのさん、その外、子女二人ありて、圓滿なる家庭である。

春日村

村會議員 板垣清治

氏は新潟師範卒業の秀才にして、小学校教育に意を注ぎ、一意専心貢献すること二十五年の長きに及び、浦田小学校長高田師範附屬小学校訓導、高木村小学校を経て吉川高等小学校長、里五十公野小学校、直江津女子尋常小学校長等、氏の教化を受けしもの近在近村のみならず、氏の熱烈にして眞摯、あくまで教育の根本精神に基き、生涯をその爲に盡瘁した人にして、氏を敬慕し畏服するもの數を知らぬほどである。現在は教職を退き、村會議員、學務委員、水利組合議員等の要職を歴任し、村治に盡力してゐる。

板垣家は代々農を以て家業となし、先代重吉氏は民政系にして政治方面に活躍した人である。また村會議員その他村治の公職に就任し、村の紛争整理の爲、推されて村長となり、功勞多大であつた。明治四十四年五十五歳にて他界され、その功勞と壯年の若さを惜しまれてゐた。

清治氏は大體七八代目の當主に當り、明治十三年二月二十七日生れ、天性濃厚篤實、亦誠實の人にして、生涯を捧げし育英に教育功勞者として縣より表彰を受け氏は讀書を深く愛好し、その高雅な人格をうなづかせるものである。

家族は夫人との間に二男二女、長男正一氏は當年二十九歳、高田中學出身、現在名古屋昭和商會に勤務中、二女ちよ氏は長濱小学校に奉職してゐる。

板倉村田屋

村會議員 鴨井哲造

氏は資性濃厚篤實なる人格者にして、謹直なる性情を有し、長期に亙り村會議員として村自治の爲盡瘁努力してゐる。當年七十二歳の高齡にしてなほ矍鑠とした精力の主であり、壯者を凌ぐ元氣さである。

當家は曹洞宗にして圓滿なる家庭の持主である。

寺野村大池新田

郵便局長 豊岡重治

當家は徳川時代に當り、黒田の士族なりしも、大池の奥地に入り込み、天下の形勢を靜觀しつゝありしも、感ずる所あつて土民となり、今日に至りしものである。以來、土地の開拓、農業指導の任に當り、姓を許されて、豊岡と名乗り、平町、寺野村二村の指導の地位にある由緒ある舊家である。

當主重治氏は、元村長の要職にあつて村民に多大の恩恵を與へし故重平治氏の男として、明治十六年四月五日に生る。長ずるや東京に遊學し、早稻田大學法科専門部を卒業す。

歸郷後は嚴父の下にて、村内の繁榮に傾心し、寺野村信用販賣購買利用組合筆頭理事、組合長、村長の要職を歴任して現在は寺野郵便局長、村會議員、組合理事、區長、寺野村教育會長を兼職して、日夜村民の爲め盡力してゐる。

地方政界に雄飛して、政界への關心は非常なるものがあり、曩に樺太支部長時代に於て、清浦内閣に加擔し、水野内務大臣の政黨に干渉して破れ、護憲二派に分限令を適用されて休職となり、以來政黨には、あき／＼せりとのことである。

氏は又次の如く信念を吐露す。
「政黨は悪くはない。しかし現代の政黨は我利々々に困つたものである。政黨は公黨と知り乍ら、利權漁りにふけり、之れが善良なる國民をして遂に政黨と云へば乞食と思はしめるに至つた。近衛總理大臣をして、斷然大改革をして貰ひ度いものである。其後に憲法政治、政黨内閣の出現せんことを切望する。」

趣味は園藝。夫人との間に二女あり、長女は寺野村郵便局長にして、末女は高等女學校に在學中で、共に才媛である。

鴻町村

村會議員 五十嵐 祐治

當家は村内最古の名門にして、曾ては

國文學の重鎮、中村敬宇先生が寄偶せられた事ありて有名である。氏は先代義富氏の養子にして明治三十九年生れ、資性濃厚篤實、明朗なる人物にて現在學務委員、村會議員等の要職にあり、村治に盡瘁するところ甚大である。また高田市第三百三十九銀行に勤務して居る。五十嵐家は村内相當の資産家にして、氏は次代村長格として囑望されてゐる有力なる候補者である。

名門の家柄の上に、勤勉努力家であるその人柄と相俟つて、村民の信望厚く、將來に期待されること多く、當村政發展を期して目されるのである。
尙氏の家庭は圓滿、和氣藹々として常に春風蕩々としてゐる。

水原村大濁

村會議員 小林 憲信

小林家は村内屈指の舊家にして、養父亡茂一郎氏は、自治制布かれたる明治二十二年の當村初代の助役として努力盡瘁

せる人であつた。當家は代々農業を營み憲信氏は茂一郎氏の養子として入籍、氏は農業に精勵すること深く、敢えて表面に出でて活動することを欲しなかつたが選ばれて村會議員となること既に三期、一度職務に就くや、名利を離れ、村自治上の一礎石となるを辭せざる、己れを捨てて村民の福祉増進、村治の開拓發展に献身して居るのである。故に村民みな氏の清廉な人格に敬慕を抱き、信望を寄せてゐる。

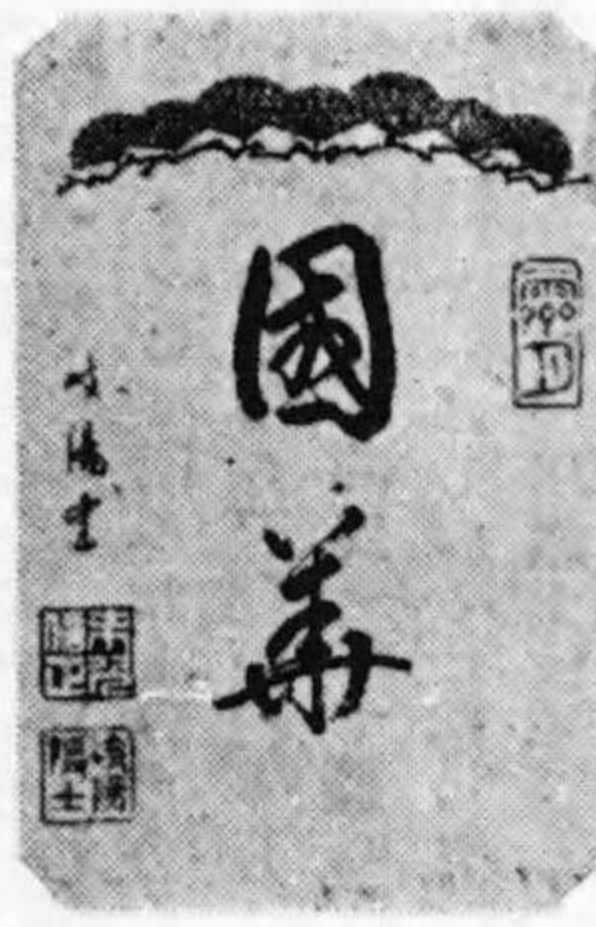
氏は私人としては他家より入りて小林家を相續し、先代の名を汚さざることに務めてゐる。資性温和にして謙讓の美德をそなへ、己れの道を守り努力をおこたはらざる人である。また圓滿平和なる村政を理想となし、大局に着目して小利を捨て、一致團結の實を擧げること努むるを以て主義となし、その氏の主張が一村を擧げて事に當りたる最近の好適例として、他村と競争しつゝあつた、頸南醫療組合病院水原診療所の實現を見るに至つ

たものである。
家族は、夫妻の間に長男憲太郎氏外數子ありて、圓滿なる一家をなしてゐる。

美守村

村會議員 野崎篤治

當家は美守屈指の舊家にして、代々庄屋を爲したる家柄である。篤治氏の祖父三右衛門氏は家運再興を意圖し、精酒の醸造業を創めたのであるが、時明治初年である。爾來當事業の經營宜しきを得たるため、家運大いに揚り、先代寛次氏の異常な努力を経て、今日の隆盛を見るに至つたのである。



精酒を國華と云ひ、獨特の美味を以て知られ、上戸の廣く愛用する所である。石高は年二百石乃至三百石にして、其の

二割を東頸城郡内に、其の八割を他に販賣してゐる。從來、屢々品評會等に出品し、賞を受くること數回に及ぶ、從業員は五六人である。

當主は、寛次氏の男として生れ、祖父傳來の家業を受けつぎて、家業に銳意從事し精勵努力しつゝある。他方其の圓滿なる人格は、村民の尊敬する所となつて推されて村會議員に當選すること四回、現に村會議員として活動してゐる。其の他諸種の公職を兼ね、村自治に貢献する所多大である。

家庭には三男三女あり、長男録夫氏は早稻田大學法科を卒業し、現在商業に従事されてゐる。録夫氏の夫人久子さんは國防婦人會評議員である。

鴻町村

村會議員 柳澤龜藏

氏は忠十郎氏の長男として、明治七年七月十五日呱呱の聲を擧げた。性明敏にして温厚篤實、村民の人望を一身に集め

熱意と細心の注意とをもつて、良く其の職責を果し、其の功を表彰せられたのである。

氏は淨土眞宗を信奉し、其の信仰は特に篤い。家族は十二人ある。氏は其の長として良く家族を統制し、家族また氏を長として尊敬し、一家一心となつて、家業に精勵し、爲めに當家の家運は隆々たるものがあり、あいあいたる和氣は家庭全體をつんで居る。

美守村

村會議員 五十嵐 弘

氏は新潟醫科大學大正十一年卒業後、富永第一内科に止り富永博士指導の下に研究すること三ヶ年、大正十四年當村に歸り開業したるものにして、資性温厚、慈悲心厚く、義侠心に富める醫師として名聲高く信頼されてゐる名醫である。内科及小兒科を専門とし、美守村小學校醫健康保健醫、保險會社指定醫として功績多く、又村會議員、學務委員として、村

自治の爲盡瘁してゐる。當家は代々醫を業とし、氏は七代目にして創家は不明なるも、醫を以て徳望高き舊家であり、名望家、資産家として著名である。

氏の家庭は男三人、女二人にして、長男洸君は十二歳、同氏夫人榮氏は現在國防婦人會評議員として銃後に活躍する賢夫人であり、貞節にして氏の良き内助者である。氏は又多趣味にして風雅を愛し園藝を好み、既に玄人の域に達してゐる又讀書家にして、常に新しき方向に眼を注ぎ、篤學の人である。

鴻町村

村會議員 佐藤清榮

當家は、當村屈指の名門にして、又當村有數の資産家である。代々農業を營む一方、精酒の醸造業を爲してゐる。先代清治氏は當村の有力者にて、村會議員、衛生組合長、區長等の要職にありて、常に公益の爲め私財を提供し、當村の爲め裨益する所、洵に大なるものがあ

て居る。氏は夙に村政に關し、改善すべ



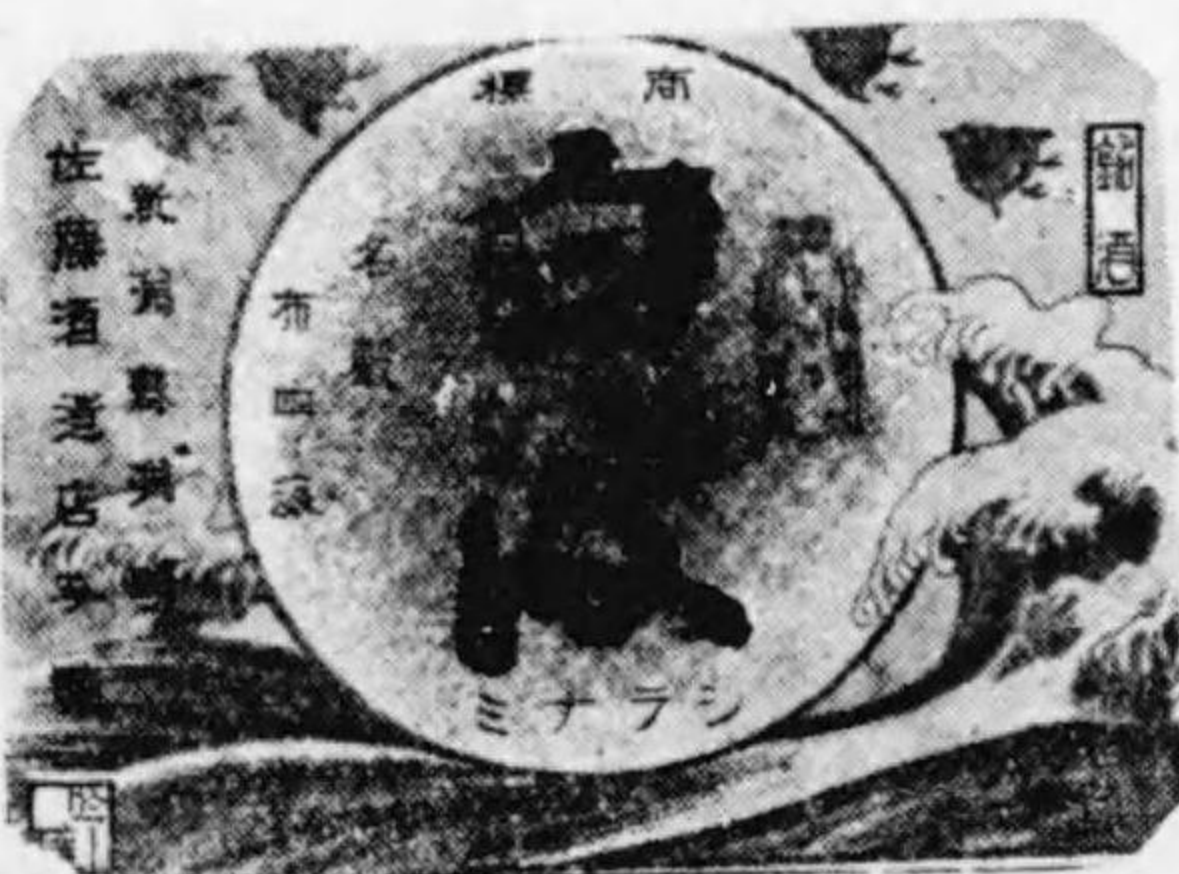
き點多
多ある
を認め
常に村
政に關
し、率
直なる
意見を
吐露し
漸次村
民の共
鳴を得

遂に押されて村會議員に當選するや、氏從來の念願たる村政の刷新に第一歩を踏み出し、爾來着々其の實績をあげ、村會議員として勤績すること茲に十五年、今や氏は、當村村會に重きをなし、當村村政は常に氏の意見を顧慮して決せらるゝ所となつた。

氏は第一回國勢調査員にあげらるゝや複雑困難なる國勢調査事務を、氏獨特の

つたが、惜しむべし四十九歳の働き盛り

を以て
逝去せ
られ、
村民の
等しく
惜しむ
所であ
つた。



の長男として明治四十四年八月二十七日呱呱の聲をあげたのであるが、頗る學究的人にして、少年時代より讀書を好み常に嶄新なる知識を吸収し、今や該博なる知識を以て村政の爲めに裨益する所大なるものがある。氏は高田中學に入學し常に優秀なる成績を保持しつゝ、同校を卒業したのである。同校を卒業するや、推されて當村青年會第六區會長に就任、

常に卓見を以て、青年の思想を是正善導するに務め、青年亦氏を師と仰ぎて、氏を敬慕した。間も無く當村村會議員に推され、爾來今日に至る迄、村會議員としての職責を良く果して來たのである。家庭にありては母堂健在し、夫人との間には四女がある。

黒川村岩手

前判事 素封家 佐藤 耕策

氏は東京帝國大學法學部卒業の偉才にして、各地方裁判所判事として高名であった。氏は公明正大常に信念に依つて行動し、法官として重大なる地位に有つて常に法の神聖と嚴正を意識して、裁判官として各地に轉勤、眞正なる法の行使者として功績甚だ多かりしも、其の後職を退き歸郷して家事に専念し、郷土の開発に努力し居る篤志家にして、その家系は舊く名門の素封家である。氏は讀書を好み、擴範圍に互つて學識高大にして、既に學徒としても研學他の追従を許さぬも

のがある。

氏の資性質實剛健にして、君子的人物であり、清廉にして日本精神主義の人である。氏の日本精神主義は大乗的にして敬神崇祖の念より出でたるものにして、神ながらの道の研究者であり、眞の日本主義とは如何なるものかの觀點より立脚したる日本主義者である。國學者として、氏は一流の見解を有し、國運の進展と共に益々確固たる意識を以て、時局難關に處する不拔なる精神の持主である。故に氏は祖先崇拜の念より朝夕佛壇に合掌し、祖先の靈魂の安らかなるを希ひ子孫の繁榮、殊に國家將來の發展を祈るなど、實に清廉潔白なる人格者として名聲が高い。

氏は明治十四年當地に生を享け、爾來前記の如く法官として公正なる半生を送り、今又郷土發展、日本主義の人として不動の地位を示してゐるが、その家庭も氏の人格を反映して、家族こそつて敬神崇祖の念あつく、模範的良家庭として、

村民の信望をあつめてゐる。

美守村錦

村會議員 青年團長 太田 誠治

太田家は當村に於ける名門資産家にして六代を閲して現在に至るものである。先代良輔氏は病身の爲め一切の公職は之を拜辭し、只管健康に留意せしも、昭和九年、六十一歳を以て歿す。

當主誠治氏は嚴父良輔氏の長男として明治三十六年十月に生まる。長ずるや高田中學に學び、卒業後は直ちに上京し、早稲田大學政經科に投ず。篤學勤勉にして優秀な成績で卒業するや、歸郷して村民の爲めに活躍す。

現在は、青年團長(昭和九年以來)、村會議員二期、學務委員、産業組合理事等の要職にあり、又、直江津農業倉庫監事、高田新聞社取締役、中頸郡那病院、高田病院幹事等、縣下一帯に互つて盡力してゐる。

氏は殊に青年訓育に意を用ひ、本村に

於ける青年指導者として、その手腕力量は將來を矚目せらるゝ人である。氏は又毎年雪害に依つて困苦を被る當郡地方の税率減額及免除に關して當局の考慮を要することを常に主張してやまない。氏は資性温健、良く風流を解し、俳句吟流會を組織して毎月其集會を催し、又在學當時は柔道及ボートの選手として活躍せる運動家でもあつた。浄土眞宗を奉じて信仰なか／＼厚きものがある。

水原村上小澤

前村長 恩田 潔

當家は舊幕府時代に於ては庄屋を勤めたる土地の名門にして、祖父園治郎氏は元村長であつた。亦實父辰五郎氏は、當主十歳の折若くして逝去し、村政に盡力するに至らなかつた。當主潔氏は實にその長男として、明治二十四年十月一日の生れ、氏は幼少にして祖父を亡ひ、相次いで父逝きて家業を繼ぐの已むなき事情に至り、依て地理的關係上近き土地の

て、篤實温和なる村治功勞者である。新



保家は代
代庄屋を
務め、農
業を營ん
で居る村
内有數の

舊家にて、氏は夙に村政に參與、盡瘁貢獻するところ甚大にして、村長、助役、郡會議員、學務委員、農會長、衛生組合理事、魚業組合理事、村會議員四期、縣水産會議員等、汎ゆる多方面に互つて活躍努力し、現在は漁業組合理事、耕地三ヶ所組合評議員、教進會理事、水産會副會長、圓藏寺檀徒總代等の要職にありて、未だ赫々たる偉丈夫である。氏の携はるる方面みな發展躍進を遂げつゝあり、故に村民みな敬慕の念を寄せ、信望殊更篤く、斯くの如き氏を有するは實に當村の誇りとしてよいのである。

氏は先代重郎治氏の長男に生れ、また氏の家族は、長男重郎氏は既に四十九歳

濁町村小船津濱

元村長 新保 善十郎

氏は明治元年生れの本年七十一歳にし

の壯年にして、合子ヶ作小學校の校長として名聲を馳せ、功勞多大である。また愛孫多勢にて、揃つて學業成績優秀なる秀才許りで、將來への希望多く、愛孫の成育を樂しんでゐる氏は、まことに恵まれた幸運の人といふべく、それはまた氏の人格業績と相俟つて、うなづけるものである。

八千浦村

元村長 渡邊 留吉

明治十年十月十日生れの氏は、今も尙嬰傑としてゐる。はやくより村自治に關與し、村長、村會議員を五期間、學務委員を三期間勤続し、村政發展の大いなる力となつた。村長在任中、村内に運動場を建設し、現在は農會副會長、並びに教育會長其外要職にありて盡瘁貢獻してゐる。氏は温良着實、一村の長として人を修める度量を有し、氏の熱心なる努力は村内に徳望高く聞えてゐる。村政の功勞者として、縣より表彰されたこともあ

る。渡邊家は村内有数の舊家にして先代桂次郎氏も、村會議員、學務委員、區長等の公職にあつて盡力した人であつた。留吉氏はその長男にして八代目の當主である。家族は八人、長男桂一氏は三十三歳、現在消防手として活動して居り、平和な一家をなしてゐる。

八千浦村遊光寺濱

元助役 伊倉 益三

氏の長男豊氏は當年二十五歳、高田中學卒業の英才にして、後直ちに千葉縣津田沼の鐵道隊工兵として入隊、現在は新潟縣にて巡查奉職中である。資性質實剛健、職務に積極的熱意を持ち、信義厚く、先輩上役より將來を有望視されてゐる青年である。かくの如き有爲な子息を持つ益三氏は、



英才にして、後直ちに千葉縣津田沼の鐵道隊

明治村仁野分

元村長 北川 竹治郎

氏は新潟師範出身にして、旭村組合長

旭高等小學校訓導を振出しに犀潟高等小學校長、新潟師範附屬小學校訓導、大湊小學校長等、教員生活三十有餘年に及ぶ教育功勞者であり、前村長として一期、村會議員たる事十四年に及び、教育功勞者として第一回到知事より表彰された。氏は村長當時、學校修繕工事、屋根替等を始め、村道二十三の完成を爲す等、自治方面に於ても其の手腕を揮ひ、功績が多い。

氏の開祖は、北川信頼にして豊臣秀頼の臣であつたが、高田築城當時、大阪冬の陣の後、當地に來り築城中止、城替の際、思ふことありて當地に土着し、開墾事業に當り今日の素因を作りたるものにして、四百年餘を経たる舊家である。氏は明治元年七月五日生れにして松治郎氏方に養子となり、趣味は盆栽、目下養鶏事業を爲し、その家庭は圓滿にして氏の人格に相應しき良家庭である。

長女は中頸城郡里五十公野村稻田與四郎氏に嫁し、長男は長逝し、令孫その相

續人なるも、聰明にして將來を期待されてゐる。

旭村

元村長 布施 卓爾

當家は當村有数の舊家にて、其の昔、



長尾爲景 當地方を領有し居りたる當時、當地に土着、

代々農を營む。先代義郎氏は當村の初代村長として、當村自治の爲め盡したる人にて、また郡會議員として郡政の爲め貢獻ありし人である。

當主卓爾氏は義郎氏の長男として明治十年呱呱の聲を擧げた。頭腦明敏にて夙に法律の研究に關心を有し、長じて明治大學の前身に入學、法律の研究を終るや一年志願兵として入營、良く軍務に精勵し歩兵少尉として除隊後、村民に推され

て村會議員となり、既修の法律知識を運用し、大いに村政の充實整備に努力した。又學務委員として兒童教育に細心の注意を拂ひ、同方面への氏の貢獻亦尠からざるものがある。

間もなく村民の懇望する所に依り、村長の要職に就き、隣保團結の美風の養成に努め、ために當村民は心を一にしたるを以て、村勢大いに揚つた。氏は人格高潔の人にして、村民の尊敬の的となり、淨土眞宗を信奉してゐる。郡農會より表彰せられたことがある。

家庭にはハナエ夫人との間に、五男一女あり、長男安次郎君は目下中學五年生として勉學中である。

谷濱村

元村長 矢澤 浩

當家の祖先は安部比羅夫の後裔にして代々庄屋を勤め、良く其の職責を果したるを以て、高田藩主より、二十五年實貞に相勤め候につき苗字帯刀差許す、との

許可を得た家柄である。



先考五郎市氏は明治二十年市町村制實施當時より

村長となり、至誠當村發展の爲めに貢献した。日清戦争當時、村長として奔走し其の功績大なるに因り、之を表彰するたため木盃一個を授與せられるの光榮に浴した。日清戦争終了後も種々當村の爲め、東奔西走中、不幸病を得て明治二十九年逝去せられた。

五郎市氏の長男として明治十三年十二月、呱呱の聲を擧げたる當主浩氏も、又先代に劣らざる力行の士である。氏は明治四十三年郡會議員に推されて出馬、當時、當地方の中心問題なりし郡道問題に努力するの外、郡立病院の設備充實を叫びX光線を設備せしむるため活動すること數年、遂に其の目的を達し、當時縣下

各病院の、羨望禁ずる能はざる所であつた。特に上杉謙信の遺跡春日山保存に關し、種々奔走し、同春日山を郡有となしたる外、郡制廢止後、春日山保存會の設立を爲し、其の評議員たること四年、現に春日山保存會理事の要職にあり、氏の功績は洵に特筆すべきものである。

氏は村長として、村政の刷新運用に盡力すること二期、此所にも亦、氏の努力の効果顯著である。即ち當村は納稅模範村として表彰せられたるも、之全く氏の善政の然らしむる所である。此の他、村會議員を勤むること二期、學務委員として九年、其他氏の就任したる公職は十指を數ふるのである。

氏の功績は以上の如く洵に刮目すべきものがあるので、日露戦争當時、其の功に依り、銀盃を授與せらるゝの光榮に浴し、また 大正天皇御大典記念章を授與せられた。

靜江夫人は國防婦人會第三班長として活動、銃後婦人としての範である。夫人

との間に二女がある。養子誠司氏は高田師範卒業、目下中頸城郡保倉村小學校に於て訓導として教鞭をとつて居る。

菅原村上田島 元村長 古澤 源太郎

明治三十二年師範學校卒業後、長く教職に在り、教育界の爲粉骨碎身し、貢獻したる氏は、退職後専ら菅原村々長として村政に盡瘁し、村役場の會計事務を嚴重にし、本村創始以來昭和十二年度、始めて縣より會計事務検査の結果表彰されるに至りたる、當時の名村長にして、性謹直にして思慮深き高潔なる人格の主である。

當家は元縣會議員、古澤文太郎氏方より分家して一家を創立したる名望家である。氏は三代目に當り、明治十年當村に生れ、爾來村政に盡瘁し來る功勞者である。氏の令息は有恒學舎々長として德育に一意専心努力し、現在新鴻鐵道局に勤務してゐるが、資性濃厚、明朗なる新

進氣鋭の人として、將來を囑目されてゐる。尙氏の家庭は圓滿にして和樂に溢れ笑聲絶ゆることなき明朗さである。

里五十公野村田村 元村長 宮崎 悌治

當村自治功勞者として缺くべからざる功績の持主として著名の氏は、元村長として當村の發展に多大なる貢獻を爲し、現在も各方面に互り、氏の卓抜なる手腕と明晰なる判斷力とを以て事に當り、氏の行く處、常によき實を結びつゝある。氏の資性濃厚にしてしかも剛毅なる反面を有し、精勵恪勤よく今日の業績を積みたるものである。現在農會長、村會議員、學務委員、及區長としての公職に在り、農會長としては、理解と眞實を以て當る農民の保護者として信望厚く、村會議員としても勿々たる重鎮、農民の代辯者として常に愛郷心に燃へる正義の人である。氏は學務委員として教育方面にも大なる關心を有し、同地教育界の功勞者

であり、區長としても常に公明正大を胸として立てる村政家としての第一人者である。

當家は村内第一の資産家にして、大地主であるが、名望家たる名に恥じぬ良家庭であり、舊家名門の家としても知られてゐる。氏の嚴父謙吉氏は、當村初代の村長として敏腕を顯はれた名村長であつた。その資性濃厚にして謹直、村民の範として仰がれた終始至誠の人であつた。尙悌治氏は信仰篤く、清廉なる心情の主であり、氏の家庭は常に春風薫る圓滿さであるが、これは唯に氏の人格の反影であらう。

美守村 元村長 富永 昶太郎

氏の資性濃厚にして篤實、徳望あり、責任感に富める人格者にして、村自治の功勞者である。氏は三十歳にして村自治に關係、村會議員、學務委員として二十年間勤続し、功績多く、其他村自治事業

に於て氏の關與せざるは無く、獻身的な活動と、愛郷の熱意に燃えたる氏は、後、推されて村長となり信望厚く、村政の改革、農業の發展に努力し、その功績甚大であつた。現在は産業組合専務理事として長期に互り勤務し、村畜産組合長としては昭和十年創立以來の功勞者にして、今日の發展に導きたる第一人者であり、又産業組合設立に際しては富永孝太郎氏外數氏と協力して其達成に努め、目的に到達するや、尙一層の發展を企圖し現に組合長として其実績を擧げつゝあるは、一に氏の功績に依るところである。

當家は當村に於ける富永家の一門にして、上杉謙信の重臣なりし富永伯耆守の末裔たりし武士、上杉家の會津移藩當時美守村に來りて開墾に従事し、勤勵努力して今日の素因を作り、その後幾變轉の後、今日の舊家にして資産家たる確固たる位置を建設したものである。

氏は護右衛門氏の長男として慶應三年當地に呱呱の聲を擧げ、爾來同地に在つ

て村政の爲献身的努力を爲し居りたる愛郷家にして、書畫を愛し、風流の道を受し、悠々たる心境に在りて讀書三昧の日を送るは、公職に寧日なかりし氏の向學心の爲せる業であらう。その家庭は圓滿にして、彌々榮え益々盛大である。長男政忠氏は現に郵便局長、村會議員であり、在郷軍人分會長をなし居る高田聯隊志願兵伍長として榮譽ある軍人であり、村自治の爲、嚴父虎太郎氏と共に盡瘁してゐる、其夫人は國防婦人會副會長として銃後婦人の模範であり、政忠氏の良き内助者として賢夫人の令名高き夫人である

美守村

元村長富永孝太郎

上杉謙信の重臣たりし富永伯耆守の末裔たりし當家の祖、上杉家會津へ移る時當地に残り土着せしものといふ。舊家名門にして資産家、大地主である。

氏は慶應三年生れ、民政黨代議士として大正九年頃出馬したる當地方に於ける

重鎮にして名士、元村長として功績あり又産業組合産の親であり、現在村會議員として當村自治に關與功顯し居る自治功勞者としての第一人者である。氏は又産業組合長、農會長として經濟界に於ても盡瘁する事多く、百三十九銀行取締役たること數年に及び、又新潟貯蓄銀行取締役として十有餘年の間勤続するなど、財界に於ても名聲高き人格者である。氏は資性温厚にして篤實、しかも剛毅にして果斷、書畫を愛好せるは、氏の事業、公職に寧日無き中に尙餘裕ある境地に在るをみ、その鑿定にかけては並々ならぬ腕の所有者である。氏の高潔なる人格の反映として氏の關與せる事業、團體は常に正確なる統一をみせ、着々と發展向上の一路を邁進してゐる。

氏の令弟忠司氏は東京帝國大學醫科出身の秀才にして、學者肌の人格者であり新潟醫科大學講師として就任し、その後學長として信望篤かりし篤學の學徒にして、現在は新潟市に於て内科専門の病院

を經營してゐるが、名醫として、名聲高く、醫學博士號の所有者にして温厚篤實謹嚴なる學者である。實に富永家の兄弟揃つて縣下に名聲高く、孝太郎氏の家庭も又氏を中心にして常に和樂に滿ち、春風の中に在るが如く、村民の信望益々篤く、家運は進展に進展を續け、隆々たるものがある。

潟町村土底濱

學務委員柳澤守之輔



柳澤家に
入籍せる
ものにて
家業は金
物商であ

氏は明治村の出生にて本家は五十嵐家なれども柳澤家に入籍せるものにて家業は金物商であるが、先代文治氏は家業に精勵する傍ら村治に參與し、區長、村會議員等の要職につき徳望高き人であつた。守之輔氏は明治十年二月二十二日此の世に生を享け

天性英晰にして篤實、また至誠の人である。衆に優れた頭腦を持ち、若くより小學校教育に高き理想を抱いて、専心その教鞭をとりしこと十五、六年の長きに互り、既に恩給もあり、教育界には特別の功績を残してゐる。また氏は養蠶に對する造詣深く、研究家として知られ、正に養蠶界の先覺者である。學務委員としてまた村會議員として四期間、區長は今回を以て二十六年目である。その功績は枚擧に遑なく、現に學務委員四期目、區長大潟耕地整理組合副長、天ヶ池耕地整理組合副長等の要職にあり、その他、信用組合理事、柿崎町外十一ヶ村傳染病組合議員、善照寺檀家總代、大字總代等に推され、村民の福祉増進のために寢食を忘れて貢献してゐる。

家族は長男千秋氏は現在北支に出征中であり、外に東京帝大在學中の次男、山梨高工在學中の三男、豫科志願學校在學中の四男と一家みな秀才揃ひの、まことに恵まれた家庭を構成して居り、子息四

人の將來は期して待つべく、希望を持たれてゐる。

吉川村竹直

柿崎病院理事小田政三

當家は、當地の舊家名門にして、小田穀山の出たる家柄である。先代、嚴父久五郎氏は當地方開發に意を注ぎ、その献身的努力は數々の功績を残し、村民の信頼極めて厚きものがある。

當主政三氏は明治十七年、嚴父久五郎氏の男として生る。現在は柿崎病院の理事を務む。

徳義心に厚く、幾多の公共事業に率先して參與し、村内の機構改良、村民の繁榮に献身的に碎勵した。その清廉潔白、高潔なる人格は噴々たる名聲を博して、村民の敬仰を集めてゐる。眞に圓滿なる人格者といふべきであらう。

政黨關係はなく、淨土眞宗を奉じて厚く信仰し、夫人との間に四兒あり。夫人は内助の功頗る高き賢婦人にして

長男は盛岡高等農林學校を卒業し、今次の聖戰に應召され目下出征中である。氏も又人格の高潔を以て謳はる。

中郷村稻荷新田

稻荷新田區長荒川重吉

氏は明治十八年、先代忠司氏長男として生を享け、明治三十八年東京市の青山歩兵第四聯隊に入營、三ヶ年の間軍務に精勵し、除隊後は當村々會議員として八年前勤めたるも、その後區長として二期に亘り、村自治の爲盡瘁したるものにして、祖父清吉氏は當地の大區長を爲したる信望厚き人物であつた。當家は戰國時代よりの舊家にして、名望家なるも、確實なる處不明である。

氏は資性温厚、君子的なる人物にして丁寧にして親切、しかも虚心坦懐なる清廉なる心情の持主にして、元は民政黨なるも現在は中立、その家庭には一男二女あり、長男重郎氏は當年二十歳にして高田縣立農學校卒業の秀才であるが、目下

東京に遊學中にして、武道に長じ、國語漢文、歴史を専門に勉學せる將來を囑目された青年である。氏の家庭は家族四人にして家庭圓滿、和樂に充ちてゐる良家庭として、村民の信望篤く、同家は代々眞宗を信奉してゐる。

妻太村五日市

元村會議員 早津 喜永治

當家は當村屈指の舊家名門である。當



家の祖先は、高田柳原藩士にして、代々大區長を勤め

た。當主喜永次氏は、先代爲吉氏の長男として、明治三年呱呱の聲を擧げた。氏は人格高潔にして、人に接するに常に虚心にして卒直、決して城廓を設くる様なことをしない。故に人も亦、氏に安んじて接し、卒直に自己の意見を述べ、氏の

高説にも接せんとする。氏は特に兒童教育に多大の關心を有し、常に卒直に自己の意見を披歴して、教育に關する資料を供し、教育界に、多大の貢獻をなしてゐる。

氏は嘗て村會議員を二期、區長を三期勤めた。趣味は書畫、植木、小鳥、謠曲等、高尚なものである。眞宗を信奉し、信仰が非常に深い。

家庭にありては、長男芳雄氏は父の旨を受けて、教育者として身を立てんと欲し、高田師範學校入學、同校卒業後、目下本縣三島郡與板町小學校長として、教育に意を注いで居る。當年四十歳である芳雄氏の外、三男一女がある。

水上村

名望家 深石 吉一

當家の先祖は古く慶長四年の頃、七郎平と云へる人の三男、善九郎氏にして、祿高新保地二十六石は、七郎平氏より與へられたものである。

當主吉一氏にて二十代を累ぬる舊家名門の家柄にして、代々農業に従事し、祖父謙吉氏は、明治四十四年より大正七年迄の久しきに亙りて村長の要職にありし人である。謙吉氏は一生を村内の開發、繁榮に注ぎ、その自治行政に於ける手腕はよく村民の認めるところである。その高潔無碍にして、温厚なる人格は、多大の功績を残す。



祖父謙吉氏

當主吉一氏は大正四年八月四日、嚴父吉郎氏の長男として生る。小學校より高田農學校に學び、卒業後は上京して法政大學専門部政經科に入學す。

卒業するや歸郷して家を繼ぎ、農業に従事す。氏は剛毅不拔の精神力と誠心不撓の念意に依り、弱冠にしてよく村内の自治に意を用ふ。その資性果斷、しかも

も純情家にして徳義心厚く、禮節を重んず。氏は國家中心主義的立場より、聲を大にして村民に説き、その思想向上に熱誠を以て當つてゐる。

西本願寺派を奉じて信仰心に富み、趣味としては圍碁、素謡等にして、仲々造詣が深い。家庭は、母堂サエ夫人と、幸子夫人、長女悦子嬢、女中、子守の六人にして、その家庭は常に和樂をなす。

泉村上馬場

農會長 市村 靖雄

當家は、當村切つての舊家名門にして舊幕時代に於て名字帯刀を許されたる程の家柄であり、代々伊右衛門と稱して、今日に至りしも、當主は之を繼がずして靖雄と稱する。代々農業を營み、大地主にして近郷に響く程である。

當主靖雄氏は故伊右衛門氏の長男として明治六年に生る。

氏は明治四十三年より村會議員に選ばれること九期にして、其間大正四年八月

より同五年三月迄、及大正十三年八月より同十四年四月迄、二回村長の要職を務む。現在は村農會長、村會議員、學務委員を兼職する。

氏は資性素朴篤實にして、村民の福祉増進に盡瘁貢獻すること絶大なるものあり、非常なる愛郷家にして、一身をあげて内村の改善に努力したることは村民の深く感銘するところである。

信仰は淨土眞宗にして、家庭には二男あり、長男淑雄氏は縣立高田中學校を卒業し、同師範二部出身者にして、同郡板倉村針尋常高等小學校に奉職中なりしが今次の聖戦に應召され出征中にして、陸軍少尉である。次男卓二氏は縣立高田中學校を経て農業大學の卒業者、現在縣立新井農商學校教諭奉職中である。

新道村上稻田

醸造元 齋藤 正次

當家は當村有数の舊家にして、又當村

屈指の資産家である。三百餘年前より、代々酒屋を營みて著名である。屋號を藤田家と云ふ。當家醸造の清酒櫻勇は、其の獨得の味を以て知られ、當地方は勿論東京方面に廣き販路を有し、部會人の間に廣く愛用せらるる所である。當家醸造の清酒は、其の四割を地元



東京方面に販賣してゐる。醸造高は約一千百五十石位である。度々品評會に出品し、賞、褒狀等を受くること數回に及び銘酒として特に喜ばれる。經營主齋藤正次氏は、六郎次氏の長男

として明治七年二月、呱呱の聲を擧げたのであるが、父祖傳來の家業を受け継ぎ酒釀所を經營して今日に至つたものである。氏は温厚篤實の人にして、村民の厚望厚く、郡會議員として郡政の爲めに大いに貢献したことがある。郡會議員を辭退したる後は、専ら家業に精勵し、度々村民より、村會議員、村長として出馬されんことを懇望せらるゝも、謝絶して居る。浄土眞宗を信奉して信仰が厚い。従業員二十二人を使用して、家運大いに振つて居る。

濁町村

産業組合長 笠原 謙治郎

笠原家は當村の舊家名門にして、宗祖父文右衛門氏の頃、天保六年二月二十八日附を以て起工式を擧げ、田地水利道を開設し、當村高田藩廳より御手許金二百圓下され、自宅に事務所を設けて、仕事に着手し、人夫日に五六百人を雇ひて、一意事業の完成に努力した。村民の恩惠

は非常なるものがあつた。氏は明治六年十二月永眠した。

當主謙治郎氏は明治十一年九月二十一日の生れにして、惠氏に養育さる。長ずるに及んで京都に遊學し、京都帝國大學工科に入学し、熱心に勉學し、才能に恵まれた氏は優秀な成績を以て卒業するや神戸の三菱造船所に職務を取り、間もなく工場長技師となる。

氏は資性明敏、篤學の士にして、且事に當るに嚴格にして積極的、苟も蔑にすることは微塵もない。よく村民の尊敬する所となり、村長一期、耕地整理組合長（之は大正十一年より現在に迄も及ぶ）を歴任して、現在は村學務委員、産業組合長、濁町村信用販賣購買利用組合長、村農會長等の要職を兼務され、村内の諸事業並に村民の思想啓蒙向上に意を用ひ學校教育に關しては、殊に熱心に指導してゐる。昭和九年滿洲事變の時、一度表彰されたことあり、又、村長で農事功勞者にして表彰されること三度に及ぶ。そ

の功績は推して知るべきである。現在は東京に於て電氣業を營み、無線ラヂオ部分品を製作販賣する。政界への關心も厚く政友會に活躍してゐる。尙養父惠氏は第一回の代議士である。家庭は咲子夫人との二人にして、養子嬢氏は本郡旭村大識家より來り、當年三十四歳にして現在大坂鐵工所造船技師である。東京帝國大學出の工學士にして秀才である。

吉川村土尻

農會副會長 長谷川 保信



氏の性は明敏、謙治郎氏の長男として呱呱の聲げたるは、明治二十六年九月十五日、少年時代より群を抜き、斷然頭角を現はし、世人氏の將來を囑望する處大なるものがあつ

た。常に優秀なる成績を保持しつゝ、小學校を終へるや、氏は更に新潟縣立高田農學校に入学し、農業の經營に餘念がなかつた。

氏は早くより農村の疲弊を歎き、之が救済策は農業の多角形的經營方法をおいて他に救済案なきものと思惟し、豚の飼育、蜜蜂の養殖等を奨励し、良く其の實績を擧げたのである。

氏は温厚篤實にして、且力行の士であるから村民の人望厚く、最初推されて村會議員に就任するや、村政の刷新、諸施設の充實に鋭意努力し、着々其の實績をあげて居る。氏は此の他區長、村農會副會長をも兼任してゐる。氏は又、當地方史蹟保存に關して、多大の關心を有し、財團法人春日山史蹟保存會評議員として此の方面にも異常な努力をしてゐる。氏は眞宗を信奉し、信仰まことに篤いものがある。その家庭は至極圓滿にして和樂に充ちてゐる。

濁町村

濱江耕地 内藤 善太郎



氏は慶應三年五月に生る。學務委員、村會議員等の要職を歴任し特に學務委員は三十有餘年

に及び、村内唯一の教育功勞者である。資性温和至純の篤學者にして徳義心厚く、滅私奉公の趣旨を帯びて、よく村内の兒童教育に盡瘁す。その徳望は非常なるものであり、村内の元老としてよく村民の認めるところである。

氏は幼少の頃より盆栽の研究を重ね、現在に於ては縣下は勿論全國的に盆栽の大家として名聲が高い。尙動物宗教を一元にした盆栽教を創り、その御本尊は、「育」なりといふ。殊に特筆すべきことは、考古學に非常

に造詣の深いことであつて、その考古學に貢献するところ多大にして、斯界の權威として萬人の認めるところである。氏は又歴史に對して深く興味を抱き、生來の篤學勤勉さは倦むことを知らず、よく日本史、西洋史等に通曉す。現在は村民の徳望を擔つて濱江耕地整理組合長の要職にあつて活躍してゐる。

斐太村小丸山新田

農林學校 淺岡 定司



寄せし甲州勢の爲に、一敗地に塗れ城砦は抜かれて再び起つこと能はず、悲運にも信濃より遙々越後に流離し來り、南葉山麓、矢代の清流に近き茫莫たる原野中の小丘に足を留め、土着せむと決心し、附近一帯を開

留め、土着せむと決心し、附近一帯を開

拓し、當村の草分けをなせしと傳ふる。當村の名門にして、代々農業を營みて今日に至る。又請ふ者あれば漢學を教授したものである。代々嚴父の嚴格な薰陶と篤學の志を受けし賜であらう。

先々代又五郎氏は、日清、日露兩役を通じ前後二十有餘年の久しき間村長たりし人で、その功績顯著なるものあり、勳七等に叙せらる。先代正治郎氏は戸主たること僅か二三年にして長逝した。

常主定司氏は故正治郎氏の長男として明治廿九年八月十九日に生る。長ずるに及び東京に遊學して東洋大學に學び、卒業後は郷里に戻りて、新潟縣中頸城郡縣立吉川農林學校教授となり今日に至る。眞宗(西派)を奉じて、信仰心極めて厚く、政黨關係はない。

英二氏は有恒學舎を経て日本大學醫學部を卒業し、其後高田市が在の中頸城郡病院高田病院外科に勤務してゐた。氏は資性溫良、篤學明敏なる少壯氣銳の青年醫師にして、營業報國を旨とし、その探究的態度と堅實なる手腕は縣下一帯の信頼を拍してゐる。淨土眞宗を奉じて信仰心厚く身心の鍛鍊の一具としてゐる。寫眞に對する造詣も殊の外深い。夫人との間に子女三人あり現住所は直江津町砂山區である。

大淺村西福島

黒井醫院は特に招かれて氏の院長となつた醫院である。黒井醫院は外科、内科、耳鼻咽喉科の醫院にて看護婦二名、藥局一名、他一名がある。醫員は東京女子醫學專門學校卒業生である。卓越せる技術とその近代的設備を以て患者の醫療に獻身的な努力を拂つてゐる様は遍く村民の感謝するところである。

西頸城郡

大和川村田伏

郷社 奴奈川神社



奴奈川姫命を祭神とする當神社は、成

務天皇御宇の際創建に、坪の廣さを有してゐる。基本財産は五千圓と謂はれ、古額二、鏡一、棟札一、古刀二、等の寶物あり、例祭は毎年四月二十四日に行はれ、氏子数は七百五十を以て數へられ、氏は大和川村に居る。

現神職は神道造氏にて、氏子總代は古山徳松、榊宗治郎、吉岡忠藏氏などである。當神社附近に神奈山城、大熊濱、府

古の川、府古の浦等の風光明媚なる名所舊跡がある。

下早川村東海

下早川村長 齋藤理祐

糸魚川中學卒業の俊才にして、圓滿豊かな人格と、溫厚にして謹勉なる特質を具へ、遠大なる理想を抱きて村自治に關與した氏は、また意志強固なる實行家にして、村政に、教育方面に、經濟方面等多方面に互りてその改良發展、村民の向上に盡瘁した。業績の主なるものをあげると、學校の建築及び傳染病院問題に盡力し、又は經濟更生の計畫を樹て、目下その途上にて實績着々舉がりつつある。從來當村は政黨關係が激烈過ぎて種々弊害があつたが、氏はこの點を遺憾に思ひ極力努力せる結果、氏は民政黨系であるが、現在は反對黨とも非常に融和圓滿をみてゐる。曾つては三期間村會議員として活動し、尙ほ消防部頭、學務委員、區長等の公職にありてよく職を果し、村民

の信望を集めた。現在村長として専念努力してゐる。

齋藤家は元祿初年の開祖にして、村屈指の舊家である。代々農業を營み、先代千代吉氏は村會議員、村長等の職務に就きて功勞あつた人で、氏はその三男であるが、長男次男とも早逝せ、爲、家を繼いで當主となつた。氏は明治二十五年十一月十六日生れの本年四十七歳、未だ前途洋々たる壯年である。

家庭はナヲ夫人との間に四男一女ありて、相續人克忠氏は現在糸魚川中學在學中の秀才で、將來を囑望されて居り、一家は常は春日の輝やかしい平和に満ちてゐる。

實に氏のごとき徳望高き人材を有する本村は、幸これに越すはないであらう。

根知村上澤 根知村長 山田勝治

明治二十二年六月八日生れの氏は、資性温良にして着實、謹嚴なる人格者にして

て職務に眞面目、よく勉め、村民の指導に献身してゐる。氏は實父幸吉氏の長男にして、



山田家は代々の地主にて農業を營んでゐる。

氏は高田輜重兵第十三大隊第二中隊に入營し、陸軍輜重兵上等兵伍長勤務として大正六年十二月退營せる偉丈夫である。

自後村政に關與、貢獻せるところ甚だ多く、先には村農會長に推され、又大字區長として村内の自治進展に盡瘁し、村學務委員として教育方面に活躍した。現在

は根知村公設消防組長、西頸城郡木炭同業組合副組長、根知村木炭改良組合長西頸城郡家畜保險組合副組合長等の要職を歴任、種々改良發展に意を注ぎ、村長としては名村長と謳はれ、村民みな畏服し、その飽くなき努力と清廉なる人格は當村にとつての大きい誇りである。氏

はまた政黨政派に關係なく、淳風良俗の民を養成するをモットーとし、専ら村治に専念、農事文化の改良に着手、着々その實を擧げつゝある。

小瀧村 小瀧村長 丸山徳平



丸山徳平氏の嚴父徳松氏は憲法發布以來村會議員、地價改正委員として村政の創業に當つた

本村自治の草分けである。老後に至るまで健在で、收入役として永年勤続したが當主徳平氏は明治二十年八月二十六日生れ、先代の遺志をつぎ、明治四十年歩兵五十八聯隊に入營、上等兵として除隊後は、専ら村政の改革に當り、村會議員二期、助役を経て、村長となり、現在小瀧村開發を双肩に負つて活動してゐる。村

政に對する氏の經綸の信條は、圓滿なる村政の實現、産業組合の利用發展の二つで、その二つの根本信條から、經濟更生、後農村の協同、といった施政が流れ出るのだ。農會長、消防組頭を兼ね、村政の中樞にある氏は、政黨的にも嚴正中立であり、温厚篤實なる風格と併せて、得がたい地方自治及教化の指導者である。丸山家の祖先是、五六百年前本村創設時代當地に移り來つたものであるが、寺の火災で記録を焼失、現在遺つてゐる記録では、正徳三年白岸智明信士から八代を経て徳平氏に至つてゐる。長男嘉忠氏は家業をつぎ、長女は他へ嫁し、二男二女はまだ小學校在學中である。

小瀧村 小瀧村助役 中村賢司

氏の長男源正氏は明朗至誠の快男子にて、早くより小學校教育に意を注ぎ、同村山之坊小學校に教鞭をとつてゐる。次男良久氏は本年二十五歳にて養子として

他家に行つてゐる。嚴父源吾氏は隱居したりと云へども、元氣矍鑠として悠々自適にその日を送り、夫人みや子氏は内助の功高き賢夫人である。一家至極圓滿にして暖かき平和に溢ふれてゐる。

當家は二百五十年前同村中村家より分家した家柄にして、一族みな舊家として榮えて居る。實父源吾氏は曾て郡會議員

村長、村會議員等、村政上重要な職務に就き、村治發展に盡瘁せる功勞者である。氏はその長男にして、小瀧小學校卒業後、獨力にて勉勵修學せる努力家にて村治によく務め、その倦まざる努力と眞摯なる信念は、廣く村民の信望を擔ひ、推されて産業組合長となり、一身を賭して盡瘁したため、村産業に多大なる發達を見、今後を囑望されてゐる。また氏は

役場助役として村治に精勤、氏の温厚にして篤實、眞摯誠實なる君子的人格は夙に評判高く、非常に重要視されてゐる人物である。

氏は明治廿四年三月二十五日に生を享

け、當年四十八歳の未だ滯刺たる活動家である。

糸魚川町緑町 町會議員 猪又富吉

猪又氏は、西頸城郡西海村の出身である。大正十一年糸魚川町に轉じて、僅か十數年間に事



業に對する氏の豊かな天分と、縦横に活動する精力とは合して糸魚川町屈指の事業家としての氏を育て上げた。現在の氏の事業を一覽しても、製材業、建築請負建築材料卸小賣、自動車と一つとして好成績ならざるはなく、氏の事業が將來どこまで伸びるかは大の期待を抱かせるものがあるが、氏は現に町會議員、緑町區長、緑町統後會長、糸魚川工業組合長

業に對する氏の豊かな天分と、縦横に活動する精力とは合して糸魚川町屈指の事業家としての氏を育て上げた。現在の氏の事業を一覽しても、製材業、建築請負建築材料卸小賣、自動車と一つとして好成績ならざるはなく、氏の事業が將來どこまで伸びるかは大の期待を抱かせるものがあるが、氏は現に町會議員、緑町區長、緑町統後會長、糸魚川工業組合長

郡自動車協會副支部長、漁業組合長として地方自治、町政の立役者であり、氏の關係せる事業關係の重鎮でもある。これだけの仕事を一つに切廻す氏の手腕と精力が驚異に價するだけでなく、非常時局に當面して、前記統後會による統後國民運動は勿論、時局の影響下にある製材、建築、自動車等各方面の綜合經營を着々と堅實に遂行していく底力に對しては、氏の不屈の事業家魂に、敬服を惜しまない。糸魚川町今後の經濟的發展の重要なキーポイントは、氏が指導する各種組合の運用如何に負ふところ多いことを思へば、世人が今後の猪又氏の健闘に期待するのにもまた當然である。且つて歩兵第二十五聯隊で軍務に服した軍人魂は、氏が時局に處するに役立つにちがいない。

青海町

町會議員 田邊 勘之助

先代種治氏は、福岡縣に生れるも、生家は百二十年前分家したる名望家にして

氏は壯年期に至り鐵工所職工として各地に轉々と



二十年前
當地青海
村に電氣
化學工業

株式會社設立の當時北海道の支店工場より職工として當地に來り、その後建築請負業及鐵工請負として當會社に出入し、爾來卓拔なる手腕を驅使して、着々と實績を擧げ、今日の素因を作つたものである。勘之助氏は明治十五年三月二日、種治氏令息として生を享け、高等小學校卒業、その後町會議員として四期に亙り努力貢獻するところ多大にして町勢の發展と發達に寄與するところ甚大である。

氏は質實敦厚なる資性を有し、言語明晰、圓滿にて德義に厚く、家庭は長男清氏東京府勤務、次男源之助氏高等學校入學準備中にして、三男鐵彌氏及三女は小學校在學中、長女は嫁し、三女は幼年に

して、夫人きた子氏は良妻賢母として令名が高い。

根知村大久保

村會議員 山本與三右衛門



古き家柄
である。
代々農業
を營み、
先代與左
衛門氏は

農事に精勵、研究に深きものあり、篤農の人として信望厚き仁士であつた。當主與三右衛門氏はその男として、明治十九年一月四日に呱呱の聲を擧げた。根知小學校を卒へて後は多く齋家に勉めその濃厚眞摯の賦稟は多數人の推輓を受くる處となり、曩に區長として、部落の融合協和に碎身し、現に推されて村會議員として村政に參與し、村自治産業の伸展の爲めに、常に中庸妥當の説議をなし

て村民の聲譽を呼ぶに至つてゐる。家庭は長男一清氏(三十四歳)既に家に在り農事に精勵し、其の溫和の品性と明朗の氣風は定評あり、次男隆氏(三十一歳)は、名古屋にて會社員なり、三男靜君は現在小學校に通學中にして、一家常に春風和樂の圓滿振りである。

小瀧村

村會議員 丸山 松太郎



丸山家は今より百五十年前村内本家より分家したる舊家であり、先代五平氏は區長二十ヶ年

収入役六ヶ年勤務、村會議員として地方自治の功勞者である。當主松太郎氏は明治八年四月十日生れ、同村小學校卒業後明治廿九年歩兵第三十聯隊に入營、後明治三十七八年の日露戰爭に従軍、第三軍

乃木將軍の幕下にあつて戰場を馳驅し、白衣の凱旋をなした勇士である。地方自治に對する功績の點では、先代の素志を繼ぎ、小瀧村村長、村會議員、在郷軍人名譽會員、青年團顧問等の要職を歴任、濃厚篤實なる人格者として、在郷の老元として尊敬せられてゐる。

小瀧村今日の發展が、氏の盡瘁に負ふところの多いことは言ふまでもないが、今は後繼者として長男昌雄氏(二十九歳)があり、家業を擔當、次男時雄氏(二十六歳)は會社員として東京市に在住、長女きみゑさんは既に嫁ぎ、次女いつゑさんが家事の手傳をやつてゐる。氏の刻苦努力の半生は、何よりの後繼者に圍まれた幸福な家庭に慰められてゐる。

歌外波村

村會議員 清水 圓次郎

歌外波村の生字引清水圓次郎氏は、當年七十六歳の高齡、文久元年の生れといふが、まだく嬰孩として、壯者をし

ぐ元氣さであり、濃厚な風格とともに現



村會議員として、歌外波村會の鼎をなしてゐる。清水

家の祖は遠く、欽明天皇の時代當村に來り漁業を營んで今日に及んだが、當主圓次郎氏は漢學に造けい深く、氏が村長、村會議員として過去の地方自治に對する經驗もまたその寺小屋時代の人格教育の精神で一貫して來たもので、村内の新人に伍して吐く烈々の氣迫は、珍重に價する。村内政友會の幹部として古くから政治運動にも盡力し、村勢今日の隆盛あるは、氏の如き堅忍持久に一貫せる自治幹部の手腕に負ふところの多いことは言ふまでもなく、氏の經歷をめぐれば村治の發展がそのまゝ語られるやうなものである。石灰製造に當る長男氏の外男二人、女一人があり、愛孫二十一人に圍まれた

圓次郎氏の姿は、想像するだけでも人の心を豊かにする。

糸魚川町

町會議員 池原仙助

當家は祖父の時代より(明治二十年頃)



材木商を經營し、先代、現在と三代續く材木商にして

自宅の外、大正六年驛前出張所を設け漸次發展を遂げつゝ、今日に至つたものである。

氏は先代仙助氏の長男にして、明治二十二年三月十日に生れ、氏は幼名を「教造」と呼び、襲名して仙助を名乗つた。

若くより町政に關與盡力し、氏の濃厚着實、進取の氣象に富む實行家にして、町民の信望篤く、また先輩より期待信頼されること多く、三十歳にして既に町會議

員に推され、また消防組頭、神社、寺院の總代等、町内の要職に就き貢献するところ甚大、現在は町會議員、區會議員を歴任し、現在の町會議員の先鋒格に當つてゐる功勞者である。

氏の家業である材木商は、時代の波にもまれ、昔日の盛大さはないと云へ、近く當町より分岐する大原線全通を期して躍進すべく準備中にて、將來を深く期待されてゐる。

家庭は夫人まん氏との間に四男四女ありて、長男仙之進氏は糸魚川中學卒業の秀才にて當年二十六歳、家業に盡力、快活明朗なる有爲の青年として將來をまされてゐる。

大正十二年青海町制の發布に先だつて村會議員となり、町制發布の後町會議員として、永年に亙り地方自治の振興に盡力してゐる桂五郎氏は、青海町の經濟

青海町青海

町會議員 水島 桂五郎

の重責を擔ふことゝなつた。兼ねて消防部長として、現在では國防の一端となつた村民の火災防止訓練の指導に、その腕を振つてゐる。政治的には民政黨の村内有力者として力を分ち、濃厚篤實なる人格と圓熟したる經驗とは、村内の衆望を負ふこと大である。

學校に遊學中 長女久子さんと二女菊子さんに加へ、三女澄子さんがあり、男五人、女三人の子寶に圍まれてゐる桂五郎氏は、幸福なお父さんでもある。

根知村梶山

村會議員 高辻 佐重



佐重氏の名は根知村に見落すべからざる存在である。

高辻家は予より四百年前、即ち戰國時代から信長、秀吉の天下統一、將にならんとする頃、根知村梶山在に居を定め、以來天下の風雲を他處に農を營んで來た村内屈指の舊家である。先代岩吉氏も區長に推されて、近隣の信望を集めたが、現佐重氏に至つて一段飛躍し、村會に入り村財政産業の開發や、教育の助長に、そ

教育方面の開發にも私費を投じて、その助成に當るといつた熱心家である。



現に青海水道株式

會社の専務取締役であり、つとに電機化學工業會社の設立や、學校の増設等には氏の力にあづかるところが少くない。人格濃厚にして、町内の信望厚く、水島家は氏が嚴父佐八郎氏の五男として分家創立して今日の礎石を築いたものであるが水島家の祖は古くから當地に住してゐたものである。政友會の町内有志として、政治運動にも盡力してゐる。明治十五年生れの氏には、長男角三郎氏、次男勝代司氏といつた力強い後繼者があり、何れも父君の志を繼いで電氣事業に従つてゐる。尙三男の盛男氏は東京に在住し、四男光吉氏は糸魚川中學校に在學、五男明君は小學校通學、別に東京和洋女子専門

氏は明治二十三年生れであつて、長男一人があり、將來氏の跡を襲ふ後繼者であり、後顧のうれひがなく、益々村政のための活躍が期待される。

小瀧村

村會議員 中村 寅藏



慶安年間の村見取圖によると、當時松本舊街道の番所が伊勢地方から移住し、伊勢東山の名

る。中村家は武田藩の臣下としてその頃當地に伊勢より移住し、代々番所吏を拜命すると共に、農を營んで來た本村創始の舊家である。當主寅藏氏は明治二十六年生、高田師範第四回の卒業生であり、北魚沼郡小出町、糸魚川町等の高等小學校に訓導を奉じ、地方農村の教育教化事業に盡瘁したが、小瀧尋常高等小學校長を終りとして大正八年教職を退いた。以後は専ら村政の指導に當り、推されて大正八年より引續き村會議員として今日に至つてゐる。

その間、大糸線の建設の帝國議會提案實現に成功し、更に小瀧停車場の完成を見たのは、氏の努力と率先奮闘に負ふところが多い。政友會に屬し、氏の大糸線實現の如きも、その地方富源開發の理想によるもので、現に村會議員に加へ、小瀧運送合資會社理事を兼ねてゐるが、先年小瀧青年會長として縣の表彰をうけた村政及地方教化の功勞者である。あき夫人との間に長男得藏氏、長女千代乃さん

があり、お孫さん六人に囲まれてゐる。

根知村中上保

村會議員 木島 亭治郎

當家の祖先、今より約六百年前より當



地に居住
代々庄屋
を勤め、
郷村に重
きをなし
たが五代

前より酒造業を営み、先代市右衛門氏の代に至りて酒造業を廢した。亭治郎氏は明治元年七月九日の生れ、縣立師範學校卒業後、農村教育の急務を痛感して、農業教員養成所に學び、同所卒業後専心農業教育の啓發に従つた縣教育界の先達である。村長在職中には自ら小學校創立の勞をとつたこともあり、温厚な人格と共に、郷土の師父たる氏は、今は自ら繪筆をとり、丹青に心を遣るといつた、花鳥風月の境涯に悠々自適してゐるが、現に

區長、村會議員として地方自治の指導にも當つて居り、且つては郡會議員、郡農

會副會長、村教育會長、青年會長として農村更生の主要な闘士であり、その功績は西頸城郡史に特筆大書せらるべきものである。

氏には高田商工學校卒業後、東京講談社に勤務する長男市右衛門氏の外、本年横濱高等工業を卒業した二男三郎氏の他既に他家へ嫁した五人の愛嬢があり、今では十一人のお孫さんに取巻かれることが、氏の何よりの楽しみの一つである。

小瀧村

元村長 中村 福一郎

當中村家は同村中村本家より三百年前



分家創立され、代
代庄屋た
りし由緒
ある舊家
である。

先代彌五平氏は、庄屋並に戸長を勤め、小瀧石灰株式會社を創設、銳意その經營に當つたが、本村が山間にして交通不便のため成績思はしからず、餘儀なく休業した。

當主福一郎氏は明治元年七月七日生、二十歳の頃小瀧村役場書記となり勤績、遂に嚴父に承けた氣性と其の成績により推されて小瀧村村長となつた。明治三十七八年の日露戰役當時、その銃後の村政に盡瘁せる功により勳七時を授けられ、他に農會長、村會議員、畜産組合長、産業組合長等、村政の要職に歴任し、村政の今日の發展は、氏の功績に負ふところが大である。温厚篤實の風格は、地方自治の先達として仰がれてゐるが、小學校卒業後、漢學を修めた氏の人格と識見は老後益々完成し、圓熟し、氏の輝かしい前半生の健闘を物語つてゐる。いよ子夫人との間には、長男利櫻氏、及び次男、養子の外に二女があり、福一郎氏を扶けてゐる。

小瀧村

元村長 中村 宗十郎

先代善平氏は温厚なる徳望家にして、小瀧石灰株式會社の役員であつた、中村家は同村中村本家より百五十年前分家せる家柄にて、村内有数の舊家である。

當主宗十郎氏は嘉永三年生れにして、資性剛毅明哲、温良の風格を具へ、幼時より秀才にして、氏は小學校卒業のみにて獨學にて齊家修身に務め、長ずるに及んで村政發展に意を注ぎ、村民の福祉増進の爲め寢食を忘れ、衆望を擔つて區長に選ばれ、區會議員、村會議員、村長等の要職に携り、その事績は悉く好評噴々たり、村長時代に道路開鑿その他、公共事業に盡瘁したことは數ふるに遑なきほどである。現在は老齡にて公職を退き、悠々として自適し農村の進展の喜びを持ちつゝ平穩な餘生を送つてゐる。

家族は長男善太氏外令嬢二人、愛孫四人であつて、圓滿平和である。

根知村上野

元村會議員 齋藤 正重

家系は詳やかならざるも、四五百年前



此の地に
移住し來
り、代々
庄屋を勤
め農を以
て家業と

せる村内切つての舊家にして、祖父作太郎氏は寺小屋を實家に設け、村民の教育指導に精勵せる人にて、先代誠一郎氏は戸長を勤め、又明治二十七八年の村長にして、日露戰爭の際は出征の事務、取扱上の功に依り三つ組の木盃登箱御下賜の光榮に浴し、村民の信望を擔つた人材であつた。

當主正重氏は明治三十二年三月八日生を享け、資性温厚にして篤實、また明朗なる人物にして糸魚川中學を卒業、村政に關與努力し、推されて村會議員、根知

銀行監査役等につき献身精勵、また消防小頭、消防部頭として、消防組の改良進展に意を用ゐるその功多大である。氏は民政黨に屬し、現在氏は公職を退き、ちよ子夫人との間に七男一女の圓滿なる家庭に悠々自適、靜穩の日々を送つてゐる。

根知村梶山

元村會議員 田上 與三吉

當家は村内切つての舊家にして、元祿



九年の開
創と謂は
れ、同村
田上家よ
り二百年
前分家し

當主與三吉氏は九代目にして、先代倉吉氏の令息、氏は根知小學校卒業後、歩兵第五十八聯隊に入營二ヶ年軍隊生活を送り、その後滿洲守備隊に勤務、上等兵となり目出度く除隊した。氏は資性快活明敏、また温雅なる人物にして、明治二十

四年九月十六日生れ、本年四十八歳である。村治開拓に力を盡し、村會議員、區長、軍人分會長、消防組頭等、村政上重要な職務に携はり、一意専心貢献活動する人材にして、村の發展亦氏に負ふところ多いのである。氏は民政黨に屬し、現今は公職を退いたとは云へ、表に立たず影になり種々の相談役として村民の信望を擔つてゐる。

家庭はたま子夫人は溫和貞淑にして、長男剛氏は二十四歳、二男太吉氏は十九歳、共に有爲の青年にて、農業に専心精勵してゐる。三男郡典氏、四男行雄氏、五男秀雄氏、みな健全にして男兒のみ五人を有する氏は、まことに前途洋々たる感あり、一家は圓滿和平に溢れた幸福なる景を呈してゐる。

大和川村

大和川小學校 訓導 和 田 貞 臣

和 田 嘉 源 治 及 貞 臣 氏 父 子 は 西 頸 城 郡 教 育 界 の 異 色 有 る 存 在 だ る 。 嘉 源 治 氏 は



貞臣氏の實父で、郡下の糸魚川、北要馬の兩小學校に勤続すること二十六年その育て上げた教

へ子達だけでも、優に千名を越える郷土の師父であるが、忠臣氏は父の遺志を繼ぎ、糸魚川中學校卒業後、獨力教員檢定試験に合格、現に二十三歳の有爲の青年教師として、大和川小學校に奉職してゐる。國民精神總動員下の教職にあつて、子供達の訓育に沈潜する一方、氏は且つて田伏團長として、時局下にその使命の重大を加へつゝある農村青年大衆の教化に、情熱を捧げたこともあり、濃厚且勤直な氏の風格は、村青年の好模範であるが、前途に新しい國家狀態に適應する教育研究の熱意と、明敏な頭腦の持主であるだけに、嘉源治氏の宿志が貞臣氏を通じてより大きな發展を遂げるにちがいない



根知村 在郷軍人 分會長 横 川 民 三 壯年期にある精力ある情熱と健康は總動員下の地方教

化事業の擔當者に相應しい。現に軍人分會長であり、青年學校指導員であり、消防組頭であるといつた多忙さで、時局の進展と共に重大性を加へつゝある地方青年の指導に當つてゐる。青年學校義務化の實現が見られ、集團勤勞奉仕といつた仕事を通じ、農村青年の組織化は國策線

上の一大急務であるが、根知村が氏の如き地方に根を下した指導者を持つたことは多幸といふべきであらう。民三氏の嚴父直吉氏は、材木商として村内屈指の事業家であり、村會議員として村政の振興に參與し、その功績は甚だ甚大なるものがあるが、昭和十一年村内青年の模範として軍人分會より表彰された民三氏は、將來嚴父の遺業を繼ぐ地方自治指導者として重い責任を負ふと共に、期待されるところも大である。たつの夫人との間に長男重昭君、長女美千代さん、次女英子さん、三女敏子さん、四女俊子さんがあり賑やかな家庭生活である。

根知村上町屋

消防組頭 金 平 弘 遠

當家の祖は今城金平と呼ばれ、遠く五百年前、建武中興の治蹟が全國津々浦々に平和を齎してゐた頃當地に移り來り、その後代々庄屋として數百年の家系を誇る家柄である。

當主弘遠氏の實父富田重藏次氏は、卓



拔せる縣政の功勞者であり縣會議員郡會議員村長、農

會長といつた重要な地位にあつて、目ざましい活動をなしてゐる。弘遠氏は糸魚川中學校卒業後、金平家の業を繼ぎ、農業經營に當つたが、推されて村會議員として村政に參與したこともあり、現に消防組頭、産業組合評議員として嚴父に承けた熱情を、地方經濟更生の指導に傾けてゐる。さく子夫人との間に長男正之次男正弘の兩愛息があり、他女三人の子寶に恵まれ和樂を極めてゐる。

根 知 村

産業組合 理事 北 村 松 太 郎

松太郎氏の嚴父吉郎益氏は、根知村村長として永年勤続し、村政に盡力するこ

と深く、その徳望と共に村民に尊敬され



た功勞者である。當主松太郎氏もまた尊父の遺業をつ

ぎ、村會議員、農會副會長、學務委員、區長、根知更生會會長として、多年村政の發展、教化事業の開發、農村更生の實現といつた各方面に活動して來た。殊に大正八年以來、氏が最も力を注いだ本村産業組合運動の發展は目ざましい業績を示してゐる。全村民をして政黨の舊弊に偏せず、農家經濟更生及全村協同を中心とせる新しい村民一致の理想實現のために組織された更生會の會長として、氏が鋭意指導に當つた結果、村民及村内青年が農村の使命に覺醒し來つたのも、そこに氏の強い理想と指導があつたからである。松太郎氏は明治六年四月生れ、當北村家は百三十年前村内の本家より分家獨

立して五代目である。

長男吉司氏は家業を継ぎ、次男敏秀君（長女逝去）、二女三女の三入はまた在學中である。

根知村大久保

伊藤福繁

伊藤家は當主福繁氏が二十年前分家戸



主として創めたものだが、村内に於ける篤農家として

氏の農業經營に對する研究的態度には特筆すべきものあり、著々として今日の確固たる地歩を築き上げたのは、その研究的態度と精進の賜物に外ならぬ。名利を追はぬ氏は、村内の農家に推されて、現に村農會評議員、畜産組合、信用組合、其他の役員、報徳會長、といった農村更生運動の第一線の指導に當る地位ある氏

が、その地位にあることによつて、本村の農業經營が合理化されたことは少くない。土で鍛へられた篤農魂は、自ら氏の風格をこの剛健なものとなし、村民に模範を示すものであることは、氏が光輝ある帝國軍人分會の名譽會員であり、消防部長であることによつても知られやう。去る昭和十二年五月には、氏神社基本金として少からぬ淨財を役じ、その敬神の念の厚さを表彰せられたといふ美談の持主であり、未だ四十四歳の壯年であるが近き將來に於て村政の指導者として期待されること大であり、その輿望を負ふ氏の活動もまた特筆すべきものがある。

青海町

杉本角夫

氏は明治廿九年四月九日生れにして、實父杉本金藏氏は杉本家創立の功勞者にして、二代目相續者たる角夫氏は資性明快、また温良して寛大、然かも生來頭腦明晰にて、青少年時代は中國岡山縣に居

住して居り岡山縣立商業學校卒業の秀才である。大正五年姫路歩兵第三十九聯隊へ入隊、大正九年陸軍歩兵豫備少尉となつた干城である。父君時代に當縣青海町に移住し來りしよりは、町政の汎ゆる方面に活動し、その卓越せる識見と豊かな資性とは、多方面に重要な役割を成し町民の信望日増しに厚く、推されて青海町會議員となり、町政發展に努力し、また同學區會議員として教育方面に氏の高邁なる理想を以て事に當り、漸進的改善進歩をみるに至つた。尙在郷軍人分會長として、町内在郷軍人の協和指導に献身してゐる。

氏は又、事業的手腕を有する敏腕家にして、電氣化學工業株式會社青海工場庶務課長として、氏の才腕縦横無碍、機腦明敏の冴えを見せ、電氣化學工業發展の時流と共に、益々繁盛を極めつつあるも、一つには氏の貢獻努力せるところも與つて力あるのである。本社は東京にありて、藤原銀次郎氏が社長である。

氏は圍碁に興味を持ち、多忙な生活の

合間に碁盤に向ふことを楽しみにして居り、その道での強者と云はれてゐる。家庭は、温良貞淑なる春子夫人との間に三男一女の和氣篤々、和やかな家庭愛に満ちて居り、まことに羨むべき家風である。

根知村根小屋

月岡靖

月岡家の祖先は上杉藩士堀久太郎の臣



氏門衛左藤父祖

下に居て、今より七百年前に居る

定めたが、代々醫師を業とし、且大庄屋たりし由緒ある名門である。先々代の藤左衛門氏は漢學に造詣深く、村内に寺小屋を開設して庶民教育の端を啓き、村民の訓育教化に盡瘁した。當時村民は飲料

不足に悩み、交通また不便を極めてゐたが、藤左衛門氏はその救済を志して、山間に立川堰を作り、村内に淨水を通ずる一方、中山街道を開鑿して交通の便を計り水害防止のために明治初年より懸案の堤防工事を完成する等、自ら村長として工場を東奔西走した業績と犠牲的精神は村民感謝的であり、今日尙立川堰の淨水は飲料水として用ひられ、その恩恵は村民をうるほしてゐる。

靖氏の嚴父要助氏は、父の遺業を繼ぎ醫師を志して東京に遊學、近代醫學を學んで糸魚川町に外科醫を開業したが、近隣に外科の名醫としてその名をうたはれた人格者である。

當主靖氏は大正八年四月八日生れ、弟博君は中學在學中、他に二子があるが、要初氏逝去の後は一身に子弟の養育に勵んでゐる。

母堂秀子さんの唯一の楽しみは、父祖の名に恥じぬ人材ににその子供達を育てることである。

青海町青海

中村時雄

青海石灰製造會社 専務取締役

當家は累代加賀藩士として仕へた舊家である。



先代氏は金澤北國新聞記者として健筆を振つ

たが、四十年前當地の石灰岩の利用開發に着目、青海石灰製造株式會社を創設し自ら社長として經營に盡瘁する一方、青海町制の實現に先だつて既に村長として地方自治に傾倒、彼自ら村長として青海水道株式會社を設立する等の功績大なるものがあつた。當主時雄氏は明治廿七年五月十四日生れ、糸魚川中學卒業後、歩兵第五十八聯隊に一年志願兵として軍務に服し軍曹に昇進、退役と共に嚴父の遺業を繼ぎ、前記青海石灰專務取締役として活動する一方、青年團長、在郷軍人副

分會長として、重大時局の第一線に立ち後進青年の指導、銃後の強化に活躍しつゝある。尙長男良雄君は魚川中學に在學外に次男三男、女兒二人の子寶がある。

根知村山寺

元村會議員 青木年松



當青木家は約五百年前當地に居を定め山寺字開祖たる、舊家である。代々農を家業とし、當

主青木年松氏は、先代清五郎氏の二男、明治十七年二月三日生れ、根知小學校卒業後家業をつぎ、推されて村會議員、區長、農會議員、林野委員等を歴任した。濃厚篤實な人格者で、區長時代には部落民を督勵して、村内に納税の模範を示した。今日の納税組合の草分けともいふべく、ために毎年村長より表彰をうけた。

けでなく、税務局からも二回に亙つて表彰せられたといふ沈黙の實行家である。且つて參與した村政に對しても、氏の徹な誠心誠意のやり方で衆望を聚め、村治上の功績も少くない。たか子夫人との間に長男一清氏は、特科隊として北支に出征、山口部隊にて皇軍のため萬丈の氣を吐いて健闘、長女もよゑさんは二十八歳、二女ふじゑさん十三歳で、目下小學校在學中である。

青海町

町會議員 八木定五郎



八木家の記録によれば、今から四百年

前、戰國時代の頃から青海に居を定め、代々農を業としてゐたといふが、當主五郎氏は金融經濟の開發を志し、大正十一年本店を富

前、戰國時代の頃から青海に居を定め、代々農を業

山縣荻生町に置く荻生銀行支店を青海町に創設、自ら支店長として今日までその經營と發展に努力して來た。歐洲大戰後の經濟界好況の波に乗つた氏の事業は、すく／＼と伸び、其後經濟界幾多の嵐にもめげず、今日では青海町は勿論、隣接町村に抜くべからざる基礎を築いて來てゐるのも、氏の明敏な洞察眼と識見によるものである。

氏は現在では、青海町會議員として、大いに格勵し、地方自治の指導者としてその經濟的識見を充分に生かし、地方經濟更生に盡力してゐるが、一面信託家でもある。つゝ子夫人との間にもうけた長男孝一氏は銀行に働き、將來の有望な後繼者であるが、次男省二氏は長岡工業學校を卒業、躍進の工業界へ、長女うめさんは高女在學中である。

根知村山寺

慈雲山金藏院

本院は千手觀音菩薩を本尊とし、法道

仙人の作と謂はれてゐる。元當院は千手院と稱せし所、明治初年の頃神佛分離の際、時の住職復訪して神職となつた爲に廢寺となり、寺中金藏院を再興したのである。宗派古義眞言宗に屬し、開祖は法道仙人にて、現在の村社日吉神社及び仁王堂の飯綱社の千手院は別當格に當つてゐる。

當院は和歌山縣伊都郡高野町の古義眞宗明王院の末寺に當り、曾て本尊のお告げに依り、信越國境仁科口に於て土賊を破り、上杉公より感狀及び田を賜つた感狀は今も當院に藏してあるが、觀音菩薩の靈驗あらたかにして、現今、近在は云ふに及ばず遠隔の地より參詣に來るもの多く、根知、小瀧、糸魚川等に檀家を持つてゐる。院内には昆沙門天壹軀、關羽畫田沼殿染筆、古畫十二天等の寶物あり、正御影供、土砂加持法會等が行事として行はれ、境内は壹反六畝歩を有してゐる。

尙越後横道第二番靈場である。

住職

山崎英賢

師は、徳望高き名僧にて、信徒からその人徳を敬仰されてゐる。

齋木利平、猪又周次、吉田庄次郎、吉田誠一、後藤久藏氏等は、檀徒總代として種々盡力して居りその功勞多大である

西蒲原郡和納村下和納

下和納區長 信用組合 評定委員

石田 杜三郎

當家はその始祖甚だ古く、爾來連綿繼承して今日に及ぶ由緒ある家柄である。先代豊松氏は、生前戸長、村會議員、助役、收入役等の公職、名譽職を歴任して銳意村勢伸展のために活躍した。自治界の先驅者で、その功績燦然たるものがあり、また徳望甚だ高かりし人である。

當主はその男にして明治八年七月六日に呱呱の聲を擧げた。濃厚にして謹言篤實の氏は長じて郡立高等科に修學した。村治に關しては父祖の血を繼承して夙

に意を注ぎ、また、産業組合の發達に就いては終始一貫してこれに精勵し、村民の福祉増進に寄與貢獻する等、その功績偉大なるものがある。氏の重厚圓滿なる人格は、その豊富高邁なる識見、手腕、力量と相俟ち、村民の信望絶大なるもので、曩に、本村生産検査員を歴任した氏は、現時推轡を受けて區長の公職に在り献身的に區政の向上に努力し、衆より深く感謝と敬慕の念を寄せられてゐる。氏はこの外、農會評議員、信用組合評定委員を兼ねて産業組合の助長發達に、農村振興に、夙夜盡瘁してゐる本村自治の功勞者で、その人望噴々たるものである。

氏は民政黨を深く支持してゐる。家庭は貞淑内助の功多き令閨との間頗る圓滿で、令息夫婦に一令孫あり、常に春風駘蕩たる和樂に包まれ、附近羨望の的になつてゐる。

岩船郡

村上町羽黒

縣社 西奈彌羽黒神社

當社は縣社にして、奈津比賣大神、倉



稻魂大神 領十八石を有すとある。徳川時代の記録をみるに、社領十八石を有せしは岩船郡内に於ては當神社のみなれば、當社が延喜式内神社なることは確認せられる。天正年間村上領主本庄繁長は、羽州庄内城主大寶寺義興の變起るや、手兵三千を率いて出征し、同地伊氏羽神社（現在の羽黒神社）に戦勝を祈願し、凱旋するや同神社の祭神たる倉稻魂大神、月讀大神の二神を勧請し、西奈彌神社と合祀するに至つた。後に西奈彌羽黒神社の名稱の起りし所以である。寛永十年六月七日、

城主堀丹後守直寄は、城廓擴張に際し、神祠と清淨の地羽黒山に奉遷し、松千樹を植へ千松山と改め、歴代の領主悉く當神社を崇敬し、社領寄進、社殿造營、祭祀執行等藩祭の實を擧げ、岩船郡の鎮守として崇敬の中心になつた。

享保十四年正一位の神階を勅許せられ明治五年村社に、同二十七年郷社に、昭和三年縣社に昇格したものである。

尙武の神であり、尙、迦具土命、火産靈命の二柱は、當神社に縁故深く、火伏の祈禱は一般の信仰篤い。攝末社に神明社、松尾社、稻荷神社二社があり、尙、神明社は、舊社殿にして寛文年間に建造されたものである。當社の寶物は金燈籠一對（領主内藤信親公寄進）、長柄銚子一對、神膳一具（領主榊原 倫公寄進）、神輿三基（榊原式部大輔公寄進、内藤信親公改修）、社領に關する古文書（本庄繁長時代の古圖、内藤式信公の社領寄進狀、堀主膳正祈願文）が藏されてある。大祭は七月六日、七日の兩日で、當地

方稀に見る特殊神事にして、嘗て新潟毎日新聞主催の縣内行事投票には一等に當選の榮冠を得、また昭和十二年の大祭に際してはラヂオに録音放送されし程である。神幸先驅に仕へ奉る荒馬は當神社の由緒中最も重大なる出羽の羽黒權現勸請の史實を如實に具現せるもので、本庄繁長の同輩、或は上杉謙信の臣にして同格の武將十四騎の雄姿を今に遺せるものと云はれてゐる。優雅悠長なる祇園囃や、勇壯なる平囃が奏せられ、領主數代が京都所司代なりしを以て京洛の遺風を傳へる處多く絢爛極りなき一大行事である。當神社の氏子數は千百〇九名で、その範圍は村上町全般に亘り、惣代として吉川嘉右衛門、百武卯助の兩氏が熱心に奉仕してゐる。

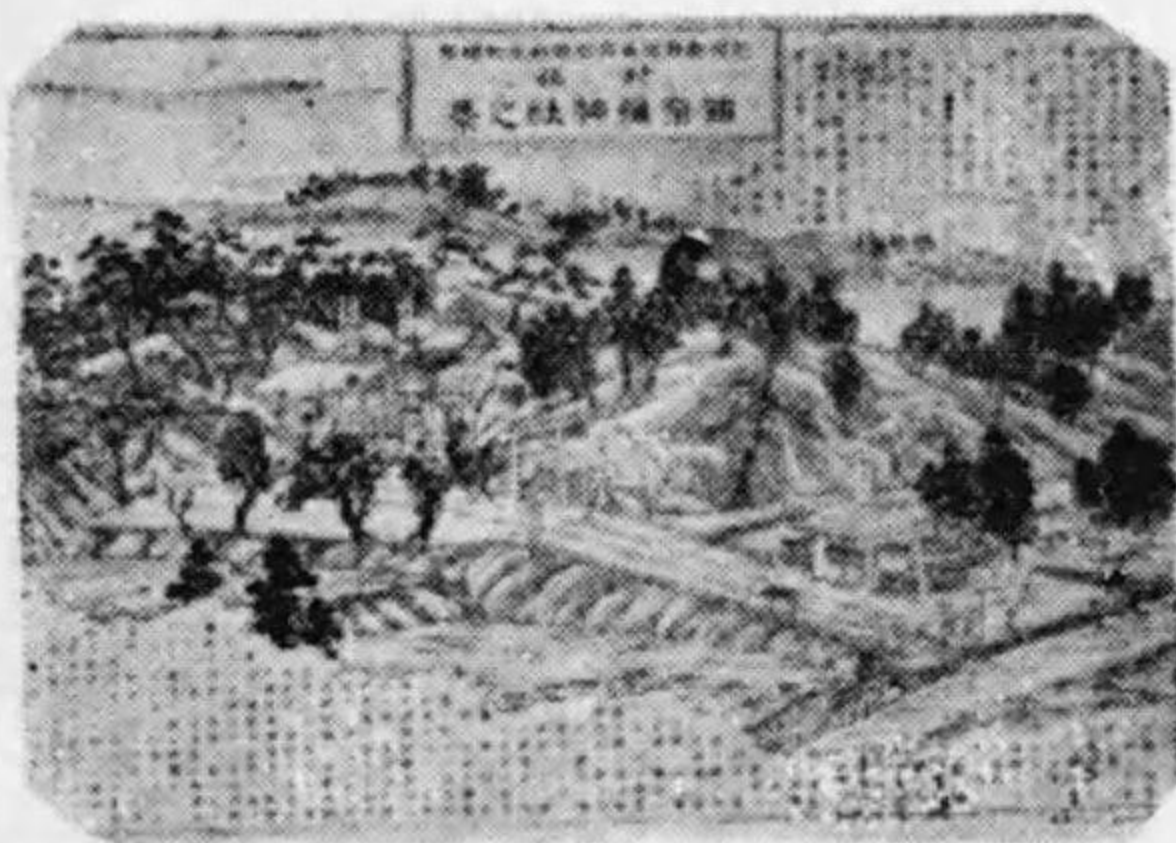
社司 江見喬平

江見家の祖先は江見安藝にして、代々當神社の神職を世襲し、當主を以つて十七代目である。奈良、野神社の主典より昭和十一年來當神社の社司に就任

したものである。氏の嚴父清風氏は明治元年の生れ、多年奈良春日神社に奉仕しまた曾て當神社々司を勤めしことあり、現在は東京に住してゐる。その長男として明治三十六年一月九日生れの氏は、現新潟神職會に活躍する新人で、頭腦明敏強固なる信念と眞摯なる正義感の持主で現代社頭の衰微せる状態を憂慮し、現状の改革を企圖して常に献身的に滅私奉公を信念に、神社の隆盛に努力し、また神社に對する奉仕に關しては高邁なる識見を有する高潔なる人格者で、今後の進出を廣く一般より期待されて、町民の信望絶大なるものである。

瀬波町 村社 西奈彌神社

當社は延喜式神名帳に載る磐船郡八重の一座にして皇紀千五百八十七年以前より有する由緒ある神社である。舊記に依れば、往古越前敦賀より氣比大神が供奉五社の臣、吉田、小島、伊與部、磯部。



小武ノ臣と共に野伊丸の旗をたてた船で國覽し給ひし時、十二月三日此の地を見えなはし清き

渚よき所なりと宜ひしに、御脊の方より波起り御船速かに進み此浦に着く、大神悦ばせ給ひ、心ありける脊の波かなと宜ひしより、西奈彌と名附しと云ふ。御船の着きし所へ神明の祠を建立せしが、今猶石の祠として現存してゐる。毎年九月四日の祭典、六月及び十二月には大祓ひ新年祭、新嘗祭を例祭行事とし、尙舊記に、順德天皇承久年間渡御還洛の御願

文を納め給ふとあり、當地の領主は代々崇拜し、祭典には參詣し幣帛料を獻納するを例とし、古來當社には十石餘の社領があつた。

當社は漁、穀物の神として崇敬されてゐる、多伎神社他末社十三社を有してゐる。岩船郡瀬波區明細帳(享保三年八代將軍吉宗の時閏十月に記せし原本にして當家の所蔵にして、當社氣比大神宮の祭禮及び社地境内の記録あり、禰原式部大輔不動堂(末社)建立の際山林松木米十俵賜はるとあり)及び神輿一基 當社の寶物貴重品にして、瀬波町全般二百五十戸の氏子を有し、氏子總代は木ノ瀬彌五助菅原誠一、渡邊卯之太、久津美寛藏、渡邊岩吉、小島源之助氏である。境内一反二畝二十四歩、境外田畑三反四畝二歩、小林三反四畝二歩あり、當社は優に縣社たる基本財産を有つてゐる。

神職は代々吉田家にて世襲し、古來數十代連綿として奉仕する名門である。曾祖父正隆氏は郡神職會長にして、又近在

の子弟を教へ、徳望高く、祖父準太氏、父伊勢太郎氏、また著名にして、故敏夫氏は高師出身の秀才にして、昭和八年二十歳にして病歿し、痛惜されてゐる。現在同氏夫人クニ氏が社務を執つてゐる。敏夫氏令弟隆氏は渡邊卯之吉家の養子となつて居り、社掌は江見左京氏である。

八幡村勝木鎮座

菅堅八幡宮

當神社の祭神は、應神天皇、草野姫命大山祇命、天照皇大神にして延喜二十一年十月十四日創建の村社である。當神社は神主家第十二代増子宗信、故あつて生國大和國を旅立ち、筑前國宮崎宮を詣で御神札を捧して諸國順巡中、勝木小門太(今日小左衛門と稱す)に宿りたる夜、丑滿時神靈枕邊にあらはれてのたまはく、我はこれ宮崎の宮應神天皇譽田別尊なり西方海に面接したるの山あり風光甚だ我が意に適ふ速かにわれを鎮祭すべし、地方の守護神として又沖合行交ふ船魂の海



らば、共に又神主たるべし宗信驚きて小門太に事の由を告げ、直ちに村寄合となり、一決して村中總出、末明、宮殿成りて十四日御神札を納め奉つて祭祀を營みたりといふ。

治安參年四月十四日嘉祿元年三月十五日長祿三年八月十三日再建奉仕明歴二年吉田家より宮稱拜受、元祿四年の再建には今日の俗稱の古宮より現位置に移轉し文化三年宮殿造替奉仕、文久元年石躰、右隨神新調奉仕、明治五年十二大區小十

區の村社に列せられ、大正十年社殿屋上



同 神 社 遠 望

全部内務省天然記念物に指定、昭和二年幣殿新築の歴史をもつ。

當神社は本社三坪、幣殿五坪、拜殿三十坪、境内四百〇八坪、社叢一町八反二畝十三歩、基本財産九百圓であり、寶物とつて八幡太郎義家矢除胸板、古刀備前長船清光作あり、九月十五日湯昇立神樂の例祭を行ふ。當社氏子數は山北五ヶ町村に互り六千戸、神職は累代にして第五

十三代宗護守、氏子總代齋藤龍彌氏、加藤小一郎氏、東嘉吉氏、齋藤岩次郎氏。

村上町小町神明社

當社の祭神は、天照皇大神で、創建は靈元天皇の御宇、延寶二年伊勢皇大神宮の分靈を奉齋したものである。伊勢國山田の住人神宮御鑰取内職福田興好(大中臣興盛五代の孫)大麻領布として連年來越し、村上町に越年するを例とした。寛文二年壬寅十二月地を購ひ出張中の宿所に爲さんと家屋を建築し、屋内を間切りて社殿を造設し、同氏の祈願に據り、延寶三乙卯年伊勢大神宮司從四位下行神祇副大中臣朝臣長春を請ふて兩皇大神宮の御神號を拜受し、これを當地に遷して崇敬した。後、明和年間福田興始の代に至り衆庶の參拜を許され、爾後信徒の崇拜するもの逐年その數を増した。

當社の寶物は神馬壹頭(木彫白塗、高サ六尺、長サ六尺五寸。彫工山脇三作、

上を守りつゝ留るべし、汝心盡して取計

年代不詳、安政頃ニ本郡内ノ崇敬者ノ奉納セシモノデアル。

例祭は四月二十五日、九月二十日、特殊神事は二月十日、二月十七日に岩船郡の稲作の豊年の祈年祭を行ひ、郡内舉つて參拜する。崇敬者數三千名で、その範圍は岩船郡全般に互つてゐる。

神職 福田興眞

當家の始祖は世々伊勢大神宮に奉仕せる司職にして、中興の祖は造宮一頭職興盛にして、血統連綿たる由緒ある



名門である。當主を以つて十五代目先代與朝氏の四男として文久三年十一月十八日の岳降。明治二年六月本宮々掌大内人職に任ぜられ正六位を賜りしも、神宮制度革正の爲め同四年五月位記を返上した。同三十四年九月十七日當神社社掌に補せられたもの

である。
曩に氏は明治二十四年十月一日、郡内大麻領布を依囑され、大正十五年十二月辭任した。

人格高潔にして清廉潔白なる徳望家である。氏の長男興泰氏(三十)、次男興敏氏(二十)共に神職にありて熱心に奉仕してゐる。

村上町第六番戸

縣會議員 益田 藤次郎

正八位勳六等 當家は代々酒造業を営み、氏は三代目にして、藤次郎は家名として世襲す。氏は日露の役に出征し、その勳功により正八位勳八等を賜はる。町會議員、消防組頭、農會長、所得税調査委員を歴任後、現在は縣會議員の要職にある。氏は民政黨に屬し、民政黨岩船郡會長にして、當地方に於ける政界の重鎮であり、縣政、町政に多大の功績あり。昭和三年頃、山虛米の田地百町歩が水渴に悩みし頃、氏は村上町水利組合を興し、組合長として

私財を投じ、三面川より水を引き、現在の豊作地となし村民の感謝の的となる。又村上町發展策として交益社を興し、村上驛附近に大製絲工場を設け、莫大なる私財を費して、製絲事業を営み、よく今日の繁榮を來す等、大いに町財政に貢献した。

氏は前町長、中村寅五郎氏の支持者にして、中村氏の町政運行を助けて、敏腕を振ひ、尙又衆議院選舉には小柳牧衛氏を推舉して活躍した。その赫々たる功績により現在は黨の長老として尊敬さる。村上町、瀬波町、岩船町を村上町に合併せしめ、大いに相互の發展を企圖して多年盡力しつゝある。

濃厚なる人格者にして、よく大局的見地より事理を裁斷し當地方の徳望家である。日蓮宗を信仰す。

タキ夫人は、村上町益田甚兵衛氏の娘にして、長男正一氏は日支事變に出征中正一夫人はな氏は、村上町益田茂一郎氏の娘である。令孫は道雄君と云ふ。

館越村小川

小川尋常高等小學校

當校は村上町より布部に通ずる縣道に面し、交通の便よろしく、現在男教員六名、女教員三名にして、生徒數三百八十名に及び、着々と教育の實を擧げ、數多の逸材を輩出せる小學校として知られてゐる。

校長

山田俊助

氏は明治十三年四月、男女川尋常高等小學校より轉任せられ、本校校長として就任せしものである。氏は新潟師範學校卒業以來、各地に於て教鞭を取り教育者として信望厚く、現小川尋常高等小學校長として濃厚篤實にして、清廉潔白、人格高潔なる名教育者として村内の範となつてゐる。

氏は岳夫鐵平氏(當七十歳)の息として明治二十六年九月二日岳降したるものにして、爾來教育者として刻苦精勵、精神的向上に努め、徳育に意を以て健全なる

國民の養成に最大なる力點を於ける名教育家である。

三面村新屋 新屋郵便局

當局は明治十五年四月二十八日開局にかゝる三等局にして、集配區域は三面村一圓に及び飯越村の一部は電報のみに限つて配達し、高根村の一部にも配達してゐる。集配事務開始は明治十五年五月十五日、爲替事務開始は明治三十二年である。昭和十二年十一月二十一日内外電信航空事務を開始した。着配共に八五、九〇〇に及ぶ。従業員は事務員三名、集配手五名である。

局長員沼

茂左衛門

先々代員沼岩次郎氏が當局開設の功勞者であり、今日の大を爲す素因を作り、春松氏それを繼ぎ益々發展し、現茂左衛門氏の代に至つていよいよ隆盛となりたるものである。氏は村上中

學校出身の秀才にして、明治三十六年十二月十二日生れ、歩兵少尉として帝國軍人の範たる性情の主であり、清廉にして潔、しかも責任感厚く、前在郷軍人會分會長にして功績甚大、信望厚き人格者である。現在學務委員として教育界に關與し、氏一流の軍人精神を以て現代の教育に當てんとしするなど、業績大なるものがある。氏は錚々たる新進氣鋭の新人として將來に期待せられてゐる。當家は代々通信事務に關與し、當地方開拓の功勞者であり、氏の家庭は至極圓滿にして、明朗、氏の資性そのものゝ如き良家庭として信望を集めてゐる。

關谷村下關

關谷信用販賣購組合

當組合は大正初期時代農村經濟の無統制時代、その唯一の相互金融機關たりし頼母子購の掛金にさへ困難を感じる状態に鑑み、之等金融財政の圓滑化と、それに伴ふ産業の伸張を圖るべく、現事務理

事佐藤敬一郎氏が當地方財界の重鎮渡邊三左衛門氏と議し、當村有力者と共に大正四年十二月廿四日設立をなしたものである。最初は渡邊三左衛門氏宅に事務所を置いたが、事業の發展擴大と、農村經濟統制の時流は昭和二年當村四ヶ字信用組合の合併を見るに至り、爾來、累年業績の顯著なる伸長を招來するに到つてゐる。十二年度末に於ける組合員數七二二名、出資口數一、五〇二口、出資拂込合計二萬九千五百圓に上る、差引純財産五萬六千圓餘、定期年賦貸付合計十五萬三千六百餘圓、總益金一萬六千五百餘圓、總損益金一萬五千二百餘圓、差引剩餘金一千二百二十五圓となつてゐる。貯金は本年度受入總額十六萬七千六百餘圓、拂戻高一四萬一千七百餘圓である。

購買事業は産業用九千餘圓、經濟用四千三百餘圓、利用事業成績は糶糶七百四十六石餘、精米千二百三十一石餘、製粉四十八石餘、農業倉庫は入庫米總額一萬一千八百餘俵、入庫木炭九萬一千餘貫(約

(二萬三千依)

共同販賣米七千二百依、木炭の共同販賣八萬五千貫で、總ての分野に於いて昨年度より顯著な増加となつてゐるが、之皆組合長、役員以下、全組合員の一致共力に眞摯なる精勵の賜といふべく、當組合の今後は内容の安固に、業績の進展に愈々大なる將來を持つものといふべきである。現組合長は佐藤春造氏、専務理事は佐藤彌一郎氏、理事として渡邊萬壽太郎、加藤芳次郎、伊東高造、迎廣吉、横山林策、内山壽太郎の諸氏が就任してゐる。監事は高橋芳太郎、八幡孝四郎、傳松四郎の三氏である。

女川村

女川村信用購買販賣組合

本組合設立の動機は、明治天皇御葬儀の夜、女川村尋常高等小學校の校庭において農村振興を目的とし、農民の利便を計るため、當時の村長横山又四郎氏始め、参加有力者に計り、一同の協賛を得

て、その後願書を提出し組合員を募集、大正三年五月その設立を見るに至つたもので、當組合は保證責任女川村信用購買販賣利用組合である。

農産倉庫を一軒有してゐる。現在の出資總額は六千七百七拾圓で、一口拾圓とし、組合員數六百二十二名を擁してゐる。

貸付總額は參萬六百七拾四圓八拾五錢で、貯金は六萬四千九百五拾八圓八拾八錢貳厘。

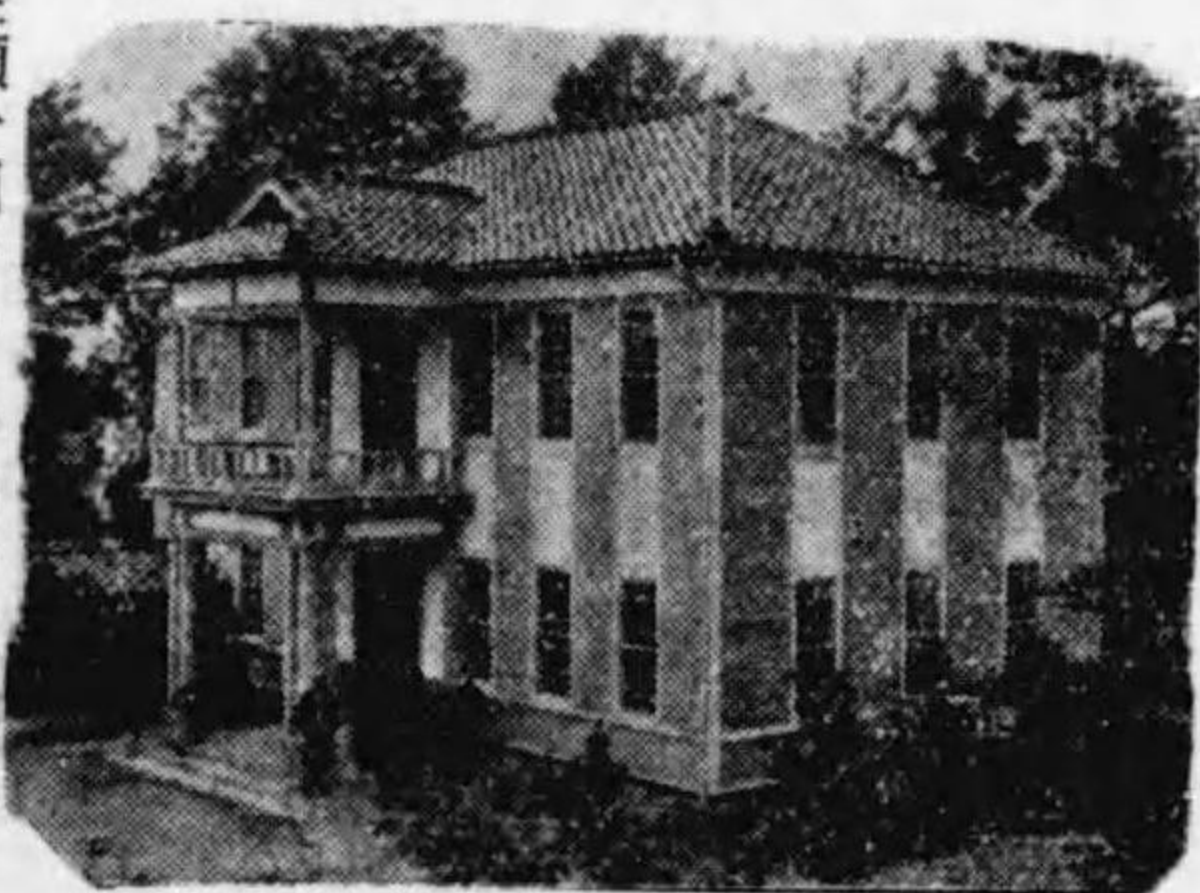
購買價格は壹萬八千九拾八圓五拾貳錢で、販賣價格は貳萬三千八百九拾五圓七拾五錢である。

組合長理事として、人望頗る厚い卓抜なる手腕家松坂平松氏が就任し、理事として、鳥屋龍藏、大島十九三、山口茂登、中東太右衛門、中東作之助、稻家重兵衛、横山久作、佐藤光、田村善三、横山健藏、須貝寅吉の諸氏が任じ、本村産業組合の助長發達に終始一貫して、献身的に盡力してゐる。

神納村有明

神納信用販賣購組合

當組合は、全郷經濟機關なく時代的に金融機關の必要を感じ、神納第一信用組合として明治四十一年創立し、大正七年に神納購買利用組合となり、昭和十二年に至り現在の名稱になつたのである。組



合員數九百四十人、出資總額二萬四千一百圓、貯金三十三萬三千五百八十一圓、貸付總額九萬四千四百圓、貯金三十三萬三千五百八十一圓。

圓、購買價格は二千二十七圓、販賣價格は二十五萬五千圓にして、準備積立金三萬六百七圓、餘裕金廿萬六千八百圓を有してゐる。

當組合發起功勞者は岩田鐵平、板垣總之助、工藤久吉、田中安次郎氏等にて、理事長を岩田鐵平氏これを擔當、幹事は横山大左衛、齋藤銈介、平山萬衛門氏にて、現在役員は工藤久吉、板垣總之助、田中安雄、佐藤伊久茂氏、大正八年、岩田驛前に農産倉庫完成と同時に、當組合を設置したものである。當組合の特色は生産物の共同販賣、及びその商品化にあり、農事實行組合の指導獎勵に力を注いでゐる。

組合長 岩田鐵平

氏は明治二年九月二十九日生れ、資性穩健、着實、夙に村自治に貢獻せること甚大、明治三十九年より四十二年一月まで二代目村長として就任、更に同四十五年七月より大正三年まで再度村長に選ばれ、大正四年には郵便局長に推さ

れ設立以來今日に及び、又産業組合長として創設



村切つての重鎮として村民の信頼を一身に集めてゐる。氏は板垣總之助と共に現存せる神納村の大立物にして、實に有力なる人物である。

岩田家は當村名門家にして、中期同村内の光淨寺の火災に依り記録不詳なれど、當地屈指の舊家として近在に名望高く、先代丑太郎氏は早世され、當主鐵平氏は關谷村加藤羊吉氏の長男なれど、十八歳の時入りて岩田家を繼ぎ、關谷村小學校卒業後、塾にて漢學を修めた人である。盆栽に興味を有し、見事なる梅鉢を持つてゐる。氏はまた國士の風格を持ち、義侠心に富み、人を容れる雅量深く、村民の深く尊敬し畏服するところである。

家族は、カン夫人との間に長女ミドリ氏、夫君は俊助氏にて、女川小學校長をしてゐる。愛孫カツミ嬢、宏平氏、俊夫氏、ムツミ嬢ありて、一家團樂、常に春日照るが如き平和な一家をなして居り、また子息女の前途は囑望されてゐる。

村上町

株式會社 村上銀行

岩舟郡北部は山間地にして交通不便であるため、要所に代理店七ヶ所を設置し地方産業發展に貢獻すること多大なる當銀行は、明治十一年十月創業、七十一國立銀行と稱せしも、明治三十一年七月株式會社村上銀行と名儀を變更したものである。次いで大正十二年十一月岩舟銀行を合併、同十三年五月村上産業銀行を合併現在に至つたものである。當銀行は資本金百六十萬圓拂込金額百五萬圓にして預金總額三百八十五萬圓、貸付總額三百八萬三千圓、諸積立金六十三萬七千圓にして配當率六分三厘である。當銀行の經

營方針は堅實にして村土地に絶大なる信用を博し、資本金に對し一割一分の利益を擧げ、縣下二三位の利益率を有する優秀銀行である。歴代頭取は吉田吉次郎氏、中山翁藏氏にして、現任専務取締役は吉田吉右衛門氏、現在常務前田仁太郎氏、主なる株主は國井伴之丞氏、吉田吉右衛門氏にして店員十五名、岩舟町大字岩舟に支店あり。

専務取締役

吉田吉右衛門

氏は村上町第一の多額納税者にして、大地主として知名なる岩舟郡屈指の資産家である。氏は町會議員として五期、學務委員、所得稅調査員、岩舟郡育英義會長として自治に盡瘁し、村上銀行専務取締役の他、村上水電株式會社取締役、小邊里織物株式會社顧問として寧日なく、功績多大に上る。氏は眞摯なる人格者にして責任感強強く、一面温情家として識られ、國防獻金、銃後會出征軍人遺家族救済に私財を投じて盡力し、又吉田救済基金を町役場

に寄附し、以て貧困者の救済等社會事業に貢獻し、岩舟郡育英義會を興し、貧しき秀才に學費を貸與するなど育英事業に努力してゐる。氏の家庭はふく子夫人、長男宏平氏は東京野村銀行員、他に三男三女あり、宏平氏の將來は矚目されてゐる。

村上本町

村上水電株式會社

當會社は大正元年九月の創立にかゝり資本金二百四十萬圓、拂込金壹百五十六萬圓の多くに及び、第四十九期昭和十一年九月より同十二年二月までの純利益金五萬二千三百八圓、前期繰越利益壹萬五千九百五拾二圓に及ぶ。同期に於ては前期に比し電灯に四百一灯、電動力七拾八馬力の増加をみ、壹萬二千四百六十二圓の増收を爲し、着々と實績を擧げつゝある。當會社従業員は計九二名にして、内重役六名、主任技術者一名、技師一名技手及技手補九名、書記雇二一名、運轉手

一三名、電工二五名、其他一六名にして當社重役は取締役社長佐藤泰造氏、取締役吉田吉右衛門氏、横山巖氏、丹吳康平氏、常務取締役佐藤又助氏、監査役松坂平松氏であり、毎期六分の配當金あり、資産株として當地方の有産階級に株主多く、岩舟郡第一に位する大會社である。

常務取締役

佐藤又助

當社常務取締役佐藤又助氏は、慶應大學法科出身の秀才にして、頭腦明晰、しかも卓抜なる才腕を有し、事業家として一流の逸材である。氏は明治三十二年七月三十日岳降、本年四十歳の壯年期にあり、益々以て將來を矚目されてゐる當地方切つての新進實業家として、天稟の才能と、常に現實の認識より出發せる見解は、當會社今日の實績を擧ぐるに功績多大である。氏は又圍碁をよくし、その技量は既に名人の境に追從せんとしてゐる。當會社の將來は實に氏の双肩に在ると云つても過言ではない。

村上町

村上町長 能村 竹次郎



氏は西頸城郡木浦村の人にして、明治十年十月二日に生る。祖先は代々商業を営みしといふ

當村に於ける舊家である。長ずるに及び新潟師範を卒業し、小學校訓導を奉職し其後榮轉して小學校長、縣視學の要職を歴任し、現在は町長、教育會長、商工會長、郡町村長會長、郡教育會長を兼任してゐる。

資性、篤學勤勉、極めて至公至平の人格者にして、博識多才、小學校長、縣視學として教育界にあること三十三年間に及び、縣下に於ける教育功勞者として第一人者である。昭和六年十一月に於ける觀劇御宴には全國教育功勞者四名中の一

人として御招宴を辱けなくした、教育者として無上の光榮を有する人である。しかして多年の教育上の功績により正七位勳七等を賜まる。

昭和七年五月には村上町長に就任し、現在は二期目に及ぶ。眞摯な名町長として町民の信望篤く、村上地方の發展に關しては大局的の見地に立つて盡力し、村上本町、瀬波町、瀬波温泉、岩船町を打つて一丸とする大村上の建設を理想とし、當地方を一大觀光地帯として飛躍せしめんと日夜寢食を忘れて奔走しつゝあり、村民の感激してゐる所である。淨土眞宗を奉じて信仰心頗る厚い。

女川村

女川村長 横山 又四郎



は新發田歩兵に入隊第一軍に從軍し彼地で千軍萬馬の中

中に華々しき軍功をたてた勇士にして、陸軍中尉、從七位勳六等功五級の名譽を有する人である。横山家は代々庄屋を勤めた名門にして先代又四郎氏は村政に寄與せる徳望家に於て、村長二期間、郡會議員等を勤めた人であつた。又四郎を襲名せる十二代目當主は、武士魂を有する剛健實實にして戦線の勇士の面影まだ濃く、何事にも熱烈眞摯、人をして心打たしむるものがある。夙に村治伸展に盡力し、前郡會議員として活動、現在は村長第四期目を勤め

て居り、又農會長、養蠶實行組合女川支部長として、自治に産業に盡する功績多大、氏あつて村民の利多く、一身を挺して福祉増進のために精進してゐる。



長男廉一郎氏は騎兵少尉にして、目下軍人分會長として、壯々たる活躍をなし、非常に將來を囑望せられてゐる。次男は早稻田大學出身、目下蒲田に在りて鐵工業に従事してゐる。

平林村鹽谷

平林村長 勳八等

野澤 金太郎

當家は當村の由緒正しき家柄にして、村内有数の資産家である。

先代年太郎氏は、頭腦明敏、進取の氣性に富み、事業慾旺盛にして、七十年前醬油醸造業を初めて今日に至る。氏は日

露の風雲を告げるや逸早く應召されて滿洲の野に各地に轉戦し、武勇拔群にして遂に名譽の負傷を受く。その助勞顯著なるものあり、勳八等を賜はる。

氏は平林村長、農會長、青年團長、所得調査員、村會議員等の諸要職を歴任し漁業組合理事、丸千醬油株式會社社長、岩舟郡醬油聯合組合長等の要職にも當り重責を双肩に擔ひて、よくその職務を遂行す。蓋し、氏の篤學にして識見と手腕のよく群衆に秀でし所以ならん。村農政に寄與貢獻するところ頗る多大にして、村民の氏に對する感謝、感激は極めて深いものがあつた。

氏は人格頗る圓満で、寛容温厚、情誼に篤い。先代の事業を繼いで、醸油の品質の改良、販路の擴張に腐心し、よく今日の隆盛を至す。又當村の名譽公職を歴任せしこと、村農政に寄與貢獻するところ頗る多大にして、その功績は村民の遍く感謝、感激するところである。氏は特に學校問題に關して意を注ぎ、

その機構の變改を常に主張し、就任以來持論として運動してゐる。政黨關係はなく、佛教を奉じ信仰心深きものがある。タツエ夫人との間に四男一女あり、金吾氏は村上中學校出身にして、金彌氏は現在大阪に在學中、金一郎氏は加茂農林に在學中で、他に金次氏の外、女子一名である。

西神納村

西神納村長 勳八等

登坂 作次郎

氏は明治十六年十一月十五日に生れ、



實父銀次郎氏は村會議員、村長等の要職につき村治に貢獻、功勞多き徳望家にして、八十歳の高齡を以て他界された。作次郎氏は實兄に當る登坂千代松氏より分家し一家を爲した人で、村上私立中學を経て、明治三

十六年近衛第三聯隊に入營、日露戰爭には第一軍に従軍出征、殊勳により勳八等白色桐葉章を授與され、凱旋歸國、直ちに守備に命ぜられ、同三十九年十二月十六日滿期除隊。明治四十年六月十一日陸軍歩兵伍長となつた。自治村政に盡力し

昭和二年土地賃賃價格調査員に當選、同昭和五年第一次家屋稅調査員に當選、同二次にも引續き選ばれ、同年九月西神納消防組頭、同九年西神納村青年訓練所充用、補習學校長、後援會長、同十年西神納村青年學校に改稱され、引續き後援會長となり、同十二年村會議員に當選、尙國勢調査員、軍人分會長、政友會長、信用組合幹事等、總ゆる方面に氏の努力に至らざるはなく、その功勞により消防組頭時代及び支部長時代に感謝状を受けてゐる。現在村長として村民の信望を一身に集め、敬慕されてゐる。

家族はスミノ夫人との間に、長男豊作氏外二男三女ありて、豊作氏は當年十九歳、農學校卒業將來を囑望されてゐる。

長女は神納村有明の鈴木嘉榮氏に嫁し、一家圓満、明朗なる家庭である。

館越村笹平

館越村長 中山 英三



その識見手腕、力量技倆近時稀に見る名村長として村民の信望絶大なる氏は、明治二十八年四月十日呱呱の聲を擧げた。幼にして頭腦明敏剛毅不屈の精神は常に群衆を抜き秀才の譽高かつた。十二歳にして先代養父種松氏の養嗣子となつた氏は、以後獨力獨行してよく今日の地位を礎き上げた當村の逸材である。現在氏は當村長の重職の外、木炭同業組合長、郡農會評議員、郡養蠶組合長、農會長、蠶業實行部會長、青年教育會長、愛國婦人會長、國防婦人會長、館越教育會長等の公名譽職に在り

て獻身的に盡瘁し、産業の發達に、育英の充實に、社會團體事業等に氏の功績偉大なるものがある。

先代故養父種松氏もまた、當村の村長其他の名譽職を歴任した自治の功勞者で二代に渉る村治の功績まことに燦たるもので、先代種松氏は七十五歳の高齡をもつて逝去した。

令閨ミヨノ夫人(四十六歳)内助の功多く貞淑にして、良妻賢母の譽高い。氏との間頗る圓満で、一男三女の子寶に恵まれ、長男保君(十六歳)、長女チエ子さん(二十四歳)、次女愛子さん(二十三歳)、三女英子さん(二十歳)、皆健在で、常に一家は和樂の笑聲に春風踴躍たるものがあり、附近羨望の的になつてゐる。尙、當家は曹洞宗を深く信仰し、同村内有数の舊家として知られてゐる。

三面村上中島

三面村長 青年團長

板垣 貞次郎

板垣家は開祖後十五代位を経てゐる當

地方を治めた大庄屋にて、名字帯刀の家



柄にして二百餘年連綿と續きたる、舊家である。先代

友次郎氏は早稻田大學法、經科出身の俊才にて學務委員を三十二年間勤続し、現在に至つた人で、本年二月教育功勞者として縣知事より表彰を受けた。尙村上銀行の取締役に事實上の實權を握つてゐる。貞次郎氏はその長男にして村上中學卒業の秀才、歩兵伍長にして、郡内少壯政治家として囑目せられて居る。郡青年團長、三面村長共に三期目にして、農會長を三年勤続し、軍人分會長は十四年の長きに及び、郡教育評議員、消防部頭十六年、岩船郡劍村會長として創立以來務め、岩船郡木炭改良組合評議員、養蠶業組合會長、岩船郡郷軍分會長理事十餘年等、村自治に、青年團に、産業に

總ゆる方面に互つて重要な位置につき一身を献して携はり、功績實に枚舉に遑なく、然も尙前途は輝く許りの洋々たる視野を有し、村民の深く尊敬と信頼を寄るところにして、かくの如き人材を有する當村の發展はまことに輝くばかりである。

氏は政黨に關さず、劍道三段を有し、園藝、養鶏、書畫、骨董等、多方面に興味造詣深く、また板垣家は郡内屈指の素封家として知られて居る。

家族は實父友次郎氏六十六歳、母堂ハナ氏五十五歳にして共に健在、サカエ夫人は三十五歳にして賢夫人の譽高く、その間に、令女三人ある恵まれた一家にして、常に笑聲邸に溢れてゐる光景を呈してゐる。

高根村關口

高根村長 横山 巖

當家は代々この地方の最も古き家系を繼承せる由緒正しき素封の家たり。地方

開發融和に大いなる貢獻を致せる信望の家門として、景仰されてゐる素封家である。當主巖氏は四十三歳の壯年、若き頃より専ら齋家修身の経程に精進して圓滿

溫容の風格と眞摯剛毅の資性は地方人士の衆望厚きものあり、現に高根村長、村會議員、其他各公名譽職に歴任執掌して、村治産業の啓發、殊に農村經濟の打開に對しては寧日なき思念を以て臨み、著々顯然の成果を挙げつゝある。實に其の高邁の識見と眞摯なる熱意は村政の將來を卜するものとして期待されてゐる。蓋し名村長の器、手腕の人たり。

氏は慶應大學の出身にして、又事業方面に於いては市街自動車會社社長となり地方交通上に便益を與へる事多大にして其の業績も頗る良好である。

尙氏は新潟武徳會副會長として、青年の身心鍊磨修養の誘掖に貢獻する處多大である。實に氏の如きは一村を擔へる當地自治の巨木ともいふべく、將來への活動は刮目して待たるゝものがある。

黒川俣村北黒川

黒川俣村長 齋藤 重太郎

當家は本村有数の舊家にして、且當村屈指の名門家である。

先々代謙造氏、先代加一郎氏共に村長の職に就き、當主亦現に村長として、本村の爲め貢獻し居る次第である。三代相續きて村長の要職につき、村政の爲め一身を捧げて貢獻するが如きは、蓋し稀であらう。

當家は始め屋號を糸屋と稱したが、現在本糸屋と云つてゐる。當家は昔、製糸業等を永く經營して居たが、後製糸業を廢して酒造等を始めたのであるが、暫くして酒造等を他に譲り、現在は地主である。

當主重太郎氏は、先代加一郎氏の男として、明治廿一年八月八日呱呱の聲を擧げたものでその資性明敏である。長じて村上中學に入學、同校を優秀なる成績を以て卒業した。同校を卒業するや、更に長

先代久太郎氏は、溫厚篤實なる人格者にして村民の信望厚く、村長として村政の爲め貢獻せ



しことあり、其他各種の公職につきて當村の爲め功勞ありし人である。

當主久二氏は、久太郎氏の長男として明治三十七年十一月十五日呱呱の第一聲を擧げたのであるが、性明敏にして、村上中學校に入學するや、常に優秀なる成績を以て通し、同校を卒業するや、間もなく歩兵として入營、爾來よく軍務に精勵し、果次進級し遂に歩兵少尉に任官し除隊したのである。

氏は圓滿なる人格の故に、村民に敬愛され、軍人分會長に推され、之に就任するや、良く在郷軍人の指導教化に當り、續いて青年團長に就任するや、情弱の風を打破して、青年間に質實剛健の風を養

中俣村

中俣村長 東海林 久二

當家は當村屈指の舊家にして、又本村有数の名門である。代々農業を營みて、篤農家として知られ、又代々庄家を營みて當村自治の爲め常に盡力し來りたる家柄である。

生し、更に村會議員に出馬、最高點を以て當選するや、銳意村政の刷新、村施設の充實に全力を傾注、特に兒童教育の重大性に鑑み、學校施設の充實は特に氏の力する所であつた。

間もなく村民の懇望に應へて、村長の要職につき、村民より慈父として敬仰されて居る。

家庭には令閨タケ枝夫人との間に四男一女あり、其の圓滿振りは人の羨望する所である。

保内村佐々木

村會議員 磯部 正五郎

當家は、天和年間よりの由緒ある名門にして、當主にて十六代を累ぬ。

氏は先代五平氏の長男として生れ、本年四十二歳の働き盛りである。當家は代々煙草業を營み、氏は加茂農林を優秀なる成績を以て卒業せし秀才である。創立以來農會總代を勤め、養蠶實行組合、郡評議員を歴任し、現在は村會議員四期、

信用組合理事、學務委員等の要職にある資性、至情至純、篤學重厚の士にして豪放にして磊落、一面堅忍にして熱烈なるものあり、村自治産業にも寄與貢獻するところ頗る多く、その識見、手腕共に衆の認めるところであり、村會に於て一度、村長に望まれしことありしも未だその時期にあらずと拜辭した程の人望家である。

氏は新思想の持主で、その説く所よく聽者の肺腑をつくものある。

氏は、學校新築に際しては委員として近村にも珍らしい程の立派な校舎を建築し、躍進保内にふさはしい各種の設備に日夜盡力して居る様は、村民のいたく感謝するところである。

氏は民政派の重鎮として縣下政界に令名高い。

家庭また頗る圓滿にして、内助の功多き貞淑なる令夫人との間に四男四女に恵まれ、夫人又才徳兼備の賢夫人にして、琴瑟相和し春風駘蕩たる感がある。

金屋村大津

村會議員 館島 丑太郎

從六位勳五等 當館島家は、代々庄屋を勤めし家柄で



氏は先代 茂八氏の 男として 明治十二年十月十二日に岳

降した。

資性英邁にして俊敏剛毅の氏は、一面温厚にして篤實、長じて家業である農事に精勵した。明治二十九年七月、氏は千葉鴻臺教導團に歩兵見習として一年半修業し、後軍曹に任官して村松三十聯隊に八年間勤務し、日露戦役には歩兵曹長として出征した。八月廿六日第三旅團の夜襲には應援として出動、酔子溝に於て壯烈にも右手腕骨折傷及右土膊部の貫通銃創を受け第二野戦病院に入院、十月内地に後送せられ仙臺衛戍病院に入院し、十

二月退院するや再び歩兵第三十聯隊補充隊に復歸し、卅九年二月歩兵少尉に任官してゐる。同年十二月朝鮮平壤守備隊歩兵第五十八聯隊附となり爾後累進して、大正五年四月には歩兵大尉に任官し歩兵第五十八聯隊附中隊長となり、同六年十一月待命、同七年十一月豫備役に編入され歸郷後は、在郷軍人分會長、金屋村青年團長(四ヶ年)、教育會代議員及區議員、二ヶ年を歴任して、専ら村治續の向上、在郷軍人の精神涵養に力を盡してその功績頗る顯著なものである。

昭和十三年二月村會議員として、衆望を擔ひ村政の中樞に執掌するや、氏は一意専心村民の福祉増進の爲め、獻身的に盡瘁してゐる。尙氏はこの外信用組合常務理事として産業組合の助長發達には泪ぐましい努力を續けてゐる本村の功勞者である。

從六位勳五等は拔群なる勳功に依り賜りしもので、また貞淑にして内助の功多きヤイ夫人との間頗る圓滿、ヤイ夫人は

國防婦人會分會長として銃後の護りに活躍してゐる賢夫人である。長男一郎氏は憲兵下士として今事變には勇躍出征し、次男氏は目下幼年學校に在學中で、尙長女嬢は同郡關谷小學校に教員として熱心に奉職中で一家は益々繁榮してゐる。

女川村

村會議員 中來 太右衛門



當家は當村有数の舊家にして、家號を鎌倉家と云ひ、赤松則村入道の子孫である。代々農を營み、篤農家として知らる。

祖父は女川小學校の改築に努力した人である。又女川役場の新築にも多大の努力をした人である。性温厚篤實にして、村民の人望厚く、村會議員、女川信用組合理事、郡會議員、村長等の公職を勤め

て、當村自治の爲め大いに盡力した人である。功により勳八等を賜はる。

當主太右衛門氏は先代福太郎氏の男として、明治三十四年八月十四日呱呱の聲を學ぐ。温厚篤實の人にして、村民の信望が厚い。推されて幾多の公職について良く其の職責を果して居る。即ち氏は現在、村會議員、學務委員、區長、信用組合理事等の要職にある。氏は夙に村政に關し、刷新すべき點の幾多あるを認めて居たので、村會議員に當選するや、誠意を以て之が改革に關する所見を吐露し、多數の共鳴者の支持を得て、着々その實績を擧げて居るのである。

家庭には夫人との間に一男一女あり、長男一郎氏は加茂農林學校出身、長女は村上女學校生徒として目下勉學中。

平林村小岩内

村會議員 松本 藤右衛門

當家は舊家にして現在の處二十六代前までは判明せるも、それ以前は詳細不明

であり、連綿たる家系を有してゐる村切つての名望家である。

先代富太郎氏は村會議員を勤め、村治に盡瘁し、貢獻裨益するところ甚大にして、家業たる農業及養蠶業に精勵したる篤農家であつた。氏の資性温厚にして高潔なる人格者として信望厚く、藤右衛門氏は先代長男として明治十七年當地に呱呱の聲を擧げ、本年五十五歳の今日まで孜々として公共事業に盡瘁し來りたるものにして、前養蠶實行組合長として産業經濟の發達に寄與し、村會議員として又農會評議員、區長として村治に關與、獻身的努力を以て公務に精勵し來り多大の實績を擧げ、現在は村會議員、農會副會長、養蠶實行組合副會長として村民の福祉増進に寄與し、獻身的努力を以て重責を果し、尙も村治に邁進し居るものにして、氏の資性廉直潔癖にしてしかも俊敏の氣性に富み、當地方に於ける政友會の重鎮として知名である。

當家の宗旨は曹洞宗にして、氏は崇祖

敬神の念に厚く、朝夕佛前に合掌するを常とし、家庭も又氏の人格を反映して敬神の念に厚く、圓滿にして和合を極め、家族は十六人の大家族なるも、團樂よく各々の分をつくし、長男は前消防組頭として盡瘁したることあり、將來を囑目されてゐる人材にして、氏の愛孫七人あり頗る圓滿である。

西神納村高御堂

村會議員 正八位 平山信藏

氏は村上中學校卒業後、新發田第十六



聯隊へ一年志願兵として入隊し、明治四十二年除隊となり

なり大正五年少尉に任官せる帝國在郷軍人である。氏は明治二十年二月十四日當地に生を享け、氏の嚴父故三郎氏は元治元年生れにして六十歳にして長逝するも

館越村下新保

村會議員 勳八等 横井 宇次郎

氏の長男龜松氏は村上中學校卒業の秀才にして、家業に従事、現在消防組頭の要職にありて當年三十八歳の壯年である。前途を囑望されて居り、サゲ夫人は當年三十八歳、温雅にして現に愛國婦人會員

として活躍してゐる。愛孫高君は十六歳



村上中學 在學中、ミサヲ嬢は十一歳 小學校通學中、幸

君三歳、ノリ子嬢一歳、健康にして明朗の一家をなして居る。

當家は開祖以來八代目にして、先代次太郎氏は八十三歳、母堂タカ氏共に健在當主宇次郎氏は明治七年九月廿七日生れにして、廿九歳より消防組頭として六年勤続、國勢調査員第一期勤め、尙氏は日清日露の兩役に出征勳功をたて、その功勞に依つて、勳八等白色桐葉章並びに一時金二百八十圓を賜はつた名譽の所有者である。現在は區長二ヶ年目、村會議員第三期目にして、村政への功績多大。氏は穩健圓滿なる人格者にして、努力盡瘁せること多年に亙り、當村有力者として村民より厚き信望をうけてゐる。

三面村

村會議員 貝沼 文四郎

當家は六百年以前より連綿と續ける舊家にして現主文四郎氏は八代目に當る。代々庄屋を勤めたる家柄を有し、一度火災に遭ひたるもその後再建したるものにして現在發展途上にあり、家運益々進展せる名望家である。當家には祖先の遺物たる傳家の寶刀がある。先代文四郎氏五十四歳にして他界せるも、村會議員として三期に亙り勤続し、其他多くの要職に在つて、村自治に盡瘁せる功績甚大であつた。

氏は明治二十五年二月二十三日當地に呱呱の聲を擧げ、資性清廉にして潔白、しかも温厚なる人格者にして、新發田十六聯隊に現役兵として入隊し、四ヶ月後渡滿し上等兵として歸村したる軍人である。氏は前區長として三期に亙り功績多く、又農會代議員として盡瘁し、現在は村會議員として第二期に亙り、村の發展

と生長に努力し、産業實行組合長として蠶業の發展に粉骨碎身しゐるものにして遞信省囑託、學務委員としては十三年の長期に亙り教育界に盡瘁する處大であつた。尙在郷軍人會顧問として徳望あり。氏は民政系にしてその家庭はイマ夫人四十六歳、長男文藏氏二十三歳、その夫がかつ子さん二十一歳あり、家庭は頗る圓滿である。尙氏の夫人イマ氏は愛國婦人會員として活躍し、銃後國民の範であり、氏の内助者として賢婦人の譽が高く、長男文藏氏は農林學校出身の秀才にして三面村役場の書記を勤め將來を囑目されてゐる青年紳士であり、かつ子夫人は村上高等女學校出身にして家事に従事せる貞淑なる若夫人である。

高根村高根

村會議員 相馬 春吉

當家は本村切つての舊家にして、開祖以來十代目と謂はれ、先祖代々各名譽職を勤め、實父末吉氏は六十八歳、實母イ

チ氏は八十六歳にて他界された。末吉氏は村政に於ける功績多大にして、村會議員、區長、その他の公職に推され、自治發展に懸命努力された人である。

當主春吉氏は明治十七年二月二十二日生れ、當年六十一歳なれど、未だ元氣旺盛にして、現在村會議員、區長等に推擧されて村治に參與、また教育方面にては學務委員として盡力すること多く、消防部頭として消防部の改良發展に貢献してゐる。斯くの如く氏の多方面に於ける活躍は村政上多大の利あり、その功績は枚擧に遑なき有様である。

氏は天性質實剛健、また温良にして人を容れるに足る雅量を有し、責任感強く職務をよく果し、村民の信任厚く、衆に拔きんでるも、また深くうなづき得る人物である。氏の如き人材を有する當村民の幸は筆舌に盡し難く、依つて當村の發展も期待するところ多いのである。

氏は家庭圓滿、村政上の功勞者としてのみでなく、家庭に於いても氏の圓滿な

る人格はよき一家をなしてゐる。

鹽野町村小須戸

村會議員 秋山久衛



天性圓滿潤達にして質實敦厚、事に當るに眞摯を以てなし、また地方稀にみる自治の敏腕家にして、今や村政の圓滿なる運行、村民の福祉増進、村民間の融和を念願として一身を促して活躍盡瘁をつゞけつゝある氏は、明治二十六年二月二十日の出生にして、先代久衛門氏の長男である。

抑々秋山家は當村屈指の舊家にして、創家以來すでに拾代の家系を閲し、代々農を家業となして篤農の家として廣く聞え、先代久衛門氏は村會議員として村政に多年の間活躍つゞけ、村勢伸展上に多大の貢献をなし、村民より思慮深き手腕

ある材幹と稱され、多大の人望を寄せられし自治の功勞者である。

久衛氏は今や村會議員の任にあり、卓拔な手腕か以て村會に村民の福祉増進の爲に堂々論じて活躍中にて、その滅私奉公の念を以て執る粉骨碎身の勞は、自ら衆望を高め、その名は噴々として四隣に普く及び、村民等して畏敬感嘆して惜く能はざるところである。その村政各般に貢献裨益するところ甚大にして、衆を擧んする手腕は愈々期待を以て俟たれ、村民注目の的となつてゐる。

家庭は常に春風駘蕩として、圓滿和樂を極め、和合の家として知られてゐる。敬神の念すこぶる厚く曹洞宗に歸依してゐる。

黒川俣村大毎

郵便局長 加藤勝造

當局は村上郵便局に次いで古い歴史を持つ局にして、明治六年の開局になる日本でも有数の舊局である。黒川俣村一

圓の集配局にして、その集配區域は、上海上村、八幡村、大川谷村、黒川俣村、中俣村に及ぶ。内外電信、内外電話、郵便貯金、保險年金等を取扱ひ、當地方の文化産業の發展進歩に寄與するところ大なるものがある。

加藤家は當村の舊家にして、九代を累ね、當氏勝進氏は四代目の郵便局長である。先代の文進氏は郵便局長、村長、郡會議員を歴任せる村内有数の功勞者である。

當主勝進氏は、明治六年七月の生れにして、嚴父の薰陶よろしく、才能に恵まれて、秀才の聞え高く、先代の志を繼いで熱心に事業に當り、村會議員、收入役村長、郡會議員に就任したことあり現在は郵便局長、學務委員として、その青年時代より村政に參與貢獻するところ多くなるものがある。

資性温厚にして稀にみる勤勉家、局長に就任してより、區内の郵便貯金、各種保險の成績向上のため寢食を忘れて努力

した人である。從七位勳八等を賜はる。

夫人は齋藤村長の遠縁の家柄にして、温和にして貞淑なる賢夫人なり。長男經夫氏は明治三十年一月十二日の生れにして、現在消防組頭、村會議員の要職にあり、父君を助けて村自治のため努力を續けてゐる。英邁なる資性を有し温厚なる人格者と稱され、その卓拔な手腕は村民の等しく嚆望する所である。

八幡村板屋澤

村會議員 加藤源佐



當家は村内屈指の舊家にして享保十六年に分家せる家柄である。代々農を以て家業となし、篤農家の譽れ高く、當主源佐氏は先代金藏氏の長男にして、明治十年五月十八日生れ、本年六十二歳、若くより村政に參

與、縣長岡靈病豫防事務所に四ヶ年勤績

前村會議員、區長、國勢調査委員、信用組合顧問として十年間寄與盡瘁し、現在尙、村會議員に推され、八幡村養蠶技術員として活躍なる活動を爲してゐる。

氏は稀に見る勤勉努力の人にして、幼少より働くことを唯一つの楽しみとし、趣味とし、家業に邁進すると同時に村政にも數多の功績を残しつゝある。

氏は温厚また穩健實直の人にして、村民の信望を擔つてゐる。家族は八人、長男は家業に従事してゐる。

大川谷村

村會議員 本間治右衛門

當本間家六代目の當主である氏は、元治元年の岳降、本年七十四歳の高齡である。温厚篤實にして人望頗る厚い氏は、本村自治の功勞者として知名、その功績また顯著なものがある。

義に氏は當村助役として村治績の向上には献身的に盡力し、村民の信望を一身

に集め、推されて村長の重職に就任するや、また村治の刷新に、育英に、産業に全く寝食を忘れて終始一貫、村民の福祉増進の爲め貢献する處甚大なるもので、識見の高邁、豊富なる體驗は、氏の重厚にして圓滿なる人格と相俟ち、衆より多大の感謝と敬慕の念を寄せられてゐる。

現時氏は村會議員の外學務委員の要職を兼ねて、村勢發展に一意専心努力を續けてきたが、最近健康を害し病床に臥せて、専ら養生に努めてゐる。

英邁にして人格高潔なる長男庄一氏は現在縣綜合副業組合理事、同村綜合副業組合長として當村はその存在重きを爲してゐる才器で、氏の令名また赫々たるものである。氏の今後の進出こそ刮目して俟つべきである。因に當家は、信仰心篤く、曹洞宗に深く歸依してゐる。

下海府村脇川

村會議員 渡邊 源五郎

氏は雄辯家にしてしかもその論旨整然



村會の闘士として敏腕を振り、又村政家として、道路改善を切望し終始その目的に向つて邁進してゐる。氏の討論として村の發展は交通の改善に在り、その必要を痛感せるものにして、村會議員として三期に互りその功績多大である。氏は又現在利用組合理事として敏腕を振つてゐる。

當家は代々農業を營み篤農家として又名望家として知られてゐる、先代源五郎氏は、現在金物商として勝木に居住してゐる。氏は源五郎氏長男として明治十年九月三日呱呱の聲を擧げ、氏は四代目に當る。當家は又一家に於て三人出征して木杯を下賜せられたる榮譽の家である。家族は四人にして長男は北支に出征中、各地に轉戦して數多の功を樹てつゝあり、次女は脇川郵便局長として内に外に戰時



々々農業、養蠶を以て業となし、先代五三郎氏は既に他界し、氏はその長男にして本年六十九歳、先には一級二級の村會議員として當時二期間當選し、現在はまた村會議員として村政に寄與貢獻し、區長として、また佐々木漁業組合理事を明治三十六年より三十六年間の長年月勤務してゐる。

氏は温厚篤實なる人物にして、村民福祉と平和と發展の爲に盡力する村内の元老格にて、村民みな均しく尊敬と信望を

下國民としての責を全ふしてゐる。

保内村佐々木

村會議員 一ノ瀬 淺次郎

當家は村内屈指の舊家である一ノ瀬三郎氏より分家にして、當主を以て三代目とし、代々農業、養蠶を以て業となし、先代五三郎氏は既に他界し、氏はその長男にして本年六十九歳、先には一級二級の村會議員として當時二期間當選し、現在はまた村會議員として村政に寄與貢獻し、區長として、また佐々木漁業組合理事を明治三十六年より三十六年間の長年月勤務してゐる。

寄せてゐる。

長男春藏氏は三十七歳、はる子夫人との間に三男ありて、父君の片腕として前途を期待されてゐる。三男春松氏は北浦原郡新發田町大井金五郎氏方の養子となり、四男春吉氏は本年二十八歳、現在横須賀海兵團へ入團中である。

一家悉く健康、有望にして末頼もしき令息を有する淺五郎氏の悦びもまた大きいものがあらう。春風蕩々として平和に輝やく家庭をなし、氏の人格と共に村民敬慕の的である。

女川村

村會議員 須貝 小次郎

明治九年十一月十一日、先代次郎氏の



男として生を享けたる氏は資性篤實練達、また圓滿柔

和なる人格者である。村民間の信望風に高くして、村治産業への進出を懇願されて村會議員、區長、養蠶實行組合高田支部長等の任に現在活躍しつゝあり、温厚なる人格と共に備はる卓越せる手腕と才能と力量は、益々村各般上に多大の寄與をなし、村に缺くべからざる人物の一人として、衆望すこぶる高い。政友派にして村政友系の重鎮と稱される。

因に須貝家は五百年以上の家歴を有する當村開拓の名ある家柄にして、萬治年頃には當村五人組の一人として活躍努力をなし、地方民より仰慕された。

平林村平林

郵便局長 木村 子三郎

平林郵便局は明治七年、木村啓治氏に依り創立をみたるものにして、子三郎氏は啓次氏の長男として明治三年一月岳降し、先代は庄屋として村治に盡瘁し、當村の今日あるは一に氏の功績に依るものである。



子三郎氏は日清戦役に従軍、多くの勳功をたて勳八等に叙せられ

かゝるゝや再び従軍して、各地に轉戦、困苦一身を國家に捧げんと、奮戦し、凱旋するや勳七等を賜り、昭和八年二月從五位に叙せられ、又昭和十二年九月七日勳五等を賜りたる光榮の主である。

氏の公職關係は郵便局長會副會長、同會幹事長並に幹事等を數十年の間歴任し甚大なる功績を擧げた。氏はまた、村會議員として三期、信用組合理事、區長、學委員を歴任し、献身的努力を以て村治に盡瘁し、區長、學務委員、氏子總代、檀徒總代等を勤め、粉骨碎身の勞をとつて貢獻する處多大であり、尙現在軍友會長として活躍し居り、村内在郷軍人分會は明治四十年頃の創立になり、氏は第二

同分會の創立者にして信望厚き功勞者である。

昭和九年四月二十日、氏は郵便局長として四十二年の長期に亙り盡瘁せる功勞者として表彰され高等官七等待遇を受けた。氏の資性温厚潤達にして、しかも明敏達識、俊敏の氣性に富める偉材として數多の公職に在り、東奔西走席の温まる間なく努力精勵し、多趣味にして青年期は釣を好み、河川に糸を垂れるの悠々たる境地を愛好したるも、現在は圍碁をよくし、既に玄人に追從する腕前の持主であり、公務に寧日なきも、時に少閑を得て碁盤に向ふを、唯一の愉しみとしてゐる。

氏の家庭は子息四人なりしも三人は長逝し、現在末子圓治氏中學四年在學のみにして、愛孫四人あり、頭は中學校三年に在學中であり、家庭は至極圓滿にして模範的良家庭である。まことに氏の當村に於ける存在は偉大にして、その一舉手一投足は注目の的となつてゐる。

館越村

村會議員 石栗 幸太郎
享保三年頃の開祖であると謂はれる村



内有數の舊家にし、代々農を以て家業とし、先代

傳次郎氏は區長を勤めてゐた。その長男たる幸太郎氏は、明治十六年十一月十日生れ、資性眞實また温和なる人物にて、夙に村發展に參與、功績甚だ多く、既に區長を三期間勤め、現在は村會議員として村政に携り、學務委員として教育方面に力あり、また區長をも兼任して、村民から信頼されてゐる。尙安田銀行本社文書課に二十年間勤務し、家は安田生命保險代理店になつてゐる。氏は仲々の活動家にして事業的手腕を有し、豊富な抱負を以て、産業方面に改良發展を期すべく

三面村布部

村會議員 本間 千代松



氏は新發田歩兵第十六聯隊除隊後、大正十年より二十二年開大字布部夜學部長に就任し、専ら青年夜學部の指導監督の任に當り、同十三年三面村消防組第一部小頭、同十四年

部頭となり退職後、昭和四年布部青年支部長に推され、又三面村軍人分會理事に推薦せられ、同五年退職と同時に消防組第一部より感謝状を受け、同九年分會前期退會と同時に理事を辭し、新發田聯隊區司令官より表彰され、爾來孜々として

倦まず、常に軍人精神を以て農事、林業に精勵し、昭和十三年一月村會議員に當選し今日に至つた。

當家は布部部落最古の舊家にして代々庄屋を勤め、家名を七兵衛と稱し、その家歴は寺院に保管せられたが、一朝祝融の襲ふところとなり、現在は審らかでない。菩提寺の過去簿に依れば、先祖は元祿九年に永眠したるを知るのみである。氏の岳父與藏氏は應應二年生れにして若くして父を失ひ、只管母堂に孝養をつくし、敬神崇祖の念に厚く、當年七十三歳にして今尙壯者を凌ぐ元氣さである。氏の母堂は大正十五年四十五才にして永眠し、與藏氏は子女養育の傍ら、植林に農業に精勵し、今日の素因を作つた。

當主千代松氏は十五代目にして、明治二十八年三月二十二日與藏氏の長男として生れ、資性眞實敦厚にして徳義に厚き

人格者にして、氏が學業を受ける機會なかりし爲、令弟武三氏當三十四歳に學費を貢ぎ、東洋大學專門部、倫理學東洋文學科を昭和七年卒業し、中等教育の免許状を受け、同年東京府より小學校正教員員の免許状を受け、爾來北浦原郡高濱小學校を振出しとして各地小學校に轉任し同十一年朝鮮京城府進明高等女學校に奉職、爾來同校に執鞭を執りつゝある教育者として高潔なる人格の持主である。

氏の家庭は貞淑にして内助の功多き、ミヤオ夫人當四十一歳を始め、養子繁氏二十六歳、夫人さき子さん二十四歳、次女いささん十八歳、三女みきさん十一歳にして、家族十二名なるも一家團樂、老父を敬ひ、分に應じて働き堅實なる自作農を營む、平和なる良家庭であり、至幸至福の家庭として附近羨望の的となつてゐる。

高根村高根

村會議員 遠山 金吉



た氏の家は、詳かならざるも、相當の舊家にして、

先祖代々各名譽職に就きて、村發展改革に力あつた名門である。また誠農家として知られて居り、實父金作氏は六十五歳にて、實母カヤ氏は七十四歳にて、既に他界してゐる。金作氏は生前縣會議員に當選した功勞者にして、第二期間勤績し又郡會議員第一期間及び最近迄の村長として三ヶ年間民政支部長として盡瘁貢獻した。

氏は資性温厚、然も謹嚴眞直、又寛容の度量は遠く衆の及ぶところにあらず、仰いで萬人の範とするに足る人材にして

よく職を果し、村政發展の有力者として
數へられる故に各方面よりの信望厚く、
高根部落の功勞者として名聲噴々として
普く、氏はまた書道をよくし、書家とし
ても評判が高いのである。

氏は民政黨に屬し、活動盛んにして、
重要視されてゐる。

家庭は常に圓滿、氏の人格と相俟つて
春風蕩々として和樂に滿ち村内羨望的
である。氏の如き人材を有する當村は幸
この上なく、その發展を期して目される
のである。

鹽野町村

郵便局長 小田 英一

當家は當村有數の舊家にして、代々郵
便局長をして居る。實父英太郎氏は、郵
便局設置以來四代目の局長として、其の
功勞多大である。

同郵便局は明治五年七月、設置され
ものであり、初代局長は佐藤長十郎氏で
ある。爾來六十有餘年の星霜を重ねて、

今日に至り、其の通信事務の目覺ましき
發展は尙ほ刮目すべきものがある。又そ
の事務の正確さは、町民均しく感謝する
所である。

當主英一氏は、先代英太郎氏の長男と
して明治三十五年十月廿六日、呱呱の聲
を擧げたのである。長じて松本蠶業學校
に入學、優秀なる成績を以て同校を卒業
し、直ちに父祖の業をつぎて郵便局長と
なり、今日に至つて居る。

氏は郵便事務に従事するに當りては、
常に親切丁寧を旨として居る。

氏は温厚篤實の人であるから、町民の
人望厚く、しばしば當町公職に推さるゝ
ことがあつたが、氏は常に郵便事務が疎
略に陥るべきことあるを恐れて、之を謝
絶してゐるのである。

家庭にありては、嚴父英太郎氏は六十
九歳、母堂イセ氏は六十七歳であつて、
共に饗樂として居る。

氏は、曹洞宗を信奉し、其の信仰が篤
い。

下海府村桑川 村會議員 本間 保雄

先代養父彦三郎の養子として當家に迎

へられた



氏は明治
八年十一
月二十七
日の岳降
である。

代々半農半漁の當家は、今より約十年前
鐵道開通と共に濱新保村より當村に移住
してきたものである。

資性温厚篤實の氏は、村内に於ける人
望噴々たるもので、曩に村政の中樞に執
掌し、村會議員として村治績の向上に獻
身的に盡瘁して功績頗る顯著なもので、
現時、引き続き衆望を擔つて一意専心村勢
發展に盡してゐる。また、その外本村漁
業組合の部落總代としては四十年間これ
に盡したその功績偉大なるものである。
子寶に恵まれ、子女十三人あり、曩に

産婆會より木盃を授與されてゐる。氏の
長男氏は新潟商業出身の才器で、目下第
四銀行村上市支店に勤務してゐる謹直なる
紳士である。

因に當家は信仰心篤く、曹洞宗に深く
歸依してゐる。

保内村藤澤

村會議員 井上 勇太郎



氏は實父谷松氏の長男として生れた人
である。
當年四十
八歳であ
る。

氏は少
年時代よ
り良く困苦缺乏に堪え、遂に今日の大を
なしたるものにして、まことに立志傳中
の人と云ふべきである。

初め竹内豊次郎氏に雇はるゝや、よく
竹内氏を助けて、當時衰運の一路をたど
りつゝありし竹内家の家運の挽回を圖る

ため、寢食を忘れて日夜奔走したるも、
大家の倒るゝや支へ難く、遂に竹内家の
没落するや、自ら獨立して米屋を開業し
爾來營々として異常なる努力の末、着々
事業を擴張し、遂に今日の大をなすに至
りたるものである。

氏は開放にして果斷、其の意見を吐露
するや極めて論理的にして、人をして自
ら心服せしむるものがある。嘗て氏は校
舎統一問題に對し、兒童教育の見地より
堂々反對論陣を張り、遂に勝を制したこ
とがある。氏は村會議員に推さるゝこと
二回、常に卓見を以て村會を指導してゐ
る。

夫人せんさんとの間に三男あり、長男
惣一郎氏は本年廿一歳にして、村上中學
校卒業、次男龜次郎氏は加茂農林に在學
中である。

女川村高田

村會議員 須貝 利惣吉

分家してよりすでに三代を關する當家

は、代々家業に農を營み、篤農の家とし

て著聞す



氏は明
治二十六
年一月十
八日先代

利惣八氏の男として呱呱の聲を擧げた資
性すこぶる穩健、また着實にして徳義に
厚く、謙恭の人と稱される清廉高潔なる
人格者である。村民間の信望すこぶる厚
く、推されて學區議員を三期歴任、區長
消防小頭等をつとめて多大の寄與を付政
教育諸般上に印せし事あり。現在尙も三
期目の村會議員、養蠶實行組合高田支部
長等の要責にあり、村民の幸福を期して
夙夜淬勵をつゞけ、村政の基礎を鞏固に
する事益々努力し、その貢獻すこぶる多
大にして、村民より益々信頼を寄せられ
村中堅人物の人としてその存在は、村に
缺くべからざるものである。表彰も數次
に及び、消防小頭二十年の永きに互つて

勤績せるに依り、縣消防義會より銀杯を贈られてゐる。

館越村釜杭

村會議員 齋藤孝雄

當家は本村有数の舊家である。代々農



を營み、篤農家である。當主は其の第九代目に當る。

先代庄次郎氏は、濃厚篤實の人にして村民の厚望厚く、村長其の他、村會議員區長等の名譽職を勤めて、本村發展の爲め貢献したる人である。

當主孝雄氏は、庄次郎氏の男として、明治廿九年五月九日呱呱の聲を擧げたのであるが、性濃厚にして、村民の信頼厚く、幾多の名譽職につきて、本村自治の爲め多大の貢献を爲しつゝある。即ち、大正九年産業統計調査員として統計事務

に従事、其の複雑困難なるに拘らず、よく其の職責を果し、又大正十四年國勢調査委員に任ぜられ、其の複雑なる事務を迅速且適正に處理し、實に昭和八年に至りては産業調査委員に擧げられ、之亦よく其の職務を完了したのである。續いて昭和十一年には農會代議員に當選、昭和十三年三月、村會議員に出馬して當選、目下、銳意當村發展の爲めに盡力してゐる。

夫人サダさんは當年四十五歳にして、夫人との間に一男三女あり、長女サダさんは當年十九歳にして、中等農業學校を優秀なる成績を以て卒業され、目下父母の良き補助者として、家業を手傳つてゐる。次女キンさんは當年十六歳にして目下中條農業學校に於て勉學中、長男邦男君十一歳、三女タカノさん八歳は、共に目下小學校に在學中である。

氏は曹洞宗の信奉者にして信仰厚く、敬神の念亦厚い。頗る圓滿なる家庭として附近より羨望されてゐる。

三面村千繩

村會議員 田村岩吉

當家は村内有数の舊家にして、代々農



を營み、篤農家である。先代實父石松氏は、濃厚篤實

の人にして、村内の信望厚く、村會議員其の他の要職を歴任、よく其の職責を果して、八十一歳を以て天壽を全うして逝去せられた人である。

當家は代々庄家を營み、村自治のため多大の貢献を爲し來りたる家柄である。當主岩吉氏は、石松氏の男として明治廿九年九月廿五日呱呱の第一聲を放った。長じて、歩兵として新發田十六聯隊に入營するや、良く軍務に精勵して、上等兵に進級し、其の精勵振りは上官の認むる所となり、陸軍全行賞を授けられたので

ある。

同聯隊を除隊するや、在郷軍人顧問として、當地方在郷軍人の指導に當つた。暫くして推されて村會議員となり、日夜村政のため奔走、更に區長、農會總代等に推されて之を兼任し、村政の爲め多大の貢献をなして居る。

妻フサさんは、當年四十二歳にして、愛國婦人會員として活動、銃後國民として萬遺憾なきを期して居る。長男文氏は卅七歳、夫人トクエさんとの間に一男一女あり。

下海府村濱新保

村會議員 本間 豊太郎



三百年位以前に創始された村内切つての舊家に於て代々農を以て家業となし、中途鹽業を營

みたることがある。氏は明治二十年六月六日此の世に生を享け、資性濃厚、質朴篤農家として知られ、又村政に對しては村の平和なる發展を期して、萬全の努力を爲し、勤勉にして誠意ある氏の盡力は村發展に與へて大に力あり、推されて區長となり二期勤績し、現在は村會議員に選ばれ功勞甚大である。

氏は政黨に偏せず、思想穩健を以て聞え、人に對する温和を以てし、人を容れる寛大さを有してゐる。

家族は七人、令息のみ五人にして、まことに前途多幸を期待し得る、一家和氣満々として笑聲溢れてゐる家庭である。氏は恵まれた家庭と、適切なる職務に於て、益々盡瘁貢獻、村民の信賴夙に厚く、衆みな畏服するところである。

家庭は曹洞宗の歸依者にて、氏はなかなかの信仰家である、また敬神の念にも深き人にて、氏の人格の高き所以がうなづかれる次第にして、當村に缺くべからざる重要な人材である。

女川村

村會議員 高橋 久次郎



の創家は鎌倉時代に係り、當村屈指の素封家として近

隣に普く著聞してゐる。先代重治氏は濃厚にして篤實なる資性の圓滿なる人格者にて、村民間の厚望厚くして村會議員、村助役として多年村勢伸張のために一身を挺し、盡瘁活躍をなしたる自治の功勞者であつた。その貢獻頗る多くして村各般にその業績は算へられ、村史に記録されるべき人物と稱されてゐる。

當主久次郎氏はその男にして、明治八年九月呱呱の聲を擧げし慈悲心の深い衆望家にして、資性圓滿潤達、又清廉なる人格の持主である。夙に篤農家の評判高

く、家業に精勵すると共に、尊父の志を嗣いで自治に竭し、現在村會議員、區長郡農會代議員、農會副會長等の自治産業の重任にあり、常に村民の福祉増進を念願となして、粉骨碎身の勞を執り、その貢獻裨益するところ尠からず、村中堅人物の一人として村民間の信望すこぶる厚いものがある。

長男重兵衛氏は頭腦明敏にして、いま村上中學に奉職してゐる。

三面村支部

村會議員 佐藤 健一郎

村上銀行理事として六七年來勤続し、



敏腕なる實業家として鳴らしてゐる氏は、村會議員、

消防組頭として村治に盡瘁し、その功績多大なるものがある。氏は村會議員とし

て二期、消防組頭としては實に二十五年の長期に亙り勤続し、獻身的努力を以て至誠村自治に關與してゐる氏は、資性濃厚にして膽力あり、謹直にして、仁俠的な人格者として、村民の信望を集めてゐる。

當家は約六百年前創家され、連綿とした家系をもつものにして、氏は十二代目に當り、名望家として知名である。代々庄屋を勤めた家柄であり、先代文史氏以來、明治維新を轉期として農業に従事し文史氏は村長として五期に亙り勤続し、當村の今日あるは實に氏の功績に依るところが多く、資性濃厚にして村民の範として仰がるゝに足りる人格者であり、六十七歳を以て他界されしも、村民に惜しまれたる功勞者であつた。氏は明治二十五年一月二十日當地に岳降し、先代の後繼者として村民の信望を得、村會、消防關係等より、數度表彰を受けたことがある。氏の家庭は夫人こと氏四十七歳、長男正史氏二十七歳、長女清香さん二十五

高根村關口

郵便局長 横山 辰次郎

先代又三郎氏は、現村長の祖父横山茂



樹氏の令弟で、同家は明治元年分家したものである。

自由黨華かりし頃縣會議員として三回當選し、誇々の論陣を張り大いに地方自治

の對策に活躍した縣政の功勞者である。

當主はその男で、明治九年四月二十二日の誕生である。頭腦明晰にして明敏達識の氏は、現在農會長の要職の外、郵便局長の重職を三十年間勤め、郵政事務に盡せし事績頗る顯著である。また義に氏は、養蠶業組合長、桑病同業組合縣評議員、村會議員等の公、名譽職を歴任し、高邁なる見識と圓熟せる技倆は、氏の清廉高潔なる人格と相俟つて、その功績赫々たるものがある。

當關口郵便局は、明治四十年三月十六日横山茂樹氏が開局したものである。氏は明治四十一年四月、局長の重職に就任し、勳八等を賜り、大正七年十二月勳七等に昇勳し、更に昭和十二年十二月勳六等に叙せられ、また昭和三年六月從七位を賜り、同八年八月正七位に昇陞したものである。氏の重厚なる人格は愈々重きを加え、當村切つて有力者としてその名聲噴々たるものがある。

氏の令息又三郎氏(三十六歳)は加茂農

林出身の才幹で、現在は消防組頭を勤める當村の中堅人物であり、次男清樹氏は村上へ養子として迎えられ、また淑やかな長女セン嬢は家業に従事し、次女イツ嬢は村上高女卒業の才媛で、東京タイピスト學校を経て羽田飛行機研究所に入り現在は名古屋市近藤紡績の人事課に勤務してゐる明朗なるスポーツ嬢である。

下海府村脇川

郵便局長 渡邊 保之助

遠き祖先是、海運業を營み、大和船三隻を有して遠く北海道方面まで活躍した海運界の先驅者であり、また先代善藏氏は生前當村の助役として、村行政方面に盡せし功績頗る顯著なもので、また郵便局長として、郵政通信事務に執掌し事績甚大なるものがある。徳望甚だ高かりし人であつたが惜まれて一昨年逝去した。

當主はその男にして、幼にして頭腦明晰、智慮衆に勝れし才器、長じて新潟縣立商業を卒業した秀才である。その資性

俊敏剛毅にして、明朗潤達な氏は、また統制の才にも秀で、若冠二十六歳にして凡に當村初代青年團長に推された程で、農村青年層に於ける氏の人望頗る厚い。

氏は常に「青年指導は一に指導者が實際に勞務に就かなければならぬ、亦時代に即應して實を進めねばならぬ」の持論を堅持し、非常時局に相應はしく、國策の線に副つて、質實剛健なる日本精神の涵養指導に獻身的に精勵してゐる。

現時氏は、郡青年團副團長として活躍してゐる。又先代の衣鉢を繼いで郵便局長として熱心に郵政事務に盡瘁してゐる。全く、今後の氏の進出こそ刮目して期待すべきである。

内助の功多き貞淑なる令閨との間頗る圓滿で、二男一女に恵まれ、春風洋々和樂に満ち溢れてゐる。

脇川

郵便局

當局は三等集配郵便局で、明治十三年開局したものである。管轄區域は下海府一圓に亙り、内外電信事務の開始

は明治四十一年、電話事務の開始は昭和六年である。

初代局長は本間孫十郎氏、二代大瀧金七氏、三代渡邊善藏氏で、現局長を以て實に四代目である。現在従業員は七名を數へてゐる。成績頗る良好で、これまで數回の表彰を受けてゐる。

下海府村

村會議員 佐藤 伊之松



溫和、明朗、健實なる思想と人格を有する氏は

明治七年十一月十一日生れである。因に當佐

藤家は二百五十年前に創始されたと謂はれる家柄にして、代々伊之松が襲名し農を以て家業とする。氏は夙に村政に參與し、學務委員として十年間勤続、教育界の功勞者である。濱新保より小學校移

轉に盡力成功したのである。現在は村會議員、木炭検査員、區長等に活躍して居り、村會議員として既に廿八年間の長期に亙り、木炭検査員として十八年、中、縣検査八年、郡検査十年勤続した。氏の抱負は村會及び現職に終身努力するにあり、長年の氏の功勞は枚擧に遑なき有様にて、表彰されたことも數度、今その一、二を挙げれば、村議及び木炭關係に就き村會より木盃を受領されてゐる。氏は六十五才と云へども壯者を凌ぐ意氣にて、元氣旺盛、出で、は公務に忠實にして、入りては家業に勵み、衆望普く氏を藏してゐる。

また家庭は常に一家團樂、平和に満ち三男二女の子福者である。長男は日の出汽船乙種船長として活躍、將來を期待されてゐる。

女川村南中

村會議員 伊藤 長吉

當家は開祖を鎌倉時代に發する由緒あ

る舊家である。

當主長吉氏は嚴父榮太郎氏の男として明治二十一年二月二十四日に生る。

氏は生來才能に恵まれ篤學の士にして博識、不撓不屈、努力の人である。村會議員、學務委員。養蠶實行組合南中支部長、區長、信用組合理事、農會議員の要職にあり、多方面に亙つて活躍し、その識見才腕共に町民の信頼するところ厚く村自治に盡瘁せるその功績頗る顯著なるものがある。氏は常に人に對するに誠心誠意を以てし、眞摯なる態度をもつて遇さねばならないと揚言してゐる。

氏の現業は木材業にして、事業の擴張隆盛に非常なる成功を修め、事業家として敏腕を謳はれてゐる。民政黨に入黨して、縣下の政界に熱烈なる意氣を見せてゐる。

三面村新屋

村會議員 佐藤 與松

約三百年前よりの開祖にして、八代間

連綿と續き榮えた舊家であり、當家は先代より分家創立したもので、先代は多年商業方面に力を入れて活動したが、其後は農業に従事してゐた。當主與松氏の嚴父與吉氏は七十歳、養母ユミ氏は七十三歳にして共に健在、當主は明治廿一年八月五日生れにして、村産業に意を注ぎ献身寄與してきた士にて、現在も専心努力して活躍中である。村自治に盡瘁し、區長として十二年間勤続の功勞者であり消防署に三ヶ年務めた。その他、蠶業組合代議員三ヶ年、國勢調査員三回、土地賃貸價格調査囑託三回、農業囑託一回等に及び、農林商工統計調査員として現在引續き勤続中にて、村會議員、區長、新潟縣蠶業特勵員等を歴任、盛んに貢献努力してゐる。尙氏は材木商山林事業に關係敏腕を謂はれてゐる。

家族は、養子留一郎氏三十七歳、その夫人カズエ氏は三十六歳、その間に愛孫ヨシ子嬢七歳、トシ子嬢四歳がある。與松氏令閨トラ氏は五十歳にして、現

在愛國婦人會員として銃後の守りに活躍し、與松代と共に村民の信望を擔ひ、また一家團樂の景を呈してゐる。

館越村小揚

村會議員 佐藤 彌惣

當家は小揚郡若屈指の舊家にして、代々農を營み、篤農家にして又歴代當部落の名譽職を勤



めて、當部落發展向上の爲め資すること甚大であつた。

先代金五郎氏は、頗る實直の人にして當部落民の信望厚く、寡言實行の人にして、常に黙々として鋏を取りて耕してゐる。氏は今や齡七十歳を超ゆるも、尙嬰鑠として、終日農業に従事し、其の元氣は壯者をしてのぐものがある。當主彌惣氏は金五郎氏の男として、呱

館越村小揚

製材業 菅 六右衛門



當家は當村屈指の舊家である。代々農を營みて篤農家の開へ高かつたのであるが、先代末次

郎氏に至り、製材業を開業し、當主六右門氏は父の業務を繼いで現在に至つてゐる。

氏は敏腕家の聞え高く、父の業を繼ぐや、鋭意その發展に力を注ぎ、爾來、當營業は着々其の規模を擴大し、當村の山林を伐採して之を製材し、各所に販賣して、間接に當村發展の爲めに貢献する所尠からざるものがある。

家庭には夫人イクさんとの間に三女あり、長女トクさん十三歳、次女カツさん十二歳、三女チヨさん六歳である。

三面村

村會議員 貝沼 岩治郎

當家は約三百年前よりの舊家にして、



先祖は庄屋を勤め現在收入役である貝沼家より當主に



當家は約三百年間連綿と續く家柄にして、當村有數の舊家にして代々農業を營み、氏は先代

至つて分家したもので、家業は代々農業に従事してゐる。先代氏は村治に専心力を盡し、夙に村會議員として活動し、第三期間勤務せる功勞者にして、昭和年六十五歳にて他界した。岩治郎氏はその長男にして明治二十六年四月一日生れ資性健實、溫良にして當家七代目の主、先には區長として四ヶ年間盡瘁し、現任村會議員に推され、村政發展に努力する一身を賭してよく職を果し、村民の衆望甚だ厚く、また農會代議員として、農會に精勵、その改良發達に献身してゐる。

現在の住居は、四十二年前に改築したものである。

下海府村越澤

村會議員 齋藤 甚五榮門

當家は約三百年間連綿と續く家柄にして、當村有數の舊家にして代々農業を營み、氏は先代伊八氏の長男にして、夙に村治に參與し村會議員に推され、また國勢調査員を二回務め、縣より稻作改善委員に任命されたことがある。現在村會議員として活躍功績甚大である。氏は穩健、謹直にして又勤勉敦實の人として知られ、農業振興農事改良研究に熱心なる人である。

兵役は歩兵上等兵にて、家族は五人、圓滿にして平和に満ち、家宗は曹洞宗である。

平林村葛籠山

元村長 齋藤 清右衛門

當家は開祖以來氏をもつて九代目を數ふる舊家にして、村内齋藤家の總本家、代々名譽職を勤め信望ある名望家である。先代清右衛門氏は日露戰爭當時、村長として村治に關與盡瘁し、産業組合長として村の産業經濟の發展に功績あり、又村會議員を二十七八年の長期に亘り勤続したる功勞者にして、當村に於て忘却すべからざる人材であつた。清右衛門氏は先代の長男として明治十八年生れにして本年五十四歳なるも、先代の血を承けて村治に多大なる關心をもち、村長として推舉さるゝや、村内各學校建築に關與し活躍貢献すること大にして功績をあげたるは特筆すべきである。氏は又村會議員を數期に亘り勤続し、學務委員として教育界に功績多く、産業組合長として村の産業經濟の發達に寄與、一身を挺して村治に邁進し、名村長の名を謳はれ、衆望

を得た。

氏の政黨關係は嚴正中立、資性溫厚にして眞摯敬虔なる好紳士であり、全ての公職を、惜しまれて辭したる今日も村民の信望篤き人格者である。氏の家庭は夫人シン氏、長男清利氏、他令息二名及愛孫二名にして、シン夫人の生家は臺北北浦原郡にして舊家名門の家柄であり、清利氏は早稻田大學卒業の秀才にして、現在横濱市鶴見町朝日スレート會社に勤務し、前途有望なる青年紳士として將來を囑目され、次男は滿洲に在住、大陸に勇飛せんとしてゐる將來性ある青年、三男は村上中學三年の秀才である。氏の家庭は頗る圓滿にして宗旨は禪宗である。

保内村

元村長 森 直吉

當家は當村屈指の名門にして、代々名主を務めたる家柄である。家號を仁右衛門と稱し、當地方有力者の一人である。氏の先代は區長を三十五年間勤続せら

れ良く其の職責を果した人である。

當主直吉氏は先代仁右衛門氏の長男として明治十六年十二月、呱呱の聲を挙げた。性溫厚篤實にして、而も實踐窮行の人である。村民の人望は頗る厚いものがある。

氏は初め推されて、第一回國勢調査委員、第二回國勢調査委員と二回に亘つて國勢調査委員に推され、複雑困難なる調査事務に當り、良く其の調査事務を果したのである。間も無く村民に懇望せられて、村長に就任、爾來永年に亘つて村自治の爲め貢献する所大なるものがあつたので、地方自治功勞者として感狀並に木杯を授與せられたのである。

其の後村長を辭任したのであるが、今尙幾多の公職にあつて、村自治の爲め全力を注いでゐる。即ち郡養蠶實行組合評議員、村會議員(當選三回)、學務委員、區長、信用組合理事、神社氏子總代等の公職を兼任して居る。

家庭にありては、トク夫人との間に三

男あり、長男徳松氏は當年二十五歳にして目下新潟醫科大學に在學中である。

西神納村九日市

前村長 素封家 登坂 千代松

當家は當村九日市の素封家にして、先



代銀次郎氏は、弘化四年の生れ、八十二歳の高齡を以て天壽をまうして去さる。生前、村會議員に選出され、當村發展の爲め貢献された功勞者である。

當主千代松氏は、先代銀次郎氏の男として明治十年十二月二十日誕生、資性英敏、少年時代より群童を抜きて頭角を現はし、其の將來は衆人の囑望する所であつた。當村高等小學校卒業後は、祖父傳來の家業をつぎて農業に従事し、村民の信望厚く、三十三歳にして既に村民多數

の支持を得て村會議員に當選、爾來今日に至る迄引續き村會議員として、村自治の爲めに盡瘁してゐる。其の間氏は、耕地整理評議員となつて、當村永年の懸案たる耕地整理に盡力し、之を完成せしめ又五代同信用組合長として、昭和十二年迄在任し、幾多の功績があり、又大正十二年助役に推され、昭和二年迄在任、村長および補助者として、産業、交通、教育各方面に互つて改善進歩を圖り、其の效果大いに見るべきものがあつた。後、村長の要職に就任し、當村開發に日夜奔走さる。同氏村長在任中、其の功績にして特筆すべきは、本村用水の完成に關するものにして、全村農業を以て家計とする爲村に完全なる治水を完成せしは、全く同氏の努力の賜と云ふべきである。

氏は用水完成の爲め上京し、當局に對し國庫より補助すべきことを交渉して、家計を顧る暇無く、遂に國庫より補助を得るに成功して、昭和七年起工、同十年其の完成を見るに至つたのである。その他

村政の爲め貢献せし點、枚擧にいとまがない。

此の他、初代消防組頭、第一回第二回國勢調査委員、學務委員を歴任、特に學務委員として永年勤続し、現に小學校擴張に際しては、進んで敷地寄附を申出でられ、初等教育の伸張發展に貢献する所大なるものがあつた。

氏は現在九日市區長、學務委員として在任中である。

夫人チヨさんとの間に一男四女あり。長男銀次郎氏は中町農學校出身の才幹、近衛三聯隊に入營し出征せしことがある氏は趣味として、盆栽を好み、梅、松蘭等を蒐集するも、中に優秀なるものが多し。

下海府村寒川

前助役 大瀧 甚吉

當家は大川谷村より移住し來れる舊家にして、其後分家し、氏の代にて四代目に當る。代々農を業とし、篤農家として

知られてゐる。先代金七氏は若年にして北海道石狩にて廻船問屋を営みたるも、その後歸村して、村長、助役等を多年に亙り勤続して功勞甚だ多く、資性剛毅にして進取の氣性に富み、村政家として實行の人であつた。甚吉氏は明治六年六月二十日生れにして、懇望されて當家に來りたるものにして前助役として二回、村會議員としても長年に亙り村政に盡瘁し來る。濃厚篤實にして實直、清廉なる資性の持主である。氏の家族は十一人の大家族であり、長男は家業に従ひ、三男は海軍軍人として今回の日支事變に出征しよくその責務に精勵し居る模範的帝國軍人である。

女川村蛇喰

學務委員 前村長 山口 茂 登

氏は加茂農林出身にして、元村長として村政に關與し、多大なる實績を擧げ、當村今日の發展をみるに至つたのは一に氏の功績に依るものと云つても過言では

ない。氏は現在學務員、養蠶實行組合蛇喰組合長として東奔西走、村治に盡瘁してゐるものにして、信用組合理事としては同村産業の發達、農民の經濟更生に力點を置きて、日に月に成果を擧げつゝあるは、氏の努力と終始一貫、誠實をむねとする行動に依る。



當家は代々庄屋の家柄にして氏は十代目に當り、村民の信望篤き舊家である。氏は先代彌次郎氏令息として明治三十一年十月十九日當地に岳降し、資性濃厚にして實直、正義を愛し、眞實を愛する人格者である。嚴父彌次郎氏は村長として二期、郡會議員としても當地方自治に功績多かりし人であり、濃厚篤實なる村政家として徳望が篤かつた。尙氏の令兄は剛毅果斷、率直にして清廉なる帝國軍人

であつたが、明治三十七、八年の日露戰役に出征して多くの軍功をたて、困苦よく帝國軍人としての責務をつくしたが、二〇三高地の戦ひに於て名譽の職死をとげ、榮譽ある家名を残した。氏の家族は現在七人にして長女は新潟工藝女學校に在學中の才媛であり、家庭は圓滿にして和氣藪々としてゐる良家庭として村民の信望がある。

保内村花立

學務委員 伊藤 徳太郎

先代徳太郎氏は六十九歳の働き盛りを以て他界された人であるが、生前學務委員、區長、荒川用水組合幹事等に歴任して、當村の爲め多大の貢献を爲した人である。母堂なか氏は八十二歳の高齡であるが、今尚ほ健在である。

當主徳太郎氏は先代徳太郎氏の男として、明治九年十二月六日、呱呱の聲をあげた人である。濃厚篤實而も實踐窮行の人として、村民の信望を一身に集めてゐる

る。最初推されて村會議員となるや日夜村治の爲め奔走、良く村政の整備刷新、當村公共施設の充實改善の爲めに貢献、多大の功績を挙げたのである。

特に當村小學校の建築に當つては、異常な努力を爲し、多大の功勞があつた。後、村會議員の公職は退いたが、今尙は學務委員として、兒童教育に多大の關心を有し、常に其の重要性を説いて、村民の注意を喚起し、兒童教育の輕視すること無からしめんことを期して居る。氏は又區長を兼ね區民の福祉増進に盡力して居る。

家庭にあつては、夫人ますよさんとの間に一男三女あり、長男榮二郎氏は當年三十七歳の働き盛りであつて、加茂農林學校にて、農業並に林業について學び、令閨たみ氏は當年三十四歳賢夫人である

三面村布部 學務委員 佐藤 寛司

氏の家庭は四男三女の恵まれたる子福

者にして一家團樂の華をなし、明朗にして、常に笑聲屋内に満ちてゐる。先づ長男作之祐氏は陸軍歩兵少尉として、支那事變の發生するや應召出征、現在大原方面に奮戦活躍中である。次男國廣氏は當年二十七歳高田署に巡查拜命勤務中にして、三男喜久男氏は二十五歳、他家の養子となり、四男の久君は十六歳、現在中學在學中である。また長女ハツエ氏は三十二歳村上高女出身の才媛、二女久江氏は二十四歳、現在村上町に在住、三女トミ嬢は小學校通學中、斯くの如く一家皆健康にして、且つ優秀なる子息女を有する寛司氏のこれまでの努力は如何許りかと察知される。氏は稀に見る人格者にして、殊に子弟の教育については人一倍熱心にして、子弟みな長じて外にゆくも内にあるも、君國の爲に一意邁進せるその成長は、氏の懸念なる努力と人格の賜である。

佐藤家は當主を以て四代目とし、家業は代々山林、農業を營み、實父は久吉氏

實母はクラ氏、寛司氏は明治二十一年二月一日の出生にして、天性謹嚴また眞摯ある人にして、村會の功勞多く、前には村會議員、區長等に選ばれ、現在は學務委員、檀家總代等に推され、村民ひとしく信任を寄せ、敬慕的になつてゐる。

瀬波町 農會長 細野 與一郎

町内有數の舊家にして、代々家號を與



左衛門と稱し、名主を勤めたる名門の家柄

である。先代與三吉氏は町開拓に功勞あり、郡會議員、學務委員を爲し、また町會議員は三十七年間勤続し、民政黨に入り、地方行政のために大に盡力した人である。現在瀬波町と細野家の住居を連ぐ橋は、氏の努力によつて懸けられたるも

のにして、地方民の利益は莫大なものである。尙與三吉氏は文久二年九月十八日生れ現在七十六歳の高齡を以て健在、功績を稱へられてゐる。夫人キミ氏は七十五歳にして本家惣右衛門氏の娘である。

その長男である與一郎氏は、資性濃厚篤實にして町治伸展に努力してゐる。現在農會長として農會の進歩發達に精進しリヤ夫人四十九歳は、現在瀬波町國防婦人會々長として銃後の守りに活躍してゐる賢夫人にて、長男與造氏は軍人として目下上海方面に奮勵、君國の爲に献身してゐる偉丈夫である。夫人イチ氏は母堂に當るリヤ夫人と共に、留守宅に銃後の守りを固め、一家甚だ圓滿なる光景を呈してゐる。

關谷村下關 郡農會長 佐藤 泰造

當家は三百年前よりの舊家にして、家號を又助と云ひ、當地方に於ては渡邊萬壽太郎氏と共に大財閥として響いてゐる

屈指の資産家である。

先代は第一回縣會議員として有名であつた。縣政の爲に堂々の論を張つて活躍し、縣治に貢献する處勤からず。

當主泰造氏は現在六十八歳の高齡を以て、先代の志を繼いで縣下に雄飛してゐる。現に、村上銀行大株主、村上水電社長、岩舟郡農會長、新潟縣溫泉副會長、關谷村郵便局長、新潟縣地方森林會々長、縣森林會理事、關郷溫泉組合長、新潟縣信用組合聯合會理事、岩舟郡木炭同業組合長、關谷村農會長、關谷村信用組合長、北越後米改良協會會長、桂岩寺檀家總代大藏神社氏子總代等の諸要職を兼任してゐられる。

資性、英邁にして温健、博識にして俊敏なる氏は、縣下の要職によく手腕を見せ、その功績多大にして枚擧に遑あらず至公至平の人格者にして、稀有の材幹である。縣下有數の自治功勞者にして、元老として衆民の認めるところである。令息又助氏は慶應大學法科出身の秀才

で、抜群の成績を以て卒業し、歸郷して父君の薫陶を受け、現在は村上水電常務取締役の要職にあり、父君を助けて、事業の發展隆盛に努力しつゝある。

金屋村

農會評議員 遠山 武吉

大正八年シベリヤ事變に際し出征したる氏は、



各地に轉戦、武勳赫々たるうちに事變終結を告ぐるや、勳八等に叙せられ、武運めでたく凱旋した。

其後村政に關與して着々と實績を擧げ金屋村名譽職助役として昭和八年八月より十二年八月まで勤続して功績多く、金屋村會議員として二期に互り専努力、村民の福利と安寧を計り、新潟縣家屋稅調査委員として一期、第一次及び第二次

委員として村政に盡瘁したものである。現在氏は金谷村青年團長として青年の教化指導に當るなど信望厚き人格者であり又金屋村農會評議員として、農村としての發展向上を助成するなど、氏の功績多大なるものがある。

當家は先代竹藏氏の創家になるものにして、氏は明治三十一年十一月十六日竹藏氏長男として呱呱の聲を擧げたるものにして、本年四十一歳の働き盛り、内に外に寧日なき日々を送りあるも、その家庭は圓滿にして和樂に充ちてゐる。氏の家族は六人にして、長女は新發田女學校に通學中の明朗にして聰明なる令嬢、氏を中心にして家庭に笑聲絶ゆる間なきは、實に氏の資性明朗にして潤達、しかも、勤勉にして篤實なる性格の反映であらう。

女川村

産業組合長 松坂平松
從七位勳六等

氏は新發田中學校卒業後、一年志願兵

として、日露の戦役第三軍に従軍、彼地で奮戦華



功をたて郷里に勇名をとどろかした

勇士である。氏はその功に依つて陸軍中尉、從七位勳六等功五級を賜はつた名譽の士にて、資性剛毅潤達、勇壯果斷にして、村政に參與しては積極的貢獻をなし推されて村會議員となり、また村長として村政の圓滿發展を期して盡力したのである。現在はまた産業方面に自ら先頭に立ちて村民を鼓舞鞭達し、女川村産業組合長に選ばれ、組合の發達は即ち村民の福祉増進にあることを信じ、懸命努力してゐる。また氏は事業的才腕を有し、村上銀行取締役、及び村上水電會社の取締役を兼任、氏の敏腕は縦横に活躍し、依つて村民の信任を得ること篤く、當村切つての有力者として重要視されてゐる。

西神納村南田中

農會長 大倉榮吉
正八位

當家は村内屈指の舊家にして、氏の嚴父榮氏は明治元年生れ、村會議員、信用組合専務理事等を歴任、村自治に努力されたが、昭和十一年病没された。

氏は資性謹嚴實直にして、村立中學校を卒業後、新發田歩兵十六聯隊に入營し一年志願兵として勤務、大正八年少尉に

任官さる。除隊後は在郷軍人分會長として七年間青年を訓育指導し、實踐躬行、身を以て模範とする。消防部長たること三年、青年團區支部長として十年に及びて勤続す。現在は村會議員、學務委員、信用組合理事の諸要職に就任、農業をもつて全村家業とする農村の農會長として五十年に及び、非常時下農家經營の心臓部に新鮮なる空氣を投じ、荒川米の聲價日々にその實質を認められ、反別當り收穫も毎年益々好評噴々たるものあり、是れ實に氏の慧眼と着實なる農家經營法によるもので益々成績をあげつゝある。又小作調査委員としても、創設當時より盡力さる。

氏の農業經營に於ける力量と見識は村民一般の信望を集め、名農會長として近郷一帶に互つて響く。

ナオエ夫人との間には長吉氏を初め五男三女さんあり、子福者として羨望されてゐる。禪宗を信仰し、歸依頗る深きものがある。

山邊里村上相川

農會長 高野丑松

丑松氏は明治十年九月五日生れにして先代駒太郎氏の長男である。高野家は開祖以來、八代を累ぬる舊家にして、駒太郎氏は村長、助役等を歴任せる當村の有力者にして、村自治の爲に残せしその功績は甚だ顯著なるものがある。

當主は村會議員、米穀検査委員等の要職を久しく勤め、現在は農會長、區長等にして相當活躍せし人であつたが、氏は政黨には關係せず。

資性濃厚實直、清廉潔白にして、所信貫徹に萬難を排して邁進する不言實行肌の人、その卓越せる識見と手腕は、村自治によく功績を残す。曹洞宗を奉じて信仰が頗る深い。

ナカノ夫人との間に一男一女あり、長男謙爾氏は、現在村會議員の要職にあつて、村内の産業自治の隆盛に關心されて

ゐる。長女はハツノさんと云はれる。

館越村小川

青年團長 船山久

明治三十八年四月二十二日に呱呱の聲



を擧げた氏は、懇望されて當家の養嗣子となりたるも

ので、養父母は現在米領ハツイに在住で頗る健在である。

氏は幼少の頃より智慮業に勝れ、群童を抜きて頭腦明敏、秀才の譽が高かつた長じて村上中學に學び同校を優秀なる成績で卒業した。その資性濃厚篤實で謙讓の美德を備へし圓滿なる人格者で、また村内外の信望絶大なるものである。

現在當村役場に奉職して熱心に業務に精勵してゐる氏は、本村の青年團長としてまた農村青年の健全なる日本精神の涵

養、非常時局に即應した指導誘掖に盡瘁して好評噴々たるものである。

内助の功多き令閨サダ子夫人(二十七歳)との間琴瑟相和して頗る圓滿で、長男君(五歳)、長女洋子さん(九歳)、次女光子さん(七歳)の一男二女の子寶に恵まれて春風駘蕩たるものがあり、和氣霽々たる笑聲に包まれ、附近の羨望を集めてゐる。

誠に氏の家庭こそ、衆の模範とすべきである。因に信仰心深い氏は、曹洞宗に歸依してゐる。

三面村

岩船郡養蠶業 丹田 照一郎



明治二十五年生れ當年四十七歳の壯々たる氏は農會の發展に盡し殊に養蠶は種々改良を行ひ

その發展に氏の力、大に與つてあり、農會長として、養蠶實行組合長として信望厚く、亦郡農會に十餘年間關與してゐる現在岩船郡養蠶業組合聯合會長として盡力し普く名聲を馳せてゐる。

丹田家は七代前の開祖にして、舊家として名高く、先々代より酒造業を創め、亦材木を多數取扱ひて有名となつた人である。先代重太郎氏は本年八十三歳にて健在、夙に村政に關與、有力者として重んぜられ、戸長、村長を歴任し、現在の民政黨の前身たる改進黨より明治二十八年推されて立ち、縣會議員に當選した人であり、一家の名望高く、村内有数の名門として尊敬せられ、當主照一郎氏は、養蠶業聯合組合長として活躍してゐる外村上水電監査役の要職にあり、また當地方の民政黨の巨頭として目され、近き將來に縣會議員たるべき人物と期せられてゐる。氏は加茂農林出身の俊才、温和また眞面目にして、學識厚く囑望せられるところである。



先代重太郎氏 屈指の名門である。今より三百餘年前より

一家は尊父重太郎氏と母堂トラノ刀自八十二歳にして健在、またコン夫人との間に二男二女ありて、一家頗る圓滿朗作つてゐる。コン夫人は當年四十一歳でなる家庭である。

高根村黒田 産業組合長 黒澤 宏之資

當家は當村有数の舊家にして、且當村り當地にありて歴代農を營み、篤農家である。

尊父重太郎氏は人格高潔の人にして、村民の人望最も厚く、當村發展の爲め、幾多の功勞ありし人である。即ち氏は、戸長役場時代の戸長を勤めたる後、村長村會議員、學務委員、郡會議員、農會長

等の要職を歴任、よく其の職責をはたしたのである。特に氏は、中間商人の擗取を排除するは、農村更生の一對策なりとの見地から、産業組合の創立を提唱し、自ら發起人として日夜奔走し、現高根信用組合の設立を見たのである。高根信用組合の設立を見るや、氏は推されて同組合の組合長に就任、終生、同組合組合長として組合の健全なる發展に努め、當組合今日の基礎を固めたのである。氏は洵に信用組合の父と云ふべきである。尙ほ氏の功績は、特に顯著にして特筆すべきは、土木事業、學校建築、製材等に關するものである。氏は幼少の頃より漢學を學び、同方面の造詣深く、學者肌の人である。

當主宏之資氏は先代重太郎氏の長男として呱呱を擧げらる。嚴父に似て、性温厚篤實、人格高潔の士にして、村民の人望厚く、昭和五年嚴父重太郎氏の死去せらるゝや、衆望を擔つて其の後任として組合長の要職に就任し、爾來、寢食を忘

れ、當組合の爲め奔走してゐる次第である。當組合は、當村發展の重要な役割を果しつゝある。氏は學務委員をも兼任し、從來幾多不備の點ありし學校施設の充實に盡した。

の女男として呱呱の聲を擧げたのであるが、性明敏にして而も温厚な人である。氏の養父倉藏氏は着實の人にして、村民の人望厚く、青年時代より既に區長におされ、續いて農會副會長、村會議員、學務委員、檜原耕地整理組合の要職等を歴任し、よくその職責を果して、前年他界せられたる人である。氏は生前、明敏の聞き高かりし當主寅次郎氏を懇望して養子として迎へたのである。

猿澤村檜原 農會長 太田 寅次郎

當家は當村屈指の舊家である。當主寅次郎氏は其の七代目である。代々農を營み、篤農家として知られ、常に當村の發展の爲めに多大の貢獻をなして來た家である。

當主寅次郎氏は、當村檜原横井寅松氏

當主寅次郎氏は温厚の人であるから、村民の人望頗る厚く、現に村會議員の要職にあるが、農會の事業にも精通して、農會長として最適任者である。氏は農會施設の充實をはかつて、村民をして之を充分利用せしめ得る様に力めてゐる。爲めに當村に於ける農會は、村民と密接不離の關係にあり、農會は當村の父とも云ふべきである。氏は此の他、村會議員にも當選することは二回、又現在學務委員を兼任して居る。

家庭にありては、夫人との間に五男四

女がある。

鹽野町村早稻田

農會長 富樫 彌忠太

經濟更生指定村にある當村の農會長の



重職にありて、鋭意専心更生事業發展のため努力貢献

する處甚大なる氏は、先代彌八郎氏の男として、明治三十四年十月二十五日に呱呱の聲を擧げたもので、また當家は本村屈指の舊家として著聞であり、現在の村長は當家より分家せしものである。先代彌八郎氏は濃厚篤實にして圓滿なる人格の所有者で徳望甚だ高かりし人である。夙に公共自治に進出し、若冠二十二歳にして村會議員に當選、以來實に二十八年間本村の公共自治に盡してきた自治功勞者で、その功績顯著なものである。

當主は幼にして資性英邁にして頭腦明敏、長じて、村上中學に學んだ秀才である。農村青年間の人望頗る厚く、曩に氏は青年團長として農村青年の健全なる精神涵養の指導誘掖に當つて好評噴々たるものがあり、續いて消防組頭の重職に就任するや、村消防組の改善向上に、献身的に盡力し、また統制の才に秀でたる氏は部下の敬慕信頼を一身に集めて名聲赫赫たるものがあつた。

現在氏は當村農會長の重職にある外、岩船郡養鶏組合聯合會長として創立以來より組合の發展に盡し、また養蠶業組合部會長、岩船郡養蠶組合評議員等を兼ねてゐる本村切つての逸材である。

讀書、園藝に興味深い氏は、家庭に在りては、貞淑にして内助の功多き令閨ヤス夫人(三十五)との間頗る圓滿で、三男一女に恵まれ、長男哲太郎君は村上中學に、長女悦子嬢は村上高女に、共に在學中で、氏の一家常に春風駘蕩たる和樂に包まれて、至幸至福を極めてゐる。

中俣村雷

農會長 木村 廣吉

次期村長の呼聲高き氏は徳望の人、村民の信望頗る篤く、濃厚にして圓滿なる人格者である。氏は又讀書を好み、常に時代と共に發展し、生長するを期してゐる。氏の抱負は一に村内の平和を愛し、着々と發展し行く村の燈したらむとしてゐる。氏は元村長として今日の村を建設したる第一の功勞者であり、昭和十年四月より農會長としての要職に在る農民の理解者であり、共存共榮を目的とせる斯界の重鎮であり、學務委員としては教育に力を注ぎ、その貢献すること甚大である。大正貳年より村會議員に推され自治の爲に一意邁進したる功勞者にして、その業績多大に上る。

當家は約四百年前に創家された舊家に於いて、二代長七氏中興の人といふべく、徳望有り當家今日の素因を作りたる人材であつた。當主廣吉氏を以て七代目に當

る名望家である。代々庄屋、戸長を爲し

村政家を輩出した家柄であり、産林、農業を營み、廣大なる土地を有して益々發展、躍進を續けてゐる。

氏は先代藤吉氏の長男として明治十九年四月生れの働き盛りである。氏の家庭は庄内鶴岡より嫁し來る夫人サクヨ氏、男子四人、女子二人の子福者にして、サクヨ氏は賢夫人として令名高く、子女の薫育に力を盡し、氏の内助者として貞淑なる夫人である。その家庭は圓滿にして美しく、近隣の信望頗る篤き、良家庭である。

下海府村寒川

農會長 齋藤 治助

代々家名を「木屋」と稱する齋藤家は家系を傳へるすでに九代にして、當地方屈指、大地主と聞える家柄である。また累代庄屋、名主を勤めた名門の家柄、先代市助氏に至るまで木材業を家業となした。市助氏は郡制當時郡會議員に推され

議員間にも信望すこぶる厚くして、郡會



先代市助翁

し、多大の貢献を各方面に印した。村自治に關與しては村長の重任を數期の永きに互つて歴任、當村開拓に大なる寄與をなし、殊に鐵道開通當時、驛設置問題に村民の衆望を擔つて献身的活躍をなし、遂に現在の寒川、桑川の二驛を設置せしめた。また寒川の史跡指定たらしめたのも氏の盡瘁に依るものにして、その功勞もその名を謳はれ、青年會の手に依つて役場の近くに記念碑が建立されてゐる。當主治助氏はその男にして、出生は大正元年九月七日である。資性快活淡明にして、頭腦明晰、幼時より學業成績すこぶる優秀にして俊才の名高く、加茂農林

學校に學を修め、夙に由緒深き家門の長

として、將又公共の一員として、一頭他を擡んじ、その才能と手腕を謳はれ、村民間に殊に青年間に信望高く、現在消防組頭、農會長等の要職に在り、その卓越せる手腕は愈々各方面に效を奏し、地方稀に見る材幹と稱されてゐる。その將來は村を背負つて立つべき人物として、村長なる器として期待を以て矚目され、齋藤家の名は愈々近隣に普く及んでゐる。むつゑ夫人は淑徳の譽高く、間に三女さんあり、和樂の家と羨望されてゐる。

上海府村

農會長 七右衛門



氏は歩兵にして現役中朝鮮守備隊にて渡鮮し、日露戰役に參加し各地に轉戦又轉戦武勳々々

たる帝國軍人である。氏は大正十二年
郷軍人分會長として就任し、後村長に推
され村自治に盡瘁したる功勞者にして、
農會長としての實績多大にのぼり、明治
初年郵便局長に就任以來、明治三十年よ
り村自治に關與し、米の検査員等に歴任
したる村政治家にして、常村の今日有るは
實に氏の功績と言ふべきである。因に當
家は代々上海府村大田に居住し、當代十
代目に當る舊家名門にして、農業及養魚
場を家業として經營し、信望ある名家で
ある。

氏の嚴父も村長として功績あり、氏は
明治十一年十一月の生れ、資性濃厚にし
て、眞摯清廉の人として村民の信望篤く
米検査員として大正五年、三つ組の銀盃
を受領したことがあり、政友會の重鎮で
ある。

氏の家庭は十五人の多數にして男四人
女四人、令息二人は北海道拓殖に従事す
る雄心の青年にして、將來を囑目されて
ゐる。

山邊里村山邊里

郡醫師會長 小田 利吉

當家は昔、當村の名門の家柄たりし、
小田庄六家より五代前に分家せし舊家で
ある。

氏は、明治十二年十二月二十八日生れ
長するや、頭腦明晰、英邁にして醫術を
以て身を立てんと志し、金澤醫大に學び
熱心に學業に勉み、優秀な成績を以て卒
業するや、郷里に歸りて開業し、農村の
衛生思想に意を注ぎ、村民を訓育す。館
越村學校醫、山邊里村學校醫として、村
民兒童の健康に關して献身的に盡瘁する
等、從つて信望厚く、又郡師醫會長二期
を勤めつゝあり、氏の醫師會長は當村と
しては適任者にて村民の好評を博してを
り、副會長、遠山衛平氏と共に圓滿に郡
内を善導しつゝある。氏の堅實な技術は
よく患者の治療に好成績を挙げ、村民の
深く感謝してゐるところである。
徳義心厚き氏は、醫術報國を旨とし、

村民の救済に當つてゐる。

長男は日本大學醫科を本年卒業したる
俊才の譽高き、材幹にして、現在函館病
院に勤務され、熱心に學術に研鑽に努力
してゐる。

西神納村今宿

信用組合長 近藤 仁右衛門

近藤家は本村有数の舊家なり。三百年
以前より當地に在住、氏の宗祖父眞吉氏
は本村三代目の村長として明治三十年に
就任、本村の爲め多大の貢獻を爲した人
である。氏は資性剛毅にして而も質素の
人である。

當主仁右衛門氏は先代宇金太氏の男と
して、明治三十四年七月二十五日誕生、
長じて農林學校に入學したるも、卒業間
際に尊父の長逝にあひ止むなく同校を中
途退學し、家業を繼いだのである。

明治十二年七月、信用組合長として、
選出されるや、當時危機に瀕してゐた組
合の更生を決意し、自ら出資し、組合精

神の普及徹底の爲めに各種の具體案を次
次に實現し着々其の實績を擧げて居る。
尙ほ氏は兩神納用水評議員である。

なほ氏は信用組合の發展は村民一般の
福利を増進する所以であるとの所信の下
に銳意其の發展を期しつゝある。村民は
若き組合長の熱意と敏腕に多大の期待を
かけて居る。

氏は神宗の信奉者である。着實にして
極めて研究的である。

家庭にありてはクニ夫人との間に二男
二女あり、圓滿なる家庭は村民の羨望す
る所である。

村上町肴町

消防組頭 吉川 廣吉

酒、醬油醸造業として「松の露」(登録)
「常盤川」の二醗酒、及「カマセキチ」
醬油を醸造し、郡下はもとより、東京、
北海道方面にまで販賣し、斯界に重きを
爲す。當家従業員は十三名にして、品質
優良により屢々表彰を受けたる名醸造家

である。當家は代々酒醬油の醸造を業と



父嘉右衛門氏は慶應二年生

れにして、多年町會議員として町政に盡
瘁せる長老であり、町民の信望厚き人格
者である。氏は嘉右衛門氏長男として明
治二十二年十一月八日當地に呱呱の聲を
擧げ、村上中學を優秀なる成績で卒業し
たる後、村上町消防後援會評議員として
町自治に功績少なからず、大正二年十一
月九日より村上町消防に關與するや、爾
來二十數年間勤続、多大の貢獻をなした
るものにて、村上地方に於て消防の先輩
として屢々表彰を受け、村上本町消防組
との合併に盡力しあり、組頭として昭和
四年九月就任、將來町會議員として囑目
さるゝ材幹である。氏の家庭は尊父嘉右
衛門氏、母堂つ氏、長男英五郎氏、次

男鐵藏氏、長女ちよ氏、のお氏、きよ氏
にして英五郎氏は村上中學卒業後、秋田
縣廳に勤務してゐる、將來ある青年紳士
である。

關谷村山本

消防組頭 市井 道次郎

當家は市井仁右衛門氏の分家にして、
本家仁右衛門氏は當地方の素封家にして
大地主である。氏は尊父幸太郎氏次男と
して明治十九年十二月二十五日岳降した
るものにして、資性濃厚篤實にして、責
任感強く義氣に富める正義の人である。
消防組頭の要職に在つて献身その任に當
り、一貫發展に邁進し十余年の間銳意努
力した至誠の人である。同地消防組は初
代佐藤梯造氏、二代市井道次郎氏であり
歴代發展に發展を重ねて今日に至つた。
氏は又農會副會長、村會議員、學務委員
の公職に有り村自治に功績多く、學務委
員としての氏は教育に重大なる關心を持
ち、我國の將來は一に第二國民の相肩に

ありと思し、その徳育及體育に努力、健全なる第二國民の養成を叫んで立つてゐる重鎮である。

氏は圍碁に興味を持ち、既に素人の境を脱した技量の持主であるが、氏の精神生活は圍碁に依つて完全なるものとなりたるの感あり、公共事業の爲東奔西走、寧日なき内に在つてよく閑日を得、圍碁を愉しむの餘裕を持つてゐる。氏の家庭はひで子夫人及加茂農林學校卒業の長男利也氏は現在高等農林學校在學中の秀才にして洋々たる前途を持つ青年であり、次男才治氏も加茂農林卒業の秀才、長女和子さんは聰明にして淑やか、夫人は内助の聽え高き賢夫人であり、氏の良き半身として子弟の教育に力を注ぎ、よく今日の氏として後顧の憂ひ無からしめてゐる良夫人である。

平林村

消防組頭 安齋 惇次

氏は西蒲原郡彌彦村の名家石川惣次氏

の三男にして、昭和四年安齋俊造長女ミ



キ氏と養子縁組をなした。養父俊造氏は用水組會議員

農會副會長、村會議員として盡瘁功勞あつた人である。三年前に他界した。

惇次氏は明治三十九年五月十八日生れ資性剛毅にして誠實、加茂農林卒業後、早稻田大學法科に修學せし俊才である。卒業後は村治に懸命努力し、前平林村青年會副會長として、青年の指導に當り、大いに士氣を鼓舞した。昭和十三年一月消防組頭に就任、村會議員、學務委員として自治に、教育に、汎ゆる方面に活動し、村民の信望を擔つてゐる。尙氏は水上銀行平林代理店、千代田生命同代理店をしてゐる。卓越せる識見と博學を以てその名聲普く、村民の信望は日に日に高まり、氏の

前途は洋々として耀いてゐるのである。

氏の家族は養父の父君廣太郎氏は八十歳の高齡なれど元氣矍鑠として、養母トク氏は六十三歳にして共に健在、ミキ夫人は三十二歳にして溫良優雅である。賢夫人の名高く、その間に一男二女ありて家庭は和氣霽々、美しき家庭である。尙氏は、劍道二段を有する偉丈夫。

館越村十川

信用組合理事 田村 修一郎

當家は開祖以來既に十代、榮々として



續いた舊家にして六代目頃まで庄屋を勤め、祖父寅藏

氏は村長を永年勤めて居り、その他の名譽職にも就き村政に寄與せること甚大の人にして、七十一歳の高齡を以て他界された。

氏は資性圓滿潤達、徳望高き人格者にして、幼年時より俊才と聞え、村上中學の出身である。夙に村政に關與、國勢調査委員たること三回に及び、現在は推舉されて信用組合理事、養蠶實行組合監事軍人分會理事、消防部頭等、要職にあり多方面に努力盡瘁すること筆舌に盡きずして、村政發展の上に大いなる利を齎らした。

田村家は當村切つての資産家である上に、當主の村自治に於ける功勞とまた氏の溫和なる人格と相俟つて、村民の信望篤く、有力な存在をなしてゐる。氏は政友會に屬し、政治方面に於ける活動も頗る活潑になされてゐる。

家族は、キヨ夫人廿七歳にして、溫良典雅の令名高く、賢夫人として廣く聞えてゐる。現在、非常時局に立つて愛國婦人會員となり、銃後の守りに盡力してゐる。長男英男君は當年六歳の可愛い盛りにて夫妻はその成長を樂しみにしてゐる。斯くの如き圓滿多幸なる家庭にある氏の

前途は洋々と輝き、將來を非常に囑望されてゐる。

三面村中新保 高橋 源平

當家は中新保部落中に於ける屈指の舊



先代鶴松氏 父の鶴

松氏は教員を夙に奉職し長年月に亘つて育英界の爲に、努力貢獻せし功勞者である。人格完成並に敬神の念を啓發するを以て第一義となしたその眞摯な教育態度は、よく村民の尊敬を集む。

當主源平氏は明治三十五年一月六日、尊父鶴松氏、マツヨ母堂との間に生れ、村上中學校卒業後は、父君の志を繼いで教育家として立つ決心を固め、勉學に勵み、のち小學校訓導を拜命して、七年間

の永きに亘りて盡せる模範的訓導であり村民の信望厚く、現に青年團理事長の要職にある。

資性英邁濃厚、齊輩の氣受良く、上長の信望深く、稀有の人格者なり、徳義心厚くして、謙讓を念とし、身を以て範となすことを心掛け、篤學勤勉にして、よく東西の智識に曉通する、眞に代表的な教育家である。その教育界に及ぼす功績は燦として光芒を放ち、永久に村民の腦裏を離れることなからん。

高根村岩澤

蠶業組合長 高橋 秀次郎



謹直なる人格者にして、現在蠶養組

合長としては永年に亘る蠶業の経験者と

してその蓄蓄を傾け、年々歳々確實なる成果を挙げつゝあり、又氏は養蠶に對して常に眞摯なる研究的態度を以て對し、努力一意發展を劃してそれに邁進して同組合が今日あるは氏の功績に負ふところ多大である。

當家は部落内の有力者にして先祖代々名譽職を勤め、村民の信望厚かりし舊家にして名門である。氏の嚴父治作氏は篤農家にして、しかも農村の先覺者であり常に前途への見透しをつけて事に當るの明ありて、好結果を將來したる篤農家であり、村政家として信望厚かりし人格者であつた。

血を承けて氏も又責任感厚く、先見の明あり、明治十七年二月二日、當地に呱呱の聲を擧げて以來、専心組合の爲、當地農業の發展の爲、活躍したる活動家である。

氏の家庭は圓滿にして、和氣に充ち、曹洞宗を信奉して、一家揃つて敬神崇祖の念に厚く、模範的良家庭である。

鹽野町村小須戸

信用組合理事 小田 長兵衛

當家は舊家にして氏は九代目に當る名望家として



て名聲がある。氏の尊父政吉氏は、各種名譽

職を勤め、功績甚大なる有力者として知名であり、又穩健着實にして謙讓の美德に富める村政家として村民の衆望を擔ひ終始一貫至誠の人として村自治に邁進して來た。氏はその長男として明治三十二年二月三日當地に呱呱の聲を擧げ、明敏達識にして快活恬淡の資性を有し、前消防組頭として活躍、青年團長として青年の教化指導に盡瘁し、各調査員として功績が多かつた。現在は信用組合理事として當村産業經濟に盡瘁する處多大にして又村會議員として村政に關與し、村民の

生活向上、産業の發展に盡瘁、多くの實績を擧げ、農會評議員としては當村農業の改善、發展を目ざして一路邁進するなど、實行家として村民の期待を以て迎へられてゐる村政家である。

氏の家庭は圓滿明朗にして春風の中にあり、和樂に充てる良家庭であり、母堂まつえ氏は賢母としてよく今日の氏を成さしめた女丈夫である。

八幡村勝木

素封家 齋藤 龍彌
正七位勳六等

當家は古來當村に於て、一二を争ふ大地主にして、代々



名主庄屋を勤め、當村發展のため、

幾多功勞ありし家柄である。

先代龍吉氏は温厚篤實にして、村民の人望厚く、村會議員、區長を永年勤続し

村民の福利増進のために、日夜奔走した人である。

當主龍彌氏はその龍吉氏の長男として明治十三年八月三十一日、呱呱の第一聲を擧げらる。性温厚にして剛毅、明治三十七八年の日露戰役には、應召して勇躍滿洲の戦線に赴き、良く困苦欠乏に堪えて、各地に轉戦赫々たる武功を立て、果進して陸軍中尉に任官、晴れの凱旋をなしたる勇士である。氏は其の功により、勳六等に叙せられたのである。

之に先立ち、明治三十四年二月十六日當地に郵便局の開設せらるゝや、先代龍吉氏は初代局長に就任したのであるが、凱旋後は氏が後を繼ぎて第二代目局長に就任、爾來氏は親切丁寧を旨として、郵便事務に従ひ、成績頗る優良、表彰されること、實に二十數回の多きに及んでゐる。氏は嘗て、村民に推されて村會議員に當選したる事あるも村會議員を兼ねること、因り、郵便事務が政略に流れ、村民に迷惑を及ぼすことあるを慮れて之を

辭退せられた。然る所、氏は村民の懇望する所に因り、軍人分會長に就任、爾來

銃意、全員の指導訓練に當つてゐる。又學務委員、氏子總代、檀家總代の公職につき、良く其の職責を果してゐる。

尙ほ氏は農會長の要職にありて、多年貢獻して來たのであるが、昨年七月、支那事變勃發するや、氏は村民を督勵して生産力の擴充に努め、特に乾燥野菜、アルコールの原料たる甘藷等の軍需農産物の生産には特に意を注ぎ、可及的に其の増收を計り、以て非常時經濟への自發的協力に萬遺憾なきを期して居る次第である。

更に氏の金融界に於ける活躍も顯著なるものがあり、現に村上銀行の取締役として同銀行の重鎮である。

氏は政及系に屬し、讀書を趣味とせられ、また禪宗を信奉され、正義の士である。

母堂ろくさんは、七十八歳の高齡にして、今尙ほ健在である。夫人まつさんは

當年三十七歳にして、二男一女あり、家庭頗る圓滿である。

大川谷村朴平

消防組頭 板垣 吉松

當家は當村有數の舊家にして、今を去ること三百餘年前當地に土着、代々農を營み、又代々戸長をなして、よく其の職責を果したのである。

先代吉藏氏は現在八十三歳の高齡にして而も尙ほ矍鑠として壯者をしのぎ、働かざれば食はずの信條の下に、鋤を採りて耕して居る次第である。洵に吾人の範とすべきである。氏は嘗て村會議員を勤めて貢獻尠からざるものがあつた。

當主吉松氏は、嚴父吉藏氏の長男として明治二十九年二月廿四日、呱呱の聲を擧げた。氏は嚴父に劣らざる精力家、而も温厚にして、村民の人望を一身に集めてゐる。氏は特に消防に關して、優秀なる技術と深い知識とを有し、永年消防に關して、村民の指導訓練に當つて來た。

其の他學務委員、村會議員、大川谷村綜合副業組合副長等、多數の公職を兼任し日夜當村の爲めに奔走して居る。

氏は道路を開發して、交通の便をよくすることが、村勢發展の重要な對策の一であるとなし、農閑期を利用して率先して、道路の開發工事に當つて居る。

氏は淨土宗の信奉者である。夫人フジイ氏は荒川口より嫁がれ、良妻賢母の聞えが高い。夫人との間に一男一女あり。

下海府村板貝 板貝區長 菅原喜作

當家の家系は詳かでないが、約二百四五十年前より舊家であると云はれてゐる。家業は代々農業及び漁業を営みて名あり。先代徳松氏は家業に熱心を以て知られ、當主喜作氏はその長男として明治十三年生れ、當年五十九歳である。氏は家業に精勵する傍ら、村政に盡力し區長代理として十九年の長年月を勤續し、現在は選ばれて區長となり、又農區長と

して盡瘁努力してゐる功勞者である。氏は殊に漁業に熱心、當村漁業の發展は氏の努力に依る賜ものである。

家族は九人、男兒のみ四人ありて、何れも喜作氏の漁業に努力せる志を受けて家郷を後に、海員として又漁業家として海上生活に活躍してゐる。まことに海國日本男子の面目躍如たるものあり、ひとしく前途を囑望されてゐる。

上海府村早川 早川區長 長谷部政吉

氏は明治二十七年三月一日の生れ、先



代傳之助氏の長男、溫良快活、また思想穩健、勤勉なる努力家である。家系は不明なるも、相當の舊家と思はれる。先代傳之助氏は海員となり活躍せしも、後に村長、區長等の公職に携はり、種々功績あつた人である。當主政吉氏も父に習ひ十七歳の時志を樹て、海上生活に入り、自後四十七歳まで三十年間活躍したが、四十七歳の時船長を辭して歸郷。女子消防應援隊の組織、飲料、消防水利に盡力貢献し、現在に至るまで、區長として六年間勤續してゐる。

岩船町上濱町

上濱區長 鈴木甚太夫

鈴木家は岩船町屈指の舊家にして、正保年間より連綿として續きたる家柄なり



祖先は下海府村にて船大工の頭領として知られ、祖父の時代より當地にて土木を家業としてゐる。岩船地方の主要建物中、學校、岩船神社等の建築は特に名高く、先代は甚太郎氏と稱し、當主は慶應二年六月二十六日生れ、早くより村政に關與、區長代理を経て區長に選出され、爾後今日迄三十有餘年の永きに及び、まことに一生を村政に捧げた人で、十九年目に賞狀と木杯一個、金一封を贈られた功勞者である。又氏は國勢調査第一回調査員として盡力され、現在岩船町初まつて以來區長として盡力多大にして、現十四區の區長中、最古參者として人望厚く、思想穩健、寛大溫和なる人格者である。

氏は、瀬戸物の蒐集家として聞えてゐる。子息亮太郎氏は父祖の家業を繼ぎ、

曾ては消防部長として盡力し、後組頭に推されて活躍した人で、性質極めて温厚である。夫人テイさんは西神納戸坂千代松氏の息女にして、長男祐司氏の外一男四女ありて一家圓滿である。尙、日蓮宗の信者にして、信仰厚き家である。

村上町庄内

辯護士 小野寺彦三郎



明治三十九年明治大學法學部を卒業せる俊才にして、同四十二年判檢事登庸試験に及弟、宇都宮地方裁判所檢事に任官し、大正四年秋、其れを辭して東京市神田區美土代町に於て辯護士を開業、大正十一年秋郷里に錦を飾つて歸郷し、現在に至つたものである。直に町政に關與、前には出納檢

査員、傳染病院組合委員として活動盛んにして、現在は選ばれて町會議員となり既に第四期目である。また庄内區長、學務委員等、多方面に互つて卓越せる識見と多能なる才能を以て功績多大、曾て氏は縣會議員益田藤次郎氏等と共に、信越製絲株式會社を設立し、村上町發展に盡力し、現在當會社の法定清算人に任ぜられてゐる。又氏は理想選舉の實行者として當地方に知らるる清廉潔白なる人格者として、また當地方の智識階級の代表者として、將來縣會、國會への進出が期待せられてゐる。本職の辯護士としての名望高く氏の人格と相俟つて赫々たるものがあり町政功勞者として、屢々表彰を受けてゐる。

氏は趣味深く、讀書慾旺んにして、園碁は初段の腕前、當地方最強と謂はれてゐる。家族はよし夫人との間に長男清彦氏、長女君子さんの圓滿なる家庭で羨望されてゐる。

保内村

農會會長 國井收平

東京國學院大學出身の逸材たる氏は、



新發田中學より國學院に學びたるものにして家事都合

上歸郷し、爾來村政に盡してゐる。氏は常に大乗的立場より、岩船郡下の諸事業生産の發展に立脚し、殿正中立、しかも内剛外柔よく他の言を聴き、曾つて人に愛憎の念を持つて對應せし事なしと聞く公明正大なる心情の人格者である。趣味はスポーツ、特に野球を好み、新神田中學時代は名投手として知られ、登山、テニス、ボート等、卓越せる技能の持主であり、活動的にして明朗快活、言語明快なる紳士である。氏は青年團長として六年間在任し、青年の指導、會の發展に努

力し、郡青年團副團長として信望あり、六ヶ年盡力し十二年八月辭任し、農會會長として六年間重職に在り、前畜産組合

長として牛馬の品種改良に盡瘁され、縣下第二位の好成績を擧ぐるに至つた。又郡家畜組合長として實績大に上り、土地賃貸價格調査員として、縣水稻品種改良委員として、實績頗る多大である。

國井家は本村切つての舊家にして名望家であり、先代森之助氏の時分家し、當地大區長(大地主)の家柄である。先代は當村初代農會會長として農會法設置の功績あり、昭和十二年病歿し、書畫を好み、遺品多大に上る。

氏は故森之助の息、明治二十九年六月二十八日生れにして、氏の家庭はちい子母堂、榮子夫人にして、母堂は賢夫人として聽え、氏の今日有るは一に母堂の薫育の賜である。夫人は貞淑温良にして、氏のよき内助者として令名高く、その家庭は氏を中心として、春風の中にあり、和氣緩々たる明朗なる良家庭として、村

民の信望を集めてゐる。

西神納村 瀧端

瀧端區長 磯部 元治郎

氏は昭和七年推されて村會議員となり



それより以前昭和四年には農業調査員となり又同十二年

年には土地賃貸價格調査員として精勵せる努力により村會より感謝狀及び銀盃一個を受け、前には荒川米協會より農林一號(一口二十俵)二等賞の賞狀を受けた功勞者である。この受賞者は當村では磯部氏一人のみであつた。また消防組第二部頭として三年間勤続し、現在は區長として昭和十二年より勤続第二期、五年目である。尙經濟更生實行委員として組合長の相談役(各區一名)として、活動してゐる。

磯部家は代々農業を以て家業となし、元次郎氏は佐藤佐一郎氏の次男にして、佐一郎氏は前收入役をしてゐた。養父卯三郎氏は家業に精進し、昭和六年七十七歳にて他界された。文次郎氏は明治二十一年二月五日の出生にして、岩船小學校の高等科を卒業、二十三歳にして磯部家の養子となり、家業に勉勵すると同時に村政にも數々の功勞をなし、穩健にして沈着なる人物である。ムラ夫人との間に五男一女ありて、長男は信男氏である。

館越村

信用組合 石田健吉

當家は當村屈指の舊家にて、代々農を



先代藤吉氏

營む家柄であり、氏は、十代目に該る。

先代藤吉氏は、温厚篤實の人にして、

村民の人望頗る厚く、村長を勤むること二期、村會議員として村政の刷新に奔走すること實に廿四年、區長として區政の向上、區の發展に資すること二十年、氏の當村福利増進に貢献すること實に甚大なるを以て、世人氏を呼びて、館越村の主と稱す。以て氏の面目の一端を知るに足るものである。氏は六十四歳の高齡なるも今尚ほ豐饒、當村の重鎮として、重要な村政は必や氏の意見を求め、之を斟酌して決せらるゝのである。

當主健吉氏は、その藤吉氏の男として生る。父祖の業をついで農を營む。性温厚篤實にして人望あり。初め推されて農會會長となり、續いて消防組頭として六年勤績、尙國勢調査員として、國政調査事務に従事したる後、現に村會議員(當選二回)、信用組合理事、區長等の名譽職にあつて、當村の爲め其の功勞は甚大である。

家庭にありては妻ミヨさん四十六歳との間に六男一女あり、長男庄一郎氏は、

本年廿三歳にして、農林學校卒業後、父の業をつぎ之に従事し、又父の志をついで、村政刷新につき抱負を有し、將來を期待すべき青年である。次男健次郎君は廿一歳にして村上中學校を卒業、三男三君は十八歳にして農林學校在學中、四男五男並びに長女は、小學校在學中である。

氏は稀に見る温厚の人、曹洞宗を信奉し、敬神の念亦厚い。

三面村 布部

農業實行 佐藤 鬼智司郎

氏は滿二十八歳にして村會議員に推され、其後



家屋稅調査員、引續き村會議員第一期を勤め

土地賃貸價格調査員等を歴任し、現在も尙獻身的努力を以て村自治に盡瘁し、又

青年分會副會長として青年の教化指導に關與してゐる。又氏は前區長として、二期間、蠶業實行組合長として鋭意努力し多大の實績を擧げてゐる。蠶業實行組合の今日在るは實に氏の功績に負ふものである。又氏は前村會議員として活躍し、村民の期待に副ひ多くの實績を擧げた。

當家は約百年前に同村佐藤又吉家より分家し、先代より農業に従事してゐる名望家である。氏は明治二十四年三月二十八日當地に呱呱の聲を擧げ、資性濃厚篤實にして公正無私、潔白清廉、篤實なる人格者である。先代吉次郎氏は二十五歳にして他界し、その後母堂トヨノさん女丈夫にして貞淑無比、よく遺子を養育し女手に當家の存續發展に力を盡し、今日の鬼智司郎氏となしたるものである。氏は新潟縣廳より三回に亘り表彰されしことあり、家族は母堂トヨノさん七十四歳トヨ夫人、四十七歳、養子七司氏三十歳トヨノ夫人二十九歳、令孫吉宏君十一歳宏二さん九歳にして、トヨ夫人は愛國婦

人會及國防婦人會員として銃後の完全を期して活躍し居り、家庭は圓滿にして和樂に充ちてゐる。尙氏は政友系にして、一方の重鎮として信望厚く、第一補充兵として軍籍にありたるものである。七司氏は資性濃厚にして謹直、將來を矚目されてゐる。



高根村黒田 信用組合 理事 小池茂俊

當家は連綿十七代に亘る村内一の舊家である。その家系は古く、歴代村の名譽職に在つて村政に盡力せる家柄であり、先代藤太郎氏は郡會議員として敏腕を揮ひ、村長として當村に於ける自治功勞者であり、其他數多の要職に有りて獻身的努力をなし、多大の成果を擧げるに至つた。藤太郎氏

その家系は古く、歴代村の名譽職に在つて村

は又公平無私にして明敏達識、しかも實敦厚なる人格者として村民の敬慕を受けてゐた。

氏は藤太郎氏の息として、明治二十一年九月十日當地に呱呱の聲を擧げ、資性高雅温良、しかも思慮深き人物として村民の輿望を擔ひ、推舉されて農會議員、消防組頭、其他各調査員となりたることあり、夙に衆望を集め、其の後信用組合理事、村會議員、區長に推され、其一擧一動は常に村民の期待を以て迎へられ、卓抜の手腕を謳はれてゐる。信用組合理事として氏は經濟的造詣深く、村民の生活上、産業の發展を劃して一意的に邁進するなど、産業經濟の發展に寄與するところ甚大である。

氏の家庭は和氣霽々として圓滿和樂を極め、氏の母堂まつさんは賢夫人として先代藤太郎氏のみならず内助者であり、氏の今日あるは實に母堂の感化多大にして、信仰篤く、曹洞宗に屬して崇祖の念深き賢母である。

鹽野町村鹽野町

方面委員 小田林藏



氏は新潟師範學校卒業にして、各地學校教員として多大の功績ある教育者である。氏が教育者としての信念は、公明正大、殊に德育に意を用ひ、氏の歩める路は常によき麥を撒き、雨露を供して菁々と發芽し、成育せる麥は刈られ、社會人として傑出せる子弟を排出したるは常に氏の獻身的教育の成果であり、犠牲的精神の結實である。氏は資性濃厚篤實にして、教育者の範たる人格の持主であり、謹直にして崇祖敬神の念に篤く、前區長として村自治に關與し、信望厚き信念の人である。氏は先代竹藏氏の息として明治十四年七月十八日當地に呱呱の聲を擧げ、嚴父竹藏

氏は村會議員、方面委員、區長として其他數多の公職に有り、多くの功績を擧げたる人にして、村民の信望篤き人格者である。當家は代々名譽職に在り、村内で、氏はその七代目として、部落に於て代表的且模範的良家庭の主であり、氏の家庭は圓滿にして常に薫風の中に在るが如く、家庭人としての氏は圓滿家として高評がある。氏の實母タツさんは賢母としてよく今日の氏を養育したる母性愛に富める賢夫人であつた。

氏が今日方面委員として活躍し、貧しき者の味方として常に彼等の理解者であり、温き手を差伸べ、多くの佳話の主として各所に美しき花を咲かせてゐるのは實に氏の母堂より受けたる賜にして、益益氏の徳行は光彩を放つであらう。氏の良心的教育家としての行動は、日本主義精神より出發するものにして、當地に於て無くてならぬ人物として、名譽噴々としてゐる。

下海府村馬下

馬下區長 井上富吉



その家系は詳かならざるも、相當の舊家であると思はれる。農業を營み、先代富藏氏は海員

であつた。氏はその長男にして明治二十五年五月十八日生れ、實父富藏氏の業を洋に希望と理想を抱き、帆船乗りとして北海漁業に従事してゐたが、五年前退き歸郷するや、昨年區長に推され今日に至つたものである。氏は海洋生活の面影を残し、剛毅果斷、進取的氣象に富み、村政に携はりては一意専心邁進し、日淺けれど既に功績多く、氏はその反面、温厚にして篤實、また博愛の士にして、村民より信望をうけてゐる。

氏の家族は七人、長男は養子にて、現
 在新發田聯隊に歩兵として入營して居り
 非常時日本を背負ふ勇士として、前途を
 有望視されて居る。氏は村政に携はる傍
 ら家業である農業に精勵努力し、また家
 庭では子息子女の成育を樂しみに、和氣
 藹々たる雰圍氣の家庭を爲しつゝ、未だ
 赫々たる壯年の意氣を以て、活躍して
 居る。

代に及ぶ。
 先考定吉氏は五十三歳にして死亡せる
 が、その生前を見るに、陸軍二等主計と
 して日清、日露の兩役に參戰し、多大の
 功を樹立、遂に從七位勳六等に叙せられ
 た。歸郷後は専ら自治公共の事に竭し、
 清廉高潔なる人格者なれば、地方民の信
 望を一身に集めて郡會に出馬を懇願され
 て馬を進め、堂々論じ活躍すること二期
 に互つた。その郡政に寄與せる功勞は、
 燦然と輝くものあり、今もその名を誦は
 れてゐる。

なる手腕家と稱され、衆望すこぶる高く
 して、一舉一動愈々期待を以て囑目され
 てゐる。實に氏こそ當村に缺くべからざ
 る人物にして、自治の華とも稱すべきで
 ある。

曹洞宗に歸依して、敬神の念すこぶる
 厚い。

家庭は和合の家として知られ、令閨マ
 キノさんは愛國婦人會員にして、銃後の
 護りに任じ功勞甚だ多く、長女アサノさ
 んは二十六歳にて、次女チエさんは二十
 二歳である。

三面村 莖太

養蠶實行
 組合 長 貝沼 定次郎



七百年前
 の創始に
 かゝり、
 家系を傳
 へる事す
 でに十三

當主定治郎氏またその衣鉢を承けて、
 青年時代より自治公共の事に關與、村會
 議員を一期、消防小頭四ヶ年、農會代議
 員、養蠶實行組合長、區長等を多年勤め
 現在尙も養蠶實行組合長、四期目の區長
 の要責に在り、常に村民の福祉増進を期
 して活躍進進をつゞけ、その村政産業の
 向上に裨益するところ甚大、またその資
 性明敏達識にして穩健着實なれば、村民
 よりは温厚なる人格者として、將又卓抜

當家は資産家として聞え、當村に於け
 る舊家である。

先代泰吉氏は木材業を營み、當地方有
 數の木材家にして、生來の事業肌の人で
 あり、斯界に於ける辣腕家として又、剛
 毅界斷、俊敏なる行動は村民の刮目する
 ところである。

保内村

消防組頭 田 中 悌 次

當主定治郎氏またその衣鉢を承けて、
 青年時代より自治公共の事に關與、村會
 議員を一期、消防小頭四ヶ年、農會代議
 員、養蠶實行組合長、區長等を多年勤め
 現在尙も養蠶實行組合長、四期目の區長
 の要責に在り、常に村民の福祉増進を期
 して活躍進進をつゞけ、その村政産業の
 向上に裨益するところ甚大、またその資
 性明敏達識にして穩健着實なれば、村民
 よりは温厚なる人格者として、將又卓抜

當主悌次氏は明治二十四年、嚴父泰吉
 氏の長男として生る。仙臺東北學院出身
 の俊才にして、内國通運坂町驛支社に於
 て運送業に關係し、二十三年に及びその
 間、事業の擴張に盡力し、よく今日の地
 位を築く。現在は消防組頭を務む。

氏は保内村現在の、村會、産業組合等
 の不統一を憂ひ、保内村の將來に對して
 は今日大英斷を要するとして、自己は第一
 線に立たず、新任せる村長、石黒交氏の
 許に種々進言し、改革の爲、盡力中であ
 る。

資性明敏にして、研究心深く、滅私奉
 公の精神を以て、村内に残す功績は眞に
 顯著なるものがある。

さき子夫人との間に四男三女あり、長
 男悌一郎君は新發田商業在學中である。
 次男悌二郎君、三男悌三君、四男悌四郎
 君、長女てい嬢、次女まき嬢、三女きみ
 嬢共に秀才、才媛揃ひにして、將來を囑
 目されてゐる、その家庭は至極圓滿明則
 な良家庭である。

岩船町 三 日 市

三 日 市 區 長
 篤 農 家 大 野 作 之 丈



主にて三
 代目、代
 代農業を
 以て家業
 となし、

篤農家として知られてゐる。先代寅之丈
 氏は寺小屋教育を受けて家業に精進し、
 明治三十九年七十二歳の高齡を以て他界
 された。當主は明治三年二月四日生れ、
 家業に精勵せる傍、村治に寄與貢獻し、
 明治三十九年頃より區長に擧げられ、以
 後引き続き區長の職にあること二十有餘
 年の長きに亙る。氏は天性温良にして着
 實、その熱心なる努力を認められて賞狀
 を受けたことがある。また前農會委員、
 害虫驅除委員等を歴任し、日露戰爭當時
 は戰時農事獎勵委員として獻身した。現

在は本町區長十四名中の最古參者にして
 徳望高き人である。

昭和八年十一月十二日家訓として、同
 氏の篤農家としての實踐窮行振りを知ら
 れた。(一)農は百業の根底なりと心得べ
 き事なり。(二)平日の業は天地と共に必
 ず同一たること。(三)自己の職業は死す
 る迄も勉勵せらるべし。(四)國家の爲な
 らば百萬の富も吝むべからず。(五)苦を
 苦と悟り樂を樂と悟り、家庭圓滿なり。
 (六)奢らず驕らず吝ならず常に中道を守
 るべし。(七)農家の普通衣は先づ下圖の
 如くなるべし。以上七ヶ條は子々孫々永
 久に固く遵守すべきこと。(圖は略す)と
 記されてゐる。夫人フス女との間に長女
 イネさんあり養子末松氏は神納村高岡菅
 原家より入家したものである。

西神納村 今 宿

今 宿 區 長 森 田 三 次 郎

氏は資性着實、温健聰明にして、また
 中々進取的氣象に富み、昭和十年區長に

選出されてより、爾後四年、信望日に



月に厚くして、非常時下區長として村内應召遺家族慰

間に、又勤勞奉仕班の積極的援助をなし統計調査の作成等に昨今多大忙を極めてゐる。又氏は私設消防時代より、公設消防部になつた現在に至るまで十餘年間勤續せる功績甚大にして、尙その間頭取、會長等を歴任した。かく多方面に於ける氏の貢獻は、村産業に寄與する所多大にして、昭和十三年一月五日、今宿農友會第七回米作競技會に於て、農林一號(四石三斗八升七合八勺)生産一反當り)の好成績により農會長大倉榮吉氏より賞状を受けたことがある。

森田家は代々農業を以て家業として居り、その家系は詳かでないが、當主は大體五代目位である。先代定吉氏は萬延元年生れ、家業に精進し、今より十一年前六十九歳を以て他界せられ、三次郎氏はその次男にして明治二十一年四月二日生れ夙に村政に盡瘁した人である。家族はミヨノ夫人との間に長男基代隆氏あり、前區分團長をなし、現在消防第二部係長として、父子とも村自治に參與身してゐる一家である。尙基代隆氏は、當年二十七歳の前途有爲な青年である。家宗は禪宗にて、神納村有明の光淨寺の檀家である。

館越村釜杭

信用組合長 阿部 利一郎



の爲に貢獻多大であつた。

當家は當村屈指の舊家である。代々農を營み、篤農家である。古くより庄屋をつとめ、當村

先代卯一郎氏は村會議員其他の名譽職をつとめて多大の功勞あり、現在七十三歳の高齡にして尙壯健なること壯者をして驚かすものがある。

當主利一郎氏は卯一郎氏の男として、明治十九年十月十日呱呱の聲を擧げたのである。性温厚篤實にして、村内の信望最も厚く、幾多の公職にあつて、當村の爲め多大の貢獻を爲してゐる。即ち信用組合長を初めとし、蠶業組合長其他の公職にあり、尙嘗て、村會議員として當選すること二回、孜々として村政向上の爲め奔走、又區長として在職すること六年其の間區民の融和、各種施設の充實に盡力、是に家屋税調査員、國勢調査員、土地賃賃價格調査員として複雑困難なる事務に従事、よく其の職責を果したのである。

夫人ヒサノさんは當年五十歳にして、愛國婦人會員として活動、銃後婦人として遺憾なからん事を期して居る。夫人との間に二男二女あり、長男利平氏(三十

一歳)、次男喜次郎氏(廿八歳)は、共に農林學校を卒業、長女林子さん(十九歳)は農學校を卒業し、次女フクさん(十六歳)は同校在學中である。利平氏に妻ライさん(二十八歳)あり、以上の様に氏は長男より次女に至る迄、皆頭腦明晰眞面目なる子供に恵まれ、家庭頗る圓滿、村民より羨望されてゐる所である。曹洞宗を信仰してゐる。

鹽野町村

消防部頭 今 兼 藏

氏の實父兼松氏は一代にして資産相當に作りたる立志傳中の一人にして、雜貨商を營み、又傍ら農業に従事してゐた家柄である。兼藏氏は明治三十四年十二月四日生れの當年三十八歳の壯年、氏は勤勉努力の人にして、獨力獨行を以て主義となし、稀に見る意志強き實行家として評判高く、模範的人物と目されてゐる。前青年會長、軍人分會長として村民の信望を負ひ、現在は消防部頭、又農會長、

猿澤村

元軍人分會長 消防組頭 志田 甚一



氏の尊父國吉氏は當村の元村長にして在職中に役場合併耕地整理問題に關與して多大の功績を擧げ、法人鵜の渡路協會を設立し、道路復舊等幾多の問題に關して盡瘁し、誠意其の實績を擧げ、赫々たる村自治の功勞者である。

氏は國吉氏の長男として明治二十九年四月八日生れ、在郷軍人分會長として十

三年に亘り多くの業績を残し、消防組頭區長として、自治の爲め献身的な活動を爲し、信用組合評議員、養蠶實行組合評議員、土地賃賃價格調査委員として經濟的發展を目して終始明晰なる頭腦と、實際的手腕に依り多大なる貢獻をなし、村會議員、國勢調査委員として村の文化的發展を企畫、その達成に努力するなど公共の爲、一身を挺して努力し、その成果多大にのぼる。

當家は氏を以て十五代、開祖約三百二十三年前なるは知れるも、それ以上は詳細不明、村内有數の舊家であり、素封家として知名である。當家は本字「鵜の渡路」内志田家の總本家にして正統なる家系と榮譽ある歴史の家である。氏は資性温厚篤實、謹直なる好紳士にして村民の信望厚く、家族は六人、長男甚五左衛門君十八歳は聰明、霸氣ある青年にして將來を囑目されてゐる。夫人は國防婦人會長として銃後に活躍し居り、氏の忠實なる内助者として貞淑なる賢夫人であり、

氏の今日あるは夫人も與つて力あり、日本婦人の鑑として令名高く、その家庭もまれに見る良家庭にして圓滿和樂に満ちたる雰圍氣を醸し出してゐる。

保内村 藤澤

藤澤 區長 平田 幾太郎



女川の平田平太郎氏の家より分家したもので、當主をもつて十五代目、代々名主を勤めた家柄で、先代祐太郎氏は生前、村會議員、區長等を歴任し、自治團體の爲に貢献した功勞者である。

氏はその男で明治九年十月四日の岳降である。自治政に、政黨色あるを好まぬ不偏不黨の中立を持する氏は、夙に村治に進出し、曩に衆望を擔つて村樞軸に執

掌し、村會議員として村勢の發展に盡瘁すること二期、また消防小頭として消防組の改善發展に力を致した功績偉大なるものである。

現在氏は、農林省統計委員として非常時下の村情報告事務に夙夜盡瘁してゐる外、藤澤區長としては今年で三十有餘年、區政の向上に努力して、事績頗る顯著なものである。氏の溫和にして篤實、素朴明快なる性格は、豊富高邁なる識見手腕と相俟ち、區長中の古參者としての徳望隆々たるものである。國勢調査には第一回より毎回調査員として盡力し、また曹洞宗に深く歸依してゐる氏は、西法寺檀家總代を熱心に勤めてゐる。尙曩に縣品評會で能登米二等賞、郡農會品評會では一等賞を授與されてゐる。家庭は、母堂トラ刀自八十五歳の高齡なるも頗る健在で、妻女サトさんとの間誠に圓滿和樂に充ちてゐる。因に妻女サトさんは北蒲原郡の出身である。



令息 正雄 君 武家の門の家の柄である。部の

落草分けにて累代村勢伸展に功勞多く、先代駒太郎氏は夙に篤農家としてひろく聞え、公共の事に關與すれば區長、氏子總代、其他に、多年力を盡して各方面に效を奏した。慶應元年の出生にしていま七十二歳の老齡なるが、令閨マツ子さんと共に健在、村民より自治の元老として慈父の如く慕はれてゐる。當主留次郎氏はその養嗣子、三十五歳の時當家に入り、其の後家運の隆盛を計つて専心家業に勵み、それと共に父君の衣鉢を襲いで自治公共の事に竭し、竹内

西神納村 小口川

區長 坂上 留次郎

坂上家は、部落有數の舊家にして、その祖は

民五郎氏區長時代に區長代理として多年努力貢献、その功多ければ區民の人望自ら高まつて昭和十二年遂に區長に推輓を受け、今や一身を挺して區民の福祉増進と融和のために盡力中にて、またその資性篤實にして濃厚、すこぶる慈悲心深ければ德行多くして各方面に五百圓の寄附をなし、愈々村民の信望厚くして感謝と尊敬の的になつてゐる。

出生は明治十六年九月二十一日、淑徳の譽れ高き直夫人はすこぶる内助の功多き賢夫人である。

令息正雄氏は明治四十一年四月七日、竹内忠六氏の次男に生を享け、のち當家に入り、俊敏の氣性に富む材幹にて、昭和四年横須賀海兵團に入團し、第一次上海事變に際して勇躍出征して赫々たる武功を樹立し、勳八等に叙されて瑞寶章を賜つた。歸郷後、専ら自治公共の事に意を用ひて、在郷軍人分會に關與盡瘁、消防小頭として功勞からず、現任する青年會長としても亦貢獻大にして、村民より

鑽仰の眼を以て迎へられ、その將來に多大の期待を寄せられてゐる。アイ子夫人との間に二男一女がある。家庭すこぶる圓滿にして、三夫婦健在せる春風和樂の家として、村民羨望の的になつてゐる。

高根村 黒田

信用組合 大田 勝太郎



て衆望を擔つてゐる氏は、殿父駒太郎氏長男として、

明治十八年一月十日當地に生を享けた。自治公共の事に意を用ひ村勢の發展と繁榮に寄與すること甚大である。氏は現在信用組合監事として、當地産業經濟の進展に功績多大にして、村會議員として村民の期待に副はんと、努力止まざるの精

進振りである。先代駒太郎氏は各名譽職を勤め、六十一歳を以て他界せるも、終始一貫村治に盡瘁して、貢獻裨益するところ甚大であつた。氏の資性俊敏にして圓滿潤達、八面六臂の材幹として與望を擔つてゐた。

大川谷村

農會長 大瀧 孝五郎



の役に記録を焼失したので家業の沿革の詳細を知るこ

當家は、當村屈指の名門である。戊辰とは出來ないが、元祿六年の建造にかゝる土蔵が今尙殘存して居る。當家は今より二百五十餘年前より、代々酒造業をなして來た古い酒造家として、近村に知られて居る。當家醸造の「雪乃梅」は、其

の特殊の美味を以て知られ、販路が非常に廣く、又先々代迄代々戸長として、村の爲め貢献して来た。又先代も當村助役として永年勤続した人である。

當主孝五郎氏は明治十五年四月三日、先代多作氏の男として、呱呱の聲を挙げた。性明敏にして而も濃厚篤實の人であり、人望厚い。新潟中學を卒業するや、郷里にあつて、當村の發展のため盡力して居る。即ち、農會長を初めとし村會議員、學務委員、利用販賣組合長、養蠶組合長等の要職を歴任し、よく其の職責を果し、續いて村長に推されて之に就任した。氏は兼ねて、村道を開通させ交通の不便を除去することこそ、當村發展の救済策なりとの意見を有してゐたので、村長に就任するや、鋭意村道開發に務め、大いに其の實績を挙げ、爲めに交通の不便が除去されて、當村は劃期的なる大飛躍をなしたと云つても過言ではないのである。

氏の功績甚大なりと云ふべきである。

家庭には母堂八十四歳の高齢にして尙健在、夫人との間に三男四女がある。

大川谷村岩ヶ崎 酒造家 青木清吉

當家は村内屈指の舊家にして、二百年前に始まる。代々清吉の名を繼ぐ資産家である。酒造業を家業とし三代前より始め、五十年の歴史を経て今日に至る。その發賣する銘酒「巖清水」は品質優良にして、縣下及び近縣一帯に名高い。當主清吉氏は村長、學務委員の要職を永年勤続し、現在は村會議員を務む。

資性俊敏、意志鞏固にして、不屈の精神はよく父君の家業を繼ぎて今日の隆盛發展に至す。その才腕並々に非らず、篤實勤直の精神を以て活躍せし賜である。

當地方の幹線である羽越線開通の際に設置驛の問題勃發するや、當村に不利な形勢にありし時、特に政友會に入黨して村長に就任し、村民の要望を双肩に擔つて、日夜寢食を忘れて東奔西奔し、遂に

今日の府屋驛を設置したるものにして、其の後の當地方の發展は目覺しきものがあり、その功績の拔群たるは村民の後年に互つて感謝してやまないところのものである。氏は又敬神の念深き人である。

夫人との間に三男あり、長男清己氏は村上中學校出身の秀才で本年三十三歳、將來を囑目される村内の逸材である。次男は清氏、三男辰七郎氏で村上中學校出身の歩兵少尉、正八位を賜はる。夫人は溫雅、淑徳の賢夫人にして、三兄弟共將來を囑目されるは、愛兒の徳育に腐心せし賜である。

大川谷村府屋 青木醫院

電話府屋三番

當家は當村有数の舊家である。代々酒造業を營み、當院長青木清九郎氏は清吉氏の令息として明治廿八年九月廿日、呱呱の聲を挙げたのであるが、少年時代より性明敏にして、スポーツを好み身心共

に健全な人であつた。長じて、中等學校を優秀な成績を以て卒業、直ちに進みて千葉醫科大學に入學、同校に於て醫學の蘊奥を極めた。同校を卒業するや直ちに當地に於て開業したのであるが、時に大正十三年である。氏は内科、小兒科、婦人科の他、外科をも得意とし、常に醫は仁術なりとの信條の下に、治療に従事、村民を感激させてゐる。

氏は在學當時スポーツに堪能、特に柔道、弓道、野球を良くし、スポーツマン型の紳士である。濃厚篤實にして、當村民の爲め貢献する所眞に大である。

夫人タマ子さんは、當村有数の資産家にて酒造家である大瀧孝五郎氏の令嬢にして、高女出の才媛、良妻賢母の聞え高く、夫人との間に三男二女あり、氏の家庭は、和氣常に霽々として其の圓滿振り

は人の羨望する所である。氏は盆栽並に讀書を趣味とする。見習生一名を置いて居る。

大正十五年、當村小學校々醫として、

村の爲め盡力、氏は特に小學校兒童の健康に異常の關心を有し、兒童の健康は氏の校醫就任以來俄かに向上してゐる。

村上町大町 齋藤外科醫院

當醫院は外科、皮膚科、泌尿器科、レントゲン科を有し、病室は八室、近代的設備完全にして、藥劑士一名、看護婦三名を持つ村上地方最大の外科醫院として名高い。



院長、齋藤良太氏は明治四十一年十一月二十七日日生れ、北蒲原郡金塚村清野才太氏の五男に

して、岩船郡關谷村の素封家にして學校醫の齋藤猪次氏の養嗣子となつた。新發田中學卒業後は新潟醫大に學び、昭和九年三月卒業と同時に同醫大中田外科教室

に勤務し、同十一年辭し、關谷村下關の養父の經營する一般醫院を助けてゐたが同十二年六月村上町に於て、現在の醫院を獨立開業したのである。

氏は未だ三十一歳の前途洋々たる青年醫學士にして、既に豊富なる經驗を積みまた名醫としての評判高く、斯界に盡瘁せること實に熱烈、努力を惜しまず、日に月に町民の信頼を厚くしてゐる。

せい夫人は當年二十八歳の麗人、溫雅にして、齋藤猪次氏の長女である。氏は學生時代よりテニスの名手として知られ、讀書好きで、當地方に於ける智識階級の一人として、將來町政に囑目期待されてゐる。

村上本町飯野 森醫院

當醫院の院長森文男氏は、明治十年四月廿二日生れ、岐阜縣東濃伏見村の人に於て、生家は代々大地主たる名門家である。天性英邁、頭腦明晰にして、長ずる

に従ひ、よきその天性を發揮し、京都帝



大醫學部に學び、卒業後は九州帝大病院に勤務、青年醫學士として囑導されてゐた。明治四十一年五月に至り、當地岩船郡立村上病院院長として迎へられ、同病院を郡より二千五百圓の補助金を受けつつ經營、斯界に貢獻すること二十餘年の長きに及び、郡下第一と謳はれ名醫としての譽高く、昭和二年に自家開業して、現在に至つたものである。實に氏は三十餘年間村上地方の衛生方面に多大の功績を残せし人にて前には岩船郡醫師會理事として努力し現在岩船郡醫師會の長老として尊敬信頼せられることまことに篤く、氏は禪宗を信仰し、また臥牛吟社を創設し、漢詩を十年間町民に指導してゐる。

夫人甫さん、長男文彦氏は當年三十歳の颯爽たる青年、東京慈惠醫大卒業後、同大學醫化學教室に勤務して居り、その夫人はひろ子さん、次男文苗氏は東京帝大醫學部卒業後、同校臟器療法教室勤務、長女文子さんは、新潟醫大醫化學教室に勤務中の小林豊吉氏に嫁し、愛孫豊さんが在る。一家悉く、醫學界に精勵、まことに羨むべき家庭をなしてゐる。

また氏は篆刻に興味を有し、漢詩の造詣深く臥牛吟社設立の傍、上村實劍主宰の逗子聲教社の會員である。氏は温泉を愛好し、全國二百ヶ所の温泉廻りを企圖し、既に六十數ヶ所を歴遊してゐる。

關谷村下土澤

富樫醫院

當院は内科、小兒科、産科、外科等の診療科目を有し、地方としては完備せる病室を設け、院長富樫榮人氏は明治廿八年九月五日生れ、大正九年新潟醫大出身の俊才にして、卒業後は西蒲原郡吉田に

在る今井病院に勤務し、名醫として好評



を博し、地方民の切望に依り當地に來て開業したものである。

氏は數年前より學校醫として献身努力し、兒童のトラホーム診療に對してはその根柢を期して全く奉仕的に盡力し、又村醫として村民の衛生に盡力し、關屋第二校同窓會副會長、村會議員としては二期目であり下土澤區長、皇軍後援會評議員、婦人會顧問、部落班長、部落總代、納稅組合長等、各方面に於ける名譽職を歴任、その功績は枚擧に遑なき状態である。近郷近在は云ふ迄もなく、氏の人格と名醫としての手腕に、診療を乞ひ來るもの數を知らず、又氏は犠牲的精神と懇切を以て人に對し、唯に醫者としてのみならず、村政の有力なる人物として重要視されてゐる。故に富樫醫院の名は遠

隔の地まで及び、益々隆盛である。氏は村内衛生施設の完備と、衛生的見地より見たる生活の改善に與つて力があつた。又氏は多忙なる職務の合間に、園藝、書畫に興味を有し、悠々自適それらの趣味に投じて、無心の状態に入るを樂しみにして居り、その豊かな又温雅な人となりも察知し得るのである。園藝、書畫共に造詣深く、素人の域を脱してゐると云はれてゐる。

保内村佐々木

金子醫院

院長金子鎌之助氏は先代清次氏の子息にして、明治十五年一月十七日生れ、中學時代より父君の命により醫學に志し、新潟中學卒業後、仙臺醫學專門學校に入學、明治四十二年七月卒業後は、岩船郡立村上病院に一ヶ年間助手として勤務後四十三年に至り自宅に開業、大正五年ハワイに渡り、同六年五月三十一日同地衛生局より免狀を受け、同地に病院設立、

患者二十名收容、従業員五名、藥局兼自動車運轉手一名の堂々たるものにして、開業以來七年半、同地醫療方面に盡力多大であつた。大正十二年十月一時歸國、滞在三ヶ年の後、再びハワイに渡り、又七ヶ年間醫療に盡瘁した。昭和八年十一月郷里保内村に歸省、同十年現在の診療所を建設、村民一般の診療に盡してゐる。當院は内科、小兒科、外科一般の診療科目にして、ヨネ夫人は保内校々醫である丸岡一郎氏の實妹にして、長男清氏は新潟中學卒業後、現在大阪高等醫學專門學校に在學中、將來を囑望されてゐる。當金子家は元祿時代よりの舊家にして家號を安角屋と云ひ、代々庄屋を勤め、名字帯刀御免の名門である。先代清次氏は生前、村長、村會議員、學務委員等歴任し村自治に功績ある徳望家であつた。又清次氏は風流を好み、書畫蒐集に興味を有し、その蒐集品の中に蜀山人の直筆等がある。

もとより外人にも診療し、徳望高く、信任厚かりし人にて、現在又かの豊富なる經驗、博學なる識見と又懇切なる診療とに依つて評判高く、村長、組合理事等、度々奨められたが、病氣を理由に辭して受けず、あくまで醫療に専心努力してゐる。

平林村平林

伊藤醫院

電話平林二一番

當家は代々農を營みたる舊家である。當醫院長々伊藤鎌三氏は、明治十八年十二月八日、呱呱の第一聲を放ちたる人である。長じて氏は、醫學を専攻して、醫術に依り社會に奉仕せんと志を抱き、中等學校を卒業したる後、直に仙臺醫學專門學校に入學、優秀なる成績を以て同校を卒業するや、東京順天堂病院よりの招聘に應じて、同病院に勤務し、醫術の蘊奥を極め、其の後轉じて新潟竹山病院勤務、茲に全く氏は醫術を完成し、明治

四十三年當地に開業して現在に至る。氏は醫は仁術なりとの信念の下に、金錢を全く超越して、醫術を以て社會に奉仕してゐる。當村村民は、氏の行爲に對しては、只感謝するのみである。

氏は内科、外科其の他一般を行ふ。家族は四人で、和氣藹々として、家庭頗る圓滿である。

氏は隣村保内村の出身にして、氏は明治四十五、六年頃より、村醫、學校醫として現在に至つて居る。氏の不斷の努力に依り、當村村民の體位は近年漸次向上しつゝある。

氏は尙ほ社會奉仕の精神に依り、出征軍人家族に無料を以て診療し、銃後國民として萬遺憾なきを期して居る。

村上本町飯野

高泉内科醫院

當院長高泉正暉氏は明治二十四年三月七日生れ、資性潤達、好學心に富み、又頭腦明晰、早くより醫學に志し、新潟醫

專(即ち現醫大前身)を大正三年十一月の第一回卒業生にして、高田知命堂病院及び静岡富士病院に勤務、有能なる名醫としての評判高く、大正七年に至り、四國松山にて開業、その後十年新潟醫大病院教室に勤務十年に及び、昭和六年新潟市にて開業、地方民の切實なる要望によりて同八年十一月、當地開業の運びとなつて今日に至つたものである。

氏は前に昭和二年十月新潟醫大助教に任ぜられ、病理學を擔當し、同三年六月九日同大より醫學博士の學位を授與され、又同四年十二月十六日正七位に叙せられたものにして、氏は當地方唯一の博士であり、最高權威者として尊敬されてゐる。

氏は愛媛縣上浮穴郡久方町上野尻五十六番地に出生、先代は重吉氏と稱し家業は代々農を營んで居り、氏は立志傳中の一人として名聲を馳せてゐる。氏は岩船郡近在一帯の總ゆる醫療方面に關與し、その功績まことに甚大にして枚舉に遑な

き程である。

家族は信夫人三十八歳にして、西蒲原郡の伊藤惇一郎氏女である。夫妻の間に長男正計君は十九歳にして村上中學卒業の秀才、長女洋子さん八歳、母堂ラクさんは七十一歳にして健在、一家圓滿にして明朗である。

又氏は讀書を好み、多忙なる生活の寸暇を割いて愛書の三昧地を味得して居るまことに氏の好學愛書の心は無限にして博學多識、その人格と學殖の偉大さは萬人の敬仰するところである。

村上町安良町

本間醫院

當院は現代で五代を累ね、當村に於いては最古の歴史を有す。院長本間修吉氏は、明治十九年二月十二日生れにして、東京慈惠會醫專を大正十三年に卒業し、新潟市前田病院に勤務、よくその手腕を揮はれたが、大正九年當地に歸り患者の診療にあたる。村上町を始め近郷數ヶ村

より來診を求められ、當地方最大の産婦人科醫院である。瀨波町校醫、岩船郡醫師會理事に就任してゐる。

資性謹嚴にして、識見と手腕と並び備はり、常に熱心に研鑽を積んで怠らず、仁慈の徳を以て患者の診療にあたり、當地方に於いて絶大な信任を寄せられて全村に於ける有力者である。

ハルミ夫人との間に四男三女あり。夫人は容姿端麗、溫雅淑徳にして、内助の譽高き賢夫人であり、前田病院長女である。長男良平君は村上中學に、次男公平君は新潟中學に、共に在學中であり、兄弟揃つて秀才である。三男は眞平君、四男廉平君といはれる。長女ひろ子嬢は村上高女卒業、東京女子高等學院出身の才媛にして、村上本町の名門、森文彦氏に嫁す。次女綾子嬢は村上高女出身にして、瀨德且溫和、横手公立病院産婦人科醫長松浦桂秋氏に嫁す。三女ハナ子嬢は、三面村板垣友次郎氏に嫁す。

尙修吉氏は園藝に興味あり、頗る造詣

が深い。

村上本町

瀧澤齒科醫院

電話村上二〇三番

當院長は瀧澤一郎氏にして、當年十五歳である。

先代は長岡の士族にして、嘗て村上警察署長として永年勤続し、よく其の職責を盡したる後、天壽を全うして八十一歳を以て他界せられた。

一郎氏は其の男として生れ、長じて、村上中學校に入學、優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直ちに上京、東京齒科醫學專門學校に入學、爾來齒科に關する學術の蘊奥を極めて、同校を卒業するや、當地に開業したのである。

爾來今日に至る迄、氏は常に醫は仁術なりとの信條の下に、醫業に従事して居る。従つて氏は金錢問題には至つて無關心である。金錢に不如意の人に對しては總て氏は喜んで無料を以て治療に應じ、

さらに深切なる好意をつくして至らざる所がない。従つて村民は、氏を敬愛する所非常に大きいのである。

ハル夫人は、長岡市の士族増澤氏の令嬢にして、良妻賢母の聞えが高い。長男直人氏は霸氣ある青年にして、現在滿洲國官吏として大陸に於て活動してゐる。

又二男武夫氏は齒科醫學專門學校を卒業されて、事實上當醫院の齒科の擔任者として、醫務に従事されて居る。四男茂氏は村上中學に在學中、他に一女あり、斯の様に氏の子息は皆夫々相當の地位にありて活動せられてゐる。

高根村高根

市街自動車板垣歡藏

村上市街自動車監査役としての氏は、敏腕を以て鳴る實業家である。當會社が今日の隆盛をみるに至つたのは、一に氏が事業家としての才腕を揮ひ、先見透察を以て先鞭を制せる所であつて、社内切つての材幹として内外の信望厚い人であ